

北陸新幹線関係発掘調査報告書IX

角地田遺跡
平遺跡

2009

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書IX

かくちだい　けいじ
角地田遺跡
たいら　けい　しき

2009

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京を基点に上越新幹線高崎駅から分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経て大阪市に至る総延長700kmの新幹線鉄道です。全面開通により、北陸地方と関東圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に伴って実施した糸魚川市大字小見に所在する角地田遺跡、平遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査によって角地田遺跡では古代・中世の遺物が出土し、平安時代の遺構が見つかりました。これらの遺構・遺物から10世紀後半と11世紀には集落が営まれていたものと思われます。また、出土品の墨書・刻書土器の「臣」から集落名の大字「小見」は10世紀後半まで遡るものと推測されます。平遺跡では断続的に古代から近世までの遺物が見つかりましたが、いずれも洪水等の再堆積による遺物散布地と推定されます。

西頬城郡旧能生町では、これまで発掘調査が行われた例がほとんどなく、貴重な古代の資料を提供できたものと考えています。

これらの発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解をいただいた糸魚川市教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をいただいた独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線建設局、同能生鉄道建設所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤 克己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県糸魚川市大字小見字木下132番地1ほかに所在する角地田遺跡、同じく大字小見字横枕258番地ほかに所在する平遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は北陸新幹線建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委）が独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部北陸新幹線建設局（以下、鉄道運輸機構）から受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。埋文事業団は、発掘調査作業および関連諸工事を株式会社みくに考古学研究所に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと平成19年5月から9月にかけて実施した。発掘調査面積は、角地田遺跡が2,135m²、平遺跡が700m²である。
- 4 航空写真の撮影は、株式会社スカイサーベイに委託した。
- 5 整理及び報告書作成にかかる作業は、当該年度に埋文事業団の管理・監督のもと株式会社みくに考古学研究所が行った。
- 6 出土遺物及び記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記号は、角地田遺跡は「07カクチ」、平遺跡については「07平」とし、出土地点・遺構名・層位等を併記した。
- 7 本書で示す方位はすべて真北である。
- 8 引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に掲載した。「第Ⅲ章4 自然科学分析」については、引用文献を節末に掲載した。
- 9 「第Ⅲ章4 自然科学分析」はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 10 輸入陶磁器については山本信夫氏（金沢大学埋蔵文化財センター）に、珠洲焼、瀬戸・美濃焼は水沢幸一氏（新潟県胎内市教育委員会）にご教示をいただいた。
- 11 本書の執筆は、高橋保雄（埋文事業団調査課課長代理）の指導のもと、實川順一（株式会社みくに考古学研究所 研究室室長）、長澤展生（同 主任研究員）、田中一穂（埋文事業団調査課嘱託員）が行い、實川順一が中心となって編集にあたった。執筆分担を以下に示す。
第Ⅰ章…高橋保雄
第Ⅰ章2・第Ⅲ章2…實川順一・長澤展生
第Ⅲ章3E 文字資料…田中一穂
第Ⅳ章…實川順一
上記以外…長澤展生
- 12 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示と協力をいただいた。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順、敬称）
相羽重徳　荒井秀規　安藤正美　金子拓男　木島 勉　兼沢正史　佐藤雅一
高島英之　水沢幸一　山岸洋一
糸魚川市教育委員会　糸魚川市大字小見町内会

目 次

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査	2
1) 角地田遺跡	2
2) 平 遺 跡	4
C 整 理	4
D 調査・整理体制	4

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

1 地理的環境	6
2 歴史的環境	7
A 周辺の遺跡	7
B 能生地区の古代・中世	9
1) 古 代	9
2) 中 世	10

第Ⅲ章 角地田遺跡

1 調査の概要	13
A グリッドと調査区の設定	13
B 基本層序	13
C 遺構と遺物の検出状況	16
2 遺 構	17
A 概 要	17
B 記述の方法	17
C 遺構各説	18
1) 掘立柱建物	18
2) 構	19
3) 土 坑	19
4) 配石 遺構	20
5) 構	20
6) 性格不明遺構	21
7) 柱 穴	22
8) 杭	22
3 遺 物	23
A 概 要	23
B 記述の方法	23
C 遺物の分類	24
1) 平安時代の土器・陶磁器の分類	24
2) 中世陶磁器の分類	28
D 遺物各説	29
1) 土器・陶磁器	29
2) 土 製 品	35
3) 鉄関連遺物	36
4) 石 製 品	36
5) 木 製 品	36
E 文字資料	37
1) 木簡について	37
2) 墓書土器について	37
3) 「臣」の墨書き土器について	40
4) 「臣」の墨書き土器のまとめ	42

4	自然科学分析	44		
A	はじめに	44	B 試 料	44	
C	分析方法	44	D 結 果	45	
E	考 察	50			
5	ま と め	55		
A	出土遺物について			55	
1)	10世紀の土器・陶磁器	55	2)	11世紀代の土器	56
B	検出造構と遺跡の性格			57	
1)	遺構の時期的変遷	57	2)	遺跡の性格	61

第IV章 平 遺 跡

1	調査の概要	62
A	調査区と調査方法		62
B	基本層序		62
C	遺構と遺物の検出状況		64
2	遺 物	65
3	ま と め	65
<要 約>			66
<引用・参考文献>			67
<角地田遺跡遺構観察表・遺物観察表>			69
<平遺跡遺物観察表>			84

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	角地田遺跡 確認トレンチの位置と本調査範囲 (1).....	3
第3図	平遺跡 確認トレンチの位置と本調査範囲 (2).....	3
第4図	能生周辺の地形.....	6
第5図	遺跡分布図.....	8
第6図	遺跡周辺の更正図.....	11
第7図	角地田遺跡 基本層序.....	14
第8図	角地田遺跡 遺物重量分布図 (Vc層出土遺物).....	16
第9図	角地田遺跡 造構の形態分類図.....	17
第10図	角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図 (1).....	25
第11図	角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図 (2).....	26
第12図	角地田遺跡 管状土錘法量グラフ.....	35
第13図	角地田遺跡 墨書・刻書き器.....	38
第14図	角地田遺跡 墨書・刻書き器分布.....	39
第15図	下宿内山遺跡出土「臣」墨書き器.....	40
第16図	角地田遺跡 「臣」崩し字の分類.....	41
第17図	角地田遺跡 花粉化石群集の層位分布.....	46
第18図	角地田遺跡 植物珪酸体含量の層位分布.....	48
第19図	角地田遺跡 花粉化石・植物珪酸体・ 本製品の切片顕微鏡写真.....	54
第20図	角地田遺跡 食膳具の法量.....	56
第21図	角地田遺跡 造構変遷図(1).....	58
第22図	角地田遺跡 造構変遷図(2).....	59
第23図	平遺跡 基本層序.....	63

表目次

第1表	遺跡一覧表.....	8
第2表	能生町の近世石高推移.....	11
第3表	角地田遺跡 1区の土層説明.....	13
第4表	角地田遺跡 2区の土層説明.....	15
第5表	角地田遺跡 造構の形態分類表.....	17
第6表	角地田遺跡 器種構成比率 (SK).....	30
第7表	角地田遺跡 器種構成比率 (SD・SX).....	31
第8表	角地田遺跡 器種構成比率 (包含層).....	33
第9表	角地田遺跡 中世陶磁器の集計表.....	34
第10表	角地田遺跡 花粉分析結果.....	46
第11表	角地田遺跡 植物珪酸体含量.....	48
第12表	角地田遺跡・平遺跡 樹種同定結果.....	49
第13表	平遺跡 土層説明.....	62

図版目次

【図面図版】

図版1	角地田遺跡 位置と周辺地形図
図版2	角地田遺跡 造構全体図(1)
図版3	角地田遺跡 造構全体図(2)
図版4	角地田遺跡 造構分割図(1)
図版5	角地田遺跡 造構分割図(2)
図版6	角地田遺跡 造構分割図(3)
図版7	角地田遺跡 造構分割図(4)
図版8	角地田遺跡 造構個別図(1) 挖立柱建物
図版9	角地田遺跡 造構個別図(2) 挖立柱建物 橋
図版10	角地田遺跡 造構個別図(3) 挖立柱建物
図版11	角地田遺跡 造構個別図(4) 挖立柱建物 橋
図版12	角地田遺跡 造構個別図(5) 挖立柱建物
図版13	角地田遺跡 造構個別図(6) 土坑
図版14	角地田遺跡 造構個別図(7) 土坑 柱穴 溝
図版15	角地田遺跡 造構個別図(8) 配石造構 溝
図版16	角地田遺跡 造構個別図(9) 溝
図版17	角地田遺跡 造構個別図(10) 溝 性格不明造構

図版18	角地田遺跡 造構個別図(11) 性格不明造構 柱穴
図版19	角地田遺跡 造構個別図(12) 柱穴 杭
図版20	角地田遺跡 遺物実測図(1)
図版21	角地田遺跡 遺物実測図(2)
図版22	角地田遺跡 遺物実測図(3)
図版23	角地田遺跡 遺物実測図(4)
図版24	角地田遺跡 遺物実測図(5)
図版25	角地田遺跡 遺物実測図(6)
図版26	角地田遺跡 遺物実測図(7)
図版27	角地田遺跡 遺物実測図(8)
図版28	角地田遺跡 遺物実測図(9)
図版29	角地田遺跡 遺物実測図(10)
図版30	角地田遺跡 遺物実測図(11)
図版31	角地田遺跡 遺物実測図(12)
図版32	角地田遺跡 遺物実測図(13)
図版33	角地田遺跡 遺物実測図(14)
図版34	平遺跡 遺物実測図

【写真図版】

- 図版35 角地田遺跡 遠景 近景
図版36 角地田遺跡 全景 基本層序
図版37 角地田遺跡 遠景 全景 1区完掘 基本層序 挖立柱建物(1)
図版38 角地田遺跡 挖立柱建物(2)
図版39 角地田遺跡 挖立柱建物と柱穴
図版40 角地田遺跡 挖立柱建物と櫛の柱穴 土坑(1)
図版41 角地田遺跡 土坑(2)
図版42 角地田遺跡 土坑(3) 配石遺構
図版43 角地田遺跡 溝(1)
図版44 角地田遺跡 溝(2)
図版45 角地田遺跡 溝(3)
図版46 角地田遺跡 溝(4)
図版47 角地田遺跡 溝(5)
図版48 角地田遺跡 溝(6)
図版49 角地田遺跡 溝(7) 性格不明遺構(1)
図版50 角地田遺跡 性格不明遺構(2)
図版51 角地田遺跡 柱穴
図版52 角地田遺跡 杭(1)
図版53 角地田遺跡 杭(2) T 1 ~ T 3 完掘 基本層序
図版54 角地田遺跡 土器(1)
図版55 角地田遺跡 土器(2)
図版56 角地田遺跡 土器(3)
図版57 角地田遺跡 土器(4)
図版58 角地田遺跡 土器(5)
図版59 角地田遺跡 土器(6)
図版60 角地田遺跡 土器(7)
図版61 角地田遺跡 土器(8)
図版62 角地田遺跡 土器(9) 土製品
図版63 角地田遺跡 鉄闇連遺物 石製品 木製品
図版64 角地田遺跡 墨書き土器 刻書き土器 木筒
図版65 平遺跡 基本層序 遺物出土状況 完掘
図版66 平遺跡 土器 木製品

第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

北陸新幹線は、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設される新幹線鉄道である。東京駅を基点として、上越新幹線高崎駅で分岐し、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・福井県小浜市などを経由し、東京都と大阪市を結ぶ路線である。総延長700km（東京・高崎間の105kmは上越新幹線と併用）のうち、高崎・長野間は既に平成9（1997）年10月に開業している。その後、平成10年3月には長野市を基点とし、長野県飯山市を経て上越市に至る長野・上越間の延長60kmの工事実施計画が認可された。

一方、上越市から富山市までの約110kmの区間は、平成5年9月に糸魚川・魚津間が新幹線鉄道規格路線として工事実施計画が認可され、平成13年4月には上越・糸魚川間及び新黒部・富山間の新規着工が認可された。

これを受けて、日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成14年3月に鉄道運輸機構から上越・糸魚川間37kmの分布調査の依頼を受け、平成14年4月に県教委が調査を実施した。その結果、周知の角地田遺跡を含む12地点で遺物を採集した。さらに地形的特徴から遺物採集地以外の地点も含め、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であるものの、今後、試掘確認調査を実施して取り扱いを判断する必要があると回答した。

平成15年9月、鉄道運輸機構から糸魚川市小見地内の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成15年11月、平成16年11月、平成18年10月の試掘確認調査の結果、角地田遺跡は1,900m²、平遺跡は2,810m²の本発掘調査が必要と回答した。

試掘確認調査の結果を受けて、鉄道運輸機構は県教委に対し両遺跡の発掘調査の実施を要望した。平成18年3月、鉄道運輸機構から県教委が受託し、同年5月から埋文事業団が本発掘調査に着手した。



第1図 遺跡の位置
（国土地理院発行 平成14年「名立町」平成15年「横」1:25,000縮尺）

2 調査と整理作業

A 試掘確認調査

角地田・平遺跡の試掘確認調査は、県教委から委託を受けた埋文事業団が、北陸新幹線法線や消雪基地・坑外設備予定地を対象として、平成15・16～19年度に実施した。調査対象面積は合計で30,458m²に及び、その内訳は、15年度8,660m²、16年度11,270m²、18年度10,400m²、19年度128m²である。

調査は、調査対象範囲内に任意にトレーニチを設定し、バックホーや人力で掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。さらに土層堆積状況、トレーニチの位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。

調査の結果、新幹線法線の200k020m～200k120mの範囲には、古代の遺構・遺物が良好に残存し、角地田遺跡は本発掘調査の対象となった。面積は1,900m²である。また、199k500m～199k620mの範囲は遺構・遺物の検出はあったが、次年度に作付けが行われるなどの制約から、検出遺構の帰属時期が明確に出来ないなど調査が不十分となった。そのため、当区域を平遺跡として再度確認調査を行うこととなった。調査対象面積は2,810m²である。なお、18-9～13トレーニチの消雪基地、15-2～8トレーニチの坑外設備予定地と199k620m～200k020mの範囲は、検出遺構や出土遺物が希薄であることから、本発掘調査対象外とした。

B 本発掘調査

1) 角地田遺跡

調査の経過 本発掘調査は、平成19年5月1日～9月6日にかけて実施した。調査区は、調査の便宜を図るために、本遺跡の東側の一級低い低地を1区、その上段の扇状地上を2区とした。2区はさらに、中央の基本層序セクションベルト（8A～8Bグリッド西側）を境として、その東側を2区A、西側を2区Bに区分した。さらに、北陸新幹線橋脚建設予定地をT1～T3と仮称した（第7図）。

調査は5月初旬、暗渠工事から着手し、同月15日には、表土除去を開始した。発掘調査は5月21日から本格化し、作業員45名（3班編成）を投入して1区と2区の包含層掘削を開始した。同月24日にはT1～T3の開渠掘削と包含層掘削も開始し、1区・2区、T1～T3の3地区が同時並行の作業を行った。

その後、6月7日にT1～T3の調査が終了し、6月下旬の27日には1区の発掘調査も完了した。

7月以降は角地田遺跡の主体である2区を中心に遺構調査を行ったが、当初終了の予定であった7月末日の終了が困難となった。そのため鉄道運輸機構、県教委、埋文事業団の三者で協議を行い、調査の延長を決定した。8月上旬、VI層上面の遺構調査の大部分が終了し、8月10日に航空写真撮影を行った。

その後は、礫層を覆土とする大規模な溝（SD853）の検出・掘削、地山面であるVI層以下の掘下げを行うとともに、再度、掘立柱建物の配列確認作業を行った。8月29日、県教委の終了確認を受け、9月6日には地山面以下の土層堆積状況を確認するための深掘りや、残務処理を終え現場を撤収した。そして、9月7日に調査区を鉄道運輸機構に引き渡した。

発掘調査の方法 表土剥ぎは、調査員立会いの下、バックホーを用い慎重に行った。包含層及び開渠はホソを用い慎重に掘削し、遺構確認等はデルタホーを用い検出に努めた。土層断面等の図化は基本的に手作業で行い、遺構の平面図等はトータル・ステーションを用いてデジタルによる測量図面を作成した。遺物の取り上げは、基本的に、小グリッドあるいは遺構単位で行ったが、遺物が集中するSK577・698等では、トータル・ステーションによる遺物ドット化を行った。遺跡の完掘写真は、ラジコンヘリコプターに



第2図 角地田舎駅 権認トレレンチの位置と本調査範囲(1)



第3図 平郷駅 権認トレレンチの位置と本調査範囲(2)

2. 調査と整理作業

による空中写真の撮影を行い、各方角からの俯瞰写真などを撮影した。

2) 平 遺 跡

平遺跡の確認調査は平成19年5月15日～8月1日にかけて実施した。北陸新幹線法線内（199k500m～199k620mの範囲）の東側法線に沿って調査区を5か所設定し、それぞれを101区～105区と呼称した（第23回）。発掘調査は101区から重機を用い表土除去を行い、人力による遺構・遺物の確認を行った。また、土層の堆積状況、調査区の位置、遺物の出土状況を図面や野帳、写真に記録した。

調査は排水作業が終了した6月26日から本格化した。101区から開始し、遺物包含層で古代の遺物を得るに至った。6月29日、102区の調査に着手し、遺物包含層の上面で遺物がやや集中する川跡を検出し、7月初旬には、103区に調査の主体を移した。同区では、遺構の検出は無かったが、混入ながら古代の遺物が出土している。同月11日には104区の調査に入り、整地層の下部に近世陶磁器が出土し、打たれた杭（くい）や樋（しがらみ）なども検出した。しかしながら、これらの遺構は、出土遺物や土層堆積状況、周辺の聞き取り調査から近代以降の所産と判断した。その後、7月25日に104区を完掘し、102区～104区の調査は完了した。翌日、105区の調査を開始した。遺構の検出は無かったが、出土遺物には古代の須恵器や木製品があった。8月1日、同区を完掘し、埋め戻し作業を行い、翌日鉄道運輸機構に引き渡した。以上の結果、平遺跡の一部を遺物散布地として認識するに至った。

C 整 理

角地田遺跡と平遺跡の整理は並行して行った。遺物の水洗、注記、接合・復元作業、遺構図面・記録類等の整理は、調査現場で発掘調査と並行して行った。9月から報告書作成の作業を本格化させ、遺構の仮図版作成、遺物実測・トレース、遺物の分類、計量・計測等を順次行い、12月から遺構図面のデジタルトレース、観察表の作成、遺物写真撮影（ニコンD50を使用）、図版作成・原稿執筆等を行った。

D 調査・整理体制

試掘確認調査と本発掘調査及び整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

【平成15年度試掘確認調査】

調査期間 平成15年11月4日～14日、12月8日～12日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 輝一）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管 理 黒井 幸一（事務局長）

長谷川二三夫（総務課長）

藤巻 正信（調査課長）

庶 務 高野 正司（総務課班長）

調査指導 寺崎 裕助（調査課課長代理）

調査担当 石川 智紀（調査課班長）

調査職員 片岡 千恵（調査課嘱託員）

【平成16年度試掘確認調査】

調査期間 平成16年11月1日、5日～11日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板尾越 鮎一）

調査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理 黒井 幸一（事務局長）

長谷川二三夫（総務課長）

藤巻 正信（調査課長）

庶務 高野 正司（総務課班長）

調査指導 山本 墓（調査課課長代理）

調査担当 滝沢 規朗（調査課班長）

調査職員 片岡 千恵（調査課嘱託員）

【平成18・19年度試掘確認調査】

調査期間 平成18年10月31日、11月6日、8日～10日、平成19年4月9日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理 波多 俊二（事務局長 平成18年度）

木村 正昭（事務局長 平成19年度）

斎藤 栄（総務課長）

藤巻 正信（調査課長）

庶務 長谷川 爪（総務課班長）

調査担当 田海 義正（調査課班長）

調査職員 田中 一徳（調査課嘱託員）

【本調査・整理作業】

調査期間 平成19年5月1日～平成20年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調査 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

管理 木村 正昭（事務局長）

斎藤 栄（総務課長）

藤巻 正信（調査課長）

監督 高橋 保雄（調査課担当課長代理）

庶務 長谷川 爪（総務課班長）

支援組織 株式会社 みくに考古学研究所

現場代理人 貝瀬 功

現場世話人 関 健二

調査担当 實川 順一（研究室室長）

調査職員 長澤 展生（主任研究員）

桑原 健（研究員）

補助員 今成 京子、江口 邦雄、貝瀬あゆみ、桑原 淳子、富沢由美子

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

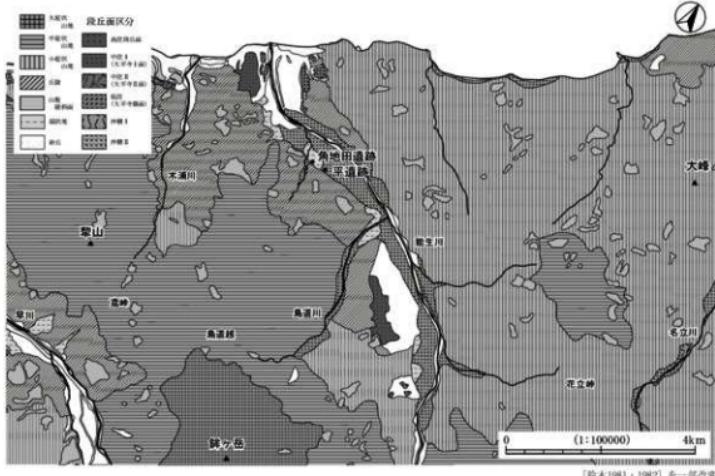
1 地理的環境

遺跡の位置と地形的特徴 角地田遺跡と平遺跡は、糸魚川市能生地区の大字小見および大字平に所在する。平成16年の合併以前は西頸城郡能生町に属し、その東は旧名立町と、西は糸魚川市早川地区と接していた。新潟県西部地域は、姫川流域に沿って、日本列島の地質構造を東西に分断する「糸魚川-静岡構造線」が走り、新第三紀層からなる「フォッサ・マグナ」地帯が広がっている。角地田遺跡や平遺跡周辺は、まさにこの「フォッサ・マグナ」地帯の中にあり、それを地質的背景とした西頸城山地と呼ばれる山地・丘陵性の地形を発達させている（第4図）。

西頭城山地には、その南方の長野県境付近の火打山(2462m)を頂点とし、放射状にのびる幾つかの尾根筋を生成している。そのうち、不動山(1430.1m)－花立峰－大峰(464.7m)へと至る連なりと、鉢ヶ岳(1316.3m)－鳶峰－犁山(751.1m)へと至る山地・丘陵の連続は、能生川と早川・名立川両流域との分水嶺をなして、徳合浜や鬼舞へと至り、急傾斜の海食崖となって日本海に張り出している。

能生地区周辺に見られるこのような西頸城山地の地形は、フォッサ・マグナの硬い第三紀層と日本海の浸食によって、切り立つ崖がそのまま海へと落ち込む西頸城独特の地理的景観を生成した。火打山から連なる分水嶺の谷間は、能生川、早川といった河川によって開拓され、「能生谷」や「早川谷」などと呼ばれる深い谷を刻み、谷底に陥没した冲積低地を生み出した。

能生地区周辺の地形は、こうした西ヶ原山地や丘陵が地勢の大部分を占め、海食崖と狭小な沖積平野を



第4図 能生周辺の地形

地形的特徴としている。それは、時に人の往来を阻み「天下の險」と言われる北陸道の難所を生み出す大きな地理的要因となった。

フォッサ・マグナと周辺地形 西頸城山地に見られる地形的特徴は起伏に富んだ地形にあり、それは新第三紀の堆積層からなるフォッサ・マグナの地質的構造を反映している〔鈴木1981・1982、戸根ほか1987〕。能生地区周辺の西頸城山地において、前述の鉢ヶ岳-鳩峰-犁山へといたる分水嶺には、起伏量400~200mの中起伏山地が特徴的に分布し、一帯は相対的に新しい新第三紀の安山岩質溶岩(谷浜層)などが堆積する。一方の不動山-花立峰-大峰の分水嶺一帯は、起伏量が少ない小起伏山地が特徴であり、その周辺は相対的に古い新第三紀の泥岩や砂岩(名立層)などから構成されている。

また、西頸城山地が広がる能生とその周辺地域は、新第三紀堆積岩起源の地滑り地帯としても広く知られ、馬蹄形の滑落崖と階段状の緩斜面を特徴とする地滑り地形が無数に分布している〔鈴木1981・1982、高野ほか1986〕。これも、フォッサ・マグナを背景とする当地域の地形的特徴のひとつであり、広範な中起伏山地・丘陵に狭小かつ平坦な丘陵緩斜面を形成している(第4図)。

このように、能生地区周辺の分水嶺にみる山地の起伏量や地滑り地形に代表される丘陵緩斜面は、フォッサ・マグナの地質的構造を背景としており、西頸城山地一帯の地形的特徴の成因となっている。

段丘面について 能生谷周辺の遺跡が形成される地形は、フォッサ・マグナを成因とする丘陵緩斜面だけではない。能生川流域などの河川流域に分布する小規模な段丘面にも多数認められ、緩斜面をなす地滑り地形とともに、繩文・古代の遺跡が立地する貴重な平坦面となっている。段丘面は中位から低位に対比される洪積段丘(大平寺I~III面相当)と冲積段丘(高田面相当)からなり、能生川流域を中心として小規模ながら発達している〔鈴木1981・1982〕(第4図)。能生谷とその周辺は、前述のような起伏に富む丘陵性の地形的広がりを見せる一方、こうした遺跡が形成される段丘面や丘陵緩斜面を小規模ながらに発達させる地理的環境下にある。

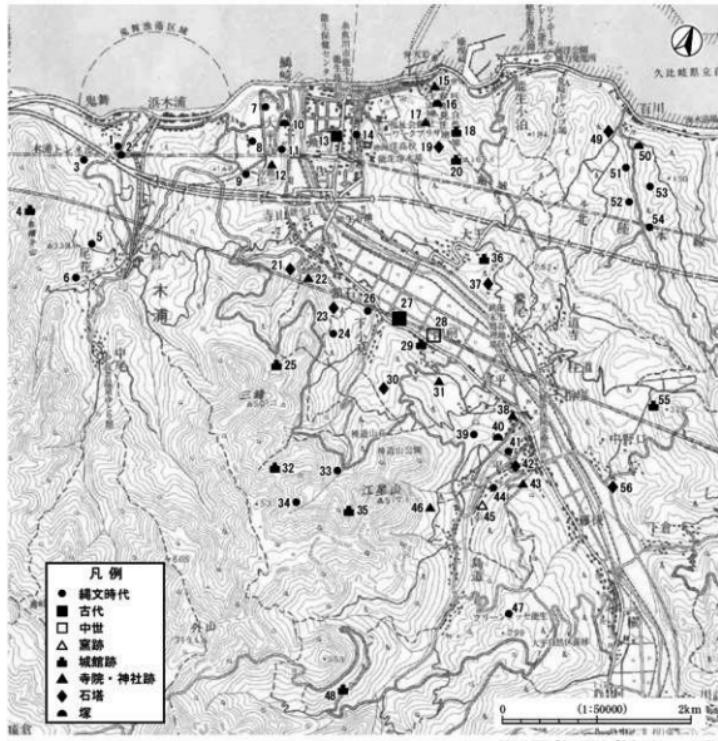
2 歴史的環境

角地田遺跡の所在する糸魚川市能生地区には、能生川流域を中心として繩文時代から中世までの遺跡が多数存在する(第5図)。その大部分は繩文時代の遺跡であり、特に能生川左岸の中位・低位段丘面や丘陵緩斜面に多い。弥生時代以降の遺跡分布は希薄であり、沖積低地に分布する古代・中世の遺跡が少数周知化されているに過ぎない。繩文時代の遺跡分布に比べ、遺跡数の減少が著しい。ここでは、能生川流域を中心とした能生地区的遺跡を紹介し、ついで、文献などに見える古代・中世の動向を概観する。

A 周辺の遺跡

繩文時代 角地田遺跡や平遺跡周辺の繩文時代の遺跡は、能生川流域を中心に分布している。なかでも右岸の低位段丘面に立地する井ノ上遺跡(14)は、古くからその存在が知られ〔斎藤1937〕、能生周辺では最古となる繩文時代早期末葉の好資料が出土している〔室川ほか1986、寺崎1997〕。

繩文時代中期~後期は、能生地区で最も遺跡数が増加し、能生川流域には中期を主体とした前述の井ノ上遺跡や春日平遺跡(24)〔室川ほか1986〕、十二平遺跡(25)〔秦ほか1990〕などが分布している。このうち十二平遺跡は、能生川左岸の丘陵緩斜面に立地する遺跡で、堅穴住居24軒を検出した環状集落とされる。出土遺物には中期前葉~後期前葉の多量の繩文土器とともに、玉造関連遺物や磨製石斧製作関連遺物が出



第5図 遺跡分布図

国土地理院「高田西部」(赤魚川) 1:50000図面

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	鬼舞	15	能生白山神社跡	29	小見館跡	43	東見寺跡
2	鬼舞Ⅱ	16	坪山経塚	30	龍光寺の五輪塔	44	山の上
3	石田	17	坪山の寺院跡	31	飯寺跡	45	井の口焼窯跡
4	木浦城址	18	乳母が懐館跡	32	差御館跡	46	白山神社跡
5	刈干山	19	神家山石塔群	33	糠沢	47	大平
6	殿村	20	能生城址	34	西すまき	48	番屋跡
7	大平寺北	21	大法院跡の石塔群	35	殿屋敷（平城）	49	百川阿弥陀堂の石塔群
8	大平寺西	22	寺屋敷（大法院跡）	36	小出山の館跡	50	ハシドの封塚
9	布引	23	明福寺の五輪塔	37	小出山出生寺の石塔群	51	上の山
10	大平寺の一石一字經塚	24	春日平	38	大神社	52	大上
11	大平寺南	25	小見城址	39	扇殿	53	上野
12	寺院跡	26	十二平	40	森本封塚	54	金剛野
13	内の間	27	角地田	41	中江	55	中野口城址
14	井の上	28	平	42	大沢の五輪塔	56	反源寺の五輪塔群

第1表 遺跡一覧表

土し、その量と質で注目されている〔秦ほか1990、寺崎1997〕。

また、能生川流域以外でも、木浦川流域の鬼舞遺跡（1）や鬼舞II遺跡（2）〔戸根ほか1987〕、百川流域の金剛野遺跡（54）〔室川ほか1986〕、筒石川流域の平畠遺跡〔小島ほか1983〕が該期の遺跡として知られている。これらは段丘面や丘陵緩斜面に立地する遺跡で、金剛野遺跡では1973年の分布調査で硬玉製磨製石斧（玉斧）が採取されている〔小島ほか1983〕。また、1982年に発掘調査が実施された平畠遺跡では、中期前葉から後期前葉の繩文土器や、硬玉製大珠などの玉造関連遺物が出土している。

角地田遺跡や平遺跡周辺では、以上のような中期を主体とした遺跡が、段丘面や丘陵斜面部に集落遺跡を形成し、多くが硬玉製大珠などの玉造関連遺物を伴っている。

弥生・古墳時代 角地田遺跡や平遺跡周辺では、弥生・古墳時代の遺跡は極めて少なく、その様相は明らかでない。かろうじて古墳時代前期の土器群が井ノ上遺跡（14）〔室川ほか1986〕で出土しているが、弥生時代に至っては皆無に等しい。

古代・中世 角地田遺跡や平遺跡周辺の古代・中世遺跡は、能生川流域に点在するが、その多くは前述の繩文時代の遺跡において少量の遺物が出土するにとどまる。これらは丘陵緩斜面や段丘面に立地する遺跡であり、井ノ上遺跡、十二平遺跡（26）などが代表的な事例である。一方、内の間遺跡（13）や角地田遺跡（27）、平遺跡（28）〔室川ほか1986〕などは沖積低地に立地する遺跡である。しかしながら、沖積地に存在する古代・中世の遺跡は、未だ少数の分布にとどまっている。

能生地区では、以上のほかに、中世の寺院跡や城館跡などが分布している。明福寺（23）、大沢（42）、龍光寺（30）などの五輪塔や飯寺（31）、東見寺（43）などの真言宗寺院跡がある。これらは、現鶴石集落から大沢集落にかけての丘陵緩斜面や段丘面に存在し、やや集中した分布傾向を示す。周辺の城館跡としては小見館跡（29）や平城（35）などが知られている〔室川ほか1986〕。

海岸部では、当遺跡周辺の合德沖や名立沖の海底で、中世の珠洲焼や須恵器の水瓶が揚陸されている〔室岡1972、伊藤ほか1975、春日2007〕。古代・中世の海路による移動を示す可能性があり注目される。

B 能生地区の古代・中世

1) 古代

奈良・平安時代の能生 古代の新潟県域は、越（高志）の一部であった。越の国域は後の越前・越中・越後を含む広大な領域であり、奈良時代の7世紀中葉には阿賀野川以北を含んでいたものと推測されている。7世紀末の越の3分割、大宝2（702）年の越中4郡（頭城郡・古志郡・魚沼郡・蒲原郡）の越後編入〔米沢1980〕、和銅5（712）年の出羽国の成立（出羽郡の分立）を経て、越後の国域が成立する。奈良時代の能生地区は、こうして成立した越後の領域にあった〔山田1986〕。

平安時代には、延長5（927）年の『延喜式』や承平年間（931～937）に成立した『和名類聚抄』によって、頭城郡などの越後7郡の存在が知られる。そのうち、頭城郡には「沼川郷、都字郷、栗原郷、荒木郷、板倉郷、高津郷、物部郷、五十公郷、夷守郷、佐味郷」の郷名がみえ、能生地区を含む西頭城の広い区域は、沼川郷に比定されている〔青木1976、山田1986〕。

沼川郷の成立時期については、今のところ上記の『和名類聚抄』以外には文献上になく、不明とせざるを得ないが、頭城郡の成立は、奈良時代の天平勝宝4（752）年の造東大寺司牒の「頭城郡胆君郷」、天平勝宝年中（749～757）の東大寺正倉院御物の庸布の「久定郡夷守郷」などの郡・郷名の記載から、少なくとも8世紀半までに遡るものと考えられる。

このように奈良・平安時代の能生とその周辺は、こうした断片的な文献資料から、頸城郡に属し、少なくとも10世紀前葉には沼川郷の郷域に含まれていたものと推測される。

なお、「北越風土記節解」などの文献には、「鶴石郷」の郷名が見られる。この「郷」については、「能生町史」「室川ほか1986」などの解釈ように、現大沢集落周辺を指す「大沢郷」の呼称があることや、これらが後世の記述であることから、正式の行政単位ではなく、「さと」の意味で用いられたものと考えられる。

能生地区の式内社 10世紀初頭の「延喜式」によれば、頸城郡に存在する式内社として13社の記載が見える。このうち沼川郷に所在した可能性がある神社には、奴奈川神社、大神社、佐多神社、水嶋磯部神社、江野神社、青海神社、圓田神社の9社がある。能生谷周辺にもこれら式内社の論社がある。能生の白山神社(14)、平の大神社(38)、筒石の水嶋磯部神社がそれで、能生白山神社には、平安時代後期とされる銅造十一面觀音立像が残っている〔室川ほか1986〕。なお、同神社については、「式外神社越後春日・布河両社等」(康和2年)の記述に見える式外神社に充てる見解もある〔青木1976〕。

鶴石駅について 北陸道の難所として広く知られた西頸城一帯には、古代の駅路が設置されていた。「延喜式」は、越後国内の駅として11駅を記し、そのうち滄海、鶴石、名立の3駅が西頸城に所在したと考えられる。北陸道は小路に格付けされ、各駅には原則として駅馬5疋が配置された。滄海駅では8疋となるが、これは親不知・子不知と呼ばれる北陸道最大の難所を通過するためと考えられている。

こうした西頸城3駅の所在地や各駅を結ぶ駅路のルートについては、文献・考古・歴史地理学のそれぞれによって検討されている。例えば、能生地区に存在したとされる鶴石駅の所在地と駅路のルートを具体的に示したものとして、駅路を海岸沿いに北上するルートと想定し、鶴石駅を大平寺周辺の段丘面上と推測するもの〔小林1978〕、内陸の山越えルートを想定し、現鶴石集落に隣接する小見周辺(角地田遺跡周辺)をその所在地と推測するもの〔金子1990〕、あるいはさらに内陸のルートをとり、駅を大沢周辺に想定するもの〔青木1976〕などがある。

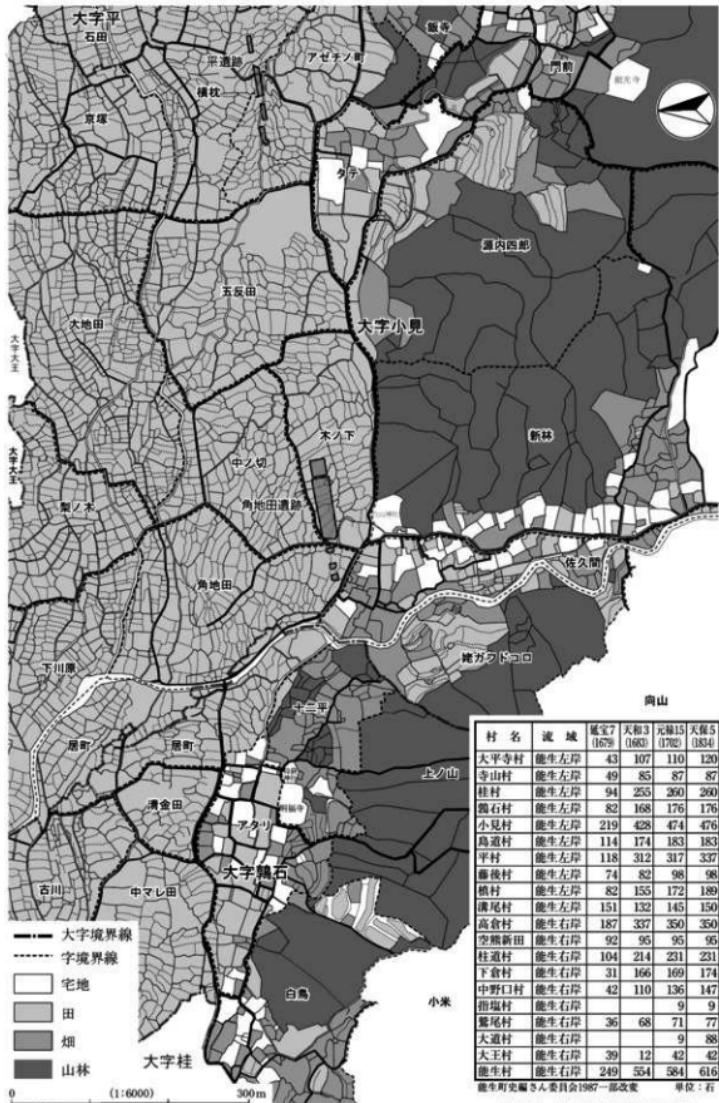
以上のように、鶴石駅の所在地をはじめとして、滄海駅から名立駅までの駅家の位置や駅路のルートは、見解の一致を見ておらず、最近刊行された上越市史でも未解決の問題となっている〔相沢2004〕。

周辺の地名 ここで、角地田遺跡や平遺跡を中心とした能生川流域の字名をみると、島道川との合流地点付近の大字平から大沢にかけて、柱道、鳥道などの道を付す地名が認められる。またこれより北には大道寺、楨などの地名も見える。このうち大道寺付近は、慶長3(1598)年の検地帳に見える大道村の可能性がある。大道、仙道、車路などの地名は、古代駅路に関係するものとは限らないが、古代駅路の沿道に認められる地名であり注目されている〔木下1996、中村2000〕。名立周辺にも名立川中流域の右岸に車路の地名が見える。能生川流域やその周辺では、道に関する地名が多く見られる。

2) 中　　世

中世の能生 越後国では、11世紀後半～12世紀にかけて中世的莊園が出現した。古代律令制度以来の郡・郷に代表される行政区画が解体し、新たに郷・保などを単位とする中世的所領が出現する。平安時代に沼川郷の領域であった能生周辺も、中世には国衙領の沼川郷(保)や名立保が成立した〔荻野1983〕。

沼川郷は能生周辺や糸魚川市域と推測され〔花ヶ前1976、青木1976〕、文安6(1449)年の天津神社懸仏の「越後國 沼河保一宮 天津社」の墨書きや、明応8(1499)年の能生白山神社所蔵梵錙の銘文「越後國沼川保内 能生泰平寺」から、少なくとも15世紀後葉までには沼川保と呼ばれるようになっていた。



第6図 遺跡周辺の裏玉閣（昭和2年地蔵堂改築）

第三章 佐世保町の近世工商地図

沼川郷（保）では、鎌倉時代の13世紀初頭頃に越後守護の流れをくむ北条宗長が地頭となり、14世紀中葉の南北朝の騒乱期には、早川谷に越後守護の一族である三宝寺上杉氏が拠点をかまえた〔山田1987、高橋2004〕。この時期には、康永4（1346）年の「村山高直軍忠状」などによって村山氏、福智氏、仁科氏といった西頸城に拠点をもつ土豪らの活躍が知られている。村山氏は、建武元（1334）年に降義が圓田保（上早川とする説もあるが、所在地は不明）の地頭職を与えられ、後裔（信義、義親）は後述のように能生筒石に拠点を置いた〔室川ほか1986〕。福智氏は、糸魚川市根知を本拠とする土豪とされ、鎌倉時代以降に土着したものと推測されている〔高橋2004〕。

15世紀に入り南北朝の騒乱が収束すると、早川谷では前述の三宝寺上杉氏が没落し、代わって山本寺上杉氏が不動山城に入り拠点を置いた。そして、戦国時代には永正の乱で越後守護上杉房能とともに活躍する〔山田1987〕。戦国期の能生谷周辺は、「安国寺文書」の永正8（1512）年7月条によって、越後守護家が相続する安国寺領であったことが知られ〔花ヶ前1976〕、「源姓村山氏系図」からは、前述の村山隆義の後裔である信義・義親が16世紀前葉頃に筒石城主となったことがわかる。また、永禄8（1565）年に村上義清が根知城に入ると、同年には子の国清が能生の徳合城主となり、後には名立に拠点を移した〔花ヶ前1997〕。同じ頃、糸魚川城主・勝山城主なったという萩田氏は、能生の土豪といわれ、小見の龍光寺にその墓とされる五輪塔がある〔室川ほか1986〕。近隣には小見館跡が存在し、萩田氏の居館と推測されている〔長原1969〕が、その確証は今のところ見出せない。

能生の寺院跡 能生谷には、多数の寺院・寺院跡が存在する。特に角地田遺跡や平遺跡の存在する小見・平周辺には、「能生谷村誌」が、廃寺となった小見の飯寺、平の善正寺、大沢の円満寺や東見寺といった真言宗寺院を伝える。明治28年の土地更正図には、字名として飯寺、善正寺が見える（第6図）。

曹洞宗寺院としては、小見の門前に龍光寺があり、萩田氏の墓とされる五輪塔を伝えている。長享2（1488）年に僧万里集九が能生に滞在した際、能生川河口付近の太平寺に逗留し、同年12月に龍光寺を訪れている。そのとき、麓にある集落を眺め感慨に耽っている〔室川ほか1986〕。

小見・平周辺の更正図 明治28年の更正図によれば、角地田遺跡や平遺跡周辺は大字小見に属していた（第6図）。字名では、平遺跡周辺にタテ、アゼチノ町、源内四郎といった人名や町のつくものが見られる。図示していないが、大字平から大字大沢の間にはさらに中屋敷、善正寺などの地名も見られる。更正図を観察する限りでは、短冊形の地割は認められないが、タテ周辺は前述のように館跡として周知され、「奴奈川史」では戦国時代以前の特徴を示す五輪塔の集積が認められたという〔長原1969〕。地割も台形状の張り出しから丘陵に向かって平行する区画が見られる。こうした特徴は、鶴石の字タリ周辺でも認められ、隣接の明福寺には五輪塔の存在が知られている。周辺には居町の地名も見える。

また、京塚から西の下用原にかけては、幾重にも能生川の旧流路の蛇行を示す地割が残されており、能生川が氾濫する不安定な区域だったことを示している。

小見周辺の村高 最後に近世の能生川流域の村高について簡単に触れておきたい。能生谷周辺では古くからのまとまった記録には、延宝7年（1679）のものがある。それによれば、延宝から天和にかけて鶴石・小見・平村などは、2倍以上の石高増加が見られ、能生川左岸の村では小見村の219石を筆頭に平村の118石、鳥道村の114石が続いている。同様の増加は右岸の村々にも認められ、能生町の249石を筆頭として柱道村の104石などが倍増している。慶長の検地帳が残る大王村、大造村は、残念ながら延宝の記録がなく比較できない（第2表）。また近世の新田村は空無新田のみで、ほかは本田村である。近世の能生谷では、17世紀後葉まで大きく開発の余地を残していたことがわかる〔室川ほか1986〕。

第Ⅲ章 角地田遺跡

1 調査の概要

角地田遺跡は、能生川左岸の現在の下小見集落にあり、背後には三峰（501.7m）、江星山（517.1m）と連なる丘陵地帯が広がる。丘陵地帯からは小見川が北へと流れ、狭小な沖積低地を形成し、鶴石集落の北方で能生川と合流する。小見川は、谷出口では小規模ながらに扇状に広がる台地状の地形を形成し、その堆積物は緩やかな斜面地をなしている。当遺跡はこうした小見川の右岸に形成された扇状地上に立地している。調査地点の微地形は、扇状地形を反映して北と東へ傾斜し、標高30.5~33mの間にある。以下は、こうした扇状地に立地した角地田遺跡の調査概要である。

A グリッドと調査区の設定

角地田遺跡の本発掘調査の調査区は、北陸新幹線法線内と橋脚建設予定地3地点からなる。法線内は調査区西側の一級低い下段の1区と、調査区の大半を占める上段の2区からなる。更にその西には、1区画 8×7 m前後の橋脚建設予定地があり、各区をT1~T3と呼称した。

グリッドの設定は、法線の中心線の200K020m（2C）と200K200m（20C）を結ぶ直線を基準ラインとして設定した。それぞれの座標値は、2CでX=120584.282, Y=44039.909, 20CでX=120562.852, Y=-44218.624である。基準ラインと直交するグリッド南北軸は、真北から $6^{\circ} 50' 47''$ 西偏している。

グリッドは、 10×10 mの大グリッドを設定し、東西軸に東から1~20までのアラビア数字を、南北軸に南からA~Dのアルファベットを付し、「5B」や「11C」などのように数字・アルファベットの順で組み合わせて表示した。大グリッドには 2×2 mの小グリッドを設定し、南東隅から北西隅へ1~25のアラビア数字を付し、「5B22」などのように大グリッドの後ろに連続して表記した（図版2参照）。

B 基本層序

本遺跡の土層断面の観察による基本層序は、表土から遺構確認面までに、1区はI~III層を、2区はI~VI層をそれぞれ確認した。1区と2区の土層の対応関係は、その間に走る用水のために把握することが出来ず、不明とせざるを得ない。したがって、1区のI~III層は2区の同名の土層と識別するために、1区に限り「1区I層」と層の前に地区名を付すこととした。1区・2区の基本層序の土層説明は、それぞれ第3表と第4表に示した。

1区の基本層序は、地形の起伏が少なく、各層が安定的に堆積している。このうち1区II層が遺物包含層で、遺構の検出面は1

層位	色調	しまり	粘性	土層の所見
I区 I 表土		あり	あり	耕作土
I区 II 暗オリーブ灰色土	5GY4/1	あり	あり	粘質土、炭化物を少量含んでいる。古代・中世の遺物包含層である。
I区 III オリーブ灰色土	25GY5/1	あり	あり	粘質土、2区の基本土層との対応関係は不明。
I区 IV 暗緑灰色土	7.5GY4/1	あり	あり	粘質土、2区の基本土層との対応関係は不明。
I区 V オリーブ灰色土	25GY5/1	あり	あり	粘質土、2区の基本土層との対応関係は不明。
I区 VI オリーブ灰色土	3GY6/1	あり	あり	粘質土、2区の基本土層との対応関係は不明。

~VI層までを識別してい

第3表 角地田遺跡 1区の土層説明



第7回 角地田螺講 基本眉序

る。これら地山面以下の土層も、2区の層序との対応関係は不明である。土層説明は、第3表にI～III層とともに示してある。

2区の基本層序は、I～VI層までがほとんど擾乱を受けず良好な堆積を示している。遺物包含層はV層で、特にVc層は概ね11世紀前葉～後葉を主体とする古代・中世の遺物を包含し、2区～T3までの全域にほぼ安定的な堆積を示している。

また、遺物包含層のVc層直下と遺構確認面のVI層との間には、主に6～8A～Cグリッド（特にSD853周辺）に、不安定で極めて薄い（層厚2cm前後）細縞を多く含む土層（Vd層）を検出した。Vd層はSD728・729・853・896・897の覆土でもあり、SD853などの遺構の立上がり付近において層厚があり、図上にはその周辺でだけ確認できる。しかしながら、Vd層はこうした遺構覆土との間に切れ目がなく、連続的に堆積しているため、SD853やSD729の覆土として表現されている（図版17 土層断面117-117の2層、（1）層に対応）。発掘現場での所見では、Vd層は薄く不安定といえ面的な抵抗を持った土層である。加えて、本土層を覆土とするSD853では直径10cm以上の縞を多量に含んでいるため、Vd層の形成が土石流によるものである可能性が考えられる。

なお、当該区域で検出された遺構の大部分（Vd層を覆土にもつSD729・853などを除き）は、このVd層を

層位	色調	しわ	粒性	土層の所見
I a	黒褐色土	10YR5/1	なし	耕作土
I b	黒褐色土	10YR4/1	あり	耕作土；「Ia層よりもしまりがある。」
II a	灰褐色土	10YR6/4	あり	耕作土；3.5cm厚、10Cグリッドなどに部分的に堆積する。灰白色粒子、炭化物、小縞を少量含む。
II b	灰褐色土	10YR6/4	あり	耕作土；T1～T3、24（西手の8-Cグリッド）に堆積する。灰白色粒子、炭化物、小縞を含む。灰白色粒子や小縞の含有量はIIa層よりも多い。
III a	灰褐色土	7.5YR4/2	あり	耕作土；ほぼ西手の8-A～8-Cグリッドに堆積する。灰白色粒子、炭化物、小縞を含むが、Ⅱb以下の層より含有的な量が少ないを特徴とする。
III b	灰褐色土	7.5YR4/2	あり	耕作土；ほぼ西手の全層にわたって安定的に堆積する。灰白色粒子、ブロックを多く含む。溝渠区画面で、石垣周縁部が採取されている。
III c	明褐色土	10YR6/6	あり	耕作土；T1～T3に堆積する。Ⅲbよりもしまりが少ないが、灰白色粒子、炭化物、小縞を含む。
III d	灰褐色土	2.5Y/7	あり	シルト層；8-1Cの溝渠区画の北端に部分的な堆積を示す。他のⅢ層よりもしまりがある。
IV a	灰褐色土	7.5YR4/2	あり	耕作土；地形的にやや落ち込むCグリッドを中心に部分的に堆積する。灰白色粒子や炭化物が微量ながら含まれている。
IV b	黒褐色土	10YR3/3	あり	耕作土；地形的にやや落ち込むCグリッドを中心に部分的に堆積する。灰白色粒子や炭化物が含まれている。
IV c	灰褐色土	10YR5/2	あり	耕作土；11-Cや7-8A～Cグリッドに局的に分布する。灰白色粒子や炭化物が含まれる。遺物の出土が、古代・中世の遺物が少なかった。
V b	灰褐色土	10YR4/1	あり	耕作土；IIa層などを極めて局的に堆積している。灰白色粒子や炭化物が含まれる。遺物の出土は極めて少ない。
V c	黒褐色土	10YR3/1	あり	耕作土；T3や2区の全層に堆積する遺物包含層で、古代・中世の遺物を多量に含む。灰白色粒子や炭化物が含まれる。
V d	褐色土	10YR4/6	あり	6～8-A～Cグリッドの本層とT3の間に層理が極めて薄く堆積している（Vd層）。この層理部は、SD729やSD853の土手付近では相対的に層理が厚くなる。きわめて薄いためSD729やSD853の土手が付近でのみ露出（土層断面117-117～118-118の層、（1）層に対応する）。部分的に土手の粘土層が混在する。
VI	黒褐色土	10YR6/2	あり	耕作土；T1～T3、2区の全層に堆積している。遺物の出土はない。
VI	青灰褐色土	5B5/1	あり	耕作土；Cグリッドでは、局的に黒褐色となり炭化物を含む。遺物の出土はない。
VI	青灰褐色土	10B6G5/1	弱	耕作土；しまりに欠けるシート状で、溝渠区画での土解剖面などで確認され、2区の広域に堆積が認められる。
VI	黒褐色土	7.5Y5/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。炭化物を少額含んでいる。灰色が暗い。深掘りトレンチの2（第7回注）でのみ確認された。
X	青灰褐色土	7	弱	耕作土；しまりに欠ける。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。耕作土に植物の土被りである。
X I	明褐色～灰褐色土	5G7/1	弱	耕作土；耕作土とVI層の上の堆積をもつて、深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X II a	青灰褐色土	10B6G5/1	弱	砂層；やや粒子が粗く、砂をベースとして、縞を多く含んでいる。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X II b	黒褐色土	7.5Y5/1	弱	砂層；やや粒子が粗く砂をベースとして、縞を多く含んでいる。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X II c	黒褐色土	NA/1	弱	砂層；縞を多く含む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X II d	灰褐色土	7.5YR5/3	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。耕作土に植物の土被りである。
X III	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X IV	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X V	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X VI	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X VII	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X VIII	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X IX	灰褐色土	N5/1	弱	シルト層；しまりに欠ける。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X X	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	シルト層；しまりに欠ける。本層の下部はやや土塊が崩く崩離できる可能性もある。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X XI	緑灰褐色土	5G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。粒子の細かい縞を少量含んでいる。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。
X XII	青灰褐色土	10B6G6/1	弱	耕作土；しまりに欠ける。颗粒に富む。深掘りトレンチ2（第7回注）でのみ確認した。

第4表 角地田遺跡 2区の土層説明

切って構築されているものと判断している。本土層を覆土とするSD853では10世紀中葉の好資料が出土しており、遺物包含層のVc層に11世紀代の遺物が多いことと矛盾しない。

以上のはかに、調査の終盤で深掘りトレチ 1~3 を設定し、VI層以下の堆積を確認した（第7図②・⑩・⑫）。VII・IX・X・XI層で暗色の土層を検出したが遺物などの出土はない。土層説明は、第4表にその所見や土層説明を示した。なお2区の基本層序は、T 1~T 3 の層序と対応している。

C 遺構と遺物の検出状況

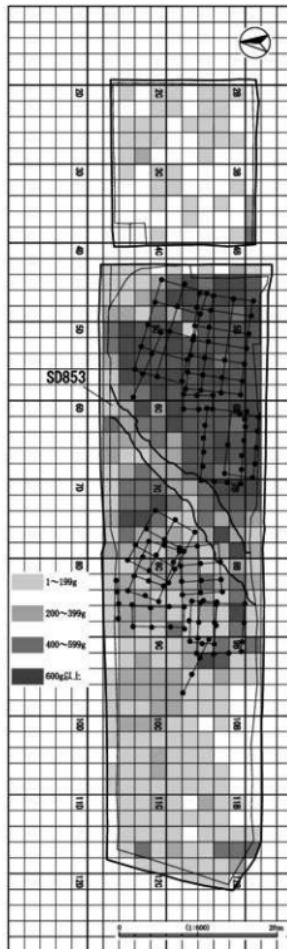
遺構の分布 本遺跡では、掘立柱建物や溝、土坑をはじめとする多数の遺構を検出した。検出遺構の大多数は、遺構の切合いや出土遺物からVd層堆積後の形成（11世紀前葉～後葉主体）と考えられる。ここではこうした11世紀代を主体とする検出遺構の分布を説明する。

本遺跡で検出された遺構はその大部分が2区に集中している（図版2）。特に8B、8Cグリッドの東側に集中的に検出され、この区域では柱穴や掘立柱建物、溝、耕作溝、土坑など本遺跡の主要な遺構が分布している。またVd層によって埋没したSD853（溝A群）は、6Bグリッドから8Bグリッドにかけて存在するが、Vc層の検出遺構はこの遺構が埋没した区域では、相対的に少なくなる。

出土遺物の分布 出土遺物は、11世紀前葉～後葉にかけての士師器食器具を主体とする遺物が、遺物包含層のVc層を中心として出土している。第8図は、Vc層で出土した遺物の重量分布を示したものである。それより下位のVd層でも、それを覆土とするSK514、SD728・729・853に10世紀中葉の出土遺物があるが、それ以外の地点や遺構には遺物はなく、同図ではVd層の遺物分布を示していない。

それによれば、11世紀前葉～後葉を主体とする遺物の分布傾向は8B、8Cグリッド以東に多くなっているが、SD853の遺構プラン周辺では分布が希薄となっている。

こうしたSD853周辺に見られる遺物の分布傾向は、11世紀代を中心としたVc層の遺物密度が、10世紀中葉以降にSD853が埋没した後も、SD853周辺を意識して廃棄した可能性を意味する。先述のように、Vc層はSD853覆土（Vd層）の上位に形成された遺物包含層であり、SD853の遺構プランの上部でもVc層が安定的に堆積し、擾乱も受けけてはいない。したがって、SD853埋没後もその周辺が区画性を維持していた可能性が遺物の分布傾向から示唆される。



第8図 角地田遺跡 遺物重量分布図（Vc層出土遺物）

2 遺構

A 概要

検出された遺構はいずれも古代に属し、Vd・VI層を遺構確認面として掘立柱建物12棟、柵(さく)2列、土坑15基、溝94条、性格不明遺構8基、配石遺構1基、柱穴363基、杭29基を検出した。これらは、遺構の検出面や出土遺物から、大きく10世紀中葉と10世紀後葉～11世紀後葉に2分される。前者は、遺物包含層(Vc層)直下のVd層を覆土とするもので、溝7条と配石遺構1基がある。後者は、Vd層・VI層を確認面とした遺構で、上記遺構の大部分に相当する。

ここでは、本遺跡で検出された遺構のうち、代表的なものを抽出し紹介する。

B 記述の方法

遺構名称 遺構の種類と略称は、掘立柱建物=SB、柵(さく)=SA、土坑=SK、溝=SD、性格不明遺構=SX、配石遺構=SS、柱穴=Pとした。遺構番号は、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号を付した(例えばSX1・P2・P3・SD4…)。溝などでは、当初別遺構として遺構名称を付したものでも調査の過程で同一と判明したものがあり、それらについては後に番号を統一した。掘立柱建物や柵(さく)は、以上とは別にそれぞれ独立して番号を付した(例えばSB1・SB2…、SA1・SA2…)。

記述の方法 遺構の説明は本文・図面図版・写真図版・観察表を用いて行なう。本文では観察表で示せない所見などを優先し、遺構の規模や形状などは観察表に示し、可能な限り記載の重複を避けた。ただし、重要度の高いと思われる遺構は、本文でも個別説明をする。遺構の写真是、重要な遺構や残存状況が良好な遺構を優先的に掲載したため、個別図にある遺構のすべてを網羅していない。

観察表 観察表は種別ごとにまとめ、個々の遺構の位置・形態・規模・他遺構との切合い・関係・出土遺物等を記した。遺構の平面形や断面形の呼称は、和泉A遺跡の分類[荒川ほか1999]に基づき記載した(第9図、第5表)。遺構の長軸方位は、長軸を基準として真北からの角度を表記した。例えば東偏50°ならば「N-50°-E」とし、西偏ならば「N-50°-W」とした。断面図や遺構図版に示した各土層の色調は、「新版 標準土色帳」[小山・竹原2005]を使用した。

平面形態	
円 形	長径が短径の1.2倍未満のもの
橢円形	長径が短径の1.2倍以上のもの
方 形	長径が短径の1.2倍未満のもの
長方形	長径が短径の1.2倍以上のもの
不整形	凹凸で一定の平面形を持たないもの

断面形態	
台形状	底部に平坦面を持ち、緩やかから急角度に立上がるものの
箱 形	底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立上がるものの
弧 形	底部に平坦面を持たない弧状で、緩やかに立上がるものの
半円形	底部に平坦面を持たない楕状で、急角度で立上がるものの
階段状	階段状の立上がりを持つものの平面長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立上がるものの
漏斗状	下部がU字形、上部がV字形の段階構造からなるもの
不整形	凹凸で一定の断面形を持たないもの

第5表 角地田遺跡 遺構の形態分類表



第9図 角地田遺跡 遺構の形態分類図

C 遺構各説

1) 挖立柱建物 (図版5・6・8~12・37~40)

合計12棟になる。すべて2区にあり、Vd層上面やVI層で検出された。これらは、長軸方向の方位から4群に分類される。1群は長軸方向が西偏90°前後のもので、SB1・4・5・7・8が該当する。2群は長軸方向が西偏70~80°のもので、SB2・9・10が該当する。3群は長軸方向が西偏6°のものでSB3・11が該当する。4群は長軸方向が東偏86°前後を示すものでSB6・12がある。

掘立柱建物の構造は、SB1（1群）、SB2（2群）、SB6（4群）、SB9（2群）が総柱建物で、これら以外はすべて側柱建物である。総柱建物は1、2、4群に存在し、このうちSB1とSB2の面積は、70m²を超える大型のものである。中型（35~50m²）にはSB9、小型（30m²以下）にはSB6がある。側柱建物は、1群のSB5・7・8、2群のSB10、3群のSB3・11があり、中型のSB7以外は小型の建物である。

掘立柱建物の各群と、ほかの遺構との切合い関係は、1群にはSB1が雨落溝と考えられるSD575が伴う可能性があり、この雨落溝がSD541~543、SD571~574の耕作溝と切合い、SD575が新しい。同群のSB4はSD559と切合い関係にあり、SB4が新しい。またSB7はSX18と切合い、SB7が新しい。

2群はSB2がSD575と切合い、SB2が新しい。同群のSB9は、東西方向に長軸を持つSD552と切合い関係にあり、SB4がそれより古い。

3群はSB3がSB1の雨落溝の可能性があるSD575や耕作溝（SD541~543、SD571~574）を切って構築している。4群はSB7がSX18、SD11と切合い、SB7がいずれも新しい。

なお、掘立柱建物と溝A群（後述）の覆土となっているVd層との前後関係は、SB4~6・9・10~12の柱穴が、これを切っていると判断される。ほかのSB1~3・7・8は、出土遺物やSK577などとの切合い関係などから、Vd層より新しいものと判断される。

SB1（図版5・8・37~39） 面積83.0m²となる大型の総柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.7~2.3m、梁行方向で1.8~2.6mを測る。梁行は北側1間が狭く、拡張された可能性が考えられる。本遺構にはSD575が近接して存在し、雨落溝として伴う可能性がある。SB2と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合い関係では、SK577、SD576・867・869と切合い、本遺構がSK577より古く、それ以外より新しい。P668・663に分割材の柱根（332）が残存し、遺物はP589（1・3）、P590（2）、P747（5）、P785（4）から出土したものを図示した。

SB2（図版5・9・37~39） 面積72.8m²の大型の総柱建物で、柱間寸法はほかの掘立柱建物より大きく、桁行方向で2.8~3.1m、梁行方向で2.9~3.1mを測る。SB1、SA1と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合い関係では、SX647、SD575と切合い、本遺構が新しい。P638には分割材の柱根（334）が残存し、遺物はP613（7）、P621（6）、P653（8）から出土したものを図示した。

SB3（図版5・10・37~39） 面積6.5m²の小型の側柱建物である。本遺構で検出された掘立柱建物では規模が最小で、柱間寸法は桁行方向で1.7~2.05m、梁行方向で1.7~1.85mを測る。SB4と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いでは、SD575（SB1の雨落溝の可能性がある）やSD576と切合い、本遺構が新しい。P579・809に分割材の柱根（333）が残存し、出土遺物は9（P579）を図示した。

SB4（図版5・10・37~39） 面積46.3m²の中型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.7~1.9m、梁行方向で1.6~1.75mを測る。SB3・5と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合い関係では、SK698、SD559・680・696・853と切合い、SK698より古く、SD559・680・696・853より新しい。

P687・896に分割材の柱根(331)が残存し、遺物はP692(10)、P687(II)から出土したものを図示した。

SB5 (国版5・10・37~40) 面積28.4m²の小型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.8~2.1m、梁行方向で最大2.44mを測る。SB4と重複するが、新旧関係は不明である。P705・843に分割材の柱根(335、336)が残存する。出土遺物は細片のため図示していない。

SB6 (国版6・11・37・38) 面積30.4m²の小型の総柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.6~2.3m、梁行方向で2.3~2.8mを測る。SB9・10と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いでSD853、P234と切合い、これらより新しい。遺物はP225(12)から出土した土師器榤を図示した。

SB7 (国版6・11・37・38) 面積35.6m²の中型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.3~2.5m、梁行方向で1.9~2.1mを測る。SB8、SA2と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いで、SX18、SD11と切合い、本遺構が新しい。遺物はP267(13)から出土した土師器榤を図示した。

SB8 (国版6・11・37・38) 面積16.9m²の小型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で2.4~2.9m、梁行方向で1.4~1.7mを測る。SB7、SA2と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いで、SD248と切合い、本遺構が古い。出土遺物は図示していない。

SB9 (国版6・12・37・38) 面積42.0m²の中型の総柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.8~2.7m、梁行方向で2.8~3.1mを測る。SB6・10と重複するが新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いで、SD522、P214と切合い、本遺構が古い。出土遺物はP231(14)、P827(210・211)の土師器榤・鉢を図示した。

SB10 (国版6・12・37・38) 面積27.9m²の小型の側柱建物で、柱間寸法は桁行方向で1.7~3.1m、梁行方向で1.9~2.3mを測る。SB6・9と重複するが、新旧関係は不明である。ほかの遺構との切合いで、SD221と切合い、本遺構が新しい。出土遺物は図示していない。

SB11 (国版6・12・37・38) 面積16.5m²の小型の側柱建物である。柱間寸法は桁行方向で1.8~2.5m、梁行方向で2.5~2.7mを測る。ほかの遺構との切合いで、SD248と切合い、本遺構が古い。出土遺物は細片のため図示していない。

SB12 (国版6・12・37・38) 調査区の壁際付近で検出され、遺構の大部分は調査区外に延びる。建物構造は不明であり、桁行3間以上となる可能性がある。柱間寸法は配列方向で1.5~1.8mを測る。出土遺物は細片のため図示していない。

2) 構(さく) (国版5・6・9・11・37・38・40)

SB2とSB7・SB8に重複するSA1とSA2の計2基を検出した。いずれもVI層を遺構確認面とする。ともに長軸が西偏70°前後を示し、掘立柱建物2群と同じである。これらの柱間寸法はSA1がSB2に匹敵し、2.2~3.0mを測る間隔が大きいものである。ほかの遺構との切合いで、SA1とSD545が切合い、SA1が新しい。またSA2はSD12と切合うが、SA2が古い。なお、SA1はSB2、SA2はSB7・8と重複するが、新旧関係は不明である。出土遺物はP626出土の15・16を図示した。

3) 土 坑 (国版4・5・13・14・40~42)

合計7基を検出した。図示したものはSK1・188・514・577・582・591・698である。このうちSK514は、覆土上層にVd層が堆積しているため、ほかの土坑より古く、後述するSD853など(溝A群)と同時期の遺構と考えられる。SK514以外は、すべてVd層を切って構築している。

このうち、SK 1 やSK577・698は、覆土に炭化物を多量に含むもので、比較的多数の土師器小椀あるいは小皿が出土した。遺構の形状は、SK 1 は不整形だが、SK577・698はほぼ円形で深さも30~36cmで類似した形状となっている。SK 1・698の覆土から人頭大の礫が比較的多数出土し、いずれも被熱して覆土内に散在していた。覆土はすべて土壤を洗浄したが、鉄関連遺物等の検出はなかった。遺物の出土状況は、SK 1・577で潰れた状況の小椀も存在するが、複数重ねられた状況ではなく、大半は土坑内に同一個体の破片が散在する状況であった。

SK188は平面形が梢円形を呈し、断面形が台形状となるものである。土師器小椀(28)が見込みを上面に向け、潰れることなく出土した。それと併存する有台椀(29)は同一個体の破片が、土坑覆土内の2か所に分散していた。SK591は断面が弧状を呈する浅い土坑で、良好な灰釉陶器皿(52)が出土している。灰釉陶器皿は、SA 1 のP626と接合関係にある。出土遺物は、17~27 (SK 1)、28・29 (SK188)、30~50 (SK577)、51 (SK582)、52 (SK591)、53~66 (SK698) を図示した。

4) 配石遺構(図版5・15・42)

検出された配石遺構は、SB 2 と重複するSS 1 とSD853の覆土で埋没したSS 2 がある。SS 1 は発掘調査での遺構名称で配石遺構となっているが、遺構を構成する礫に規則性が看取されず、礫が集積したものと考えられる。下部に、土坑等の検出はない。SS 1 には、集積した礫の間に須恵器甕(69)が挟まっていた。ほかの67・68はSS 1 のごく近辺で出土したものである。

SS 2 は、SD853の遺構の立上がり付近から基底面にかけて検出された。礫層(Vd層)によってSD853とともに埋没している。その南側では、SD853の遺構の立上がりラインに沿うように、大型(長軸60cm前後)の礫と小型(長軸20~30cm前後)の礫を配置する。SD853の基底面付近では、大型礫以外は散在している状況であった。出土遺物は砾石のB類(318)があり、極めて大型でSS 2 の近辺(図版15)で出土した。

5) 溝(図版5・6・15~17・43~49)

溝は、遺物包含層のVc層の直下に形成されたVd層を覆土とするA群と、それを切込むものなどのB群に区分できる。A群はSD728・729・853・867・869である。B群は上記以外の溝の大部分と考えられる。また、B群のうちSD541~543・571~574は、検出状況から耕作溝として一括した。

A群(図版5・6・16・17・47~49) 本群は、掘込みや基底面が不整形で起伏に富むSD728・729・853と直線的で2条が並行するSD867・869がある。前者は自然形成と考えられるもので、SD729とSD853は並行し、SD728はSD729の南端から分岐し北西方向へと続く。覆土はVd層を起源とする礫層からなる。

これに対してSD853は、その覆土が6層に区分され、2・4層の礫層ばかりでなく1・3層のような粘質土と混合する土層も堆積していた。礫層は拳大以上のものが含まれており、堆積要因として土石流が推測されるが、1・3層が挟在するため、2度以上に渡り堆積した結果、埋没した可能性が高い。なお、SD853の2層(2'層)は、土層断面117~117'(図版17)の観察ではSD728・729の覆土へ連続し、さらにSD853の1層の上部にも、不安定な薄い堆積をなしていた。この薄い礫層は層厚2cm前後と薄いため、表示できなかった。出土遺物はSD728・729では土師器の細片が少なからず混在し、SD853では双耳瓶(165)のような良好な遺存率を示す個体も存在していた。出土遺物は覆土の上下で取り上げたが、接合關係は層位を越えて多数認められた。

SD867・869は、ともにSS 2 の東から北東方向へ2条が並行して存在している。発掘調査の所見では、

SD867とSD869の間では、地山面の硬化等変質は認められなかった。

A群の出土遺物は、SD867・869ではなく、SD729（130～132）とSD853（135～168）がある。

B群（図版5～7・15～18・43～47） 本群は、A群を埋没させたVd層を切ると考えられるものだが、Vd層の堆積が及ばない区域でも、出土遺物などから本群に帰属するものと推測される。

B群のうちSD14・15は、断面形が台形状を呈するもので、平面形は緩やかに蛇行している。このうちSD15は、地形のセンター線に沿って北東方向に延びる溝である。SD15とは切り合関係にあり、SD15が古い。

SD247・248・521・522・548は、断面が弧状・台形状・半円状を呈し、急斜度の立上がりを示すものである。これらは直線的に連なり、長軸方向がほぼ同方向を示す。このうちSD247とSD521、SD248とSD522は並行して存在する。いずれも覆土に共通性があり、Vb層～Ⅲb層に対比される灰色系粘質土とその直下のVc層に対比される黒褐色系の粘質土が堆積する。特にVb層～Ⅲb層に対比される覆土の厚層が厚く、Vc層堆積後も暫く開口していた可能性がある。長軸方向は西偏81°～84°を示す。これらと切合う遺構には、SB8・9・11、SD554・559、杭18があり、杭18が新しく、それ以外はすべて古い。

SD523は、断面形が台形状を呈する浅い溝である。ほかの遺構との切り合いで、B群ではSD15やSD522と切り合、本遺構が古い。また、多数の管状土錐が集中して出土した（図版16・44）。

SD532・545・715は、後述の耕作溝を構成するSD541などと同様の長軸方向（西偏78°前後）を示すものである。また、これに直交する長軸方向（東偏22°）を持つSD554は、その南でほぼ直角に折れてSD532などと同様の長軸方向を示す。このうちSD532・545は、杭23・24・28・29が並行して打ち込まれている。これらと同様の長軸方向を持つものは、ほかにSD646・650・697がある。このうちSD697の覆土とその周囲では、土師器小挽（120～125）が集中して出土した（図版14・47）。

SD559は、本遺跡では少数の長軸方向が南北（西偏17°）を示すもので、SD532などと同様に幅が狭く浅い溝である。本遺構には並行して、杭15～20・25が打込まれている。SB4、SD548・550・696と切り合、SB4、SD548が新しく、ほかは古い。

SD575・576は、SB1の西側に位置するもので、平面形が東側に折れる特徴を持つ。特にSD575はSB1に伴う可能性があり、雨落溝の可能性がある。ほかの遺構との切り合いは、SD575はSB3より古く、耕作溝（SD541～543・571～574）より新しい。SD576は、SB1・SB3・SK577より古く、SD867・869より新しい。

以上のはかにSD11・12・221・550・689・680・696・803は、断面図を図示した。

B群の出土遺物は、SD221（87）・521（88～90）・548（103・104）・522（91～98・317）・523（99～102・300～304）・575（114～116）・576（110～113・319）・554（105～107）・650（118）・646（117）・680（119）・697（120～125）・715（126～129）・803（133・134）を示した。

耕作溝（図版5・16・45） SD541～543・571～574は、並行する溝が密集する耕作溝を構成する。これらはSD541・543・571・573のように長軸方向が西偏77°～80°のものと、SD542・572・574のような長軸方向が西偏86°～87°を示すものとに分かれる。ほかの遺構との切り合いは、SD575（SB1の雨落溝の可能性がある）、SB3と切り合、SB3、SD575が新しい。出土遺物は、SD571の108・109を図示した。

6) 性格不明遺構（図版6・7・17・18・49・50）

総数8基のうちSX2・3・17・18・102・104・647の7基を図示した。これらはVI層を遺構確認面とするもので、検出された区域にはVd層は確認されていない。

このうちSX17・18は、浅い不整形な遺構で、その近辺には遺物が比較的集中して出土していた。特にSX18は、遺構確認時に、すでにSX18の範囲外にまで遺物が分布していた。それ以外の区域では、遺物の出土が極めて少なく、SX18とその周辺に出土遺物の分布域を形成する（図版18・50）。

SX 3はその規模と形状から自然流路と推測されるが、SX 3一帯は明治28年の更正図に見える流路跡の直近に位置している（第6図）。また、2区東のSX647は、凡そ1/3が擾乱を受けているが、緩やかに1区に向かって傾斜しており、自然形成の落ち込みと推測される。

性格不明遺構とほかの遺構との切合いは、主要なものでは、SX18がSB 7とSX647がSB 2と重複し、SB 2とSB 7が新しい。出土遺物は、SX 3（169～174）・17（184）、SX18とその周辺（175～183）、SX104（188）・647（185、187）にある。以上のはかに、SX 2・102・104を図示したが、これらの詳細は観察表を参照いただきたい。

7) 柱 穴（図版5～7・18・19・51）

8 A～Cグリッド以東で集中的に検出された。柱穴の大半は、覆土に細礫層（Vd層）の堆積がないことや出土遺物などから、Vd層堆積後に構築されたものと考えている。

柱穴は、規模と形状で3種に区分できる。1類は、長軸30cm前後、深さ30cm～50cm前後のもので、P163・214・234・819などを図示した。2類は、長軸50cm～60cm前後、深さ40cm以上の規模の大きいもので、P512・519を図示した。3類は、長軸50cm～60cm以上、深さ30cm以下の浅いもので、P121・622・624・629を図示した。このうち、1類の柱穴は、本遺跡で検出された柱穴の大多数を占めるもので、SB 1・3～8・10～12、SA 2などの掘立柱建物や柵列の柱穴の大部分を占める。規模の大きい2類は、柱痕が確認されたP512をはじめ、SB 2やSA 1などの柱間寸法が3mにおよぶ掘立柱建物や柵列に多く認められる。3類は配列を持つものは認められないが、P629では比較的平坦な基底面付近に踝が集積していた。

これら柱穴とほかの遺構との切合いは、主要なものでは、1類のP214・234・330・819が、それぞれSB 9・6、SX18、SK577と切合い、P234がSB 6より古いが、ほかはいずれも新しい。2類では、P512とP519が溝A群のSD782やSD729と切合い、いずれもSD728・729より新しい。

柱穴の出土遺物は、P121（189）・163（190）・214（191）・256（192・193）・319（194）・330（195）・512（196・197）・519（198～202）・624（203）・622（204～206）・629（207～209）の出土資料を図示した。

8) 杭（図版5・19・52）

29基を検出し、その内遺存状況の良好な14基（杭12～20・23～25・28・29）を図示した。これらはすべて掘込みが無く、地山面に直接打込まれていたものである。このうち杭12～14・16～20・25は、SD538・559に沿って分布する。また、杭23・24・28・29は、並行するSD545とSD532に沿って検出されている。杭とほかの遺構との切合いは、杭18が断面145～145'（図版19）から、SD548よりも新しいと判断される。これらの杭木は、杭13（337）・18（338）・23（339）・24（340）・28（341）を図示した。

3 遺 物

A 概 要

角地田遺跡では、10世紀中葉～11世紀を中心とした、古代後半～中世にかけての遺物が多数出土した。出土遺物は平箱で44箱と多く、その大半は11世紀前葉～後葉に所属する。出土遺物の内容は、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、製塙土器、青磁、緑釉陶器などの土器・陶磁器（39箱）のほか、管状土錘（1箱）、楕形鍛冶津などの鉄関連遺物（1箱）、石製品（1箱）、下駄・木簡などの木製品62点がある。また、少量ながら古代9世紀代の遺物や、中世12世紀以降の輸入陶磁器や珠洲焼などもある。

さらに、10世紀中葉に遡る越州窯系の青磁や、「臣」と墨書きされた土師器などもあるなど、遺跡の性格や位置付けを行なう上で注目すべき遺物も出土している。以下、本遺跡の古代・中世の出土遺物の分類を行い、各時期の代表的な遺物を抽出し、その特徴を説明する。

B 記述の方法

掲載遺物 本遺跡の出土遺物は多量であり、そのすべてを報告書（本書）に掲載することは不可能である。したがって、報告書への掲載遺物の抽出は、分類を通して得られた器種や時期を代表する典型例を中心とした。遺物の図化は、そうした典型的な遺物のうち残存率が良好な遺物や、破片資料でも遺物の器形や特徴が把握できるものを優先的に掲載した。また、土器の図化にあたっては、器形を重視する該期の遺物特性を考慮し、破片資料であったとしても極力器形の復元に努めた。

遺物の記述 本書の遺物の記述は、本文と観察表の両者を併用する。しかしながら、本書では、個々の遺物の所見は観察表を重視する方針をとり、本文の記述は観察表との重複を避けるように努めた。特に一括資料となる可能性が高いSD522・853などの構内出土遺物は、組成や概要の記述を中心に行った。またその際には、可能な限り組成の一覧表を示した

観察表 本書に図示した遺物の法量や、土器の調整等の所見については、巻末の観察表に一覧表として示した。観察表の項目は、土器、管状土錘、石製品、鉄関連遺物、木製品のそれぞれで作成した。ここでは、特に土器の観察表項目のうち「胎土」と「調整等の所見」について説明する。

「胎土」は、土器・土製品の胎土に含まれる含有物を記入した。含有物は、石英、長石、チャートのほか、雲母、海綿骨針、砂粒、礫がある。これらはそれぞれ「石」、「長」、「チャ」、「雲」、「骨」、「砂」、「礫」と略して観察表に示した。このうち、砂粒・礫としたものは、石英、長石、チャート、雲母、以外の含有物を一括したもので、「礫」は砂粒よりも粒子が大きいものを示す。また、上記以外で、白色を呈する粒子が含まれるものがあり、これを「白」と記した。

こうした含有物が含まれるのは須恵器、土師器、灰釉陶器、珠洲焼であり、含有物の記入はこれらを対象とするが、古代・中世陶磁器のうち、輸入陶磁器、瀬戸・美濃焼については、胎土にこうした含有物が含まれることが極めて稀であることから、色調のみを示した。

「調整等の所見」では、土器に施された調整と古代・中世陶磁器に施された釉薬の色調を記入した。記入にあたって、調整に切合いが認められる場合、「→」の記号でその前後関係を示した〔春日2003〕。例えば「カキメ→タタキ」は、カキメ、タタキの順で調整が行われたことを示す。

C 遺物の分類

ここでは古代・中世の土器・陶磁器を分類する。本遺跡の土器・陶磁器は、無台椀や小椀・小皿を主体とする土師器・須恵器、黒色土器、灰釉陶器、輸入陶磁器などで構成される。これらは、大きく組成の大半を占める土師器食膳具からなる一群と12世紀以降の珠洲焼や陶磁器からなる一群に分離できる。ここでは、前者を平安時代の土器・陶磁器、後者を中世陶磁器として分類し記述する。前者には、11世紀代の小椀、小皿を主体とする土師器食膳具が含まれる。

1) 平安時代の土器・陶磁器の分類

平安時代の土器・陶磁器の分類では、西頭城方面の古代の土器編年【春日1998】や頭城平野での11世紀代までを扱った考察【鈴木1993、春日1997、笹沢2003】、土師器の法量変化を主眼とした中世の個からの編年【水沢2005】などを参考とした。以下に、土器・陶磁器の分類を示す。

須 惠 器

食膳具の無台杯や有台杯、貯蔵具の長頸瓶や横瓶、壺などがある。以上のほかに双耳瓶、凸帶付四耳壺などの特殊な器種も加わり、須恵器の器種組成を構成する。これらは本遺跡では、客体的な出土だが、10世紀中葉のSD853の遺構一括資料や包含層資料にも見られ、本遺跡の出土遺物の古い部分をなす。以下はこうした本遺跡の須恵器の分類である。

無台杯 本遺跡の無台杯は、底部の調整を基準として、回転ヘラ切りのⅠ類と回転糸切りのⅡ類に分類できる。Ⅰ類は更に器形によって細分が可能である。Ⅰa類は、底径が8cm以上のもので口縁部の立上がりが急なものである(237)。これに対してⅠb類は、底径が7cm代の小さいもので、口縁部の立上がりが緩くなっているものである(238)。胎土や器形などの特徴からⅠ類は佐渡小泊窯産、Ⅱ類は頭城丘陵産と推測される。

有台杯 有台杯は、高台径の大小によって分類できる。Ⅰ類は高台径が10cm前後の大形のもの(240)、Ⅱ類は底径6.5cm前後の小形のもの(241)である。胎土の特徴からいずれも西頭城丘陵産と推測される。

杯 壺 少量の出土のため細分はしない。本遺跡で出土したものは、いずれも口縁部が三角形状となる退化した形状のもので占められる(242)。

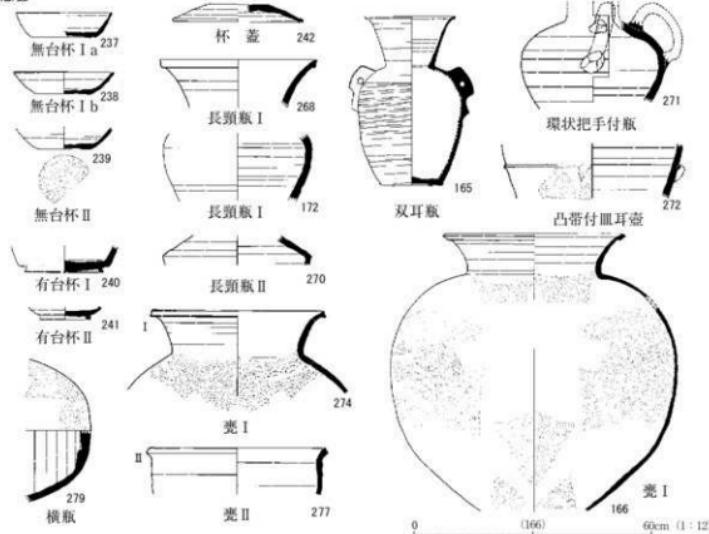
瓶・壺類 長頸瓶(172・268・270)、環状把手付長頸瓶(271)、双耳瓶(165)、凸帶付四耳壺(272)、横瓶(279)がある。このうち、長頸瓶は体部の器形を基準にⅠ類とⅡ類とに分類した。Ⅰ類は体部の肩がまるくなるものである(172・268)。Ⅱ類は体部の肩が強く屈曲するもので、270の1点が確認できた。

甕 本遺跡の甕は、器形で大きく2分できる。Ⅰ類は、本遺跡の甕の大部分を占める器種で、体部が球胴状を呈するものである(166・274)。Ⅱ類は、極めて少量で、体部の肩がなくそのまま底部に至る器形となるものである(277)。277の胎土は軟質で、ほかの甕の胎土とは異質である。

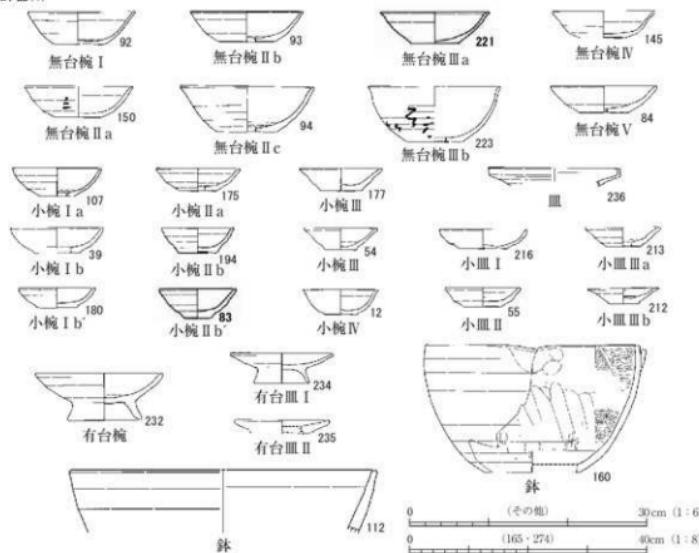
土 師 器

無台椀、小椀・小皿を主体とする食膳具や長甕、小甕、鍋の煮炊具からなる。土師器の器種組成では、食膳具が圧倒的で、小椀・小皿の存在が特徴的である。後述のSD522やSD853、SK1・577・698、SX18

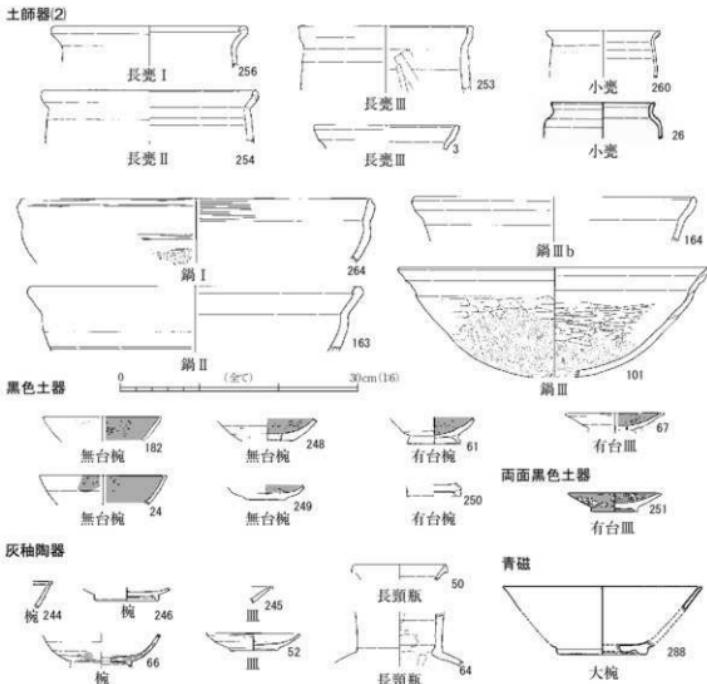
須恵器



土師器(1)



第10図 角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図(1)



第11図 角地田遺跡 古代の土器器種分類概念図(2)

では、無台椀、小椀・小皿などを主体とする良好な造構一括資料が出土し、大きく10世紀中葉から後葉の無台椀を特徴とする一群と11世紀前葉～後葉の小椀・小皿を主体とした一群を認識した。さらに、11世紀代の土師器は、小椀・小皿などの様相によって、3期に細分化が可能である。ここでは、無台椀や小椀・小皿を中心とした土器器の分類を行う。

食器具

無台椀 土器無台椀は、SD522や確層からなるVd層を覆土に持つSD853などで出土した。一部遺物包含層からも出土しているが、その量は少ない。無台椀は、食器具の無台器種のうち、口径12cm前後以上のもので、器形の特徴からI～VI類に分類できる。

I類は、口縁部が外反しないもので、92のように直線的に立上がるものなどがある。本遺跡では少量の出土である。II類は、口縁部が外反傾向にあるもので、法量(口径)で3細分できる。IIa類は口径12～13cm前後(150)、IIb類は口径14cm前後(93)、IIc類は口径16cm以上のもの(94)である。このうちIIa類やIIb類には、径口指数27前後の身が浅いものと、33前後の身の深いものとがあり、IIc類には身の深いものが認められる。

Ⅲ類は、口縁部が強く外反するもので、法量によって2分できる。Ⅲa類は口径12~13cm前後のもので、221のように体中位で弱く括れてそこから外反する形状のものが含まれている。Ⅲb類は、口径16cm以上のもので、径口指数42に達する223などがある。

Ⅳ類は杯の器形に近いもので、口縁部が直線的で相対的に短いものである(145)。V類は、後述の小椀・小皿などと併存するもので、相対的に底径が大きく身が浅い特徴がある。器壁が厚く、口縁部の立上がりもほかより緩い(84)。VI類は以上の分類に該当しないものを一括したものである。

小 椭 食器具の無台器種のうち凡そ口径11.5cm以下で、後述の小皿より相対的に身の深いものをここでは小椀に分類する。器形と口径などによってI類~IV類に分類できる。

I類は楕形を呈するもので口縁部が外反しないものである。I類は器形などの特徴によって以下のように細分した。Ia類は、口径11cm代のもので、後述のIb類よりも相対的に底径が小さく、身も深いものである。また器壁も薄く、無台椀I・II類が小楕化したものとも考えられる(107)。Ib類(39)は、口径11.5cm~9cm代を含むもので、9cm代の小径のものは、Ib'類(180)とした。Ib類は、Ia類より身が浅く、底径が大きくなる特徴があり、底部の器壁も厚くなり、厚底化の傾向が見られる。

II類は、口縁部が外反し、底部と口縁部の間で屈曲するものである。本類は身の深いIIa類(175)と、身が深いIIb類(194)に2分され、IIb類はさらに底径が相対的に大きいIIb類(194)と底径が小さく厚底の傾向が進行したIIb'類(83)とに細分が可能である。IIa類は、後述のIII類と比較して、底径が大きい傾向が認められ、III類よりも古い様相と考えられる。

III類は、外反する口縁部までが直線的になりつつあるもので、底径が大きいもの(177)と小さくなるものの(54)とが存在する。底径の小さいものは、底部の立上がりが急で、側面が平高台のような形状となる。54には柱状化の兆しが認められる。

IV類は、上記の基準に含まれないもので、体部が丸味をもって外反する器形のもの(12)などがある。

小 皿 径口指数23前後以下のものを小皿とした。口径11cm代~9cmまでが含まれ、前述の小椀より相対的に身が浅くなっているものである。器形からI~III類に細分できる。I類は、口縁部が外反せず、胴部が湾曲する特徴がある(216)。II類は、外反する口縁部と底部の間で屈曲するもの(55)で、III類と比較して底径が大きい傾向がある。III類は、胴部から外反する口縁部が直線的になるもので、II類より底径が小さい特徴がある。本類は法量によって2分でき、器高が相対的に高いIIIa類(213)と、低くより中世的な皿状の器形となっているIIIb類(212)が認められる。IIIb類の212はIIIa類より厚底となっている。

■ 上記の小皿のはかに、口縁部が垂直に立ち上がる皿がある(236)。2点出土している。

有台器種 土師器の有台器種には、有台椀(232)と有台皿(234・235)がある。有台椀は前述の小椀などと併出し、232のように脚が高いものが見られる。有台皿は、234のような脚の高い高台がつくものや235のように口縁部までが直線的となるものが存在する。前者を有台皿I類、後者をII類とする。

鉢 本遺跡では少なからず確認できる。器形は多様であり、SD853で出土した160のような内済する口縁部に片口がつくものや112のように内済せず椀状となるものなどがある。器形復元できるものが少なく、ここでは細分しない。

煮 炊 具

長 瓢 口縁部の形状でI類~III類に区分できる。I類は口縁部が丸く収まるもので、内面への肥厚が顕著で、本遺跡では特徴的に認められる(256)。II類は口縁部を摘上げるが、先端が丸く収まるものである(254)。III類は口縁部が有段状となるもので、口縁部の立上がりが垂直気味となるもの(253)や立上がり

りが緩い（3）ものなどがある。

小 梶 小梶は長梶同様その出土量は少ない。260のように口縁部の外面を肥厚させるものや26のようない器形が壺に近くなるものがある。

鍋 本遺跡の煮炊具の中では最も出土量が多く、口縁部の形状で細分される。I類は口縁部が摘上げられ、口唇部が尖るものである（264）。本遺跡ではこのような口縁部は少數である。II類は口縁部を丸く収めるもので、内面への肥厚が著しいIIa類（163）と微弱なIIb類（164）とがある。本遺跡では後述のIII類とともに定量認められる。III類は斜傾した口縁部が有段状となるもので、口唇部の摘上がりが退化し丸く収まる。同類の図示はSD523の101のみだが、小破片では少からず確認できる。

黒色土器

無台椀（248・249）、有台椀（61・250）、有台皿（67）が存在する。口縁部から底部までが残存する個体がほとんどなく、法量の傾向はつかめない。分類は口縁部が残存した椀類と底部の無台椀と有台椀が識別できる。椀類の法量は、口縁部の破片から口径15～17cmが確認できた。無台椀は、底部付近の体部外面をロクロケズリする丁寧なつくりのもの（248）と底部に糸切り痕を残し、底部付近の体部外面がロクロナデのままのもの（249）が見られる。有台椀は、相対的に高い高台のもの（61）と台形状の低いもの（250）がある。いずれも数量が少なく、ここでは特徴を述べるにとどめる。有台皿についても量が少ないと、67を図示した。以上のはかに、両面黒色土器の有台皿（251）が出土している。

施釉陶器

施釉陶器は、灰釉陶器（52・66・244・245・246）と緑釉陶器（243）がある。本遺跡では灰釉陶器が圧倒的で、緑釉陶器は細片が3点確認されたにすぎない。

灰釉陶器は、有台椀と皿、長頸瓶が確認できる。少量の出土だが、SK698などで土師器小椀・小皿などと出土している事例がある。有台椀には、口縁部内面に沈線がめぐるもの（244）や高台が三日月状となるもの（246）や三角形状となるもの（66）などがある。ほかに段皿（245）や皿（52）などの食器類、長頸瓶（50・64）が存在する。長頸瓶などの瓶類の破片資料は少なくない。

そ の 他

上記以外の該期の土器・陶磁器には、輸入陶磁器の青磁碗や製塙土器がある。輸入陶磁器は、越州窯系の青磁大碗で、本遺跡では1個体を確認した（288）。分類は山本信夫の研究成果〔山本2000〕に拠った。製塙土器は、本遺跡では、器形が判明する資料は存在しない。したがって、以下の記述では個々の特徴を示すにとどめ、ここでは分類しない。

2) 中世陶磁器の分類

中世陶磁器の出土は非常に少ないとから、独自の分類は行わず、先行の研究成果に依存し、本文や観察表の記述を行う。輸入陶磁器の青磁や白磁は、森田勉や山本信夫の大宰府周辺での成果〔森田1982、山本2000〕、珠洲焼の器種や時期区分は吉岡康鶴の編年〔吉岡1994〕、大窯期の瀬戸・美濃焼は、藤澤良祐の一連の研究〔藤澤1986・2005〕を典拠とした。

D 遺物各説

1) 土器・陶磁器

掘立柱建物の出土土器 (図版20・54-1~14)

掘立柱建物ではSB1~4・SB6・7・9の柱穴内から出土した遺物を図示した。大部分が小破片であり、遺物の器形全体が把握できるものは非常に少ない。

SB1 (図版20・54-1~5) 土師器では小挽(1)、有台挽(2)、長甕(3)があり、須恵器には甕(4)がある。ほかに製塙土器(5)の口縁部破片がある。このうち、1は口径11.6cmの小挽(IV類)の可能性が高く、胴部が括れずに口縁部が外反する器形的特徴がある。2は有台挽の底部で脚の高い高台が特徴的、こうした1・2のような特徴をもつ食膳具は、SK577出土資料にも見られる。これらが出土した柱穴は、1・3がP589、2がP590、4がP785、5がP747である。

SB2 (図版20・54-6~8) 土師器小挽(6)、無台挽(7)、鍋(8)がある。このうち6(小挽I b類)の口径は10.6cmを測り、SB1出土資料の1よりも小さい。器厚が厚い特徴がある。鍋の8は、口縁部の先端が強く摘上げられる鍋I類に相当するものである。これらが出土した柱穴は6がP621、7がP613、8がP653である。

SB3 (図版20・54-9) 9は土師器小挽の底部資料で、底径が小さく器厚もやや厚い特徴があり、小挽I b類の底部の可能性がある。P579から出土している。

SB4 (図版20・54-10・11) 10は土師器無台挽、11是有台挽に分類されるものであろう。特に11の口縁部は、器壁が厚く、本遺跡で出土している他の有台挽と同様の特徴を示す。これらが出土した柱穴は、10がP692、11がP687である。

SB6 (図版20・54-12) 12は土師器小挽のIV類で、底部側面が平高台のように急角度に立上がる特徴がある。底部が厚底化し、口径も9.4cmと小さくなっている。P225から出土している。

SB7 (図版20・54-13) 13はSB3の9と同様の特徴を持つ小挽の底部で、厚底化の傾向が認められる。P267から出土している。

SB9 (図版20・54-14) 14は土師器無台挽で、口縁部が外反しないI類に帰属させておく。P231から出土している。

柵(さく)の出土土器 (図版20・54-15・16)

柵(さく)では、SA1の出土遺物を図示した。15・16とともに、土師器小挽I b類に相当し、器壁が厚いのが特徴である。底部形状は、その側面が急角度に立上がる。P626(15)、P617(16)から出土している。

土坑の出土土器 (図版20~22・54・55-17~66)

本遺跡の土坑では、SK1・577・698などから比較的良好なまとまりが得られた。ここではこれらの遺構出土資料を中心に、出土遺物の説明を加える。

SK1 (図版20・54-17~27) 小挽・小皿を主体とする土師器が多量に出土した。口縁部残存率計測法による個体数の集計(第6表)では、総計234/36個体のうち、食膳具が229/36個体(97.9%)を占める。食膳具は土師器(232/36個体、99.1%)が圧倒的に多く、少量の黒色土器(2/36個体、0.9%)を伴う。食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台器種が449/36個体、有台器種(柱状高台を除く)が14/36個体で、無

台器種が96.9%と他を圧倒している。

このような本遺構で大多数を占める土師器無台器種の様相は、19の小椀Ⅰb類、17や18の小椀Ⅱa類、20の小椀Ⅲ類からなる。このうち17・18は、器高が3.0cm以下と低く器厚も厚くなり、口縁部の器形がⅢ類のように直線的になりつつある。いずれも口径は10cm台で、20が口径10.0cmと本類の最小である。

以上のはかに、本遺構の出土遺物には、土師器無台椀や有台椀の底部(21~23)や黒色土器(24~25)、土師器小甕(26)、鉢(27)などがある。

SK577 (国版20・21・54・55~30~50) 土師器小椀を主体とする土器が出土した。口縁部残存率計測法による個体数の集計(第6表)では、総計712/36個体のうち、食膳具が707/36個体(99.2%)を占める。食膳具は、口縁部残存率計測法の対象資料のすべてが土師器(707/36個体、99.2%)である。食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台器種が1006/36個体、有台器種(柱状高台は皆無)が137/36個体で、無台器種が88%と他を圧倒している。

土師器無台器種は、口径の大きい無台椀(30・32)と10~11cm前後の小椀(31・33~43)からなる。無台椀は、口縁部が外反傾向の32(Ⅱa類)や口径が14cmを超える30(Ⅵ類)などが見られる。これらは、後述の小椀よりも器壁が薄く、底部も厚底化していない特徴がある。一方、小椀は、口縁部の立上がりが直線化しつつある35(Ⅲ類)以外は、すべてⅠb類で占められている。Ⅰb類(31・33・34・36~43)は、内湾気味に立上がる口縁部と、立上がりが急斜度で、側面観が平高台状となる底部に特徴がある。また、器壁も厚くなる傾向がある。

以上のはかに、土師器では、大型の無台椀の底部(44)、有台椀(45・46)、鉢の底部(47)、鍋の体部(48)などがある。また、須恵器の甕の破片(49)や灰釉陶器の長頸瓶(50)なども出土している。

SK698 (国版21・22・55~53~66) 土師器を主体とした遺物が多量に出土した。小径(口径9cm前後)となった小椀・小皿が組成に加わっている特徴がある。口縁部残存率計測法による個体数の集計(第6表)では、総計427/36個体のうち、食膳具が421/36個体(98.6%)を占める。大部分が土師器(419/36個体、98.1%)であり、食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台器種が254/36個体、有台器種(柱状高台は皆無、黒色土器11/36個体、3%を含む)が48/36個体で、無台器種が84.1%と他を圧倒している。

本遺構の食膳具は、口径9cm前後の小椀Ⅱb類(53)、同Ⅲ類(54)、同Ⅳ類(56)や小皿Ⅱ類(55)、口径12.7cmの無台椀V類(57)の無台器種に加えて、土師器有台椀(58~60)や黒色土器有台椀(61)、灰釉陶器有台椀(66)といった有台器種が見られる。小椀や小皿の特徴は、小皿Ⅱ類(55)のように口縁部の外反が顕著で器高が低いものや、小椀Ⅲ類(54)のように口縁部が直線的に立上がるものがある。

有台器種のなかでは、66の灰釉陶器有台椀があり、底部内面の糸切痕が残り、内外面ともに無釉となっ

SK1				SK577				SK698			
種別	器種	口縁部残 存率.36	比率(口 径.値) %)	種別	器種	口縁部残 存率.36	比率(口 径.値) %)	種別	器種	口縁部残 存率.36	比率(口 径.値) %)
土師器	無台椀・ 小椀・小皿	215	91.8	土師器	無台椀・ 小椀・小皿	698	98	土師器	無台椀・ 小椀・小皿	402	94.2
土師器	有台椀・皿	10	4.3	土師器	有台椀・皿	9	1.2	土師器	有台椀・皿	16	3.8
土師器	鉢	2	0.9	土師器	鉢	0	0	土師器	鉢	1	0.2
土師器	兵甕	0	0	土師器	兵甕	0	0	土師器	兵甕	0	0
土師器	小甕	5	21.1	土師器	小甕	0	0	土師器	小甕	3	0.8
土師器	鍋	0	0	土師器	鍋	0	0	土師器	鍋	1	0.2
黒色土器	無台椀	0	0	黒色土器	無台椀	0	0	黒色土器	無台椀	0	0
黒色土器	有台椀	0	0	黒色土器	有台椀	0	0	黒色土器	有台椀	0	0
黒色土器	楕円瓶	2	0.9	黒色土器	楕円瓶	0	0	黒色土器	楕円瓶	2	0.4
灰釉陶器	有台椀	0	0	灰釉陶器	有台椀	0	0	灰釉陶器	有台椀	0	0
灰釉陶器	長颈瓶	0	0	灰釉陶器	長颈瓶	5	0.8	灰釉陶器	長颈瓶	2	0.4
総計		234	100	総計		712	100	総計		427	100

第6表 角地田遺跡 器種構成比率(SK)

ている。以上のほかに、土師器小甕（62）や須恵器甕（63・65）、灰釉陶器長頸瓶（64）が出土している。

その他の土坑出土土器 以上に示した資料のほかに、SK188（28・29）やSK582（51）、SK591（52）の土坑出土資料を図示した。このうち、SK591出土の灰釉陶器の皿（52）は、高台が低い三角形状を呈するなど、相対的に新しい様相をもつ。胎土から東濃産と推測される。

配石遺構出土土器（図版22・55-67～69）

SS 1 の縄間やその周辺で出土したものである。黒色土器有台皿（67）や須恵器甕（68・69）を図示した。このうち67の黒色土器有台皿は、底部から口縁部までの立上がりが短くなっている。

溝出土土器（図版22-26・55-59-70-168）

検出された溝では、SD11・15・522・554・697・853に比較的良好な遺物のまとまりが得られた。特にSD853の遺物の量は、他のどの遺構よりも多く一括資料として期待される。ここでは、上記遺構の出土遺物を中心に説明する。

SD11（図版22・55-70-74） 出土遺物の量は少ないが、小甕や小皿を中心とした土師器で構成されている。70-72は、土師器小甕・小皿で、いずれも体部中位で弱く屈曲し、外反して口縁部に至る器形である。相対的に70・72は身が深く小甕II類に、71は小皿II類に分類される。このほか、土師器有台甕（73）や黒色土器無台甕（74）が併出している。

SD15（図版22・56-81-86） 土師器小甕IIa類（81・82）、小甕IIb類（83）といった口径が10cm前後のものと、口径13.2cmの無台甕V類（84）や有台甕（85）からなる。このうち、81や82の体部中位で弱く屈曲するものは、SD11にも見られる。また、83の底部は、厚底かつ小径となっており、底部からの立上がりが高くなっている特徴がある。以上のほかに、胎土から佐渡小泊産と推測される須恵器無台杯I類（86）が出土しているが、混入遺物の可能性が高い。

SD522（図版22・56-91-98） 出土遺物は、後述のSD853覆土中の遺物が再堆積した可能性がある。型式学的にはSD853出土遺物との差は明瞭でない。91-97の土師器無台甕と98の須恵器長頸瓶がある。土師器無台甕は口縁部の外反が顕著でなく、無台甕I類（91・92）と無台甕IIa類（97）、IIb類（93）、IIc類（94）がある。「臣」と墨書きされた可能性をもつ95、96も無台甕I類かII類に帰属するものであろう。墨書き土器については後述する。

SD522			SD853			SX18周辺					
種別	器種	口縁部残 存率(%) 残削(%)	比率(EI)	種別	器種	口縁部残 存率(%) 残削(%)	比率(EI)	種別	器種	口縁部残 存率(%) 残削(%)	比率(EI)
須恵器	無台杯	0	0	須恵器	無台杯	5	0.7	土師器	野垂・小甕・小皿	133	94.4
須恵器	瓶・壺類	5	26	須恵器	瓶・壺・皿類	15	2	土師器	有台甕・皿	4	28
須恵器	甕	0	0	須恵器	甕	6	0.8	土師器	甕	0	0
土師器	無台甕	172	90.6	土師器	無台甕	709	92.3	土師器	兵甕	0	0
土師器	有台甕	10	5.3	土師器	有台甕	0	0	土師器	小甕	0	0
土師器	砵	1	0.5	土師器	砵	10	1.3	土師器	溝	0	0
土師器	兵甕	0	0	土師器	兵甕	4	0.5	黒色土器	無台甕	0	0
土師器	小甕	0	0	土師器	小甕	0	0	黒色土器	有台甕	0	0
土師器	鍋	0	0	土師器	鍋	7	0.9	黒色土器	角類	4	28
黒色土器	無台甕	0	0	黒色土器	無台甕	0	0	灰釉陶器	有台甕	0	0
黒色土器	有台甕	0	0	黒色土器	有台甕	0	0	灰釉陶器	長頸瓶	0	0
黒色土器	角類	1	0.5	黒色土器	角類	6	0.8	総計		141	100
灰釉陶器	有台甕	0	0	灰釉陶器	有台甕	0	0				
灰釉陶器	長頸瓶	0	0	灰釉陶器	長頸瓶	0	0				
剪切土器	—	1	0.5	剪切土器	—	5	0.7				
総計		190	100	総計		767	100				

第7表 角地田遺跡 器種構成比率 (SD・SX)

口縁部残存率計測法による個体数の集計（第7表）では、総計190/36個体のうち、食膳具が184/36個体（96.8%）を占める。食膳具は、大部分が土師器（183/36個体、96.3%）であり、食膳具の底部残存率計測法による集計では、無台椀が250/36個体、有台椀が12/36個体で、無台椀が95%と他を圧倒している。

SD554（図版23・57～105～107） 出土量は少ないが、土師器小椀のIa類（105～107）がある。器壁が薄く、底部の厚みなど、小椀のIb類と比較して未発達である。

SD697（図版24・57～120～125） 前述のSK577とともに土師器小椀Ib類が主体を占める。120～123が該当し、口径は10.7cm前後である。以上のはかに、122の土師器鍋や124・125の有台椀が出土している。

SD853（図版24～26・57～59～135～168） 土師器無台椀を主体とする遺物が多量に出土した。口縁部残存率計測法による個体数の集計（第7表）では、総計767/36個体のうち、食膳具が730/36個体（96.8%）を占め、底部残存率計測法による集計の結果では、土師器無台椀が997/36個体（97%）、黒色土器無台椀が31/36個体（3%）、有台椀が4/36個体（0.3%）と有台椀が圧倒的に少ない。

土師器食膳具の様相は、口縁部の外反傾向が弱い無台椀II類（137～144・150）が主体的で、底径が大きい杯状の器形を呈するIV類（135・145・148・149）、その他を一括したVI類（146）が加わる。口縁部の外反が顯著な型式学的に新しいIIIa類（136・147・151）は、本遺構では客的な出土である。また、極めて少量ながら、これらより法量が小さい小椀Ib類（口径11.5cm）の出土（153）もある。

以上のはかに、155～157の墨書き土器、158・159の黒色土器無台椀、160の鉢、161～164の鍋、165の双耳瓶、166の須恵器大甕、167・168の製塙土器などが出土している。このうち165の双耳瓶は、把手や器形などの特徴が、北陸西部（富山以西）などの同器種と類似している。

その他の出土土器 このほか前述した溝以外に、SD12（75・76）、SD14（77～80）、SD221（87）、SD521（88～90）、SD523（99～102）、SD548（103・104）、SD576（110～113）、SD575（114～116）、SD646（117）、SD650（118）、SD680（119）、SD715（126～129）、SD729（130～132）、SD803（133・134）を図示した。

以上のうち、SD521では、土師器無台椀IIIa類（89）とともに小破片ながら、佐渡小泊産と推測される須恵器無台杯（88）が出土している。同資料の口縁部の傾きは緩やかである。SD523では、良好な土師器鍋（101）があり、頸部の括れが弱く、微弱な段をもつ口縁部となっている（鍋III類）。SD576やSD646には、「臣」と墨書きされた可能性がある土師器無台椀（110・117）があり、ともに口縁部が外反する特徴がある。このうち110は無台椀II類に、117は無台椀IIIa類と推測される。

耕作痕出土土器（図版23・57～108・109）

耕作痕を構成する溝（SD541～543・571～574）のうち、SD571の出土遺物を図示した（108・109）。108は土師器無台椀、109は土師器有台椀である。

性格不明遺構の出土土器（図版26・27・59・60～169～188）

ここでは、比較的良好な資料的まとまりを示すSX18周辺を中心に、出土遺物の説明を行う。

SX18周辺（図版26・59・60～175～183） 小椀などの土師器食膳具が主体をなす。口縁部残存率計測法による個体数の集計（第7表）では、総計141/36個体のすべてが食膳具で、大部分は土師器無台器種（133/36個体、94.4%）である。食膳具の底部残存率計測法による集計でも、無台器種が64/36個体、有台器種（柱状高台は皆無）が14/36個体（黒色土器有台椀、6/36個体を含む）であり、無台器種が82%を占める。

土師器小椀の様相は、相対的に古い要素をもつ小椀Ib類(178)やIb'類(180)が含まれるとともに、相対的に新しい器形的特徴を持つ小椀IIa類(175・179)やIII類(176・177)が組成する。

以上のはかに、土師器有台椀(181)や黒色土器有台椀(183)や黒色土器椀類(182)などもある。

その他の出土土器 SX18以外にも、SX3(169~174)、SX17(184)、SX104(188)、SX647(185~187)の出土遺物を図示した。

このうちSX3では、土師器無台椀IIa類(169)とともに、土師器長壺I類(170)や須恵器長頸瓶(172)、須恵器壺I類(173)が出土している。170は171・174と同一個体となる可能性がある。SX17出土の土師器有台椀(184)の高台は三角形状となり、胴部から口縁部にかけての器壁も厚い。SX647では、底部に糸切痕を残す須恵器無台杯II類(185)や瓶類の底部(186)、土師器鍋I類(187)が出土している。このうち185は、胎土から西頭城丘陵産の可能性がある。SX104出土の須恵器無台杯Ib類(188)は、胎土や器形などの特徴から佐渡小泊産と推測される。

柱穴出土土器 (図版27・61~189~211)

本遺跡では、柱穴からも良好な土師器椀が出土した。このうち、P519(198~202)、P622(204~206)、P629(207~209)には、土師器小椀・小皿の好資料がある。P519では、土師器小椀Ib類(198)とともに、小皿I類(200)や口縁部が直線的に立上がる小皿IIIa類(199)が併出している。ほかに土師器有台椀(201)があり、同資料の高台は三角形状となり、その基部が椀の中心近くに達している。

P622でも土師器小椀Ib類(204)とともに小皿I類(205)や有台椀(206)が出土した。P629では207~209の土師器小椀Ib類が出土し、このうち208の口縁部は垂直方向に立上がる特徴がある。それ以外の207・209は、径高指指数26と身が浅い特徴がある。

以上のはかに、P319の土師器小椀IIb類(194)やP330の土師器小皿IIIa類(195)などの口径9~10cmの新しい様相を帶びた一群もある。また、P256やP827では、土師器小椀Ib類(192)、無台椀VI類(210)とともに、193や211の鉢が併出している。

平安時代の包含層出土土器 (図版28~31・60~62~212~298)

包含層出土土器の組成 (第8表) 包含層から出土した土器・陶磁器は、極めて多数である。口縁部残存率計測法による集計では、総計14526/36個体中、土師器が13952/36個体を数え、すべての土器の96%に及んでいる。このうち土師器食器具は、13609/36個体(97.5%)と土師器の大部分を占め、底部残存率計測法による集計では、無台器種(27659/36個体)が、有台器種(2013/36個体)よりはるかに高率の存在(93.2%)で

種別	器種	口縁部残 存率 (1) (26 残能) %	比率 (1) (存率 (26 残能) %)	種別	器種	口縁部残 存率 (1) (26 残能) %	比率 (1) (存率 (26 残能) %)	種別	器種	口縁部残 存率 (1) (26 残能) %	比率 (1) (存率 (26 残能) %)				
須恵器	無台杯	166	1.14	土師器	無台椀・小 盤・小皿	13349	91.9	黒色土器	無台椀	67	0.46	灰釉陶器 有台椀	5	0.03	
須恵器	有台杯	9	0.06	土師器	有台椀	103	0.71	黒色土器	有台椀	6	0.04	灰釉陶器 無台	17	0.12	
須恵器	杯蓋	35	0.24	土師器	有台皿	221	0.15	黒色土器	有台皿	2	0.01	灰釉陶器 長頸瓶	2	0.01	
須恵器	鉢	12	0.08	土師器	長甕	109	0.75	黒色土器	有台甕	2	0.01	灰釉陶器 計	34	0.23	
須恵器	瓶・壺類	56	0.39	土師器	小甕	67	0.46	黒色土器	有台甕 深甕	2	0.01	製塙土器	—	113	0.78
須恵器	皿	3	0.01	土師器	素口小甕	3	0.01	黒色土器	有台甕 深甕	9	0.06	青磁	5	0.03	
須恵器	甕	55	0.38	土師器	甕	164	1.13	黒色土器	甕	164	1.00	甕	5	0.03	
須恵器計		336	2.3	土師器計		13952	96.04	黒色土器計		86	0.58	総合計	14526	100	

第8表 角地田遺跡 器種構成比率 (包含層)

あることを示している。

須恵器は土師器につぐ個体数だが、全体の23%にすぎない。食膳具の杯類（175/36個体、61%）や貯蔵具の壺・瓶類（56/36個体、19%）、甕（55/36個体、19%）が多い。黒色土器は食膳具からなり、底部残存率計測法による集計では、無台椀が251/36個体（77%）で、有台椀の74/36個体（23%）を圧倒している。黒色土器はほかに両面黒色土器の椀・甕があるものの1%に満たない。灰釉陶器は個体数が少く（0.23%）、甕（17/36個体、50%）と長頸瓶（10/36個体、29%）が見られる。

食膳具（図版28・60・61-212-252） 遺物包含層から出土した食膳具には、土師器、須恵器、黒色土器、施釉陶器がある。このうち土師器には、小皿Ⅲb類（212）や同Ⅲa類（213・214）、同Ⅳ類（216・217）、小椀Ⅰb類（215・218）、無台椀Ⅱa類（220）、同Ⅱb類（222）、同Ⅲa類（221）、同Ⅲb類（223）、同Ⅳ類（219）、有台椀（232・233）、有台皿Ⅰ類（234）、有台皿Ⅱ類（235）、甕（236）、鉢（252）がある。また、無台椀の口縁部や底部、有台椀には「臣」などと墨書きされた可能性がある224-227・231があり、同様の文字と推測される刻書の228-230もある。刻書は焼成以前に刻まれたものである。

以上のおうち、小皿Ⅲb類の212は、同類の213・214などと比べて器高が低く、底径も小さい。また、底部側面の立上がりが急角度で、厚底の傾向も顕著となっている。有台皿においても、235（有台皿Ⅱ類）は口縁部が短く、直線的に立上がるものとなっている。

無台椀では、SD522やSD853にも見られる無台椀Ⅱa類（220）のほかに、10世紀後半以降に更に顕著となる口縁部の外反傾向〔榎沢1998〕が、221（Ⅲa類）や223（Ⅲb類）といった個体に認められる。223には蛇行した墨書きが認められる（後述）。

須恵器食膳具は、無台杯Ⅰa類（237）、同Ⅰb類（238）や底部に糸切り痕を残す同Ⅱ類（239）、有台杯Ⅰ類（240）、有台杯Ⅱ類（241）、杯蓋（242）がある。以上のうち237や238は、胎土や器形などから佐渡小泊産、239や241は頬城丘陵産と推測される。

黒色土器は、無台椀（247-249）、有台椀（250）、両面黒色土器の甕（251）がある。このうち無台椀の249は、底部側面のケズリを行わず、切り離しの糸切痕をそのまま残す。底部の器形は小椀Ⅰb類と類似している。250の有台椀は、高台が低い台形状を呈している。

施釉陶器は、綠釉陶器の椀（243）や灰釉陶器の有台椀（244・246）、段皿（245）がある。このうち243の綠釉は、濃緑色を呈し京都産の可能性もある。244の灰釉陶器は、口縁部の内面に細い沈線がめぐる特徴的なものである。245の段皿は、胎土から東濃産の可能性がある。

煮炊具（図版29・61-253-267） 前述のように少量の出土で、図示できる資料が限られるが、ロクロ整形の土師器長甕、小甕、鍋を確認できる。口縁部残存率計測法による集計では、非ロクロ系の甕も存在するが、極めて少なく図示に至らない細破片であった。長甕Ⅰ類（256）、同Ⅱ類（254・255）、同Ⅲ類（253）、小甕（259・260）、鍋Ⅰ類（261-263・265）、Ⅱa類（264）がある。また、長甕の体部（257・258）、鍋の体部（266・267）はタタキを施すもので、体部の特徴を示すものとして少量を図示した。

貯蔵具（図版30・62-268-280） 須恵器や灰釉陶器がある。須恵器には、長頸瓶Ⅰ類（268-269）、同Ⅱ類（270）、環状把手付長頸瓶（271）、凸帶付四耳壺（272）、甕Ⅰ類（273-276）、甕Ⅱ類（277）、横瓶

種 別	器 种	点 数	備 考
青磁	椀	1	龍泉Ⅰ類
白磁	椀	5	IV類
白磁	甕	1	ID葬
青白磁	椀か皿	1	
輸入陶磁器計		8	
甕		8	
甕(下種)		5	
甕(R種)		1	
片口鉢		1	
珠洲燒計		15	
圓口燒・美濃燒	天目茶椀	1	大窓
總計		24	

第9表 角地田遺跡 中世陶磁器の集計表

(279) がある。灰釉陶器には長頸瓶(280)が少量組成する。加えて、須恵器の瓶類(278)と推測されるが、線刻された破片資料がある。描かれた内容は不明である。

製塙土器 (図版30・62-281~287) 少なからず出土しているが、細片が多く器形が判明するものはない。287の底部は、直径20cmにもなる大型のものである。

平安時代の輸入陶磁器 (図版30・62-288) 越州窯系の青磁大碗で、本遺跡では本資料1個体のみの出土である。山本分類のI類2ウに相当するもので、10世紀中葉に位置付けられる [山本2000]。

包含層出土の中世陶磁器 (図版31・62-288~298)

中世陶磁器 12世紀以降の中世陶磁器が少量出土している。破片数による集計では、青磁や白磁などの輸入陶磁器(8点)、珠洲焼(15点)が組成の主体である(第9表)。これらの時期は、12世紀以降に位置付けられる白磁(289)、青磁(291)や珠洲焼(294~298)、15世紀代の白磁(290)と珠洲焼(293)、16世紀後葉~17世紀初頭の瀬戸・美濃焼(292)に分けられる。12世紀以降では、大きい玉縁をもつ白磁碗(289)があり、山本分類の碗IV類 [山本2000] に位置付けられる。これとは同時期の龍泉窯系の青磁碗(291)は、山本分類のI類~2あるいは4類に相当するものであろう [山本2000]。

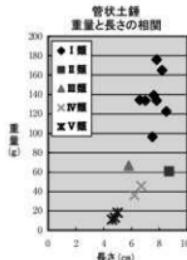
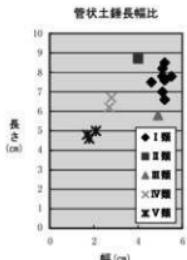
また、これらに並行するものとして、細密な叩き目が施された珠洲焼のI期の壺(294・295・297・298)や壺T種(296)がある [吉岡1994]。15世紀の白磁皿(290)は、その器形から森田編年のD群 [森田1982] と考えられる。珠洲焼V期の片口鉢(293)は、密に施文された鉗目が特徴的である。瀬戸・美濃焼の天目茶碗(292)は、大窓4期(16世紀後葉~17世紀初頭)と推測される [藤澤2005]。

2) 土 製 品 (図版31・62-299~304)

管状土錘が多数出土している。総計299点の出土であるが、1個体が完存するものは非常に少なく、重量が計量できるものは限られている。I~V類に形態分類した。I類は長さ7~8cm、最大径5cm前後のものである(299~307)。II類は1類より細身のもので、長さは8.7cmに達する(308)。III類は短い円柱状を呈するもので、長さは5.8cmとIV類の長さに近い(309)。IV類は長さ6cm台の細型のものである(310・311)。V類は長さ4.5cm前後の小型で細型のものである(312~314)。

第12図は、これらI~V類の法量(長さと最大径)との相関、長さと重量との相関(II・III類は重量不明)を示したものである。II類とIII類の資料数を増やす必要があるものの、法量の相関グラフでは類単位のまとまりが認められる。また、重量との相関では、I類は130~140g、IV類は40g前後、V類は20g未満と対応関係が認められる。孔径との相関は、I類は1.5cm前後、II類が1.1cm、III類が2.0cm、IV類が0.8~0.9cm、V類が0.5cm前後となり各類と孔径は対応関係を示している。また、I・III類は最大径がほぼ同一で、孔径も太い。これに対してII・IV・V類は孔径が細く、形態的特徴が類似している。したがって、本遺跡の管状土錘は、孔径の太いI・III類と相対的に細いII・IV・V類とに区分される。

これらの管状土錘は、SD14(299)、SD523(300~307)、遺物包含層



第12図 角地田遺跡
管状土錘法量グラフ

(305~314) で出土している。このうちSD523では、管状土錘のI類のみが非常に狭い範囲で集中的に出土した(図版16の遺物分布図参照)。同遺構の管状土錘は比較的の残存状況もよく、周辺では土師器鍋(101)が出土している。

3) 鉄関連遺物(図版31・63・315・316)

椀形鍛治滓2点を示した。ほかに羽口の小破片も存在するが、図化していない。中型の椀形鍛治滓(315)と小型の椀形鍛治滓(316)とがあり、このうち315は、裏面に炉床土が付着している。いずれも遺物包含層から出土している。

4) 石 製 品(図版32・63・317~322)

石製品は7点と極めて少なく、すべて砥石に分類される。素材となる礫の形状を大きく残し1~2面の砥面をもつA類(317・319~322)と多面体を呈するB類(318)がある。A類は、317・319のように敲打痕を残すものや321のように筋状の擦痕が認められるものがある。また、320には、断面が直線的となる砥面が形成されている。

一方、B類は、318の1点のみの出土である。同資料は非常に重く、長軸方向の6面以上が砥面となっている。また、SS 1の近辺で配石を構成する礫とともに検出され、SD853の覆土(礫層)に埋没していた。

なお、図示資料の素材はすべて砂岩である。これらは、SD522(317)・853(318)・576(319)の遺構出土資料と、320~322の遺物包含層出土資料がある。

5) 木 製 品(図版32・33・63・323~341)

木製品 木製品は非常に少ない。しかしながら、木筒(323)、箸(324)、用途不明木製品(325)、下駄(326・327)、横櫛(328)、留具用の綴じ皮(329・330)がある。このうち木筒(323)には符録と「急々如律」の墨書から、呪符木筒と判断される(後述)。下駄は差歎下駄の歎(326)と台(327)がある。櫛(328)は横櫛で、全面に黒色の漆が塗られている。綴じ皮(329)は、幅約1.5cm程の帯状の樹皮がゼンマイ状に巻かれたものである。なお、P234(326)以外は、すべて遺物包含層から出土している。

柱 標 6点(331~336)を示した。いずれも樹芯を外し、四面を加工した分割材を用いている。断面形は、やや歪んだ台形状を呈するもの(331~333)や方形となるもの(335)などがある。柱底の側面觀は、偏逆三角形を呈するもの(331・332)や平坦となるもの(333・335・336)などがある。樹種は、キハダ(331~333)、クリ(334)、スギ(335・336)が確認できる。

これらは、SB 1-P668(332)、SB 2-P638(334)、SB 3-P809(333)、SB 4-P687(331)、SB 4-P705(335)、SB 4-P843(336)の基底面などに残存していたものである。

杭 木 杭は1~28の合計28基が確認され、そのうちの杭13(337)・18(338)・23(339)・24(340)・28(341)の5点を示した。いずれも上部が欠損する。

木取りは、丸木取り(337・338)やミカン割り(339)、半割り(340・341)がある。杭底の側面觀は、偏逆三角形(337~339・341)や逆三角形(340)となり、加工はいずれも先端に向かって銳角に仕上げられている。樹種はすべてクリである。

E 文字資料

今回の調査で木簡1点と墨書き土器33点が出土している。木簡は点数が少ないため、多くに言及することはできないが、墨書き土器は小破片でありながら示唆的な資料が見られ、字体変化の可能性や本遺跡が所在する地名とも関連する可能性が考えられる。

1) 木簡について

【釈文】

(符録) 急々如律 ×

(142) × (32) × 3 型式

7B24グリットのVc層から出土した(図版32・63・64-323)。木簡は上下と縱方向に大きく4つに分断されている。上端部は原形のまま、やや丸味を帯びている。上端から約3cmと約5.5cm付近で横方向に折れるが、自然によるものであろう。木簡の右側面は欠損していないが、左側面は符録割書の約半分しか墨痕は残っていないので、おそらく約1/4～1/3を失ったと考えられる。全体を通じて切断のための刃物痕跡は見いだせないのでおそらく、木簡は土圧や洪水など自然条件により各断片が左右に分割されたと推測される。

オモテ面の表面調整は、全般に良く残り平滑である。それに対して、ウラ面は全く確認できず、当初から調整を施していない可能性も考えられる。

墨痕は下断片の方が残りがよい。それでも肉眼での判読は困難で赤外線カメラを用いた。一方、上断片は一層墨痕が薄れており、赤外線カメラを使用してようやく見出せるほど薄い。

冒頭の符録については割書で書かれている。墨痕が希薄なことや左側面の欠損により完全に残っていないため判読しがたいが、比較的明瞭な右行とは同じ墨痕が左行にも確認される。

符録の下に当たる上断片と下断片の切断部には「急」の墨痕がかかる。上断片に残る「急」の上半分は墨痕が薄いが、下断片の「心」(シタゴロ偏)は明瞭に赤外線カメラで確認される。符録と思われる墨痕と、「急々如律令」の一部が確認されたことから本木簡は呪符と判断される。文字内容からは中世の可能性も想定されるが、共伴遺物や土層観察など調査所見から古代の木簡であると推定される。

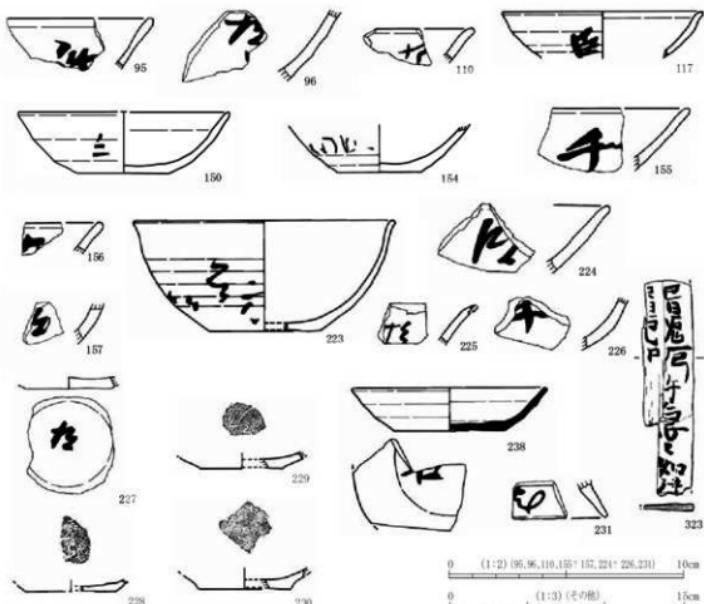
次に、この呪符木簡がどのような呪いに用いられるのかが問題となる。大宮司朗氏の著書で道教系〔大宮2002〕、『修驗道草疏』第1・2巻で修驗道系〔日本大藏經編纂会2000〕、沖縄に現存する呪符(靈符)をまとめた山里純一氏の研究〔山里2004〕などで、該当するものを求めたが、符合する靈符は見出せていない。

新潟県内における「急々如律令」の呪符木簡の出土遺跡でも¹⁾、中世に関するものが多く、明確に古代と考えられるものは新潟市(旧黒崎町)緒立C遺跡しか見いだせない。よって、本呪符木簡に関しては、符録の種類や、そこから分かる呪いの具体的な内容などほとんど明らかにできなかった。

2) 墨書き土器について

墨書き土器30点、ヘラ書3点、合計33点が出土した(第13回)。これらはVc層とする古代・中世の遺物包

1) 奈文研『木簡データベース』の検索による。



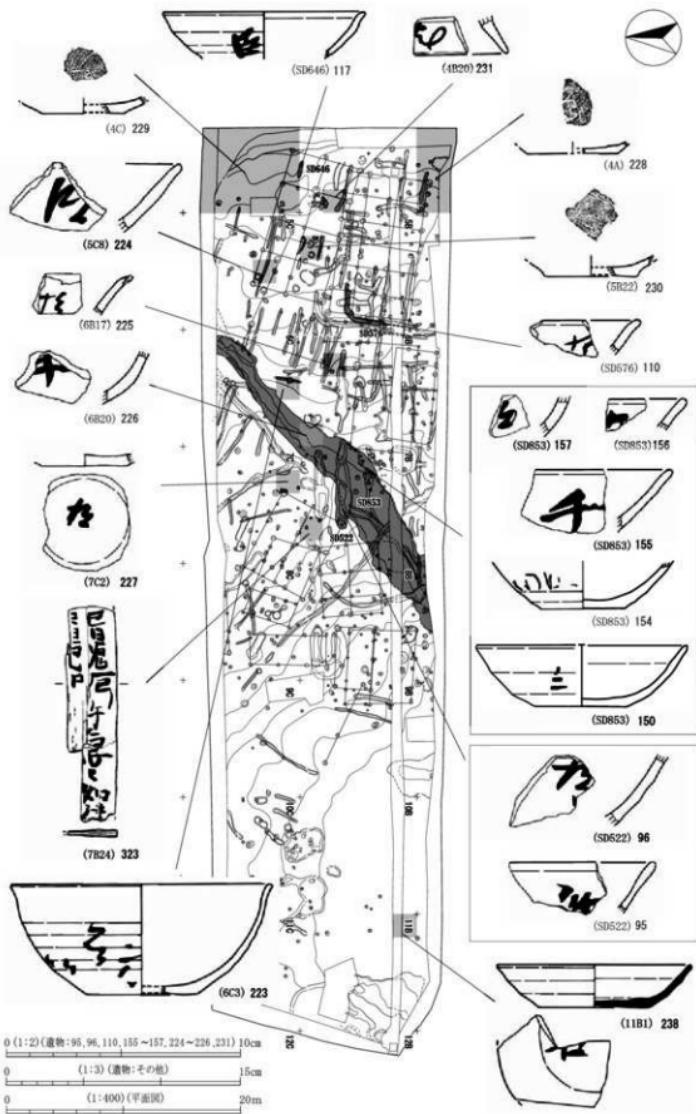
第13図 角地田遺跡 畫畫：刻畫土器

含層と遺構内からほぼ同量出土している。遺構は主にSD853とSD522からの出土で、SD522はその底部より出土している。共伴遺物などから10世紀中葉頃と考えられる。本章で記されているように、当該期に入りの居住を示す遺構が少ないので、調査地点は集落の縁辺付近と考えられている。特にSD853は土石流などによって埋没した可能性も推測されているので、これらの墨書き器は南側の山麓付近に所在した遺跡本体から流入した可能性も考えられる¹⁾。

土器の種別では須恵器は238の1点だけで、残りはすべて土師器である。これが地域的特徴なのか、時期的特徴なのかも明確にできていない³²⁾。墨書き部は底部外面に墨書きされた227・238・231を除いて、体部外面に正位で墨書きされる共通性がある。一方、ヘラ書文字はすべて底部内面に刻まれている。したがって、墨書き部の共通性は本遺跡出土の墨書き土器の一つの特徴といえる。判読された文字は「臣」「臣カ」16点、「臣」の一部の可能性ある墨痕7点、「千」2点、墨点や墨線だけで判読できないものが8点である。「千」(155・226)についても、体部外面に正位で墨書きする。2点の出土地点は近接するとはいえ、226は包含層からの出土に対して155はSD853からの出土という相違点もある。筆致をみると、文字を書き

1) 細密にいえば、墨書き器が使用された原位置からは離れてしまったものであるが、近隣集落からの流入であるため、本遺跡の所在する地域との関係を勘案する上では、問題ないと思われる。

2) 『糸魚川市教委によって調査された同市山崎A遺跡では土師器廐棄土坑内から大量の土師器に混じって、墨書きされた土師器が約20件出土している。時期は10世紀前半である。この遺跡で須恵器の割合が少ないことを考えると、時期的特徴である可能性も考えられる。



第14図 角地田遺跡 墓葬・刻書土器分布



第15図 下宿内山遺跡出土「臣」墨書き土器

慣れた人物による可能性があり、同筆の可能性も考えられる。

154は体部外面に横位で蛇行するように墨書きがなされている。何らかの文字や記号状のものが記されたとはとても考えがたい。実見された荒井秀規氏や高島英之氏も文字などの墨痕とは見なしがたく、文様や絵として墨書きしたものではないかというご指摘を頂いた。よって文様など文字以外のものと考えるか、土器という身近な媒体に対して行った落書などと推測される。

一方、積極的に意図をもって墨書きされたと考えるならば、蛇行していることを重視してヘビ形木製品と関連する可能性も考えられる。平川南氏は、蛇行した墨痕が書かれている長野県屋代遺跡出土一二四号と一二五号木簡に関して、ヘビ形木製祭祀具が9世紀にいたり、その簡略形として蛇行する墨書きへと移行したと推測する〔平川南2003〕。これに立脚するならば、墨書きする媒体の性格の相違を超えて土器でヘビ形が代用された可能性も考えられる。何分、文字でなく単なる墨痕の蛇行では推測の幅が広く、決定的な根拠にかけるため、両案を併記することとする。

3) 「臣」の墨書き土器について

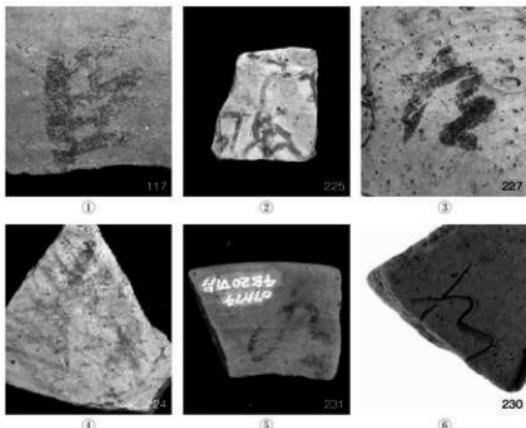
「臣」と判読した根拠の一つは117が明らかに「臣」と判読できることである。「臣」を記した墨書き土器の類例は管見の限りでは多くない¹⁾。それらは、大きく3つに大別される。一つは「朝臣」を記したもので²⁾、もう一つが「中臣」を墨書きしたもの³⁾、さらに「臣」一文字の墨書き土器である。一文字「臣」の出土例の多くは、1点だけの出土である。唯一、一定量を見いだせたのが東京都清瀬市下宿内山遺跡である。報告によれば、集落遺跡である下宿内山遺跡の縁辺部を流れる旧拂瀬川の流路内から出土した「臣」の墨書き土器の中には、第15図に示したような字体の墨書き土器が見られる〔東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会1986〕。この遺跡で出土した78や121は崩しが少ない字体でこれが元々の字形と思われる。これらに近いと思われる字体が、「五體字類」に見出されるので「臣」で問題ないであろう。おそらくこの字形が変化したものと見なし、ほかも「臣」と報告されているのであろう。こうした字例から、本遺跡で出土した墨書き土器の中でも96や224・225・227などは、第15図と類似しているといえる。よって、本遺跡の崩れた字体も「臣」と判読した。

さらに、上述のような崩れた字形を「臣」と判読されるならば、その字体の変遷過程が推測される。そ

1) 墨書き土器の検索には、吉村武彦氏らによる「全国墨書き・刻書き土器データ」（平成11～13年度科学研究費補助金（基盤研究B2）「古代文字資料のデータベース構築と地域社会の研究」による研究成果の一部）を利用した。

2) 岩手県水沢市駒沢城跡出土など。

3) 千葉県吉原三王遺跡や宮城県多賀城市耕谷遺跡などで出土。



第16図 角地田遺跡 「臣」崩し字の分類

が、第16図である。変形部分を中心とした相違点やその分類に含まれると考えられる遺物を記すと以下の通りである。

- ①「臣」の楷書体⇒117・238・150（150はすでに崩れはじめ行書体に近いと思われるが、ここに含めた）
- ②本來第2画目になる縦画を最初に書き、横画に続けて以下の筆画を崩して記す。⇒225のみ
- ③本來の第1画・横画を書いた後に、縦画から連続して以下の筆画を崩して記す。⇒96・227
- ④本來の第1画・横画を記さず、③の縦画から崩し部分のみを記す。⇒224のみ（110もこの例）

※ヘラ書3点は110の類字形と考えられる。⑤への過渡的な段階として、縦画の後に筆をその右側に回す④ではなく、左（外）側から回す字体と考える。

- ⑤縦画を記した後に、外（左）側から回す。崩した最終画を点で止める。⇒157・231
- ⑥は筆順の違いによって生じた可能性も推測される。すなわち、②以外の一連の崩し方では縦画から書き始め、それにつづく筆画で字体を崩すのに対して、②だけは横画に続けて崩しに入る点で、ほかと異なる。何らかの理由で筆順を誤ったために生じたイレギュラーとも考えられ、それが点数の少ない理由とも考え得る。②を③以降の文字を記したのは別の人達と考え、集團を異にする可能性もあるが、②を後継する字体が見いだせなかつたので分別は避けた。よって、②を組み込むべきか考察の余地があるが、可能な限り数多くの字体を検討する観点から、本報告では組み入れておく。以上のような類似字体や字体の変化に立脚して、本遺跡出土の墨書き土器の多くを「臣」と判読した¹⁾。

土器に記された文字資料としてヘラ書が出土している点は注目される。ヘラ書資料はその筆順が明白になる点でも重要性が見出され、3点のヘラ書によって「臣」と思われる字体が縦画から書き始めるという重要な根拠が示された。もう一つ注目されるのが、墨書き土器と同じ文字（字体）がヘラ書によっても記さ

1) これに対して、土器を実見された荒井・高島氏は関東地方などの墨書き土器の例から「得」ではないかとご指摘頂いた。確かに、字体が類似している可能性は否定できないが、新潟県内では「得」を記した墨書き土器やヘラ書き土器は関東ほど多くない上、「臣」に対して一定の根拠や後述する意義などが見出せたので「得」とすることは避けた。

れ、墨書と刻書という筆記方法が異なっても共通する文字が記されていることである。同様の事例は、胎内市（旧中条町）中倉遺跡で須恵器に「王」が墨書とヘラ書で記されている。ほかに上越市上押出遺跡では須恵器蓋の内面に「大」が刻書され、また同じ遺構（SX91）から出土した土師器杯の体部外面に横位で墨書されている¹⁾。本遺跡で出土した土師器は、おそらく遺跡の近隣で焼成生産されたと考えられる。ヘラ書と墨書で同じ文字（字体）が記されているということは、筆記には同じ文字（字体）を使用する集団、もしくは人物が関わったことを示唆している。

4) 「臣」の墨書土器のまとめ

「臣」の墨書土器は現地名との関係でも示唆的な資料である。周知の通り、本遺跡の所在地は大字小見〔オミ〕である。いうまでもなく墨書土器「臣」と音通し、これが地名の由来と関わる可能性がある。しかし、小見に関する初見史料は、室町期までしか遡らぬ、現地名との関係を明確に示す史料はない。一方、隣接する大字鶴石の地名は「延喜兵部式」にみえる古代北陸道、鶴石駅の有力比定地であり、何より古代の地名が現在まで隣接地に残存している点で注目される。また、近隣には式内社に比定されている大神社も所在する。こうした周辺の古代に関する資料をみると、墨書土器「臣」をもって「小見」の地名が古代まで遡る可能性が見いだされる。

問題となるのは、古代の場合、「続日本紀」和銅六年（713）条「好字二字」によって、二文字で記すことが多い。墨書土器でも、二文字で地名を記した墨書土器は散見する²⁾。しかしながら、古くは一文字で地名を記したことは「コシ」で周知の通りである。すなわち、国郡名や人名などの「高志」もしくは「古志」（「コシ」）は、「日本書紀」ではすべて「越」一文字で記載されている。見附市上田遺跡出土の「山」墨書土器が当該地の郷名「夜麻」と通じる〔田中2005〕ことが認められるならば、本遺跡でも「オミ」と表音する地名を二文字で表記するほかに、一文字で表記した可能性は十分に推測される。ほかに島根県青木遺跡出土の9世紀後半の文字資料では遺跡に隣接する郷名「伊勢郷」と「美談郷」を「伊」と「美」の一文字で記した木簡や墨書土器が見られ、地名を1文字で記す可能性は十分に想定される〔島根県教育庁埋蔵文化財調査センター編2006〕。

周辺に古代に関する資料が豊富で、特に隣接地に古代の地名が残存していることや、地名を一文字で表記することに問題のないこと、換言すれば、「好字二字」に限る必要のないことを勘案すると、この遺跡が存在していた10世紀頃にすでに「オミ」という地名が存在し、それに対して「臣」の文字を当てて表記した可能性は十分考えられる。こうしたことから、「臣」墨書土器は当該地・大字「小見」に関する初見資料として資料的な価値が非常に高い。

近年の頸城方面における発掘調査の成果では、現在の地名が古代に遡ることが次々と明らかになりつつある。越市大字下野田に所在する延命寺遺跡ではその出土木簡にみえる「野田村」や、上越市に所在する岩ノ原遺跡がその具体例である。後者の遺跡は付近の小字名を遺跡名としたが、出土した墨書土器によって越後国東大寺領石井莊の比定地であることが判明し、莊園名「石井（イワイカ）」が由来になった可能性が指摘されている〔高橋は2007〕。本遺跡の墨書土器はこれらと同様に、頸城地域の地名が古代に遡

1) 墨書やヘラ書の中には「×」や「十」が見られる。これらに関しては文字と見なす客観的な根拠に乏しい。また判読した人物の主觀によりどちらとも判じがたい面もある。こうしたものは単なる窓記号などとして記された可能性もあるため、考察の対象からは除外した。

2) 例えば、長野県屋代遺跡群出土の墨書土器の中に、「屋代」や「八代」と書かれたものがある。

る可能性を示す資料としても重要である。同時に從来、中世後半期（上杉期）までが上限と思われていたこの地方の地名に関して、その起源の再考を迫る資料としてもその価値が見い出される。

また、式内比定社大神社は、おそらくその読みが「オオ神社」であったと推測される。「大」をオオと表音する典型的な事例として『古事記』編纂者の「大安万呂」があり、多氏との関係やこの氏族が称したカバネ「朝臣」との関係も興味深い¹⁾。しかし、こうしたこと述べるには、十分な根拠が見出せない現状では、今後の課題としておき、「臣」墨書土器と大字小見との地名上の関連を指摘するに止めておきたい。「臣」墨書土器に関連して当該地域である能生谷に残っている歴史的な背景が垣間見られるが、こうした点については後考に期したい。いずれにしても、「臣」墨書土器が能生谷の歴史を明らかにする上で、貴重な資料であることは間違いないといえる。

1) 40ページ註3)で記した宮城縣猪谷遺跡では「中臣」とともに「中」や「臣」の墨書土器が出土している。これを参考とすれば、「朝臣」の一字が墨書きされた可能性はある。

〔別註1〕

字体の変化と土器の編年的な関係については、明らかにし難い。よく問題となるのは、第16図1のような楷書が土器の編年上古い時期で、崩れるに従って土器の年代が新しくなるのかという疑義である。この点について、調査担当者には土器の編年的な視点も含めて検討頂いたが、時期などが分かるすべての土器は同じ時期内に入り、それ以外のものについては小破片のため明らかにできなかった。このように土器の時期を細分できなかったこと、また、そもそも、製作に間わる年代観である編年と、土器の使用の時期とをイコールには考え難いことにも、文字の崩しと土器の年代との関係を明らかにできない要因があるようと思われる。

〔別註2〕

多氏の初見史料でもある『日本書紀』天智即位前紀には「多臣茂敷」という人名がみられる。また、平城京の住民として8世紀に、「多臣」が見出せる。『日本書紀』の参照・引用といった二次的な影響による墨書土器「臣」の可能性は否定できないが、基本的には時期が2世紀近く離れる以上、それを関連づけることは困難と思われる。

また、カバネ「臣」との関係も推測はできるが、律令期（八色の姓以降）の「臣」姓は8階中、下から3番目であり、こうした低いカバネを記したとは考えがたい。確かに、律令前代の「臣」姓は最高位であるが、遺跡の時期（10世紀後半）と3世紀以上前のカバネを墨書きしたとするなら、『日本書紀』などのかなり古い史料の引用か、何らかの伝承が当時に存在したことを考える必要があるが、そのような根拠が明示できない以上、そこまで推測するのは非常に困難である。

4 自然科学分析

A はじめに

新潟県糸魚川市大字小見に所在する角地田遺跡は、能生川左岸の沖積地に面した小見川が形成した扇状地上に立地する。本遺跡は、扇状地扇端部を東西に横断するように調査区（1・2区）が設定されており、人工改変に伴う崖線を挟み、崖線下（1区）、崖線上（2区）とされている。発掘調査の結果、2区からは、10世紀後葉～11世紀頃に比定される掘立柱建物、溝等が確認されたほか、10世紀中葉と推定される自然流路（SD853）等が検出されている。

本報告では、中世およびそれ以前の古植生や本遺跡から出土した木製品の樹種の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。なお、樹種同定については、周辺の平遺跡の木製品についてもあわせて行った。

B 試 料

試料は、1区および2区調査区の深堀りトレンチ1～3（第7図、土層断面②・⑩・⑫）に認められた土層から採取された土壤試料と本遺跡から出土した木製品等からなる。以下に、各試料の概要を示す。

1) 土 壤 試 料

古代～中世の遺構が多数検出された2区は、V（Vc）層が遺物包含層、VI層上面が遺構検出面とされている。深堀りトレンチ1～3（第7図）では、各地点においてV層が確認されているが、V層より下位堆積物は、各トレンチにより堆積状況が異なる。深堀りトレンチ1・3（同図、土層断面⑩・⑫）では、比較的層厚のある砂礫層が確認されており、深堀りトレンチ1（同図、土層断面⑨）では最大で人頭大ほどの円～亜円礫が混じる淘汰の悪い砂礫により構成される。これに対し、深堀りトレンチ2（同図、土層断面②）は砂～砂礫が挟在するものの全体的にシルト～粘土等の泥質な堆積物からなり、暗色を呈する土層や炭化物の混じる土層も確認されている。

本分析では、上記した分析目的に基づき、遺物包含層のV（Vc）層と遺構検出面のVI層を主体として、その上・下位の堆積物を対象に分析調査を行う。分析対象とした土層は、1区 II層・III層、2区深堀りトレンチ1 IIIb層・Vc層・VI層、深堀りトレンチ2 Vc層・VI層・VII層・IX層・XIV層、深堀りトレンチ3 Vc層・VII層である。これらの土層から採取された土壤試料を対象に花粉分析、植物珪酸体分析を実施する。

2) 木 製 品

試料は、木製品19点である。なお、19点中2点（実測番号329・330）は樹皮と判断できたため、分析対象から除外したことから、分析対象試料は17点となる。試料の詳細は、結果とともに表に示す。

C 分析方法

1) 花 粉 分 析

試料10ccを正確に秤り取り、水酸化ナトリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植

物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するすべての種類を対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のはかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は20μm以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表および花粉化石群集の層位分布図として表示する。微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表・図として示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入し、100単位とする。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。

2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学的処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤【近藤2004】の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。各分類群の含量は有効数字を考慮し、10の位を四捨五入し、100単位とする。合計は、各分類群の丸めない数字を合算した後に100単位とする。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位の変化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位の変化を図示する。

3) 樹種同定

各木製品の木取りの観察を行った後、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接縫断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（滴水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

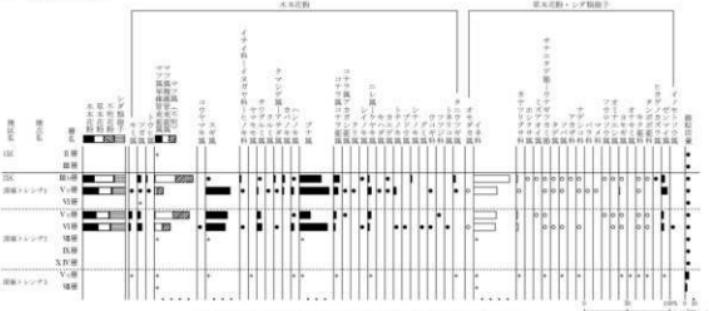
同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東【島地1982】、Wheelerほか【Wheelerほか1998】、Richterほか【Richterほか2006】を参考にする。各樹種の木材組織については、林【林1991】、伊東【伊東1995・1996・1997・1998・1999】や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

D 結 果

1) 花粉分析

結果を第10表、第17図に示す。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難などを示す。木本花粉総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する懼れがあるため、出現した種類を+で表示するに留めている。花粉化石の産出状況は試料により異なるが、保存状態は全体的に

4 自然科学分析



第17回 角地田遺跡 花粉化石群層の層位分布

種類	試料名	1区			2区			3区		
		深淵トレンチ		Vc層	深淵トレンチ		Vc層	深淵トレンチ		Vc層
		Ⅰ層	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層	計層
木本花粉		-	-	-	-	-	-	-	-	-
モミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツガ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
トウヒ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属(不明)		2	-	-	24	15	-	25	19	4
コウヤマキ属		-	-	-	-	-	-	2	-	-
スギ属		-	-	-	1	62	-	34	47	3
イチイ属-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	-	-	2	2	-	-	1	-
ヤマモモ属		-	-	-	-	1	-	6	12	-
サワガシ属		-	-	-	-	3	-	-	-	1
クルミ属		-	-	-	-	2	-	-	-	-
クマシタ属-アザダ属		-	-	-	2	2	-	-	-	-
カラマツ属		-	-	-	3	3	-	-	-	-
ハシノキ属		-	-	-	1	7	-	-	-	-
ブナ属		-	-	-	30	75	-	17	67	2
コナラ属-コナラ属		-	-	-	8	11	-	4	4	-
コナラ属-アカシヤ属		-	-	-	-	1	-	1	-	-
クリ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-
シメノ属		-	-	-	-	2	-	5	4	-
ニレ属-ケヤキ属		-	-	-	-	9	-	-	-	1
ヒバ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
カエデ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-
トネリコ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-
ブドウ科		-	-	-	-	7	-	-	-	-
シナノキ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-
グミ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科		-	-	-	-	2	-	-	-	-
ツブツブ属		-	-	-	-	-	-	2	-	-
トキワガシ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-
タニワガシ属		-	-	-	-	3	-	-	-	-
草本花粉		-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモギ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-
イネ科		-	-	-	183	157	-	110	142	87
カキツバタ科		-	-	-	5	5	-	6	11	3
ホシクサ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-
ミズクサ属		-	-	-	-	2	-	4	2	3
サンエイタデ属-ウナギツカミ属		-	-	-	2	4	-	1	1	-
アマモ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-
ソバ属		-	-	-	-	2	-	-	-	-
アザダ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-
ナデシコ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-
バラ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-
マメ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-
アフロダイト属		-	-	-	-	1	-	1	-	-
オニナシ属		-	-	-	-	1	-	2	1	-
ヨモギ属		-	-	-	28	7	-	3	2	1
オナモ属		-	-	-	-	1	-	-	-	2
ホクサ属		-	-	-	-	1	-	1	-	-
クサヒメンドコ科		-	-	-	-	1	-	-	-	1
小木花粉		2	-	-	5	8	1	7	8	1
シダ類		-	-	-	1	-	-	-	-	-
ヒカゲノカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-
ゼンマイ属		-	-	-	16	39	-	10	16	-
イノモトウ属		-	-	-	-	-	-	2	-	8
他のシダ類		4	3	96	141	1	144	177	24	6
合計		2	0	117	216	1	133	204	4	0
木本花粉		0	0	205	180	0	129	165	1	0
草本花粉		2	0	8	1	-	7	8	1	0
不明花粉		4	3	113	180	1	154	195	24	6
シダ類		6	3	435	526	2	416	564	29	6
統計(不明を除く)		<100	<100	200	400	300	400	600	300	<100
1) あたりの面積(面積)		<100	<100	200	400	300	400	600	300	<100
2) 面積は100m ² を4分割し、100m ² を1としている。										

第10表 角地田遺跡 花粉分析結果

やや不良である。以下に、各地点の産状を示す。

1区 II・III層からは、花粉化石がほとんど検出されず、II層からマツ属が2個体検出されたのみである。微粒炭量は、II・III層ともに100個未満/ccである。

2区深掘りトレンチ1 VI層からは花粉化石がほとんど検出されず、わずかに木本花粉のツガ属が1個体検出されるのみである。Vc層は、木本花粉では、ブナ属やスギ属、マツ属が多産し、このほかに、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属等を伴う。草本花粉では、イネ科が多産し、ヨモギ属、カヤツリグサ科等を伴う。IIIb層は、木本花粉では、マツ属とブナ属が多産し、このほかに、ツガ属、トウヒ属、コナラ亜属、タニウツギ属等を伴う。草本花粉では、イネ科が優占し、カヤツリグサ科等も認められるほか、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属等の水湿地生植物が検出される。また、Vc・IIIb層からは、栽培種であるソバ属の花粉も検出される。

微粒炭量は、VI層は約300個/cc、Vc層は約400個/cc、IIIb層は約200個/ccである。

2区深掘りトレンチ2 XIV・IX層は、花粉化石は1個体も検出されず、わずかにシダ類胞子が検出されるのみである。VII層も花粉化石の産出状況は不良であり、木本花粉ではマツ属やスギ属、ブナ属、草本花粉では、イネ科が1~2個体検出されるのみである。VI・Vc層から花粉化石が産出する。木本花粉では、マツ属やスギ属、ブナ属が多産し、このほかに、モミ属やツガ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属等を伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科やサンエタデ節-ウナギツカミ節、ヨモギ属等が認められる。また、オモダカ属やミズアオイ属の水湿地性植物や栽培種のソバ属等も検出される。

微粒炭量は、XIV層は約100個未満/cc、IX層は約300個/cc、VII層は約200個/cc、VI・Vc層は約400個/ccである。

2区深掘りトレンチ3 VII・Vc層とも花粉化石の産出状況は不良であり、解析に有効な個体数は検出されない。VII層は、マツ属とイネ科がそれぞれ1個体ずつ検出されるのみである。Vc層は、木本花粉ではマツ属やスギ属、ブナ属、コナラ亜属等が、草本花粉ではイネ科が多く、このほかに、カヤツリグサ科、サンエタデ節-ウナギツカミ節、ソバ属等が認められる。

微粒炭量は、VII層は約2,000個/cc、Vc層は約4,200個/ccである。

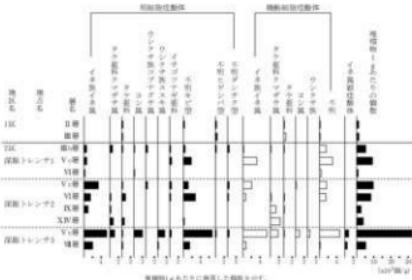
2) 植物珪酸体分析

結果を第11表、第18図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど、保存状態は不良である。以下に、各地点の産状を示す。

1区 II・III層は、植物珪酸体含量は1,200~1,300個/g程度と少ない。検出された分類群では、タケ亜科等がわずかに認められる。

2区深掘りトレンチ1 VI層は、植物珪酸体含量は約800個/g程度と少ない。検出される分類群は、ヨシ属がわずかに認められたほか、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体が認められる。Vc層は、植物珪酸体含量は約9,200個/gと増加する。イチゴツナギ亞科がわずかに検出されたほか、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。特に、機動細胞珪酸体の産出が目立ち、含量は約3,300個/gである。IIIb層は、植物珪酸体含量は5,200個/gとVc層に比べ低い値を示すが、検出される分類群は本地点で最も多く、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、コブナグサ属、イチゴツナギ亞科、栽培植物のイネ属も検出される。

2区深掘りトレンチ2 XIV層は、植物珪酸体含量は3,800個/gであり、クマザサ属を含むタケ亜科の産



第18図 角地田遺跡 植物珪酸体含量の層位分布

(個/g)

試料名	I区		II区		III区		IV区		V区		VI区	
	Ⅲ層	Ⅳ層	深掘トレンチⅠ	Vc層	Ⅲ層	Ⅳ層	深掘トレンチⅡ	VI層	Ⅲ層	Ⅳ層	深掘トレンチⅢ	Vc層
ノホク葉茎短胞珪酸体	-	-	600	600	200	3,400	1,500	900	-	5,300	2,000	
イネ族イネ属	-	-	600	600	-	-	200	200	800	600	2,000	
タケモチクマザサ属	-	-	200	200	-	-	200	900	-	-	2,000	
ヨシ属	200	200	-	-	200	-	-	-	-	-	2,000	
ウシクサ族コナガサ属	-	-	400	-	-	600	-	-	-	-	1,000	
ウシクサ族イネ属	-	-	200	400	-	-	400	200	-	-	400	200
イチゴツナギ亞科	-	-	200	1,800	-	-	1,100	2,800	-	200	6,700	1,400
小明キク型	200	400	200	-	-	-	-	-	-	-	200	-
小明キクセイ型	200	400	-	-	-	400	200	-	-	-	400	-
ビカクシダ属	-	-	400	-	-	400	200	-	-	-	400	-
ノホク葉茎短胞珪酸体	-	-	200	3,300	-	2,000	600	-	5,600	700	-	
イネ族イネ属	-	-	200	-	-	-	200	1,300	2,200	1,800	-	
タケモチクマザサ属	200	500	200	-	-	-	200	200	-	-	200	-
ヨシ属	-	-	-	-	-	200	-	-	-	-	900	-
ウシクサ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	500	-
ビカクシダ属	200	300	1,600	3,100	400	1,700	1,500	-	-	4,700	200	-
化粧繊維	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	900	500
II	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科葉茎短胞珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科葉茎短胞珪酸体	700	500	3,100	2,900	400	5,800	5,800	1,100	1,500	17,800	3,800	
イネ科葉茎短胞珪酸体	300	700	2,100	6,300	400	3,900	2,600	1,500	1,500	13,800	900	
化粧繊維	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	500
総計	1,200	1,200	3,200	9,200	800	9,700	8,900	2,600	3,800	32,900	5,300	

第11表 角地田遺跡 植物珪酸体含量

出が目立つ。IX層は、植物珪酸体含量は約2,600個/gと下位のXIV層に比べ低い。クマザサ属を含むタケア科が認められるほか、栽培植物のイネ属の短胞珪酸体が検出される。VI層は、植物珪酸体含量は約8,300個/gと高い値を示す。クマザサ属を含むタケア科やイチゴツナギ亞科などが認められるほか、イネ属の含量はIX層に比べ高い値を示す。含量は、短胞珪酸体が約1,500個/g、機動細胞珪酸体が約600個/gである。Vc層は、植物珪酸体含量は約9,700個/gと本地点で最も高い。タケア科やコブナグサ属、イチゴツナギ亞科などが認められるほか、イネ属の产出が目立つ。含量は、短胞珪酸体が約3,400個/g、機動細胞珪酸体が約2,000個/gである。

2区深掘トレンチ3-VII層は、植物珪酸体含量は約5,300個/gであり、タケア科やスキ属が検出される。また、イネ属も検出され、その含量は短胞珪酸体は約2,000個/g、機動細胞珪酸体は約700個/gである。Vc層は、植物珪酸体含量は約32,900個/gと今回の分析試料中で最も高い。クマザサ属を含むタケア科やヨシ属、スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亞科が検出されるほか、イネ属の含量が高い。イネ属の含量は、短胞珪酸体は約5,300個/g、機動細胞珪酸体は約5,600個/gである。

3) 樹種同定(1)

角地田遺跡 結果を第12表に示す。本製品19点は、針葉樹1種類(スギ)、広葉樹4種類(クリ、モクレン属、イスノキ、キハダ)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部

の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3~4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸~薄く、横断面では角張った指円形~多角形、單独および2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界付近で径を減少させる。道管は分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は階段状~対列状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~40細胞高。

イヌノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イヌノキ属

加工の関係から木口面の切片が採取できなかった。柾目面で放射方向にはば同径の道管が配列していることから散孔材と判断できる。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。軸方向柔組織が認められ、柾目面では放射方向に等間隔で出現する。道管、柔細胞、木繊維に黒色~茶褐色の充填物が顯著に認められる。

キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圈部は3~5列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~40細胞高。

4) 樹種同定 (2)

平遺跡 結果を第12表に示す。本製品は、針葉樹1種類(スギ)、広葉樹1種類(トチノキ)に同定された。以下に、各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。

実測分号	部位	グリッド	遺構	形態	本取	樹種	備考
303	25KA	7024	気含槽	水槽	板目	スギ	
324	25KA	—	気含槽	著	削出槽	スギ	
325	25KA	5935	気含槽	不明	分割材	スギ	
326	25KA	71625	円筒形	希爾ト松の歯	板目	モクレン属	
327	25KA	6108	気含槽	希爾ト松の歯	板目	モクレン属	
328	25KA	5914	気含槽	希爾ト松の歯	板目	モクレン属	
329	25KB	8C1	気含槽	希爾ト皮	分割材	イヌノキ	
329	25KB	8C1	気含槽	希爾ト皮	—	樹皮	
330	25KB	8C1	気含槽	希爾ト皮	—	樹皮	
331	25KA	683	P987	柱根	分割材	キハダ	
332	25KA	5A21	P968	柱根	分割材	キハダ	
333	25KA	5A20	P789	柱根	分割材	キハダ	
334	25KA	6C1	P938	柱根	分割材	キハダ	
335	25KA	6A23	P705	柱根	分割材	スギ	
336	25KA	6A25	P943	柱根	分割材	スギ	
337	25KA	6C3	板13	板	芯材丸木	クリ	
338	25KA	6B17	板18	板	芯材丸木	クリ	
339	25KA	6C20	板21	板	分割材	クリ	
340	25KA	6C20	板24	板	半乾木	クリ	
341	25KA	6C20	板28	板	半乾木	クリ	
番号	実測番号	部位	遺構	本取	樹種	備考	
V1	34	—	約文字(?)	板目	スギ		
W1	25	—	約文字(?)	板目	スギ		
W2	25	—	削出槽	板目	スギ		
W3	11	25	削出槽	板目板目板	トチノキ		
W4	12	25	希爾	削出槽	スギ		

第12表 角地田遺跡・平遺跡 樹種同定結果

トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った梢円形、単独または2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、單列、1~10細胞高で階層状に配列する。

E 考 察

1) 古 植 生

1区および2区の基本土層の花粉分析結果では、1区Ⅱ・Ⅲ層や2区の各トレーナーの遺構確認面(VI層)より下位の堆積物では花粉化石が検出されない、あるいは、検出されてもわずかであった。発掘調査所見によれば、2区深堀りトレーナーでは、砂礫が基盤をなす状況(トレーナー1)や泥質な堆積物中に砂礫を挟在する状況(トレーナー2・3)が観察されている。深度約4mまで掘削されたトレーナー2では、部分的に砂礫を挟在する比較的泥質な堆積物の量重からなり、各土層の所見を参考すると一連の堆積物とみられる粒径の変化も窺われる。また、炭化物などが混じる土層が確認されているが、Vc層のような古土壤とみられる堆積物の形成は明瞭でない。分析調査の結果、VI層より下位では植物珪酸体含量が低く、検出される種類もクマザサ属を含むタケア科がわずかに検出される程度であった。これらの点から、VI層より下位の土層中に花粉・植物珪酸体等の植物微化石が取り込まれにくかったことが推定される。また、VI層および上位の堆積物における花粉化石群集も、シダ類胞子が比較的多産することや検出された花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多いことから、堆積後の経年変化の影響を受けていると推定される。

2区のVI層より下位の堆積物中で産出が目立ったクマザサ属を含むタケア科の植物珪酸体は、これまでの研究から他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点[近藤1982、杉山ほか1986]や他の種類よりも残留しやすいことが指摘されている。また、後背地の潜在自然植生[宮脇1985]や本遺跡のVI層および上位の堆積物の花粉化石群集から、当時の森林植生はブナ林であり、その林床にはチシマザサ(クマザサ属の一種)が生育していたと推測される。本遺跡の立地を考慮すると、今回検出されたクマザサ属を含むタケア科は、後背地からの碎削物とともに運ばれてきたササ類の植物珪酸体や周辺に生育したササ類に由来すると考えられる。

古代~中世前半の遺構検出面とされるVI層と上位の遺物包含層とされるVc層の花粉化石群集は、木本花粉と草本花粉が同程度の割合を示し、ほぼ同様の分類群が認められた。木本類では、ブナ属やスギ属、マツ属が多く、このほかに、モミ属やツガ属、サワグルミ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属-ケヤキ属等が検出された。ブナ属は、コナラ亞属等とともに冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であることから、後背の丘陵・山地部には、これらの落葉広葉樹林が分布し、部分的にモミ属、ツガ属等の温帶性針葉樹が生育していたと考えられる。また、サワグルミ属やハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、トネリコ属等は、河畔林や湿地林を構成する分類群や過湿地を好む分類群であることから、周辺の河川沿いや河畔や低地などにはこれらの分類群が生育していたと推測される。多産したスギ属は、水分や養分の多い土壤でよく生育するとされていることや、富山県入善町の扇状地扇端の湧水部ではスギの天然林とされる杉沢の沢杉がみられることなどから、同様に遺跡周辺の低地部に林分を形成していたと推定される。

草本類では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科やサナエタデ節-ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属などが検出された。これらは明るく開けた場所を好む人里植物を含む分類群であることから、調査区周

辺に草地を形成していたとみられ、この他にススキ属なども生育したと考えられる。また、周辺の水湿地には、オモダカ属やミズアオイ属、ヨシ属が生育していたと考えられる。

Ⅲb層では、花粉化石群集組成における草本花粉の割合がやや増加する傾向が認められた。また、VI・Vc層で多産していたスギ属が減少し、マツ属が顕著となる。木本類で最も多産したマツ属は、亜属まで同定できたものの多くは複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は、生育の適応範囲が広く極端な陽樹であることから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類である。マツ属は、スギ属とともに花粉生産量が多いことから、スギの減少に伴ってその割合が強調されている可能性があるが、少なくとも、スギ等からなる林分の減少を反映しているとみられ、二次林としてのマツ属も増加した可能性がある。また、増加が認められた草本類では、イネ科の優占が認められた。このことから、イネ科をはじめとしてカヤツリグサ科やサナエタデ節－ウナギツカミ節、ナデシコ科、ヨモギ属等の明るく開けた場所を好む人里植物を含む分類群からなる草地が遺跡周辺に分布していたと推定される。

なお、植物珪酸体分析結果では、栽培植物のイネ属が検出された。イネ属の短細胞珪酸体がわずかに検出されたⅣ層では、堆積物中に炭化物が混じることが明らかとされているが、遺構・遺物は確認されておらず、イネの由来や利用について言及することは困難である。一方、Ⅴ層および上位の堆積物では、地点によって産状は異なるが、上位に向かってイネ属の植物珪酸体含量が増加するほか、VI層より上位で多産したイネ科花粉の概査では、イネ属に類似した形態を示す個体も多く認められている。本遺跡では、調査区東半より遺構が多く検出されており、耕作溝とみられる溝も確認されていることから、土地利用の状況を反映している可能性がある。また、Vc層およびⅢb層では、栽培種のソバ属が検出された。このことから、当該期には、遺跡周辺でソバ栽培が行われていたと考えられる。

花粉分析対象とした堆積物の微粒炭量は、100個/cc未満～4200個/ccであった。微粒炭は、人間活動と密接に関係しており、遺跡周辺での火入れなどに由来するとされている〔例えば安田1987、松井ほか1992など〕。今回の調査では、2区深掘りトレチ3のⅣ・Vc層でやや高い値が認められたが、全体的に微粒炭量は少なく、その増減は明瞭捉えられること、トレチ1・2において同様の傾向が認められないことから、遺跡周辺での人間活動を反映している可能性について言及することは困難である。

2) 木材利用

角地田遺跡 樹種同定を行った木製品のうち、柱根6点は10世紀後葉～11世紀の掘立柱建物跡を構成する柱穴内から出土したものであり、いずれも樹芯を外した分割材の利用が認められた。このうち、1/4～1/5分割材を利用し、加工形状が類似するP687・668・809の3点はいずれもキハダであった。また、残る3点のうち、P638やP705は面取とみられる加工も認められたが、不明瞭であったため検討が必要である。これらの試料には、スギとクリが認められた。クリは、重硬で強度・耐朽性が高い材質を有し、スギも比較的強度や耐水性が高い。一方、キハダは、強度は高くないが、耐朽性はクリに次いで高いとされる。これらの材質的特徴から、柱材は耐水性・耐朽性の高い木材の選択・利用が推定される。また、杭列の杭も芯持丸木・半截木、分割材が混在し、加工方法は異なるが、すべてクリであった。このことから、柱材と同様に耐朽性の高い木材の利用が窺われる。

木製品は、木簡、箸、下駄、横櫛等からなる。木簡は、薄い板目板が利用され、樹種は針葉樹のスギであった。新潟県内では、浦郷遺跡（白根市）等で中世の木簡を対象とした調査事例があり、スギが多数認

められている〔パリノ・サーヴェイ株式会社2003a〕。

箸は、断面六角形の削出棒状を呈し、樹種はスギであった。本遺跡周辺では調査事例が少ないが、用言寺遺跡（上越市）においてスギの箸が出土している〔パリノ・サーヴェイ株式会社2007〕。下駄の歯（326）は、木取りが柾目板状になることから、差歎下駄の歯とみられる。327は、柾目板状であり、遺存状態は不良であるが、残存部の特徴から差歎（露卯）下駄の台と考えられる。下駄の歯はスギ、台はモクレン属であった。モクレン属には、下駄歯によく利用されるホオノキが含まれており、比較的軽く加工が容易である。露卯下駄の台にモクレン属が利用された事例は、下沖北遺跡（柏崎市）などで確認されている〔松葉2000、パリノ・サーヴェイ株式会社2003b〕ほか、新潟県内では差歎下駄の台や連歎下駄にもモクレン属が認められており、様々なタイプの下駄に利用されていたことが推定される〔パリノ・サーヴェイ株式会社2003a・2003c・2005、金原2006〕。

一方、差歎下駄の歯にスギが認められた事例は、坂井遺跡（見附市）や馬越遺跡（加茂市）などで確認されている〔パリノ・サーヴェイ株式会社2005、金原2006〕ほか、差歎下駄の台では住吉遺跡（紫雲寺町）などで確認されている〔植田2006〕。連歎下駄にスギが利用される事例は、差歎下駄よりも多く、一之口遺跡（上越市）や細田遺跡（上越市）で確認されている〔パリノ・サーヴェイ株式会社1994、株式会社古環境研究所2005〕。このことから、スギは、モクレン属と同様に様々なタイプの下駄に利用されていたことが示唆される。

櫛はいわゆる横櫛であり、櫛の背が木口、歯の広い面が柾目になる木取りであったことから、分割材より削り出していることが推定される。全体的に黒色を帯び、樹種は広葉樹のイスノキであった。イスノキは、日本産広葉樹の中でも特に重硬で緻密な材質を有し、加工は困難である一方、緻密なために細かな加工に適し、櫛の用材としてツゲに次ぐ良材とされている。新潟県内におけるイスノキの櫛の出土例は、ツゲの櫛よりも多く、八反田遺跡、仲田遺跡、用言寺遺跡（上越市）などで確認されている〔株式会社パレオ・ラボ2002、株式会社古環境研究所2006・パリノ・サーヴェイ株式会社2007〕。このほかに、曾根遺跡（豊浦町）、馬越遺跡（加茂市）、住吉遺跡（紫雲寺町）、城田遺跡（神林村）で古代～中世の横櫛にイスノキが認められており、イスノキが広く利用されていたと推定される〔川村1983、パリノ・サーヴェイ株式会社2001・2005、植田2006〕。なお、イスノキは、暖温帶常緑広葉樹の構成種で新潟県に自生していないことから、これらの櫛は、木材あるいは製品として西日本地域より持ち込まれたことが推定される。

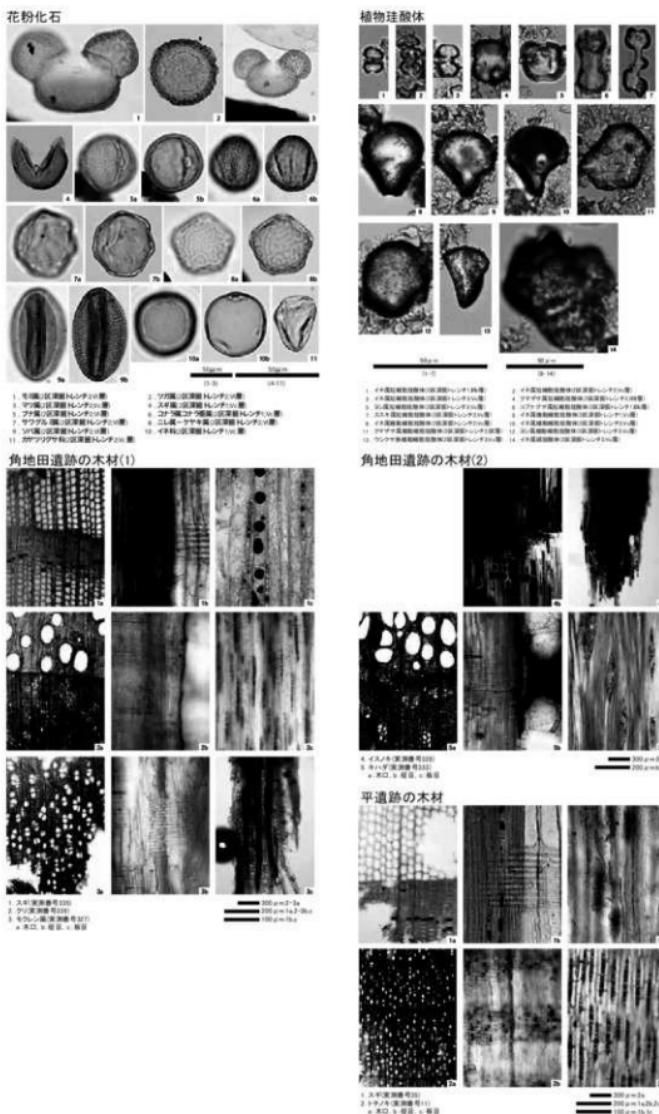
平遺跡 大（35）・小（34） 2点の杓文字状を呈する板材のうち、35は柾目板、遺物番号34は板目板と木取りが異なったが、樹種はいずれもスギであった。糸巻きは、組合せ式糸巻（糸桿）の腕木と考えられる。削出棒状を呈し、同じくスギであった。スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易といった材質的特徴を有することから、これらの板材や削出材などに利用されたと考えられる。

漆器椀は、横木地板目取であり、広葉樹のトチノキであった。トチノキは、ブナ属やケヤキと共に漆器に多く利用される樹種の一つされるが、新潟県内における調査事例では、一之口遺跡（上越市）の古代の資料や、仲田遺跡（上越市）、下沖北遺跡（柏崎市）、大武遺跡（和島村）、住吉遺跡（紫雲寺町）の中世の資料が知られているのみである〔パリノ・サーヴェイ株式会社1994・2003b、松葉2000、三村^{注1}2003、植田2006〕。中世の漆器本地については調査事例が少ないので、近世の資料ではトチノキに横木地板目取、ブナ属に横木地柾目取の資料が多く見られる。トチノキは、辺材部分（シラタ）が少ないために、シラタを効率的に利用するために丸太表面に椀を伏せたような形で木地をとる横木地板目取、樹芯まで利用可能なブナ属は狂いがより少なく、木地が多くとれる横木地柾目取が適しているとされており〔北野2005〕、樹

種に合わせた木取りが行われていたと推定される。

引用文献

- 林 昭三 1991 「日本産木材 頸微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ 木材研究・資料31」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ 木材研究・資料32」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ 木材研究・資料33」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ 木材研究・資料34」 京都大学木質科学研究所
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ 木材研究・資料35」 京都大学木質科学研究所
 株式会社古環境研究所 2005 「繩田遺跡出土木製品の樹種同定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 下馬場遺跡・
 繩田遺跡」 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 株式会社古環境研究所 2006 「自然科学分析」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 用言寺遺跡Ⅰ」 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 株式会社パレオ・ラボ 2002 「木製品の樹種同定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第110集 八反田・高畑遺跡」 新潟県
 教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 川村忠洋 1983 「曾根遺跡出土木の識別」[新潟大学農業報 No.16]
 金原 明 2006 「木製品の樹種」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第169集 坂井遺跡」 新潟県教育委員会・財団法人
 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 北野信彦 2005 「近世出土漆器の研究」 吉川弘文館
 近藤鍊三 1982 「Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究」「昭和56年度科学的研究費(一般研究C)
 研究成果報告書」
 近藤鍊三 2004 「植物ケイ酸体研究」「ペドロジスト 48」
 松葉礼子 2000 「大武遺跡出土木製品の樹種同定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 大武遺跡Ⅰ(中世編)」
 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 松井 龍也 1992 「土の地理学－世界の土・日本の土－」 朝倉書店
 三村昌史 2003 「仲田遺跡出土木製品の樹種」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 仲田遺跡」 新潟県教育委員会・
 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 宮脇昭編 1985 「日本木生誌 中部」 至文堂
 パリノ・サーヴェイ株式会社 1994 「一之口遺跡東地区から出土した木質遺物の同定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書
 第60集 一之口遺跡東地区(本文編)」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化
 財調査事業団
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2001 「城田遺跡の自然科学分析」「神林村埋蔵文化財報告第10 城田遺跡(本文編)」 林
 村教育委員会・山武考古学研究所
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2003a 「木製品の樹種」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第126集 浦瀬遺跡」 新潟県教育委員会・
 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2003b 「下沖北遺跡から出土した木製品などの樹種」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第125
 集 下沖北遺跡Ⅰ」 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2003c 「舗波・塀下遺跡の自然科学分析」「神林村埋蔵文化財報告第18 舗波・塀下遺跡」 神
 林村教育委員会・山武考古学研究所
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2007 「用言寺遺跡の自然科学分析」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第183集 用言寺遺跡
 Ⅱ」 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2005 「平成14年度馬越遺跡の自然科学分析」「加茂市文化財調査報告第14 馬越遺跡－国道
 403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書－」 加茂市教育委員会
 パリノ・サーヴェイ株式会社 2006 「自然科学分析」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡」 新潟県教育
 委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 Richter H.G.(編) 2006 「針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」 海青社
 烏地 謙 1982 「図説木材組織」 地球社
 桜山真二 1986 「機動細胞壁酸体の形態によるタケア科植物の同定」「考古学と自然科学」 19
 植田弥生 2006 「出土木製品の樹種同定」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第157集 住吉遺跡」 新潟県教育委員会・
 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 Wheeler E.A.(編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」 海青社
 安田喜憲 1987 「文明は緑を食べる」 読売新聞社



第19図 菊地田遺跡 花粉化石・植物珪酸体・木製品の切片顕微鏡写真

5 まとめ

A 出土遺物について

本遺跡では、10世紀中葉～11世紀後葉までの土師器食膳具を主体とする土器、陶磁器が多数出土した。特に、SK 1・577・698、SD853・522、SX18などの出土遺物は、比較的良好な一括資料となる可能性がある。ここでは、これらの遺構出土資料の時間的位置付けを考えてみたい。

1) 10世紀の土器・陶磁器

SD853出土土器 本遺構からは、食膳具の土師器無台椀を主体とする土器が多数出土した。特に食膳具の主体をなす無台椀は、外反傾向にあるⅡ類を主体として、器形的に無台杯に近いⅣ類や、外反が顕著なⅢ類などが伴うものであった。それらは、口径は12cm～13cm、底径は5.5cm～6.5cm前後で、底径が大きい特徴がある。Ⅱ類には、器高指数27～31前後のものと、33～35のものとがある。

以上のような食膳具において須恵器が極めて少なく、土師器無台椀をその主体とする器種組成は、10世紀前葉以降の様相と考えられる。土師器無台椀の法量は、頸城平野で10世紀中葉とされる保坂遺跡SX2〔笹沢1998〕出土資料に近いもので、Ⅳ 3期の須沼角地SI227〔土田ほか1988、春日1998〕のものより底径が大きく、身も浅くなる傾向がある（第20図）。また、春日編年のⅦ 2期〔春日1999〕とされる10世紀後半の上越市四ツ屋遺跡SE25出土資料〔中村ほか1988〕より、若干口径と器高が高くなっている傾向があることから、本遺構の土師器無台椀の位置付けは、10世紀中葉と考えておきたい。

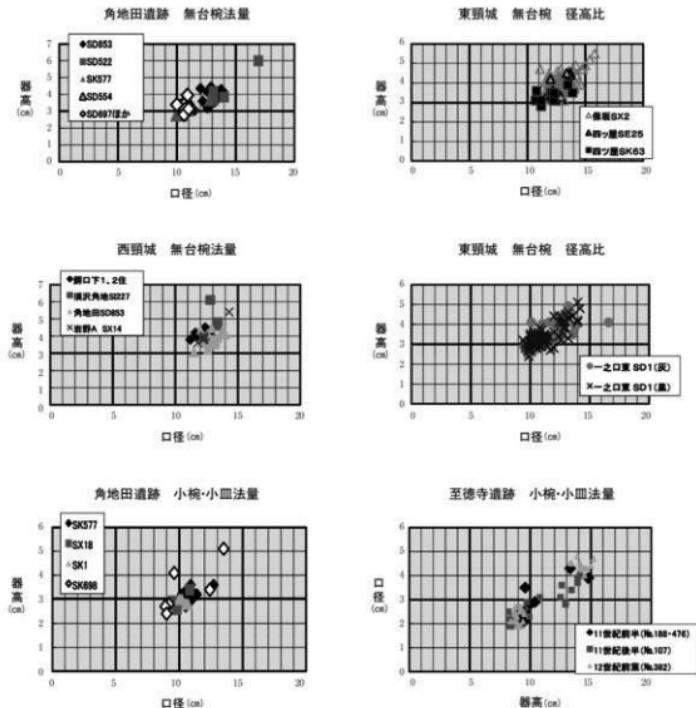
なお、本遺構では、こうした土師器無台椀のほかに、良好な残存状況の双耳瓶（165）が伴出する。本資料に類似のものは、本県では少なく、本遺跡周辺では名立町松原B遺跡〔戸根ほか1987〕に、本遺跡の資料と類似の耳を持ち凸帯が付されるものがある。いずれも北陸西部を産地とする可能性があるが、本資料は、南加賀窯跡群などに見られるものにも類似する。特に、口縁部が摘上がりず三角形状となっている点や板状の耳の形状、やや胴部が短い器形といった特徴は、VI 2～3期（10世紀前葉～中葉頃）の同窯群の小型品にも認められる〔望月1999〕。

その他の資料 SD522やSD554に比較的良好なまとまりがある。前者はSD853の覆土埋没後形成された遺構だが、出土遺物の様相はSD853と大差なく、ほぼ同時期の遺物であると考えられる。したがって、本遺構の出土遺物は、SD853覆土の遺物が再堆積した可能性を考える必要がある。

また、SD554では、口径11cm前後の土師器小椀 I a類に分類した3個体がある。器形的特徴や器壁が薄いなど、後述のSK577の小椀 I b類よりやや古い様相がある。法量では10世紀後半の上越市四ツ屋遺跡SK63〔中村ほか1988〕に同様の法量をもつ一群があり、SD853より新しく位置付けられる（第20図）。

以上のはかに、包含層で出土している土師器無台椀220・221・223が該期のものと考えられ、特にⅢ類とした221・223に見られる顕著な外反は、新しい傾向と考えられ、10世紀後半（春日Ⅶ 2期並行）に降る可能性もある〔春日1997・1999、笹沢1998〕。また、こうした土師器以外で特筆される資料として、越州窯系の青磁の大椀（288）は、10世紀中葉の特徴を持つものである〔山本2000〕。

なお、本遺跡の墨書き器は「臣」と読めるものも含めて、すべて10世紀後半までに収まるものと考えられる。灣る可能性があるのは須恵器無台杯の238で、その底径から9世紀中葉以降と考えられる。



第20図 角地田遺跡 食器の法量

2) 11世紀代の土器

SK577出土資料 本造構では、土師器食器のうち、小椀 I b類が主体的に出土している。小椀 I b類は、口縁部が外反しないが、底部は厚底の傾向を示し、その形状は垂直方向に立上がるようなものとなり、中世的様相を示しつつある。法量が口径10~11cm前後と小さく、器高は3cm前後のもので占められ、42のように2cm台の浅いもの含まれている。こうした特徴は、11世紀前葉前後とされる上越市一之口東遺跡SD 1' 1・2層出土資料〔沢2005〕の法量に近いもので、底部の器形や器高がやや低くなる点で、より新しい様相を帯びた可能性もある。この時期の型式学的な変化の方向性としては、皿化していく過程であり、口径・器高が徐々に小形化していく。加えて、法量が大小2法量の器種の分離傾向を強める時期であり〔鈴木1994、春日1997、笹沢2003〕、本造構でも口径が13cm前後の無台椀 II類も組成し、器種分化している様相が認められる。一之口東遺跡SD 1' 1では相対的に分化が明瞭でなく〔春日1997〕、その点でも新しくなる可能性がある。

以上から、本造構の小椀 I b類に代表される様相は、11世紀前葉に位置付け、一之口遺跡SD 1' 1・2層

に並行するかそれより新しい時期のものと考えておきたい。

本遺跡では、ほかに該期の遺構資料としてSK188やSD697・803などがあり、これらからも小椀Ib類が主体的に出土している。ほかの小椀を出土する大半の遺構もSK577に代表される11世紀前葉と考えられる。

SK1とSX18周辺出土資料 SK1とSX18周辺では、小椀IIa類とIII類を代表とする土師器食膳具が出土している。これらは外反傾向が強いもので、IIa類は胴部が括れる形状を呈するが、III類は口縁部が直線化し、より中世の小皿へと型式的な傾斜を示している。これらには、少量の小椀Ib類が伴うが、SX18では口径9cm台のIb類を含んでいる。法量では、前述のSK577のIb類主体の様相と比較しても、口径10cm前後、器高3cm以下と小皿化が進行している。したがって、SK1とSX18周辺出土資料の位置付けは、少なくとも前述したSK577（11世紀前半）より新しいものと考えられる。

また、11世紀代の資料がまとまっている至徳寺遺跡の資料群〔水沢2005〕（第20図）との比較では、11世紀前半の遺構群（No188・476遺構）よりも身が浅く、後半の遺構群（No107遺構）よりも相対的に口径も大きく身が深い傾向が認められる。したがって、SK1とSX18周辺の位置付けは、11世紀前半～後半期への移行期と考えられ、おそらく11世紀中葉を前後する時期のものと推測されるものである。本遺跡では、以上のほかに、SD11やSD15などの出土遺物がこの時期と考えられる。

SK698出土資料 SK698では、さらに小口径化した小椀・小皿が出土している。口縁部が外反するもので、胴部で鈍く屈曲する小椀のIIb類や小皿II類、口縁部が直線的となった小椀のIII類など、より中世的な様相を見ることが出来る。法量では口径9cm台が多く、器高も浅いものが見られるなど、上記したSK1やSX18などより相対的に新しい様相を帯びている。以上のはかに、器種分化した口径12～14cmの無台椀も見られる。また、器種組成の上でも、上述の小椀・小皿のはかに、土師器や黒色土器などの有台器種が定量性伴う特徴が認められる。

上越市至徳寺遺跡〔水沢2003・2005〕には、11世紀～12世紀の遺構出土資料があるが、本遺構の出土資料は、11世紀後半（No107遺構）～12世紀第1四半期（No382遺構）の法量に近い。しかしながら、12世紀のNo382遺構では有台器種（柱状高台以外）が見られない〔水沢2005〕。したがって有台器種が存在する本遺構の時期的位置付けは、11世紀後葉と考えられる。なお、伴出資料には灰釉陶器の有台椀（66）があり、底部の糸切り痕を難に残し、胴部内外面は無釉とする丸石2号窯式に並行する可能性がある。

本遺跡では本遺構のような該期のまとまりは少なく、本遺構以外では、P330の195（IIIa類）、遺物包含層の212（IIIb類）や213（IIIa類）などに少量の該期の遺物が見られる。

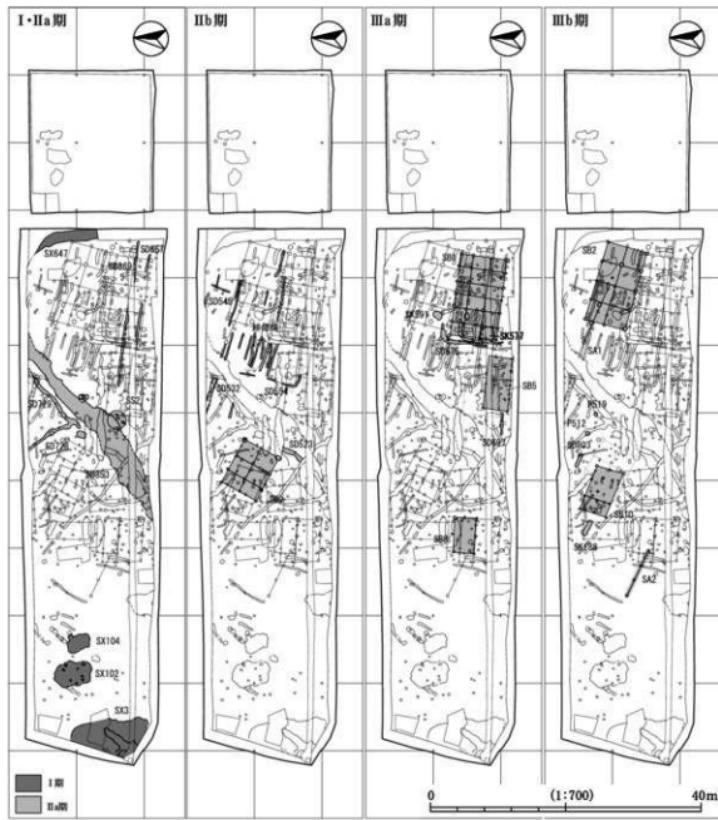
B 検出遺構と遺跡の性格

1) 遺構の時期的変遷

ここでは、前述の土器・陶器器の位置付けや、遺構の重複関係や切合い関係をもとに、古代～中世の遺構の変遷を整理する。時期区分はI期を9世紀～10世紀前葉、II期を10世紀中葉～後葉、III期を11世紀前葉、IV期を11世紀中葉～後葉、V期12世紀以降とする。

I 期（9世紀～10世紀前葉）

SX104やSX647がI期の遺構と考えられる。これに加えてSX3はこの時期以降に形成された可能性がある。いずれも自然形成と考えられるものである。遺物包含層でも少量の遺物が確認でき、明瞭な遺構形成が無い時期と考えられる。墨書き土器の須恵器無台杯（238）は、この時期のものと考えられる。



第21図 角地田遺跡 遺構変遷図(1)

Ⅱ 期 (10世紀中葉～後葉)

おむね10世紀中葉～後葉に相当し、10世紀中葉をⅡa期、後葉をⅡb期とする。Ⅱ期は、本遺跡が集落として明確化する時期であり、特にⅡb期にそれが顕著となる。

IIa期 Vd層とした礫層を覆土にもつSK514やSD728・729・853・867・869（構A群）、SS 2が本期の遺構と考えられる。以上のうち、SD853の立上がり付近には、SS 2が形成され、SD853の覆土で埋没していた。したがって、SS 2はSD853が開口しているときには存在していたと考えられる。SS 2の東には東西方向に幅1.8mの間隔を置いて2条の溝（SD867・869）が走る。位置関係からSD867とSD869の終点（あるいは基点）が、SS 2やSD853であった可能性がある。SD853やSD728・729は、プランや遺構基底面が不整形で



第22図 角地田遺跡 遺構変遷図(2)

る集落の居住域や耕地として利用された可能性が考えられる。

III 期 (11世紀前葉)

SK577から出土した小輪Ib類に代表される11世紀前葉に相当する。掘立柱建物の長軸方向によって大きく2分され、SB1（1群）などからなるⅢa期とSB2（2群）からなるⅢb期とに細分される。本期は、大型の掘立柱建物を伴う集落の居住域の形成が明確で、出土遺物等から検出遺構の大半を本期と推測する。

Ⅲa期 長軸方向が西偏87°~90°の掘立柱建物1群の一部(SB1・5・8)を充てる。掘立柱建物には、面積83m²の大型のSB1があり、これに長軸方向がほぼ同様の小型（面積30m²以下）のSB5とSB8が伴うものと推測している。これに加えてSD575・576、SK577が本期の遺構と考えられる。SD575（SB1の雨落溝

起伏に富むことから、自然形成の遺構と推測される。以上のはかにSK514も本期間に含めておく。これらの遺構のうち、SD853は、出土遺物の位置付けから10世紀中葉と考えられる。

Ⅲb期 Ⅱa期の遺構を埋没させたVd層上面、あるいはVI層で検出された遺構のうち、SB9（掘立柱建物2群）、耕作溝（SD541~543・571~574）やそれらと長軸方向を同じくするSD532やSD545、あるいは屈折して方向を同じくするSD554を本期とした。これに加えて、管状土錘が多数出土したSD523も本期と考えられる。

このうちSB9は、面積約42m²の中型の縦柱建物であり、出土遺物から本期に位置付けたが、長軸方向はⅢb期の掘立柱建物2群の軸に近く、Ⅲ期まで時期が降る可能性もある。溝では、耕作溝のSD571が、Ⅲ期のSD575（SB1の雨落溝の可能性がある）に切られており、Ⅲ期以前と考えられる。また屈折して長軸方向を同じくするSD554には、10世紀後葉の土師器（105~107）が出土しており、本期に帰属すると考えられる。以上のほかに、上記したSD545・532に沿って杭23・24・28・29が検出され、これらの杭も本期と推測される。

なお、10世紀後葉~11世紀後葉を出土する包含層出土遺物（Vc層）の分布傾向（本章1C参照）からは、SD853のプラン周辺に遺物分布が及ばない傾向があり、SD853埋没後（本期以後）も、SD853周辺が区画的性質を帯びていた可能性が考慮される。

以上のように、掘立柱建物の位置付けには課題を残すが、本期は掘立柱建物と耕作溝などからな

の可能性がある)がⅢb期のSB2に切られており、SB1などの掘立柱建物1群とSB2に代表される掘立柱建物2群との前後関係が把握される。本期は、SB1とSK577との切合いなどから、少なくとも2時期に細分される可能性がある。

Ⅲb期 長軸方向が西偏80~70°の掘立柱建物2群やそれに近い長軸方向を示す遺構などを考えていく。SB2・9・10、SA1・2、SD803、SK188が本期のものであろう。SB1の雨落溝(SD575)をSB2が切って存在しているため、掘立柱建物2群をⅢb期に位置付けた。

本期の掘立柱建物は、面積約73m²の大型のSB2があり、これと長軸方向が同一となる小型のSB10も同期と推測した。SB2とSA1やSB9とSB10の切合い関係から、本期も2時期に細分される可能性がある。SK519は出土した灰釉陶器皿(52)が、10世紀中葉~11世紀前葉頃までの年代幅を含んでおり、Ⅱb期に遡る可能性もある。これらに加えP512・519なども本期に帰属する可能性がある。ただし、P519は出土遺物の様相からⅣ期以降に遡る可能性もある。

N 期 (11世紀中葉~後葉)

11世紀中葉から後葉にかけての時期に相当する。引き続き掘立柱建物が検出され、集落の居住域を形成しているが、時期が明瞭な遺構はⅢ期よりも減少している。中葉をⅣa期、後葉をⅣb期とする。

Ma期 SB6・12、SK1、SX18、SD11・15、杭12~20・25などが本期の遺構と考えられる。掘立柱建物には4群のSB6・12がある。このうちSB6は、東偏87°を示し、その出土遺物からⅣa期に考え、それとほぼ同軸のSB12も同期と推測した。SB6の示す軸と直交するSD599も本期と考えたが、おおむねそれと並行して検出された杭12~20・25(以下「杭列」と略す)も同様の時期と推測される。この杭列のうち、杭18は、後述するSD247溝群のSD548(少なくともⅢa期以降)より新しいものと判断される。本期は、SB6などを中心として、長軸方向を東偏87°とそれと直交する軸をもつ杭列などで構成された可能性がある。ここではこれらⅣa期の東偏する一群を東群と仮称する。

ほかに、本期には西偏87°の長軸方向をもつSD15やそれと直交する軸のSD11・12などがあり、これは、調査区西側に分布している(西群と仮称する)。こうした東群と西群は、SB6とSD15の重複や、両群の長軸方向などに差異が認められ、本期が細分される可能性を示している。いずれかが新しくなると考えられるが、東群の長軸方向が、Ⅳb期の掘立柱建物4群の示す方向に近いことから、東群が新しくなる可能性を考えておきたい。このほか、本期には、一括遺物を出土したSK1やSX18が位置付られる。しかしながら、両者のうち東群または西群のいずれかに属すかは明らかではない。

なお、SD247・248・521・522・548の溝(以下「SD247溝群」と略す)は、そのうちのSD522がSB9(Ⅱb期)を切っているため、Ⅲ期以降の帰属を推測した。しかしながら、Ⅲ期には、SD247溝群が示すと同様の長軸方向をもつ掘立柱建物がないため、ここではⅣ期に示した。なお、SD247溝群の帰属はあくまでも推測であり、時期がⅢa期まで遡る可能性もある。時期が遡る場合、SD247溝群より切合いで古いSD559も同時に遡ることとなる。

Mb期 出土遺物の時期や遺構同士の切合い関係から、SB7、SK698を本期に位置付けた。このうち、掘立柱建物1群のSB7は西偏86°を示すもので、Ⅳa期のSX18を切って構築されている。同群のSB4もほぼ同様の長軸方向をとり、Ⅳa期のSD559より新しいことが、切合い関係から確かめられている。しかしながら、SD559はSD247溝群などとⅢ期に遡る可能性もあり、SB4の位置付けも流动的である。

なお、SD248溝群はレンズ状をなして堆積するVc層相当の覆土の上に、Ⅲb層までが堆積している掘込みが深い溝で、Vc層堆積終了後もしばらく開口していた可能性が高い。

V 期（12世紀以降）

珠洲焼や青磁、白磁、青白磁などで構成される12世紀と15世紀を一括したが、明確な遺構形成がなされていないため、該期の様相は不明である。

2) 遺跡の性格

古代の角地田遺跡 本遺跡は、前述の検出遺構の変遷や出土遺物の様相から、11世紀（Ⅲ以前）を主体とする集落遺跡である。この時期は、掘立柱建物を明確に検出し、1～3棟の掘立柱建物や土坑、溝によって構成される。特に、Ⅲa期、Ⅲb期には70mを越す大型の掘立柱建物が存在し、それに1～2棟前後の30m未満の小規模な掘立柱建物が伴うものと推測される。こうした大型の掘立柱建物が伴う集落遺跡は、現状では、有力者の居宅などといった性格が想定されており〔春日1995〕、Ⅲ期の本遺跡はこのような階層（在地有力者）の集落であったことが推測される。

また、特筆すべきは10世紀中葉に帰属する越州窯系の青磁大碗が本遺跡に存在していることである。平安時代にこのような輸入陶磁器を保有する遺跡は、県内では少数事例に限られる。頸城郡では有力者層や官人の居宅が想定されている上越市四ツ屋遺跡〔中村ほか1988・笠沢2003〕や同市五反田遺跡〔渡邊ほか2005〕などが知られている。したがって、この点でも本遺跡がこうした有力者階層の集落であることが想定される。しかしながら、越州窯系の青磁碗が示す年代のⅡ期前後（10世紀後半）の本遺跡は、上越市の上記遺跡のような円面鏡・腰帶石斧といった特殊な遺物の出土ではなく、検出遺構も配石遺構や並行するSD867・869（Ⅱa期）や、中型の掘立柱建物や耕作溝（Ⅱb期）などの検出に留まっている。

このことは、大型掘立柱建物に代表される11世紀の集落への伝世を考える必要があるものの¹⁾、その一方で、10世紀の本遺跡周辺に、輸入陶磁器を保有可能な集落が存在した可能性も考えなくてはならない。現状では、越州窯系青磁碗が本遺跡において10世紀中葉に帰属するか否かは今後の課題とせざるを得ないが、いずれにせよその存在は本遺跡がそれを保有できる集落であったことを示すものであろう。

本遺跡の性格と関連して、本遺跡の近辺は、10世紀初頭の「延喜式」に見られる北陸道の駅路が通過し、鶴石駅が存在した可能性が高い地域である。10世紀は駅制の終末期であり、少なくとも10世紀後半にその制度が衰退するといわれるが、その実態は明らかではない〔中村2000〕。

今回の発掘調査では、こうした駅路や駅家を明瞭に示す遺構の検出には至らなかったが、本遺跡の存続期間や大型の掘立柱建物の検出、輸入陶磁器などが示す本遺跡の性格は、古代北陸道などを含めた官道との関連を完全に否定するものではない。本遺跡の性格については、こうした古代官道との関連も含めて、より詳細に検討する必要があるだろう。しかしながら、能生谷での古代遺跡の発掘調査はほかに例がなく、古代官道や集落の地域的様相などは明らかでない。本遺跡と古代官道との関連など、調査の進展を待ち、再度検討したい。

12世紀以降の角地田遺跡 本遺跡では、少量の珠洲焼や輸入陶磁器などの12世紀以降の遺物も出土している。しかしながら明確な遺構形成はなかった。本遺跡の近隣には、十二平遺跡〔秦ほか1990〕や平遺跡（後述）でも中世の遺物が出土しており、遺跡は皆無ではない。本遺跡を含めた12世紀以降の様相は、今後の調査に委ねたい。

1) 五反田遺跡の白磁碗の事例では伝世が考えられている〔渡邊2005〕。

第IV章 平 遺 跡

1 調査の概要

平遺跡は糸魚川市大字小見字横枕258番地ほかに所在し、海岸から約2.6km内陸に入った能生川左岸の沖積地に立地する。本発掘調査対象地は、遺跡南側の丘陵裾部から北東方向へと伸びる台地状の微高地縁辺である。現況は、整地されたやや高い面と下段の水田面に分かれ、高い面は畠地として利用されていた。標高は40.0~35.3mを測る。

A 調査区と調査方法

調査区の設定 調査区は、北陸新幹線法線の199K230m~199K620mの区間のうち、199K230m~250mの範囲と199K470~620mの範囲である。

排土置場の関係から、基本的にこの範囲の法線南側に沿ってトレントを設定した。トレントの設定か所・長さは、隣接耕作地に合わせて都合5か所とした(第23図)。199K470m~199K620mの範囲には101~104区があり、畠となっていたやや高い面のトレントを101区、その西側の水田面のトレントを102~104区とした。199K230m~199K250mの範囲には、水田面に105区を設定した。

調査方法 上述のトレントで重機と人力による掘削及び遺構確認を行なった。記録は土層の堆積状況、トレントの位置、遺構・遺物の検出状況等を野帳・図面・写真等にとどめた。

出土遺物の取上げは、基本的に各トレント単位とした。しかしながら、102区ではⅢb層から遺物がやや多く出土したため、調査区内に5×5mのグリッドを設定し、グリッド単位で取り上げた。グリッドは、調査区の南東隅部から5m北側の東西ラインを基準にした。グリッド名は南東隅を1とし、以後東から西に割りつけた。各グリッドには1~16番の番号付した(第23図)。

B 基本層序

平遺跡の基本層序(第23図、国版65、第13表)は、もともとの地形や過去の耕地整理の影響か明らかに西側(101~104区)と東側(105区)では異なっていた。したがって、西側(101~104区)と東側(105区)に分けて基本層序を記述する。

101~104区の基本層序 大別6層、細別13層に区分できる。I層は耕作土あるいは客土で、Ia層が耕作土、I b~I d層が圃場整備で撒入された客土である。I b層は砂を敷詰め転圧された状態の床土と考えられ、102区東側に存在する。

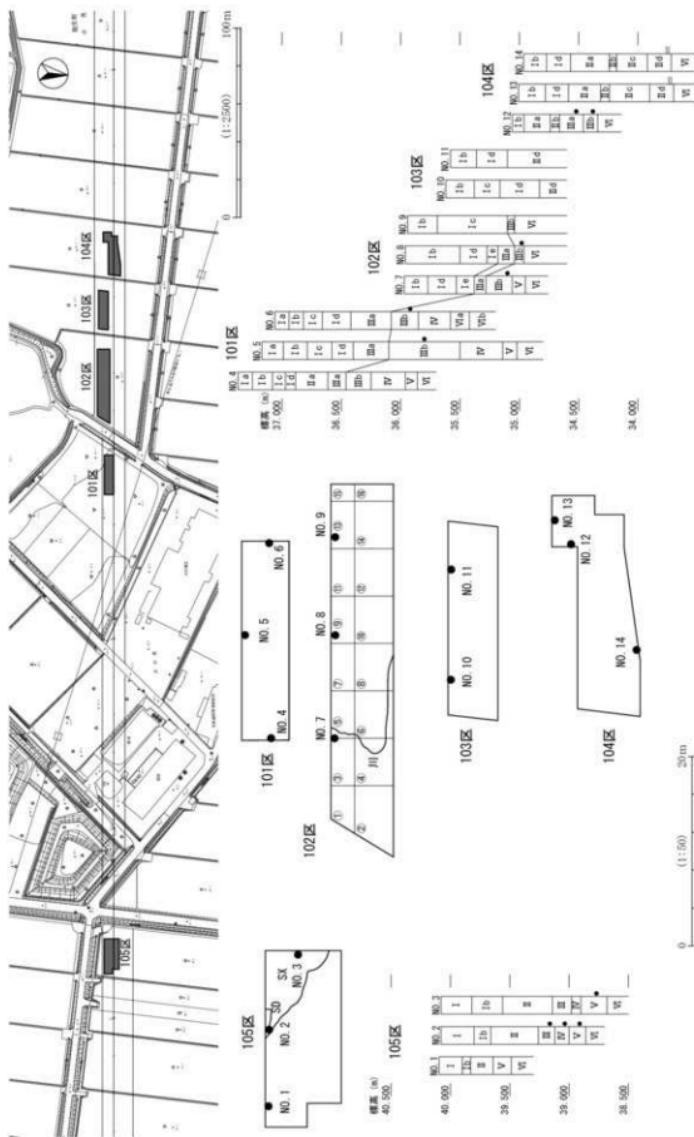
II層は、I層と遺物包含層のⅢ層の間に堆積す

層位	色	調	しまり	粘性	土層の所見
I a層	褐灰色	10YR4/1			耕作土
I b層	褐色	—			整地客土
I c層	褐色	—			整地客土
I d層	褐色	—			整地客土
Ⅲ a層	褐褐色	5YR4/2			田耕作土
Ⅲ b層	褐色	—			整地客土
Ⅲ c層	褐色	5YR4/1	ややあり	あり	粘質シルト 遺物包含層
Ⅲ d層	褐褐色	5YR4/2	ややあり	ややあり	砂 粒子は微粒
V層	褐灰色	7.5GY4/1	なし	なし	砂 粒子は粗め
VI層	褐灰色	N3/0			砂礫

105区の土層説明

層位	色	調	しまり	粘性	土層の所見
I a層	褐灰色	10YR4/1			耕作土
I b層	褐色	—			砂 整地客土
II層	褐褐色	5YR4/2	あり	あり	粘質シルト
III層	褐褐色	10YR4/2	ややあり	あり	砂質シルト
IV層	褐灰色	7.5GY4/1	あり	あり	粘質シルト 遺物包含層
V層	褐灰色	5GY6/1	あり	あり	粘質シルト
VI層	褐灰色	7.5GY5/1	あり	あり	粘質シルト
VI層	褐灰色	N3/0			砂礫

第13表 平遺跡 土層説明



第23図 平道跡 基本層序

1 調査の概要

る旧耕作土や客土を一括したもので、Ⅱa層は旧耕作土、Ⅱb層は石灰を敷きつめた床土である。Ⅱc～Ⅱd層は旧圃場整備による客土で103・104区の西側に存在する。Ⅲa～Ⅲc層は遺物包含層である。このうちⅢa・Ⅲb層は砂を含む粘土シルト層で、101区・102区・104区の西側に存在する。Ⅳ・V層は灰褐色・褐灰色の砂層である。Ⅳ層は砂礫の基盤層と考えられる。なお、Ⅲ層以下は河川堆積層である。

105区の基本層序 7層に分層した。Ⅰ層は耕作土あるいは客土で、西地区のⅠ層に類似している。特にⅠb層は102区と同様に圃場整備によって砂が敷詰められた床土と推測される。Ⅱ層以下は河川堆積層で、Ⅱ～Ⅳ層は砂を含む粘質シルト層である。Ⅳ層・V層は炭化物を含む遺物包含層で、V層では炭化物が多く含まれている。VI層は砂礫の基盤層である。

C 遺構と遺物の検出状況

102区で川跡や103区で護岸の木組みや樋（しがらみ）が検出された。しかし、木組みや樋は後述のように近世・近代以降に構築されたもので、中世以前の遺構は検出されなかった。出土遺物には古代～中世・近世の土器・陶磁器がある。しかし、これらが出土する遺物包含層は、砂の挟在が見られる粘質シルト層で、その形成が洪水に由来する。したがって、これらの出土遺物は再堆積による可能性が高く、周辺からの流れ込みと判断した。ここでは、こうした101～105区の遺構と遺物の検出状況を説明する。

101区（第23図、図版65） 試掘調査（18～8T、第3図）で遺物が若干出土した地点である。調査面積は104.37m²で、標高は37.3～37.0mを測る。農道を挟んだ102区とは12m程の比高差がある。遺構確認面（IV層上面）での検出遺構はなく、遺物はⅢa層から須恵器有台杯（1）などが若干出土した。

102区（第23図、図版65） 101区の西側の一段低い水田に設定された。調査面積は237.27m²で、標高は36.1mを測る。本区ではⅢa層とⅢb層の堆積があり、Ⅲa層上面で川跡が確認された。川跡はⅢa層を切るもので、漆器椀・糸巻きの柄が出土した。Ⅲb層では、その上面から15cmの深さで遺物が出土した。遺物の分布は5・6～11・12グリッドに集中し、平安時代の須恵器無台杯（2・3）、土師器無台椀（4・5）・甕等（8・9）、漆器椀（11）などが出土した。VI層上面で遺構確認を行ったが、遺構は認められなかった。

103区（第23図、図版65） 調査面積は110.7m²で、標高は35.6mを測る。遺物包含層や遺構は検出されなかった。出土遺物には須恵器甕（13）、土師器無台椀（14）、染付椀（15）がある。

104区（第23図、図版65） 試掘調査で河川や用水の護岸と考えられる木組みを検出した地点である。伴出遺物がないため構築時期が不明であり、再度確認調査が必要となった地点である。調査面積は113.2m²で、標高は35.3mを測る。調査は最初に、平成15年度の試掘トレンチ15～30T（第3図）を掘削し、木組み部分の確認を行った。しかしながら、木組みはその後の排水口掘削で既に処理されていたため、対岸での構築を想定して、その南側での調査を開始した。その結果、Ⅱd層で樋（しがらみ）を検出した。この樋は東西方向に約45cm間隔で直径3～5cmの杭を打並べ、粗朶（そだ）を絡めたものである。さらに90cm南側にも並行して同様の樋を検出した。また、木組みの西側から直径3～5cmの杭と雜木を確認し、その東側にもやはり護岸と考えられる杭列の一部を検出した。直径6～7cmの杭を70～80cm間隔で東西方向に2列に打込み、その上に廃材を並べ、廃材の隙は5cmの角杭、あるいは丸杭で固定していた。

これら本区で検出された木組みや樋付近の遺物には、その直下（Ⅱb層最下面）で出土した越中瀬戸壺（26・27）や近世陶磁器（28）がある。このような出土遺物や木組みの角材から、木組みや樋は近世・近代以降の遺構と判断した。なお、VI層上面で遺構確認を行ったが、ほかに遺構の検出はなかった。

以上のはかに、同区東側の遺物包含層から遺物が出土している。平安時代の須恵器甕（21～22）、無台

杯（17）、瓶類（18・19）、土師器壺（23・24）、製塙土器（25）、中世土師器無台椀（16）がある。

105区 調査面積は134.8m²で、標高は約40.0mである。II層からVI層までは東から西に急傾斜している。遺物包含層は3層で確認され、III層から木製品の杓子（34・35）、IV層から須恵器杯（29）、V層からは土師器壺（30～33）などが出土した。遺構確認はVI層上面で行ったが、認められなかった。

2 遺 物

出土遺物は土器・木製品があり、浅箱コンテナで2箱になる。土器は、平安時代の9世紀代を主体とし、中世や近世の遺物が伴出する。以下、調査区ごとに出土遺物を説明する。

101区出土遺物（図版34・66-1） 1は須恵器食膳具で、器形から有台杯と推測される。

102区出土遺物（図版34・66-2～12） 2・3は須恵器無台杯で、いずれも底径7cm未満と小さく、口縁部の立上がりは緩い。胎土から佐渡小泊産と考えられる。4・5は土師器無台椀で、このうち4は径口指寸24と身が浅く、底径が大きい特徴がある。6・7は須恵器貯蔵具で、6は壺の口縁部、7は長頸瓶の底部と推測される。8～10は土師器壺の口縁部資料である。8・9はロクロ成形で、口縁部先端の摘み上がりは微弱である。10はハケメが施された非ロクロ成形の資料である。11～12は木製品で、11は漆器椀で、内外面とも黒色漆を施し、厚手の輪高台を持つ。12は糸繰り棒で、十字の軸に嵌め込む棒である。

103区出土遺物（図版34・66-13～15） 13は須恵器壺の胴部破片である。14は土師器無台椀で、底部に系切り痕をもつ。15は伊万里焼の染付け椀で、近世以降の所産である。

104区出土遺物（図版34・66-16～28） 16は土師器椀で、器形・調整から中世の可能性がある。17～22は須恵器で、17は無台杯、18・19は長頸瓶、20～22は壺に分類される。このうち17の須恵器無台杯は、胎土から佐渡小泊窯産と考えられる。また、20・21は胎土から同一個体の可能性が高い。23・24は土師器煮炊具で、23は小壺の底部、24は内面にハケメをもつ土師器壺の体部資料である。25は製塙土器で、輪積痕が顕著である。26・27は越中瀬戸の壺で、接合はしないが胎土・焼成から同一個体の可能性がある。28は染付椀で、伊万里焼の所謂「くらわんか椀」で、19世紀の所産と考えられる。

105区出土遺物（図版34・66-29～35） 29は須恵器食膳具で、器形から有台杯と考えられる。30～33は土師器煮炊具で、いずれも壺の破片資料である。このうち30・33はロクロ成形で、30の口縁部先端の摘み上がりは顕著である。31・32は非ロクロ成形で、32には内外面にハケメが施されている。34・35は木製品である。いずれも杓子で、共に柄に比べて身が短い。35は身の先端が炭化している。

3 ま と め

遺構は、104区で木組みや櫛（しがらみ）が検出されたが、その帰属時期は近世・近代以降の構築と判断した。したがって、中世以前の遺構は検出できなかった。一方、遺物は比較的多く出土し、9世紀代の須恵器（2・3・21など）や土師器（4・8・9・30など）が主体をなす。ほかに中世土師器（16）、越中瀬戸の壺（26・27）、伊万里焼（28）などの近世陶磁器、漆器椀（11）などの木製品がある。しかしながら、いずれも出土層位との関係から、河川による再堆積と推測される。本遺跡の上流部東側の丘陵裾部周辺からの流入を考えている。本遺跡自体の様相は中世以前の遺構もなく、遺物も再堆積と判断されることから、不明瞭と言わざるを得ない。遺物散布地と考えられる。

要 約

角地田遺跡

- 1 角地田遺跡は糸魚川市大字小見字木ノ下に所在し、能生川に注ぐ小見川の右岸に形成された扇状地に立地する。標高は30.5~33.0mで現況は水田である。
- 2 北陸新幹線建設に伴い、平成19年度に2,135m²を発掘調査した。
- 3 遺構の大部分は平安時代に属し、検出状況や出土遺物から10世紀中葉～後葉と11世紀代の大きく2時期に分けられる。10世紀中葉～後葉の遺構は、溝7条、配石遺構1基である。遺物は土師器の食膳具を主体とし、須恵器の大甕、双耳瓶、墨書き土器等が出土している。11世紀前葉～後葉を主体とする遺構は、掘立柱建物12棟、櫛2列、土坑15基、耕作溝を含む溝94条、性格不明遺構8基、配石遺構1基、ピット363基である。掘立柱建物には、7間×4間の大型の總柱建物が存在する。
- 4 遺物は平安時代を中心に土器が大量に出土した。土器の内訳は土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、綠釉陶器、製塙土器等で、主体は土師器食膳具である。以上のはかに、中世の12世紀代の珠洲焼、16世紀後半の瀬戸・美濃焼の天目茶碗などがある。
- 5 出土した陶器には、10世紀後半に位置付けられる越州窯系の青磁碗が1点存在する。
- 6 管状土錘が多数出土し、SD523では狭い区域にまとまって出土している。
- 7 出土遺物は、土器・陶磁器以外にも、鉄関連遺物の椀形鍛冶溝、石製品の砥石、木製品の下駄、櫛などがある。
- 8 出土した文字資料には、「臣」と墨書き・刻書された須恵器や土師器のほかに、呪符木簡を記した木簡が出土した。「臣」墨書きは、本遺跡が所在する現在の地名「小見」と推測される。
- 9 本遺跡は、11世紀を中心とする集落跡で、面積70m²におよぶ大型の掘立柱建物の検出や越州窯系青磁碗の出土から、在地有力者が居住する集落と推察される。10世紀後葉の遺構・遺物も少なくなく、掘立柱建物や溝などからなる集落と考えられる。

平 遺 跡

- 1 平遺跡は糸魚川市大字小見字横枕に所在し、能生川左岸の沖積地に立地する。標高は35~40mで現況は畠・水田である。
- 2 北陸新幹線建設に伴い、平成19年度に700m²を発掘調査した。
- 3 中世以前の遺構は検出されなかった。
- 4 出土遺物は土器と木製品がある。土器は平安時代（9世紀代）の須恵器・土師器を主体とし、佐渡小泊産の須恵器無台杯の出土がある。ほかに中世16世紀末の越中瀬戸の壺、近世の伊万里焼の椀などがある。木製品は漆椀・糸繰り棒・杓子・箸が出土したが、土器が伴わないと時期は不詳である。
- 5 遺物は出土層位から洪水等による周辺からの流れ込みと推定される。

引用・参考文献

- 相沢 央 2004 「第Ⅲ部古代 第Ⅱ章第5節 人々の往来と類城群」『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』 新潟県上越市史編さん委員会
- 相羽重徳 2003 「越中瀬戸広口壺に関する粗描－県内出土の報告例から－」『研究紀要』第4号 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木重孝 1976 「第6編 上世の構築・第7編 亂世の堀」『糸魚川市史1 自然・古世・中世』糸魚川市
- 伊藤信太郎 1975 「名立タラバ発見の六個一組の珠洲焼」『越佐研究』35 新潟県人文研究会
- 出越茂和 1997 「北陸古代後半における櫛、皿食器(後)」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 歌代 勉 1976 「第1編 地の構図」『糸魚川市史1 自然・古世・中世』糸魚川市
- 大宮司朗 2002 「道教秘伝 罪符の呪法」 學習研究社
- 荻野正博 1983 「越後国中世莊園の成立」『新潟史学』第16号 新潟史学会
- 荻野正博 1986 「第6章 第2節 莊園と国領領」『新潟県史 通史編1 原始・古代』 新潟県
- 春日真実 1995 「古代菴落の展開－越後を事例として－」『研究紀要』 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
- 春日真実 1998 「西頭城地域における古代土器様相」『研究紀要』2号 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2007 「新潟県上越市名立沖掛陣須恵器水瓶について」『新潟県考古学講話会会報』第32号 新潟県考古学講話会
- 金子拓男 1990 「第6章 第5節 交通と交通路」『柏崎市史 上巻』 柏崎市
- 木下 良 1994 「古代道路の地表遺構」『季刊考古学』第46号 雄山閣出版
- 木下 良 1996 「1 古代道路研究の成果」『古代を考える 古代道路』 吉川弘文館
- 金坂清則 1996 「5 北陸道－その計画性および水運との結びつき－」『古代を考える 古代道路』 吉川弘文館
- 小島幸雄 1983 「平畠遺跡発掘調査報告書」 新潟県能生町教育委員会
- 小林健太郎 1978 「第4章 北陸道 第7節 越後の國」『古代日本の交通路 II』 大明堂
- 斎藤秀平 1937 「新潟県史蹟名勝天然記念物調査報告書」 第7編 新潟県
- 斎藤孝正 1994 「IV 生産地 東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代土器の研究－律令の土器様式の西・東3 施釉陶器』 古代の土器研究会
- 坂井秀弥 1986 「第5章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 一之口遺跡西地区』 新潟県教育委員会
- 鶴沢正史 1998 「Ⅲ.付録」『新潟県上越市 保坂遺跡発掘調査報告書』 新潟県上越市教育委員会
- 鶴沢正史 2003 「第5章古代 第1節時代概説」『上越市史 資料編2 考古』 新潟県上越市史編さん委員会
- 品田高志 1991 「越後の中世土師器－編年の研究の現状と課題－」『新潟県考古学講話会会報』第8号 新潟県考古学講話会
- 鳥根県教育厅埋蔵文化財調査センター編 2006 「青木跡、2(弥生・平安時代編) 国道431号道路改修事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3」
- 鈴木郁夫 1981 「新潟県上越地域 土地分類基本調査 高田西部」 新潟県農地部農村総合整備課
- 鈴木郁夫 1982 「新潟県上越地域 土地分類基本調査 糸魚川」 新潟県農地部農村総合整備課
- 鈴木俊成 1988 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 小出越遺跡」 新潟県教育委員会
- 鈴木俊成 1993 「第VI章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区(本文編)』 新潟県教育委員会
- 間 雅之 1990 「古代縦型管状土鉢考」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- 高野徹雄 1986 「第1章 能生町の山なみと自然、第2章 地すべりの多い能生町」『能生町史 上巻 自然編』 新潟県能生町史編さん委員会
- 高橋典幸 2004 「第1部 第2章 第4節 地頭と御家人」『上越市史 通史編2 中世』 新潟県上越市史編さん委員会
- 高橋保雄 2007 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡」 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡I」 石川県立埋蔵文化財センター

- 田中一穂 2005 「見附市上田遺跡出土の文字資料について」『上田遺跡』 新潟県見附市教育委員会
- 土田孝雄 1986 「糸魚川市史 資料集Ⅰ 考古編」 新潟県糸魚川市
- 土田孝雄^(は) 1988 「須沢角地A遺跡 発掘調査報告書」 新潟県西頸城郡青海町教育委員会
- 寺崎裕助 1987 「能生町井ノ上遺跡出土の繩文時代早期の土器」「越佐補遺些」 第2号 越佐補遺些の会
- 寺崎裕助^(は) 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第54集 鰐口下遺跡 美山遺跡」 新潟県教育委員会
- 東京都清瀬市下宿内山遺跡発掘調査会 1986 「下宿内山遺跡」本文編
- 戸根与八郎^(は) 1987 「新潟県埋蔵文化財調査報告書47集 宮ノ平遺跡はか9遺跡」 新潟県教育委員会
- 中村太一 2000 「日本の古代道路を探す 律令国家のアウトバーン」 平凡社新書045
- 中村美恵子^(は) 1988 「四ツ屋遺跡発掘調査報告書」 四ツ屋遺跡調査団
- 長原四郎 1969 「まとめ」「奴奈川史」 糸魚川市教育委員会 県立糸魚川商工高等学校社会科クラブ
- 日本大藏経編纂会 2000 「修驗道草疏」第1・2巻
- 花ヶ前盛明 1976 「西頭城の莊・保」「かみくひむし」23
- 花ヶ前盛明 1987 「第2章 古代から中世まで「名立町史」 新潟県名立町史編さん委員会
- 秦繁治^(は) 1990 「十二平遺跡発掘調査報告書」 新潟県能生町教育委員会
- 秦繁治^(は) 1996 「大イナバ遺跡発掘調査報告書」 新潟県名立町教育委員会
- 平川 南 2003 「歴代遺跡群木簡のひろがり」「古代地方木簡の研究」 吉川弘文館
- 藤田邦雄 1989 「中世土器素描 -加賀地方の土器を中心にして-」「北陸の考古学」II
- 藤田邦雄 1992 「加賀における様相 -土師器-」「第5回北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」 北陸中世土器研究会
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」「研究紀要V」 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」「全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～ 発表要旨集」 シンポジウム実行委員会
- 水澤幸一 2003 「至徳寺遺跡(至徳寺跡・至徳寺跡)」「上越市史 資料編2 考古」 新潟県上越市史編さん委員会
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」「新潟考古」第16号 新潟県考古学会
- 水澤幸一 2007 「越後の中世漆器 -椀・皿を中心にして-」「新潟考古」第18号 新潟県考古学会
- 宮田進一 1992 「越中ににおける中世土器の編年」「第5回北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」 北陸中世土器研究会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」「中・近世の北陸 -考古学が語る社会史-」
- 室川右京^(は) 1986 「第1章 原始古代 第2章 中世」「能生町史 上巻 自然編」 新潟県能生町史編さん委員会
- 室岡 博 1972 「頸城地方の海と海底・海浜道路」
- 望月清司 1999 「越前・南加賀地域の須恵器貯蔵具」「北陸古代土器研究」第8号 北陸古代土器研究会
- 森田 勉 1982 「14-16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究」No 2 日本貿易陶磁研究会
- 山里純一 2004 「咲符の文化史」 三修井書店
- 山田英雄 1986 「第5章 第2節 国都制の成立・整備」「新潟県史 通史編1 原始・古代」 新潟県
- 山田邦明 1987 「第2章 第2節 3 国人と守護」「新潟県史 通史編2 中世」 新潟県
- 山本信夫 2000 「大宰府条坊跡X V-陶器分類編-」「大宰府市教育委員会
- 八峰 興 2001 「柱状高台古」「中世土器研究論集 -中世土器研究会20周年記念論集-」「中世土器研究会
- 吉岡康暢 1980 「中世陶器流通の時期と地域性」「日本海域の土器・陶磁[中世編]」 六興出版
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 横田健次郎^(は) 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について -型式分類と編年-」「九州歴史資料館研究論集」4 九州歴史資料館
- 四柳嘉章 1992 「能登における中世土器の編年について(播道)」「第5回北陸中世土器研究会 中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」 北陸中世土器研究会
- 米沢 康 1976 「古代北陸道の伝馬制について」「信濃」第28巻第5号 信濃史学会
- 米沢 康 1980 「大宝2年の越中国四郡の分割をめぐって」「信濃」第32巻第6号 信濃史学会
- 渡邊裕之 2005 「第七章 まとめ」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第138集 上の台遺跡・船ノ上遺跡・五反田遺跡」 新潟県教育委員会・財团法人新潟県埋蔵文化財調査事団

角地田遺跡 堀立柱建物(SB) 観察表

遺構名	グリッド	構造			方抜	施道構との切合い	遺構 図版	出土遺物	備考	
		型式	列(間)× 梁(間)	面積 (m ²)	桁行 (m)					
SB1	4B, 5B	柱柱	7×4	83.0	12.1	6.8	N-89°-W	SK577+SD576+SD867+669	国版8 国版33-332	P666-P96212.11 柱根が現存して作られた可能性がある
SB2	4B, 4C, 5B, 5C	柱柱	4×2	72.8	11.9	6.1	N-81°-W	SD575+SX647より新しい	国版9 国版33-334	P6381に柱根
SB3	5B, 6B	柱柱	2×3	6.5	3.7	1.7	N-6°-W	SD575+SD576より新しい	国版10 国版33-333	P579-P809に柱根
SB4	6A, 6B, 7B	柱柱	5×3	46.3	9.1	5.2	N-87°-W	SK698より古い。SD559+ SD660+SD696+SD853より新しい	国版10 国版33-331	P896-P987に柱根
SB5	6A, 6B	柱柱	4×1	28.4	7.9	3.8	N-88°-W	-	国版10 国版33-335	P705-P843に柱根
SB6	7B, 8B	柱柱	3×2	30.4	5.9	5.1	N-87°-E	SD853+P234より新しい	国版11 国版20-20	
SB7	8B, 9B	柱柱	3×3	35.6	6.4	5.7	N-86°-W	SD11-SX18より新しい	国版11 国版20-13	
SB8	8B, 9B	柱柱	2×2	16.9	5.1	3.3	N-87°-W	SD248より古い。	国版11 国版20-14 国版27-210-217	
SB9	7B, 7C, 8B, 8C	柱柱	3×2	42.0	7.2	5.8	N-70°-W	SD322より古い	国版12 国版20-14 国版27-210-217	
SB10	7B, 7C, 8B, 8C	柱柱	3×2	27.9	7.0	4.1	N-75°-W	SD1221+P214より新しい	国版12 国版20-14 国版27-210-217	
SB11	8B, 8C	柱柱	3×1	16.5	6.6	2.6	N-6°-W	SD1248より古い。	国版12 国版20-14 国版27-210-217	
SB12	8C	-	3×(1)	-	5.0	-	N-86°-E	-	国版12 国版20-14 国版27-210-217	

堀立柱建物の柱穴(P) 観察表(1)

SB1

遺構名	グリッド	規格(cm)		施道構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P580	5B30	63.0	48.7	-	国版8	-	
P590	5B19	62.0	58.4	-	国版8 国版20-2	-	
P593	5B17-18	70.0	48.1	-	国版8	-	
P599	5B17	40.0	32.5	-	国版8	-	
P606	5B16	46.0	46.5	-	国版8	-	
P612	4B20	37.0	25.4	-	国版8	-	
P652	4B14	42.0	37.4	-	国版8	-	
P814	5B15	36.0	61.0	SD576より新しい	国版8	-	
P583	5B14	41.0	44.0	-	国版8	-	
P589	5B13	28.0	32.0	-	国版8 国版20-1-3	-	
P741	5B12	35.0	39.0	-	国版8	-	
P604	5B11	49.0	49.4	-	国版8	-	
P608	4B15	32.0	29.2	-	国版8	-	
P791	4B9-14	53.0	37.3	-	国版8	-	
P856	5B10	38.0	58.2	SK577+SD869 より新しい	国版8	-	
P747	5B9	55.0	61.0	SD869より新しい	国版8 国版20-5	-	
P585	5B8	42.0	69.8	SD869より新しい	国版8	-	
P889	4B4	24.0	32.0	-	国版8	-	
P705	5B5	29.0	45.0	-	国版8	-	
P776	5B4	22.0	27.0	-	国版8	-	
P669	5B3	39.0	55.8	-	国版8	-	
P670	5A22	27.0	24.2	-	国版8	-	
P668	5A21	55.0	50.2	-	国版8 国版33-332 柱根が 残存	-	
P663	4A25	35.0	68.0	-	国版8 柱根が 残存	-	
P785	4A24	70.0	49.3	SD867より新しい	国版8 国版20-4	-	

別 表

掘立柱建物の柱穴(P) 観察表(2)

SB4

造構名	グリッド	規格(cm)		地盤との 切り合い	造構 回版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P896 7B11	300	42.5	SD853より新しい	回版10	-	柱根が 残存	
P852 6B15	320	32.9	-	回版10	-		
P855 6B14	380	44.7	-	回版10	-		
P824 6B13	420	29.0	-	回版10	-		
SK360 6B12	82.0	48.3	SD359より新しい	回版10	-		
P565 6B11	34.0	38.0	-	回版10	-		
P895 7B6-11	320	32.5	-	回版10	-		
P836 7B6	420	31.4	SK698より古い	回版10	-		
P871 7B1	27.0	70.0	SK698より古い	回版10	-		
P904 6B5	38.0	31.0	SD696より新しい	回版10	-		
P992 6B4	64.0	53.6	SD696より新しい	回版10	回版 20-10		
P687 6B3	37.0	46.7	SD680-SID696 より新しい	回版10	回版 33-3H 20-11	柱根が 残存	
P681 6A22-6B2	87.0	52.0	SD559より新しい	回版10	-		
P677 6A21	23.0	28.0	-	回版10	-		

SB7

造構名	グリッド	規格(cm)		地盤との 切り合い	造構 回版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P140 9B12	33.0	29.0	-	回版11	-		
P150 9B6-11	31.0	33.3	-	回版11	-		
P162 8B10	26.0	41.4	-	回版11	-		
P169 8B8	36.0	42.3	-	回版11	-		
P316 9B7	36.0	32.8	SD11より新しい	回版11	-		
P257 9B1	41.0	44.0	-	回版11	回版 20-13		
P341 9B1	34.0	54.9	-	回版11	-		
P257 8B5	32.0	24.0	-	回版11	-		
P317 8B3	29.0	48.0	SX18より新しい	回版11	-		

SB8

造構名	グリッド	規格(cm)		地盤との 切り合い	造構 回版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P146 9B16	26.0	45.0	-	回版11	-		
P291 8B19-20	29.0	46.0	SD248より古い	回版11	-		
P274 8B18	59.0	32.0	SD248より古い	回版11	-		
P278 9B11	20.0	18.0	-	回版11	-		
P173 8B13	25.0	30.9	-	回版11	-		
P147 9B6-11	38.0	48.0	-	回版11	-		
P160 8B10	21.0	31.2	-	回版11	-		
P170 8B8	27.0	31.6	-	回版11	-		

SB9

造構名	グリッド	規格(cm)		地盤との 切り合い	造構 回版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P306 8C11	33.0	23.0	-	回版12	-		
P315 7C10-15	35.0	32.0	-	回版12	-		
P717 7C9	43.0	36.8	-	回版12	-		
P506 7C2-3	60.0	26.0	-	回版12	-		
P210 8C6	30.0	24.0	P21より古い	回版12	-		
P287 7C5	36.0	48.0	-	回版12	-		
P726 7C4	33.0	38.0	-	回版12	-		
P827 7B23	30.0	56.0	-	回版12	回版21- 20-21		
P245 8B22	37.0	33.7	-	回版12	-		
P286 8B21	56.0	33.5	-	回版12	-		
P231 7B20-25	51.0	73.7	-	回版12	回版 20-14		
P829 7B19	96.0	64.1	SD522より古い	回版12	-		

SB10

造構名	グリッド	規格(cm)		地盤との 切り合い	造構 回版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P202 8C13	26.0	37.2	-	回版12	-		
P207 8C12	26.0	32.2	-	回版12	-		
P216 7C10	38.0	69.0	SD321より新しい	回版12	-		
P718 7C9	42.0	31.0	-	回版12	-		
P194 8C8	27.0	14.0	-	回版12	-		
P344 8C7	27.0	35.1	-	回版12	-		
P223 7C5	27.0	27.7	-	回版12	-		
P235 8C3	26.0	41.4	-	回版12	-		
P203 8C2	26.0	25.0	-	回版12	-		
P229 8B21	23.0	42.0	-	回版12	-		
P232 7B25	30.0	28.6	-	回版12	-		

SB7

造構名	グリッド	規格(cm)		地盤との 切り合い	造構 回版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P143 9B16-17	25.0	54.6	-	回版11	-		
P276 8B15-20 9B11-16	34.0	30.0	-	回版11	-		
P288 8B15	19.0	35.0	-	回版11	-		
P172 8B13	36.0	53.3	-	回版11	-		

掘立柱建物の柱穴(P) 観察表

SB11

遺構名	グリッド	規模(cm)		地遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P187	SC15	30.0	42.0	—	図版12	—	
P186	SC5	26.0	32.5	—	図版12	—	
P337	SC25	33.0	39.3	—	図版12	—	
P279	SD30	39.0	39.0	SD24より古い	図版12	—	
P192	SC13-14	35.0	38.4	—	図版12	—	
P190	SC4-9	26.0	36.3	—	図版12	—	
P251	SD33-24	31.0	37.4	—	図版12	—	
P280	SD18-19	38.0	23.0	—	図版12	—	

SB12

遺構名	グリッド	規模(cm)		地遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P209	SC14-19	46.0	26.0	—	図版12	—	
P311	SC13-18	29.0	22.7	—	図版12	—	
P339	SC18	23.0	26.0	—	図版12	—	
P313	SC17	30.0	25.6	—	図版12	—	

角地田遺跡 棚(SA)観察表

遺構名	グリッド	長幅 (m)	方位	地遺構との 切合い	遺構図版	出土遺物	備考
SA1	SC	8.7	N=73°-W	SD24より新しい	図版9	図版20-15-16	—
SA2	9C	7.4	N=72°-W	SD12より古い	図版11	—	—

角地田遺跡 棚の柱穴 観察表

SA1

遺構名	グリッド	規模(cm)		地遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P617	SC10-15	56.0	51.4	SD24より新しい	図版9	図版20-15-16	—
P620	SC9	65.0	59.0	—	図版9	—	
P626	SC2-3-7-8	57.0	50.0	—	図版9	図版20-15	
P644	SC1	72.0	33.0	—	図版9	—	

SA2

遺構名	グリッド	規模(cm)		地遺構との 切合い	遺構 図版	出土 遺物	備考
		最大長	深度				
P135	9B119	36.0	62.8	—	図版11	—	
P136	9B118	32.0	37.0	—	図版11	—	
P142	9B112	30.0	45.5	SD12より古い	図版11	—	
P151	9B111	36.0	17.6	—	図版11	—	

角地田遺跡 土坑(SK) 観察表

SA1

遺構名	グリッド	遺構の形態		規模(m)	地遺構との 切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		平面	側面					
SK1	SC10-15	不整形	弧状 縮やか	3.32	1.24	0.22	—	図版13-14
SK188	SC8-9-10-14-15	梢円形	台形状	急斜度	2.50	0.96	0.23	—
SK514	7B22	梢円形	台形状	急斜度	1.24	0.99	0.21	SD521より古い
SK537	5B4-5-9-10	円形	台形状	急斜度	2.26	2.20	0.30	SD1より古い、SD76-SD867-SD869- P19より新しい。
SK582	5B19-24	梢円形	台形状	急斜度	0.82	0.40	0.69	SD19より古い
SK591	5B23-24	梢円形	弧状	1.48	1.04	0.11	—	図版5-13
SK608	7B1-2-6	円形	台形状	急斜度	2.41	2.32	0.26	SD4-SD697-SD699より新しい

SA2

遺構名	グリッド	遺構の形態		規模(m)	地遺構との 切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		平面	側面					
P135	9B119	36.0	62.8	—	図版11	—		
P136	9B118	32.0	37.0	—	図版11	—		
P142	9B112	30.0	45.5	SD12より古い	図版11	—		
P151	9B111	36.0	17.6	—	図版11	—		

角地田遺跡 配石遺構(SS) 観察表

SS1

遺構名	グリッド	規模(m)		地遺構との 切合い	遺構 図版	出土遺物	備考
		長幅	深度				
SS1	4B20-25	1.54	1.41	—	図版5-15	図版22-67-69	
SS2	7B6-7-11-12	3.84	1.83	SD853と同時期で新しい(SD853の覆土で埋没)	図版6-15	図版32-318	

溝(SD) 観察表 (1)

遺構名	グリッド	遺構の形態		規模(cm)	地遺構との 切合い	遺構図版	出土遺物	備考
		断面	上上がり					
SD11	9B6-7-11	弧状	縮やか	40.0	5.0	SD7(P216)より古い	図版6-15	図版22-70-74
SD12	9B7-12-17	弧状	縮やか	28.0	3.0	SD4(P142)より新しい	図版6-15	図版22-75-76
SD14	8A21-22, 8B2-7-12-16-17	台形状	急斜度	56.0	8.0	SD15-83より新しい	図版6-15	図版22-77-80
SD15	7A22-23, 7B3-9-10-15, 8011-17-23, SC3-4	台形状	急斜度	52.0	16.0	SD4より古い。SD853より新しい	図版6-15	図版22-81-86
SD103	11B21, 11C1	弧状	縮やか	86.0	4.0	SDX102より古い	図版7-18	—
SD221	7C10-15, 8C6-11-16-17	台形状	急斜度	92.0	16.0	SD1(P216)より古い	図版6-15	図版23-87

Vc層直下の形
成、Vd層を切る

満(SD) 観察表 (2)

遺構名	グリッド	遺構の形態			規模(cm) 前面 ±上位±下位 最大幅 深度	他遺構との切合	遺構回数	出土遺物	備考
		前面	±上位±下位	最大幅					
SD247	6B23-24-25	弧状	緩やか	99.0	17.5	-	回版6-15	-	SD321-522-548 -248の覆土と類似
SD248	6B18-19-20	台形状	急斜度	136.0	28.0	SB18 (P274-291), SB11 (P279) 上り 新しい。	回版6-15	-	SD321-522-547 -247の覆土と類似
SD521	7B16-17-18-19-21-22-23-24	半円状	急斜度	124.0	33.5	SD853より新しい。	回版6-15	回版23-88-90	SD321-549-247 -248の覆土と類似
SD548	6B13-14-16-17-18-19-20	弧状	急斜度	114.0	17.0	SD554, SD559より新しい。	回版5-15	回版23-103-104	SD321-522-247 -248の覆土と類似
SD522	6B20, 7B11-12-13-14-16-17-18-19	半円状	急斜度	128.0	37.0	SB9 (P829), SD833より新しい。	回版6-15	回版23-91-98, 回版22-317	SD321-549-247 -248の覆土と類似
SD523	7B8-9-13-14	台形状	急斜度	74.0	6.0	SD853より新しい。SD15-SD522より 新しい。	回版6-15-16	回版23-99-102 回版31-300-304	SD13との切合 -14回版15の断面回数整理
SD541	SB25, 6B21, 6C1-2	台形状	急斜度	38.0	9.0	SD675より古い。	回版5-16	-	本遺構とSD542 -543-571-574 は耕作跡を構成
SD542	5B25, 5C5, 6C1-2	半円状	急斜度	36.0	14.0	-	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-574 は耕作跡を構成
SD543	5C5, 6C7-6	台形状	急斜度	24.0	12.0	-	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-574 は耕作跡を構成
SD545	5C1-6-7-8-9-15, 6C11-13-18-19-20	弧状	緩やか	29.0	5.0	SA1 (P617) より古い。SD729-853より 新しい。	回版5-16	-	本遺構とSD542 -543-571-574 は耕作跡を構成
SD571	5B20, 6B16-17-18-22-23	半円状	急斜度	44.0	9.0	SD675より古い。	回版5-16	回版23-108-109	本遺構とSD541 -543-572-573 -574は耕作跡を構成
SD572	5B20, 6B16-17-22	半円状	急斜度	32.0	10.0	SD675より古い。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-573 -574は耕作跡を構成
SD573	5B20-25, 6B31-22	半円状	急斜度	36.0	12.0	SD675より古い。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD574	5B25, 6B21-22	半円状	急斜度	27.0	13.0	SD541-575より古い。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-573 -574は耕作跡を構成
SD575	5B10-15-20-24-25, 6B6	弧状	緩やか	80.0	12.5	弧状小溝(SD541-543-SD751-754- SD699より新しい。SB3 (P579-P809) より古い。	回版5-16	回版24-114-116	SH1の雨落溝の 可能性あり
SD576	4A25, 5B5-10-12-13-14-15-17-19-20	弧状	緩やか	58.0	11.0	SB1 (P844), SB3 (P751), SK577よ り古い。SD869-867より新しい。	回版5-16	回版23-24- 110-113, 回版32-319	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD532	6C13-14-19-20, 7C16	台形状	急斜度	24.0	4.0	SD729-SD853より新しい。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD550	6B7-8-9	弧状	緩やか	40.0	7.0	SD554より新しい。SD559より古い。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD554	6B8-13-14-18-23	弧状	緩やか	24.0	4.0	SD548-SU350より古い。SD729-SD869 より新しい。	回版5-16	回版23-105-107	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD559	6A22, 6B2-7-12-17	台形状	急斜度	28.0	8.0	SB4 (P603), SK360, SD548より古い。 SD550-699-869より新しい。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD650	4B18-19	台形状	急斜度	48.0	13.5	-	回版5-16	回版24-118	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD646	4B23-24, 4C3-4	台形状	急斜度	20.0	17.5	-	回版5-16	回版24-117	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD660	6A23, 6B3	半円状	急斜度	24.0	7.0	SB4 (P602)-SD696より古い。SD689 より新しい。	回版5-16	回版24-119	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD669	6B23-24	半円状	急斜度	38.0	8.5	SD680より古い。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD696	6B2-3-4-5	台形状	急斜度	34.0	5.0	SB4 (P601)-692-697, SD539より古い。 SD680より新しい。	回版5-16	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD697	7A21-22, 7B1-2	弧状	急斜度	44.0	9.0	SK698-SD699より古い。	回版6-14	回版24-120-125	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD699	7A21, 7B1	台形状	急斜度	60.0	11.0	SK698より古い。SD697より新しい。	回版6-14	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成
SD715	5C17-18	弧状	急斜度	34.0	10.0	-	回版5-16	回版24-126-129	Vc層以下の形成、Vd層を切る SD553の覆土と類似する の特徴(回版17-117参照)
SD728	7C1-2-6-7-12-13-18	弧状	緩やか	79.0	20.0	PS12より古い。SD729との新旧は不明	回版5-6-16	-	本遺構とSD541 -543-571-572 -573は耕作跡を構成

溝(SD) 観察表 (3)

造構名	グリッド	造構の形態		規模(cm) 平面 断面 立上がり 最大幅 深度	他造構との切合い	造構回版	出土遺物	備考
		断面	立上がり					
SD729	6C3-9-10-13-14-17-18, 7B21-22, 7C1-6	弧状 縦やか	66.0	18.0 SD545-532-P519より古い、SD728と の新旧は不明	—	回版5-16	回版24- 130-132	SD853の壁土と 類似、V字型の 形で(回版17- 117参照)
SD867	4A24-25	台形状 急斜度	40.0	15.0 SK577-SD576-P819より古い	回版5-16	—	—	SD869+SD852 の壁土と類似
SD803	7C14-15	台形状 急斜度	54.0	8.0 —	回版6-16	回版24- 133-134	—	—
SD869	6B3-4-5, 5B1-8-9-10, 6B6-7-8	台形状 急斜度	44.0	10.5 SB1-1P856-747-585-SK577-SD559- 554-575-576より古い	回版5-16	—	—	SD867-853の覆 土と類似
SD853	5C20, 6B15-20-24-25, 6C3-4-5-7-8-9-10-11-12- 13-16-17, 7A25, 7B3-4-5- 6-7, 8A21-22, 8B1-2-3-14- 15-16-17-18-21-22, 9C1- 8A21-22-23, 8B1-2-6	台形- 階段	急斜度	372.0 SB4 (P896), SB6 (P224), SD14- 15-521-323, 532, 545より古い、 SS2より古いが同時期	回版5-6-17	回版24-26- 135-166, 回版32-318	SD728-729-867 -869の覆土と類 似、V字型直下の 形成(回版17- 117-118参照)、 本造構の壁土上 SS2が埋没する	—

角地田遺跡 性格不明造構(SX) 観察表

造構名	グリッド	造構の形態		規模(cm) 平面 断面 立上がり 長軸 短軸 深度	他造構との切合い	造構回版	出土遺物	備考
		断面	立上がり					
SX2	9A24-25, 9B4-5- 9-10, 10A21	—	V字型 縦やか	3.86 (3.40)	3.88 (3.06)	0.78 0.44	—	回版7-17
SX3	10A23-24, 11C4-5	—	弧状 縦やか	—	—	—	回版7-17	—
SX17	8B4-5	(橋円形)(弧状)	縦やか	0.99	0.52	0.08	—	回版6-18
SX18	8A23, 8B3-4	(不整形)(弧状)	縦やか	1.44	0.92	0.06 SB7-P330より古い	回版6-18	回版27-184
SX102	10B19-20-21- 25, 10C4-5-9-10, 11B21, 11C1-6	橋円形 階段状	縦やか	5.82	3.98	0.18 SD103より新しい	回版7-18	—
SX104	10B22-23, 10C2- 3	不整形	弧状 縦やか	3.76	2.30	0.16 P121より古い	回版7-18	回版27-188 自然形成の落込 みの可能性あり
SX647	4C2-3-7-8-12-13- 19	—	(弧状) 縦やか	(4.75)	(2.37)	0.47 SB2より古い	回版5-17	範囲が大きく複 雑をうける

角地田遺跡 柱穴(P) 観察表

造構名	グリッド	規模(cm) 最大長 深度	造構との 切合い		造構 回版	出土 遺物	備考	造構名	グリッド	規模(cm) 最大長 深度	他造構との 切合い	造構 回版	出土 遺物	備考
			断面	立上がり										
P759	5B19	25.0	Z7'	SK582より古 い新しい	回版 5-13	—	1 類	P256	8A24	136.0	28.0 P36より新 しい	回版 6-18 192-193	—	1 類
P819	5B5	(25.0)	22.0	SK577より古 い新しい	回版 5-14	21-25	1 類	P319	7C15	24.0	20.0 —	回版 6-19 27-319	—	1 類
P530	8B4	(39.0)	9.0	SN18より古 い新しい	回版 6-18 27-195	—	1 類	P512	7C7	68.0	48.0 SD728より古 い新しい	回版 6-19 196-197	—	2 類、柱根
P163	8B9	36.0	26.0	—	回版 6-18 27-190	—	1 類	P519	6C10, 7C6	67.0	44.0 SD729より古 い新しい	回版 6-19 196-202	—	2 類
P214	7C5	36.0	50.0	P297 (SB89) より古い新しい	回版 6-18 27-214	—	1 類	P622	5C4	64.0	10.0 —	回版 5-19 204-206	—	3 類
P121	10C2	68.0	8.0	SN10より古 い新しい	回版 7-17 27-189	3 類	P624	5B22	58.0	6.0 —	回版 5-19 203	—	3 類	
P234	7B25	36.0	38.0	SD56 (P2027) より古い	回版 6-18 32-326	—	1 類	P629	5C7-12	58.0	20.5 —	回版 5-19 196-209	—	3 類
P269	8A24	37.0	26.0	P256より古 い	回版 6-18	—	1 類	—	—	—	—	—	—	—

角地田遺跡 土器観察表(1)

報告 書No.	国版 登記No.	注記No.	出土土地	種別	器種	分類 (類)	法量(cm) (口径 底径)	器高	含有物	色調	勘定		調整等の所見	回転 方向	口縁部 進存率	備考	
											内	外					
1	20	07#P589	SBI (P589)	土器器	無台桙			11.6	石・長・チャ ・黒	に赤い黄褐色 10YR 7/3			ロクロナデ		6/36	炭化物付着	
2	20	07#P590	SBI (P590)	土器器	有台桙			6.8	石・長・チャ ・黒	に赤い褐色 7.5YR 7/3			ロクロナデ、底部糸切り	右			
3	20	07#P589	SBI (P589)	土器器	長甕			11.8	石・長・チャ ・黒・砂	灰黄褐色 10YR 6/2			ロクロナデ		2/36		
4	20	07#P785	SBI (P785)	須志器	甕	Ⅱ			石・長	灰 N 5/0							
5	20	07#P747	SBI (P747)	堅壺	土器				石・長・塵		砂						
6	20	07#P621	SBI (P621)	土器器	無台桙		10.6		石・長・チャ		に赤い黄褐色 10YR 6/3			ロクロナデ		6/36	
7	20	07#P613-1	SBI (P613)	土器器	無台桙		6.0		石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 5/2							
8	20	07#P653	SBI (P653)	土器器	鍋	I	30.0		石・長・チャ ・砂	灰 10YR 7/6					3/36		
9	20	07#P687	SBI (P687)	土器器	無台桙		4.4		石・長・チャ	灰 10YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右			
10	20	07#P692	SBI (P692)	土器器	無台桙		5.4		石・長・チャ ・チャ・砂	灰黄褐色 10YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右			
11	20	07#P687	SBI (P687)	土器器	有台桙		12.8		石・長	砂	5YR 7/6			ロクロナデ		4/36	
12	20	07#P225	SBI (P225)	土器器	小甕	IV	9.4	4.2	32	石・長・黒	灰黄褐色 10YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	
13	20	07#P267	SBI (P267)	土器器	無台桙		4.8		石・長・チャ ・黒	灰白 10YR 8/2			ロクロナデ、底部糸切り	右			
14	20	07#P231	SBI (P231)	土器器	無台桙	VI	12.8		石・長	灰黄褐色 10YR 8/3			ロクロナデ		4/36		
15	20	07#P626	SAI (P626)	土器器	小甕	I b	10.7	4.6	30	石・長・チャ ・砂	に赤い黄褐色 10YR 7/3			ロクロナデ、底部糸切り		12/36	
16	20	07#P617	SAI (P617)	土器器	小甕	I b	10.7	4.5	37	石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右	19/36	
17	20	07#SX1-N65	SKI	土器器	小甕	II a	10.2	5.2	3.0	長・チャ・砂	灰 7.5YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右	29/36	
18	20	07#SX1-N68	SKI	土器器	小甕	II a	10.5	5.9	28	石・長・チャ ・砂	に赤い褐色 7.5YR 7/4			ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36	
19	20	07#SX1-N67	SKI	土器器	小甕	I b	10.7	5.8	28	石・長・チャ ・砂	灰白 10YR 8/2			ロクロナデ、底部糸切り	右	27/36	
20	20	07#SX1-N63	SKI	土器器	小甕	III	10.0	4.9	30	石・長・チャ ・砂	に赤い褐色 7.5YR 7/4			ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36	
21	20	07#SX1-N67	SKI	土器器	有台桙		8.4		長・チャ・砂	5YR 7/4			ロクロナデ、底部糸切り	右			
22	20	07#SX1-N632	SKI	土器器	無台桙		5.8		石・長・チャ ・雪・塵	灰白 10YR 8/2			ロクロナデ、底部糸切り	右			
23	20	07#SX1-1層	SKI	土器器	無台桙		6.2		石・長・塵	灰黄褐色 7.5YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右			
24	20	07#SX1-1層	SKI	墨色 土器	無台桙		15.8		石・長・チャ	灰 2.5YR 7/2			LH#外表面 ダギ、内面 I ガギ、その他のロクロナデ		2/36		
25	20	07#SX1-N69	SKI	墨色 土器	有台桙				石・長・チャ ・黒・骨	に赤い黄褐色 10YR 7/3			内・外表面 ダギ、底部糸 切り→ナメ	右			
26	20	07#SX1-N62	SKI	土器器	小甕		12.6		石・長・黒	灰 10YR 5/1			ロクロナデ		5/36		
27	20	07#SX1-N63	SKI	土器器	鉢		20.9		長・チャ・黒 ・砂	灰 5YR 7/6			ロクロナデ		2/36		
28	20	07#SK188- No.1	SKI188	土器器	小甕	I b	11.0	5.4	32	石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 7.5YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右	29/36	
29	20	07#SK188- No.4 + No.5	SKI188	土器器	有台桙		15.3	7.7	70	石・長・チャ ・雪・塵	に赤い褐色 7.5YR 7/4			ロクロナデ、底部糸ナデ		22/36	
30	20	07#SDS577- No.7 + No.8	SK577	土器器	無台桙	VI	14.9	9.0	40	石・長・チャ ・黒・骨	灰黄褐色 10YR 8/4			ロクロナデ		7/36	
31	20	07#SDS577- No.7 + No.8	SK577	土器器	小甕	I b	10.9	5.4	36	長・チャ・黒 ・塵	灰黄褐色 10YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右	21/36	
32	20	07#SDS522- No.9 - 12	SK577	土器器	無台桙	II a	12.7	6.0	36	石・長・チャ ・黒	砂 5YR 7/6			ロクロナデ、底部糸切り	右	16/36	
33	20	07#SDS577- No.12 + SDS577	SK577	土器器	小甕	I b	10.6	4.8	34	長・チャ ・砂	5YR 7/6			ロクロナデ、底部糸切り	右	2/36	
34	20	07#SDS577- No.8	SK577	土器器	小甕	I b	10.3	4.3	32	石・長・チャ ・黒・砂	灰黄褐色 10YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36	
35	21	07#P819- (P819)	SK577	土器器	小甕	III	9.9	4.9	27	石・長・黒 ・砂	に赤い褐色 5YR 7/4			ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36	炭化物付着
36	21	07#SDS577- No.34 + No.35+ No.81 + SDS577	SK577	土器器	小甕	I b	10.2	5.0	32	石・チャ・砂	灰黄褐色 7.5YR 8/3			ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36	内面に漆付 着

角地田遺跡 土器觀察表(2)

報告書No.	図版No.(種別)	注記No.	出土土地点	種別	器種	分類(種)	法量(cm)			断面	調整等の所見	回転方向	口縁部進存率	備考
							口径	底径	器高					
37	21	07#SD577- No19+ No27	SK577	土器	小楕	I b	112	52	32	石・チャ・砂	褐灰 10YR 5/1	ロクロナデ、底部希切り	右	17/36
38	21	07#SD577- No2	SK577	土器	小楢	I b	104	50	31	石・チャ・砂	に赤い模 5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	7/36
39	21	07#SD577- No7	SK577	土器	小楢	I b	114	57	32	石・チャ・砂	に赤い模様 10YR 7/3	ロクロナデ、底部希切り	右	5/36
40	21	07#SD576- No1	SK577 (SD576)	土器	小楢	I b	106	51	32	長・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り	右	17/36
41	21	07#SD577- No46	SK577	土器	小楢	I b	110	56	30	チャ・黒・砂	に赤い模 7.5YR 7/3	ロクロナデ、底部希切り	右	6/36
42	21	07#SD577	SK577	土器	小楢	I b	105	46	27	石・長・チャ	に赤い・模 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	4/36
43	21	07#SD710	SK577 (SD710)	土器	小楢	I b	112	44	32	石・チャ・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り	右	5/36
44	21	07#SD710	SK577 (SD710)	土器	無台輪		6.8			チャ・砂	模 5YR 7/6	ロクロナデ、底部希切り		
45	21	07#SD577- No6+ No7+ No57	SK577	土器	有台輪		137			チャ・塑・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り →ロクロナデ	右	2/36
46	21	07#SD577- No7	SK577	土器	有台輪		136			石・長・チャ ・砂	に赤い・模 7.5YR 7/4	ロクロナデ		7/36
47	21	07#SD710	SK577 (SD710)	土器	鉢		10.0			チャ・砂	浅黄褐色 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部希切り	右	
48	21	07#SD577- No6+ No7+ No16	SK577	土器	鍋					石・長・チャ ・砂	に赤い・模 7.5YR 7/4	外観タキメ、内面あて 貝瓶		
49	21	07#SD577- No16	SK577	頸忠器	甌					石・長・白	灰 N 5/0	外観タキメ、内面あて 貝瓶		
50	21	07#SD577	SK577	灰輪	長頭瓶		124			石・長	灰白 N 8/0	ロクロナデ		4/36
51	21	07#SD582	SK582	土器	無台輪	II a	120	43	35	石・チャ・砂	に赤い・模 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	7/36
52	21	*PSK698-#1 +PSK698-#22 +PSK698-#32 +SC32V-#8 +SC3-#C+貝瓶	SK599 (PS26)	灰輪	皿	II	114	5.9	23	石・長・白	灰白 N 8/0	ロクロナデ、底部希切り →ロクロナデ	右	17/36
53	21	07#SK698-#1	SK698	土器	小楢	II b	92	5.5	28	石・長・白	に赤い・模 10YR 7/2	ロクロナデ、底部希切り	右	12/36
54	21	07#SK698-#1	SK698	土器	小楢	II	89	40	27	石・長・チャ ・砂	に赤い・模 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	16/36
55	21	07#SK698-#29	SK698	土器	小皿	II	90	46	24	石・長・チャ ・砂	に赤い・模 10YR 7/2	ロクロナデ、底部希切り	右	7/36
56	21	07#SK698-#27	SK698	土器	小楢	IV	96	52	41	石・チャ・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り	右	13/36
57	21	07#SK698-#14	SK698	土器	無台輪	V	124	52	34	石・長・チャ ・砂	に赤い・模 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り		6/36
58	21	07#SK698-#11 +No12	SK698	土器	有台輪		135	6.8	51	石・長・白	に赤い・模 10YR 7/3	ロクロナデ、底部希切り →ロクロナデ		3/36
59	21	07#SK698-#8 +SK698-No22 +No39	SK698	土器	有台輪		136			石・長・白	褐黃褐色 10YR 6/2	ロクロナデ、底部ロクロナデ		11/36
60	21	07#SK698-#6 +No35	SK698	土器	有台輪					石・長・白	に赤い・模 7.5YR 6/4	ロクロナデ、底部希切り →ロクロナデ	右	
61	21	07#SK698-#7 +No20	SK698	黑色 土器	有台輪		65			石・長・チャ	に赤い・模 7.5YR 7/4	ロクロナデ	右	
62	21	07#SK698-#8	SK698	土器	小器		8.6			石・長・チャ	2.5Y 8/2	ロクロナデ、底部希切り (2回と6)	右回転2回	
63	22	07#SK698-#23	SK698	頸忠器	甌		30.0			石・長・白	N 6/0	ロクロナデ		1/36
64	22	07#SK698-#49	SK698	灰輪	長頭瓶					石・長・白	N 8/0	ロクロナデ		
65	22	07#SK698-#19	SK698	頸忠器	甌					石・長・チャ ・白	灰 N 6/0	外観タキメ、内面あて 貝瓶		
66	22	07#SK698-#30	SK698	土器	有台輪					石・長・白	灰白 N 8/0	鋼鐵ドロロクロナデ、 底部希切り→ロクロナデ、 その他のロクロナデ		
67	22	07#4B25- SSI	SSI	黑色 土器	有台輪		11.8			石・長・チャ ・白	浅黄褐色 10YR 8/3	1回外観タキメ、内面あて 貝瓶		2/36
68	22	07#SS1-#a +No36-#b +SSI	SSI	頸忠器	甌					石・長	灰 5Y 6/1	外観タキメ、内面あて 貝瓶		

別 表

角地田遺跡 土器觀察表(3)

報告書No.	国版 書No. (桝印)	注記No.	出土地點	種別	器種	分類 (類)	法量(cm)			勘定	調整等の所見	回転 方向	口縁部 造存半	備考
							口径	底径	器高					
69	22	07#SS1-N65	SS1	頸忠器	甕					石・長・白	灰	外観タキメ、内面あて 具痕		
70	22	07#9B66- SD11-1層	SD11	土師器	小甕	II a	10.8	6.2	3.0	石・長・チャ ・雲・薄	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36
71	22	07#9B66- SD11-1層	SD11	土師器	小甕	II	10.4	5.6	2.4	石・長・チャ	灰黃	ロクロナデ、底部糸切り		4/36
72	22	07#9B66- SD11-1層	SD11	土師器	小甕	II a	10.6	5.9	2.7	石・長	25Y 7/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36
73	22	07#9B66- SD11-1層	SD11	土師器	有台碗				7.2	石・チャ・薄	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36
74	22	07#9B11- SD11-1層	SD11	黑色 土器	無台碗				6.0	石・長	浅黄褐色 10YR 8/3	内面ミガキ、その他ロク ナデ		
75	22	07#9B17- SD12-1層	SD12	土師器	無台碗		9.4	4.8	2.3	石・長・薄	に赤い黄褐色 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		4/36
76	22	07#9B12- SD12	SD12	頸忠器	甕					石・長・チャ	灰 N 6-0	外観タキメ、内面あて 具痕		
77	22	07#9B12- SD14	SD14	土師器	無台碗			4.6		石・薄	浅黄褐色 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	
78	22	07#SD14	SD14	土師器	有台碗		22.0			石・長・チャ ・砂	灰褐色 7.5YR 8/2	ロクロナデ		3/36
79	22	07#9B12- SD14-1層	SD14	土師器	甕	II	17.0			石・長・雲 ・砂	に赤い黄褐色 10YR 7/3	ロクロナデ		3/36
80	22	07#9B17- SD14	SD14	頸忠器	甕					石・長	灰 5Y 5-1	外観タキメ、内面あて 具痕		
81	22	07#SD702	SD15(SD702)	土師器	小甕	II a	10.6	5.2	2.7	石・長・チャ	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	8/36
82	22	07#SD15-Na	SD15	土師器	小甕	II a	10.0	5.8	2.7	石・長・チャ	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36
83	22	07#SD702	SD15(SD702)	土師器	小甕	II b'	9.6	3.6	3.7	石・長・チャ ・雲・砂	に赤い黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36
84	22	07#7B15- SD15-1層+ 8B11-SD15	SD15	土師器	無台碗	V	13.2	6.2	3.4	石・長・チャ ・雲・砂	に赤い黄褐色 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36
85	22	07#7B15- SD15	SD15	土師器	有台碗		8.3			石・長	5YR 8/4	ロクロナデ		
86	22	07#8B20- SD248-1層+ 8C9-SD15	SD15 (SD248)	頸忠器	無台碗				6.3	石・長・チャ ・雲・砂	灰 N 6-0	ロクロナデ、底部ヘラ切 り	右	底水小泊
87	23	07#SD221	SD221	土師器	無台碗			6.0		石・長・チャ ・雲・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	
88	23	07#TB22- SD321	SD321	頸忠器	無台碗	I	10.0			石・長	灰 N 6-0	ロクロナデ		5/36
89	23	07#SD321- Na3	SD321	土師器	無台碗	II a	13.2	4.6	4.1	石・長・チャ ・雲・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	12/36
90	23	07#SD321- Na9	SD321	頸忠器	甕					石・長	灰 N 6-0	外観タキメ、内面あて 具痕		内面灰化物 付着
91	23	07#7B17- SD322	SD322	土師器	無台碗	I	13.1	5.5	3.7	石・長・チャ ・雲・砂	相 7.5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り	右	8/36
92	23	07#7B17- SD322+	SD322	土師器	無台碗	I	13.1	5.8	4.2	石・長・チャ ・雲・骨・砂	に赤い黄褐色 10YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	13/36
93	23	07#7B17- SD322-3m+ SD322-No8	SD322	土師器	無台碗	II b	14.0	7.4	3.9	石・長・チャ ・雲・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36
94	23	07#7B17- SD322-3m+ SD322-No3 -18	SD322	土師器	無台碗	II c	16.9	7.8	6.0	石・長・チャ ・雲・砂	浅黄褐色 10YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	24/36
95	23	07#7B17- SD322	SD322	土師器	無台碗		13.2			石・チャ・雲 ・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ		墨書き「口」
96	23	07#SD322- No15	SD322	土師器	無台碗					石・チャ・雲 ・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ		墨書き「得」
97	23	07#7B17- SD322+	SD322	土師器	無台碗	II a	13.0	6.4	3.7	石・長・チャ ・雲	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36
98	23	07#7B17- SD322	SD322	頸忠器	長頭瓶		15.8			石・長・チャ	5YR 1	ロクロナデ		5/36
99	23	07#SD323- Na10 + 7B13- SD323	SD323	土師器	無台碗		10.8			石・長・チャ	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ		6/36
100	23	07#7B14- SD323-上層	SD323	土師器	無台碗			5.2		石・長・チャ ・砂	に赤い相 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り		

角地田遺跡 土器觀察表(4)

報告書No.	回収数 (件数)	注記No.	出土位置	種別	器種	分類 (種)	法量(cm) 口径 底径 器高	勘定 含有物	色調	調整等の所見	回収方角	口縁部 進存半	備考	
101 23	07#SD523- Nal+ Ne2	SD523	土師器	鍋	II	38.5	石・長・チ ・サ・砂	にぶい橙 7.5VR 7/3	外画面クロナデ→タタキ メ→ケズリ、内画面クロ ナデ→具痕・ケズリ	5/36				
102 23	07#SD523- S10523	SD523	須恵器	甌			石・長	灰	外画面タタキメ、内面あて 具痕					
103 23	07#SD548- SX548	SK548	土師器	無台碗		12.8	石・チ・サ・墨 ・砂	にぶい橙 7.5VR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36			
104 23	07#SD548	SK548	須恵器	有台杯	II	7.4	石・長	灰	ロクロナデ、底部糸切り	左				
105 23	07#SD554	SD554	土師器	小椀	Ia	11.2	4.7	3.3 石・長・チ ・サ・砂	10YR 8/3 浅黄橙	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36		
106 23	07#SD554	SD554	土師器	小椀	Ia	10.5	4.8	3.3 石・長・チ ・サ・砂	10YR 8/3 浅黄橙	ロクロナデ、底部糸切り	右	14/36		
107 23	07#SD558	SD554	土師器	小椀	Ia	10.9	4.1	3.5 石・長・チ ・サ・砂	10YR 8/3 浅黄橙	ロクロナデ、底部糸切り	右	19/36		
108 23	07#SD571- S10571	SD571	土師器	無台碗		5.0	石・長	灰	ロクロナデ、底部糸切り	右				
109 23	07#SD571- S10571 6022+SD573	SD571 (SD573)	土師器	有台碗		14.5	7.6	5.0 石・長・チ ・サ・砂	淡黄 2.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	1/36		
110 23	07#SD576- S10576	SD576	土師器	無台碗		13.0		石・チ・サ・墨 ・砂	にぶい橙 8YR 7/4	ロクロナデ		2/36	墨書き原々 得ノ	
111 23	07#SD576	SD576	土師器	無台碗		5.2		石・チ・サ・墨 ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右			
112 23	07#SD576	SD576	土師器	鉢		38.0		石・長・チ ・サ・砂	にぶい黄 10YR 7/3	ロクロナデ		1/36		
113 24	07#SB12- SD576	SD576	須恵器	甌				石・長	灰	外画面タタキメ、内面あて 具痕				
114 24	07#SB25- 6036+SD571	SD575(S10571)	土師器	無台碗		13.4		石・長・チ ・砂	にぶい橙 7.5VR 7/4	ロクロナデ		4/36		
115 24	07#SB25- SD575	SD575	土師器	無台碗		5.2		石・長・チ ・砂	灰白 10YR 8/2	ロクロナデ、底部糸切り	左			
116 24	07#SB25- SD575	SD575	土師器	鍋		34.2		石・長・チ ・砂	灰黄 10YR 5/2	ロクロナデ		2/36		
117 24	07#SD646	SD646	土師器	無台碗		12.6		石・長・チ ・砂・墨	にぶい黄 10YR 7/3	ロクロナデ		6/36	墨書き原」	
118 24	07#SD650	SD650	土師器	有台碗				石・長・チ ・砂・墨	にぶい橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ				
119 24	07#SD660	SD660	土師器	小椀	I b	10.3	5.2	3.3 石・チ・サ・砂	5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り	右	14/36		
120 24	07#SD697- Nal	SD697	土師器	小椀	I b	10.7	4.8	3.0 石・長・チ ・砂	7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36		
121 24	07#SD699- Nal+ Ne17+ Nal8+ SK698 (SD699, S10596)	SD697	土師器	小椀	I b	10.6	4.6	3.4 石・チ・サ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36		
122 24	07#SD697- SD697	SD697	土師器	鍋				石・長・チ ・砂	にぶい橙 7.5VR 7/3	外画面タタキメ、内面あて 具痕				
123 24	07#SD699- (SD699)	SD697	土師器	小椀	I b	10.7	5.5	3.2 石・長・チ ・砂	浅黄橙 7.5VR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36		
124 24	07#SD697- Nal	SD697	土師器	有台碗		7.0		石・長・チ ・砂	浅黄橙 7.5VR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ				
125 24	07#SD699- Nal+ Ne6+ Na 7+ Ne19 (SD699)	SD697	土師器	有台碗		6.6		石・長・チ ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ				
126 24	07#SD715	SD715	土師器	無台碗		10.8		石・長・チ ・砂	浅黄橙 10YR 8/3	ロクロナデ		6/36		
127 24	07#SD715	SD715	土師器	無台碗		5.8		石・長・チ ・砂	にぶい橙 7.5VR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右			
128 24	07#SD715	SD715	土師器	有台碗		13.6		石・長・砂	にぶい黄 10YR 7/3	ロクロナデ		6/36		
129 24	07#SD715	SD715	土師器	有台碗		7.5		石・長・チ ・砂	にぶい橙 7.5VR 7/4	ロクロナデ			内・外画面 化物付着	
130 24	07#GC14- SD729	SD729	須恵器	無台杯		15.0		石・長	灰 N 6-0	ロクロナデ		3/36		
131 24	07#SD729- Nal	SD729	土師器	無台碗		5.2		石・チ・サ・砂	にぶい橙 7.5VR 6-3	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ				
132 24	07#7C1- SD729	SD729	須恵器	長頭瓶	I			石・長	灰 N 5-0	ロクロナデ				
133 24	07#SD803- Nal	SD803	土師器	小椀	I b	10.5	4.6	3.4 石・長・チ ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	33/36		
134 24	07#SD803- Nal2	SD803	土師器	小椀	I b	10.9	5.2	4.0 石・長・チ ・砂	浅黄橙 7.5VR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	35/36		
135 24	07#SD803- Nal25	SD803	土師器	無台碗	N	13.0	6.8	3.7 石・長・チ ・砂	にぶい橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	36/36		

角田遺跡 土器觀察表(5)

報告 書No.	国版 書No.	注記No.	出土地點	種別	器種	分類 (種)	法量(cm) (口径 底径 器高)	勘定 含有物	色調	調整等の所見		回収 方向	回収 部位	備考
										右	左			
136	24	07#7SD853- No13+6B25- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪	IIa	127 56 35 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	8/36		
137	24	07#7SD853- No26+6C16- SD853	SD853	土師器	無台輪	IIb	138 6.0 43 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	17/36		
138	24	07#7SD853- No24+7B17- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪	IIa	129 4.8 45 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	20/36		
139	24	07#カクタ- 6C9-SD853- 1層+7B12- SD853+上層- 7B16- SD853+上層- 7B17- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪	IIa	120 5.6 44 -φ	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	5/36		
140	24	07#7TB16- SD853+上層+ 7B17-S0322	SD853	土師器	無台輪	IIa	126 57 42 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36		
141	25	07#7TB17- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪	IIa	130 5.8 35 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	1/36		
142	25	07#7SD853- No23+7B18- SD853	SD853	土師器	無台輪	IIa	132 5.4 38 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	18/36		
143	25	07#7- 6C9-SD853- 1層	SD853	土師器	無台輪	IIb	140 6.8 41 -φ	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	2/36		
144	25	07#76C9- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪	IIb	139 6.0 41 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	23/36		
145	25	07#7SD853- No3+N4+ 1層+6C3- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪	IV	130 5.9 35 -φ	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	18/36		
146	25	07#78B1- SD853	SD853	土師器	無台輪	V	132 6.5 36 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36		
147	25	07#796C7- SD853	SD853	土師器	無台輪	IIa	122 4.3 36 -φ	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36		
148	25	07#796C8- SD853+6C8- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪	IV	126 5.8 32 -φ	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36		
149	25	07#7TB12- SD853	SD853	土師器	無台輪	IV	132 6.1 37 -φ	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	6/36		
150	25	07#7TB16- SD853+上層+ 7B12+SD853	SD853	土師器	無台輪	IIa	134 5.8 39 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 7.5YR 8/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	2/36	墨書き 「E」	
151	25	07#7SD853- No11	SD853	土師器	無台輪	IIa	130 5.2 38 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	11/36		
152	25	07#7TB17- SD853+上層	SD853	土師器	無台輪		18.2 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 7.5YR 7/4	ロクロナデ		5/36		
153	25	07#7TB15- SD853	SD853	土師器	小挽	Ib	115 4.2 31 -φ	石・長	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36		
154	25	07#796C7- SD853+ 6C12+VI層	SD853	土師器	無台輪		5.3	石・長	浅黃褐色 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	墨書き 「続く しくは唐唐 など。」		
155	25	07#76C9- SD853+ 下層	SD853	土師器	無台輪		11.8	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 5YR 7/4	ロクロナデ		3/36	墨書き 「千」	
156	25	07#798A21- SD853	SD853	土師器	無台輪		13.0	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 7.5YR 7/4	ロクロナデ		1/36	墨書き 「[S.]」	
157	25	07#76C16- SD853	SD853	土師器	無台輪		10.8 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 10YR 8/3	ロクロナデ		墨書き 「留」		
158	25	07#7TB17- SD853+上層	SD853	黑色 土器	無台輪		6.4	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 10YR 7/3	ロクロナデ、底部糸切り、その他のロクロナデ	右			
159	25	07#7SD853- No28	SD853	黑色 土器	無台輪		6.4	石・長・チャ -砂	に赤い・橙 7.5YR 7/3	内面 ミガキ、その他のロクロナデ、底部糸切り	右			
160	25	07#7SD853- No14 ~ 7B11+SD853+ 7B12+SD853+ 6B15-V層+ 6C7+7B16(重層)	SD853	土師器	鉢		27.0 12.0 16.2 -φ	石・長・チャ -砂	浅黃褐色 7.5YR 8/3	外側面ケズリ+ロクロケズリ、内面ミガキ、底部ナデ、その他のロクロナデ		10/36		
161	25	07#7TB13- SD853+上層	SD853	土師器	鍋			石・長・チャ	黒闇 10YR 3/1	外側タキメ、内面あて 具柄				

角地田遺跡 土器觀察表(6)

報告書No. (件目)	国版 注記No.	出土土地 (件目)	種別	器種	分類 (種)	法量(cm)		勘定		調整等の所見	回転 方向	口縁部 進存半	備考		
						口径	底径	器高	含有物	色調					
162	25	07#*6C12- SD853-下層	SD853	土器器	鍋				石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 6-3	外観タキメ、内面あて 具痕				
163	25	07#*7B16- SD853-上層	SD853	土器器	鍋	II a	36.0		石・長・チャ ・砂	に赤い長粒 10YR 7-3	ロクロナデ	2/36			
164	25	07#*7B11- SD853	SD853	土器器	鍋	II b	34.8		石・長・チャ ・砂	根 5YR 7-6	ロクロナデ	3/36			
165	26	07#*6C9- SD853-Nel + 6C8-SD853	SD853	須志器	瓦耳瓶		15.2	10.0	28.7	石・長・白	N 6-0	ロクロナデ	15/36		
166	26	07#*SD52- Nel + SD2 + SD616 + SD853-Nel + 6C8-SD853 上層 他	SD853	須志器	甕	I	45.2		石・長	灰 N 4-0	胸部外観タキメ、内面 あて具痕。その他のロク ナデ	6/36			
167	26	07#*7B5- SD853	SD853	聚塊 土器			26.0		石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 6-3	内・外面輪縁痕	1/36			
168	26	07#*7B5- SD853	SD853	聚塊 土器			32.0		石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 7-4	内・外面輪縁痕	2/36			
169	26	07#*11B4- SX3-1M + 11B4- V型	SX3	土器器	無台桙	II a	11.9	5.3	4.0	石・長・チャ ・黄砂	に赤い粒 5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	4/36	
170	26	07#*11B4- SX3-1M	SX3	土器器	長甕	I	24.2		石・長・チャ ・砂	淡褐 5YR 8/3	ロクロナデ	6/36			
171	26	07#*11B4- SX3-1M	SX3	土器器	長甕				石・チャ・墨	に赤い黄砂 10YR 7/3	ロクロナデ、内面あて 具痕				
172	26	07#*11B4- SX3-1M	SX3	須志器	長瓶	I			石・長	灰 N 5-0	ロクロナデ				
173	26	07#*11B4- SX3	SX3	須志器	甕	I	38.0		石・長・白 ・墨	灰白 5Y 7-1	ロクロナデ	1/36			
174	26	07#*11B4- SX3-1M	SX3	土器器	長甕				石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 7/4	外観タキメ、内面あて 具痕				
175	26	07#*8B4- Nel-S1	SX18	土器器	小甕	II a	10.1	4.5	2.8	石・長・チャ ・砂	に赤い黄砂 10YR 7/3	ロクロナデ、底部希切り	右	26/36	
176	26	07#*8B3- Nel	SX18	土器器	小甕	II	9.5	4.7	2.9	石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	12/36	
177	26	07#*8B3- Nel	SX18	土器器	小甕	II	10.0	5.1	2.8	石・長・チャ ・砂	に赤い黄砂 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り	右	9/36	
178	26	07#*8B4- Nel	SX18	土器器	小甕	I b	10.8	5.0	3.4	石・長・チャ ・砂	浅黃砂 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り	右	9/36	
179	26	07#*8B4- Nel	SX18	土器器	小甕	II a	10.3	4.7	2.8	石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り		10/36	
180	26	07#*8B4- Nel	SX18	土器器	小甕	I b'	9.8	5.1	2.6	石・長・チャ ・砂	浅黃砂 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り	右	6/36	
181	26	07#*8B3- Nel	SX18	土器器	有台桙		12.6			石・長・チャ ・砂	に赤い粒 5YR 7/4	ロクロナデ	4/36		
182	26	07#*8B3- Nel-11	SX18	黑色 土器	無台桙		14.6			石・長・チャ ・墨砂	に赤い黄砂 10YR 7/3	L層外側ミガキ、内面ミ ガキ、その他のロクロナデ	4/36		
183	26	07#*8B4- Nel-S1	SX18	黑色 土器	有台桙		8.2			石・長	灰白 10YR 8/3	内面ミガキ、底部希切り →ロクロナデ、その他の ロクロナデ	右		
184	27	07#*8B4- Nel-S6	SX17	土器器	有台桙		13.2	7.8	5.0	石・長・砂 ・墨	浅黃砂 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り →ロクロナデ	8/36		
185	27	07#*4C19- SX647	SX647	須志器	無台桙	II		6.2		石・長・チャ ・砂	灰 N 6-0	ロクロナデ、底部希切り	右		
186	27	07#*4C13- SX647	SX647	須志器	瓢箪			7.8		石・長・チャ ・砂	灰白 5Y 7-1	ロクロナデ、底部希切り			
187	27	07#*4B13- SX647	SX647	土器器	鍋	I	31.4			石・長・チャ ・砂	に赤い粒 5YR 7/4	胸面タキメ、その他の ロクロナデ	3/36		
188	27	07#*SD104- Nel-1-S62	SX104	須志器	無台桙	I b	11.4	6.1	3.0	石・長	灰 N 6-0	ロクロナデ、底部ハラ切り	右	16/36	
189	27	07#*P121	P121	土器器	小甕	I b	10.5	4.1	3.3	石・チャ・砂	に赤い粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	9/36	
190	27	07#*P163	P163	土器器	小甕	I b	10.8	5.2	4.0	石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	5/36	
191	27	07#*P214	P214	土器器	小甕	I b	10.3	4.2	3.0	石・長・チャ ・砂	浅黃砂 10YR 8/3	ロクロナデ、底部希切り	右	5/36	
192	27	07#*P256	P256	土器器	小甕	I b	10.9	5.1	3.6	石・長・チャ ・砂	に赤い粒 5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	14/36	
193	27	07#*P256	P256	土器器	鉢		18.3	9.0	5.5	石・長・白	浅黃砂 2.5YR 7/4	浅黃砂	5/36		
194	27	07#*P319	P319	土器器	小甕	II b	8.8	4.8	3.2	石・長・チャ ・砂	灰白 2.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	12/36	
195	27	07#*8B4- P330	P330	土器器	小甕	II a	9.8	4.4	2.2	石・長・チャ ・砂	に赤い粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部希切り	右	12/36	

角地田遺跡 土器觀察表(7)

報告書No.	出版年(邦国)	注記No.	出土地點	種別	器種	分類(類)	法量(cm) 口径 底径 器高	含有物	貯土:	調整等の所見	回転方向	回復部 進存半	備考
口径	底径	器高	色調										
196	27	07#P512	P512	土師器	小瓶	I b'	9.8 4.4 3.3	石・長・チヤ -砂	灰黃 25Y 7/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
197	27	07#P512	P512	土師器	小瓶	I b	10.3 4.6 3.3	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り		5/36	
198	27	07#P519	P519	土師器	小瓶	I b	10.9 4.9 3.4	石・チヤ・砂	灰 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	17/36	
199	27	07#P519	P519	土師器	小瓶	II a	10.6 6.0 2.4	石・長・砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
200	27	07#P519	P519	土師器	小瓶	I	11.1 5.9 2.8	石・長・チヤ -砂	灰黃 7.5Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り		7/36	
201	27	07#P519	P519	土師器	有台碗		7.5	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ			
202	27	07#P519	P519	製塩器			45.8	石・長・チヤ -砂	灰 7.5Y R 8/3	外輪輪積灰		1/36	
203	27	07#P624+ P624-Na1	P624	土師器	小瓶	I b	11.4 4.7 3.7	石・長・チヤ -砂	灰黃 7.5Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	10/36	
204	27	07#P622-Na 1+Na2	P622	土師器	小瓶	I b	10.3 4.8 3.3	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	7/36	
205	27	07#P622	P622	土師器	小瓶	I	10.5 4.6 2.3	石・長・チヤ -砂	灰黃 2.5Y 6/2	ロクロナデ、底部糸切り		1/36	
206	27	07#P622-Na 5+Na6	P622	土師器	有台碗		14.7 6.8 4.7	石・長・チヤ -砂	灰 7.5Y R 7/3 ナデ	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36	
207	27	07#P629-Na	P629	土師器	小瓶	I b	10.6 4.5 2.8	石・長・チヤ -砂	灰 7.5Y 6/1	ロクロナデ、底部糸切り	右	4/36	
208	27	07#P629+ P629-Na2	P629	土師器	小瓶	I b	10.0 5.2 3.4	石・長・チヤ -砂	灰 10Y 5/1	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36	
209	27	07#P629-Na1+Na 2	P629	土師器	小瓶	I b	11.0 5.0 3.2	石・長・チヤ -砂	灰 10Y 7/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	9/36	
210	27	07#P1002	P827	土師器	無台碗	VI	12.3 5.9 3.9	石・長・チヤ -砂	灰 10Y 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	14/36	
211	27	07#P1002	P827	土師器	鉢		36.6	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y 6/2	ロクロナデ		3/36	内・外輪輪 物付帯
212	28	07#P562	包含層	土師器	小瓶	II b	8.7 3.7 2.1	石・長・チヤ -砂	灰 7.5Y R 7/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	21/36	
213	28	07#H9A21- Vc層	包含層	土師器	小瓶	II a	9.4 4.5 2.3	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り		6/36	
214	28	07#H7R3	包含層	土師器	小瓶	II a	10.2 5.2 2.6	石・長・チヤ -砂	灰 10Y R 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	18/36	
215	28	07#H1C1- Vc層	包含層	土師器	小瓶	I b	9.4 3.8 2.9	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y 6/3	ロクロナデ、底部糸切り	左	4/36	
216	28	07#H5B- Vc層	包含層	土師器	小瓶	I	10.8 6.0 2.4	石・長・チヤ -砂	灰 7.5Y R 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		18/36	
217	28	07#H8B1-5a1	包含層	土師器	小瓶	I	11.2 4.4 2.8	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	23/36	
218	28	07#H5C6-5a1	包含層	土師器	小瓶	I b	10.6 5.2 3.2	石・長・チヤ -砂	灰 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右	28/36	
219	28	07#H6M-巨層	包含層	土師器	無台碗	IV	12.0 4.8 3.4	石・長・チヤ -砂	灰黃 7.5Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	13/36	
220	28	07#H7B-1a1	包含層	土師器	無台碗	II a	11.7 7.6 3.8	石・長・チヤ -砂	灰黃 7.5Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	23/36	
221	28	07#H5A23	包含層	土師器	無台碗	II a	13.4 6.0 3.9	石・長・チヤ -砂	灰 7.5Y R 7/3	ロクロナデ、底部糸切り		5/36	
222	28	07#H6325	包含層	土師器	無台碗	II b	13.8 6.4 3.8	石・長・チヤ -砂	灰 10Y R 8/2	ロクロナデ、底部糸切り	右	6/36	
223	28	07#H6C3-見跡	包含層	土師器	無台碗	II b	16.4 6.8 7.0	石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右	3/36	黒書「絵も しくは落書 など」
224	28	07#H5C8-Vc層	包含層	土師器	無台碗		14.8	石・長・チヤ -砂	灰黃 7.5Y R 8/3	ロクロナデ		1/36	「絵」
225	28	07#H6B17-U層	包含層	土師器	無台碗			石・長・チヤ -砂	灰黃 10Y R 8/3	ロクロナデ			黒書「絵」
226	28	07#H6B20- Vc層	包含層	土師器	無台碗			石・長・チヤ -砂	灰 7.5Y R 7/3	ロクロナデ			黒書「絵」
227	28	07#H7C2-Vc層	包含層	土師器	無台碗		5.4	石・長・チヤ -砂	灰黃 7.5Y R 8/3	ロクロナデ、底部糸切り	右		黒書 「絵」
228	28	07#H4A	包含層	土師器	無台碗		5.8	石・長・チヤ -砂	灰黃 7.5Y R 8/3	ロクロナデ			黒書 「絵」
229	28	07#H4C	包含層	土師器	無台碗		5.4	石・長・チヤ -砂	灰 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り			黒書 「絵」
230	28	07#H5B23- Vc層	包含層	土師器	無台碗		5.6	石・チヤ・砂	樹 5YR 7/6	ロクロナデ、底部糸切り			黒書 「絵」
231	28	07#H4B20- Vc層	包含層	土師器	有台碗			石・長・チヤ -砂	灰 10Y R 7/2	ロクロナデ			黒書 「絵」

角地田遺跡 土器觀察表(8)

報告書No.	国版 書No.	注記No.	出土土地点	種別	器種	分類 (種)	法量(cm) (口径 底径 器高)	勘定 含有物	色調	調整等の所見		回収 方向	口縁部 進存半	備考
										横	縦			
232	28	07#7#6A23- 6A22	包含層	土師器	有台輪	15.8	9.0	6.0	石・長・チエ ・砂	にぶい粒 5YR 7/4	ロクロナデ、底部ロクロ ナデ		27/36	
233	28	07#7#5C1-Vc #5C0-Vc層	包含層	土師器	有台輪	15.2	8.4	5.4	石・長・チエ ・砂	浅黄褐色 7.5YR 8/3	ロクロナデ、底部ロクロ ナデ		2/36	
234	28	07#7#6C6-Vc #6C7-Vc層	包含層	土師器	有台輪 I	12.8	6.7	3.8	石・長・チエ	にぶい粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り →ロクロナデ	右	16/36	
235	28	07#7#9C13- Vc層	包含層	土師器	有台輪 II	11.9			石・長・チエ	にぶい粒 7.5YR 7/3	ロクロナデ		6/36	
236	28	07#7#	包含層	土師器	圓	16.6			石・長・チエ ・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	ロクロナデ		3/36	
237	28	07#7#6A	包含層	頸忠器	無台輪 Ia	13.8	8.0	3.1	石・長	灰 N 6-0	ロクロナデ、底部ヘラ切り		2/36	
238	28	07#7#11B1- Vc層	包含層	頸忠器	無台輪 Ib	12.2	7.0	2.8	石・長	灰 N 6-0	ロクロナデ、底部ヘラ切り		3/36	墨書き印+, 内面墨付
239	28	07#7#6A23-VI #6D14-Vc層 #6D15-Vc層	包含層	頸忠器	無台輪 II		6.6		石・長	灰 N 6-0	ロクロナデ、底部糸切り	右		
240	28	07#7#3D-Vc層 #6A24-Vc層 #7A21-Vc層 #7A22-Vc層	包含層	頸忠器	有台輪 I		9.5		石・長・チエ	灰 5Y 5/1	ロクロナデ、底部ヘラ切り	右		
241	28	07#7#6C15-Vc #7C3-Vc層	包含層	頸忠器	有台輪 II		6.2		石・長	灰 N 6-0	ロクロナデ、底部糸切り	右		
242	28	07#7#8C10- Vc層	包含層	頸忠器	杯蓋	15.9			石・長・チエ ・塵	灰 N 6-0	天井部ロクロケズリ。 その他のロクロナデ		4/36	
243	28	07#7#6B8- Vc層	包含層	縁輪	楓				石・長	(動土) 灰 N 6-0	ロクロナデ			内・外面上 縁輪
244	28	07#7#6B19- Vc層	包含層	灰輪	有台輪		15.0		石・長	灰白 N 7-0	ロクロナデ		3/36	口縁内面沈 墨
245	28	07#7#10C14- Vc層	包含層	灰輪	段皿	10.0			石・長	灰白 5Y 8/1	ロクロナデ		1/36	内・外面部 墨ハゲ
246	28	07#7#4B5- Vc層	包含層	灰輪	有台輪		7.6		石・長	灰白 N 8-0	ロクロナデ、底部ロクロ ケズリ	右		内面墨付
247	28	07#7#6B15- 7B11	包含層	黑色 土器	無台輪		7.0		石・長	にぶい粒 10YR 7/2	内面ミガキ、底部糸切 り、その他のロクロナデ	右		
248	28	07#7#7B18- Vc層	包含層	黑色 土器	無台輪		6.6		石・長・チエ	脚下部ロクロケズリ、内 面ミガキ、その他のロクロ ナデ				
249	28	07#7#5A23- SD673	包含層	黑色 土器	無台輪		5.0		石・長・チエ	5YR 8/4	内面ミガキ、底部糸切 り、その他のロクロナデ	右		
250	28	07#7#5B4- Vc層	包含層	黑色 土器	有台輪		6.4		石・長・チエ	浅黄褐色 10YR 8/3	内面ミガキ、底部糸切 り→ロクロナデ、その他の ロクロナデ	右		
251	28	07#7#5C18- Vc層	包含層	画面黒 色土器	有台輪	11.6	5.6	2.4	石・長・チエ ・砂	黑 N 2-0	内・外面部ミガキ		8/36	内・外面部 直痕
252	28	07#7#6A22	包含層	土師器	躰		10.4		石・長・チエ ・砂	にぶい粒 5YR 7/4	ロクロナデ、底部糸切り	右		
253	29	07#7#4C20	包含層	土師器	長甕	III	21.0		石・長・チエ ・砂	12.5-13 7.5YR 7/4	ロクロナデ		1/36	
254	29	07#7#12B	包含層	土師器	長甕	II	24.6		石・長・チエ	にぶい粒 10YR 7/3	ロクロナデ		4/36	
255	29	07#7#11B13- Vc層	包含層	土師器	長甕	II	24.0		石・長・チエ ・砂	にぶい粒 7.5YR 8/3	ロクロナデ		3/36	
256	29	07#7#11B4	包含層	土師器	長甕	I	23.4		石・チエ ・砂	にぶい粒 7.5YR 7/3	ロクロナデ		4/36	
257	29	07#7#11B14- Vc層	包含層	土師器	長甕				石・長・チエ ・砂	にぶい粒 7.5YR 7/3	外側タタキメ、内面あ て月根→ハマメ			
258	29	07#7#11B22	包含層	土師器	長甕				石・長・チエ ・砂	にぶい粒 7.5YR 7/3	外側タタキメ、内面あ て月根			
259	29	07#7#11B5	包含層	土師器	小甕		11.5		石・長・チエ ・砂	浅黄褐色 2.5YR 7/4	ロクロナデ		3/36	
260	29	07#7#5B20- VI層	包含層	土師器	小甕		14.2		石・長・チエ ・砂	にぶい粒 10YR 7/3	ロクロナデ		1/36	
261	29	07#7#11B5- Vc層	包含層	土師器	楓	I	35.0		石・長・チエ ・砂	にぶい粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ		2/36	
262	29	07#7#4B20- Vc層	包含層	土師器	楓	I	33.6		石・長・チエ ・砂	にぶい粒 7.5YR 7/4	ロクロナデ		2/36	
263	29	07#7#5A21- VI層	包含層	土師器	楓	I	36.4		石・長・チエ ・砂	浅黄褐色 10YR 8/3	脚外側カタメ、その他の ロクロナデ		2/36	
264	29	07#7#12B6- Vc層	包含層	土師器	楓	IIa	35.6		石・長・チエ ・砂	にぶい粒 7.5YR 7/3	ロクロナデ		3/36	
265	29	07#7#8C2-U1層	包含層	土師器	楓	I	40.4		石・長・チエ ・砂	灰黃褐色 10YR 6/2	脚外側カタメ→タタキ メ、口縁内面カタメ、そ の他のロクロナデ		2/36	

別 表

角地田遺跡 土器觀察表(9)

報告 書No.	図版 (伴圖)	注記No.	出土土地 (伴圖)	種別	器種	分類 (種)	法量(cm)		勘定		調整等の所見	回転 方向	口縁部 進存部	備考
							口径	底径	器高	含有物	色調			
266	29	07#91917-Vc型 +8011-Vc型 +9013-Vc型	混合層	土師器	鍋					石・長・チャ ・砂	にぶい橙 7.3YR 7/4	外縁タクミ、内面あ り		
267	29	07#917A	混合層	上脚器	鍋					石・長・チャ ・黒・砂	にぶい橙 5YR 7/4	外縁クロロナデ→タク ミ、内面あり具痕		
268	30	07#9839-Va 型+8017-Vc型	混合層	須志器	長頸瓶	I	19.6			石・長	灰 N 4/0	ロクロナデ	8/36	
269	30	07#91911-Vc 型+9017-Vc型 +9012-Vc型	混合層	須志器	長頸瓶	I				石・長	灰 N 5/0	ロクロナデ		
270	30	07#95C10-V 型	混合層	須志器	長頸瓶	II				石・長	灰白 N 7/0	ロクロナデ		
271	30	07#9PS1-V 型+4020-Vc型 +4024-Vc型	混合層	須志器	子母長 頸瓶					石・長・塵	灰 N 5/0	ロクロナデ		
272	30	07#98A23-V c型	混合層	須志器	凸唇付 四耳壺					石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ		
273	30	07#92C14-V c型	混合層	須志器	甕	I	74.4			石・長・チャ ・塵	灰 N 6/0	ロクロナデ	2/36	口縁部外縁 に液状文
274	30	07#9SDP-53548 +S1054-S3 +5C9-Vc型+ 5037-Vc型+ 6037-Vc型+ 集	混合層	須志器	甕	I	28.2			石・長	灰 N 5/0	胸部外縁タクミ、胸部 内面あり具痕、その他 タクロナデ	5/36	
275	30	07#98D2-Vc 型+8015-Vc 型	混合層	須志器	甕	I	23.0			石・長	灰 N 6/0	胸部外縁タクミ、胸部 内面あり具痕、その他 タクロナデ	6/36	
276	30	07#9802-Vc 型+8A24	混合層	須志器	甕	I	62.4			石・長	灰 N 6/0	ロクロナデ	1/36	
277	30	07#98C2-Vc 型+9C7-Vc 型	混合層	須志器	甕	II	21.8			石・長・チャ	7.5YR 6/1	ロクロナデ	5/36	
278	30	07#97A22-V c型	混合層	須志器	瓶					石・長・砂	5Y 6/1	ロクロナデ		外縁に剥離
279	30	07#911B123- Vc型+11C7- Vc型	混合層	須志器	横瓶					石・長	灰オーリーブ 5Y 2/0	外縁カキメ、内面ロクロ ナデ		
280	30	07#95B11-V c型	混合層	灰釉	長頸瓶		30.2			石・長	灰白 N 7/0	ロクロナデ	2/36	内・外縁に 灰釉
281	30	07#97C12- Vc型+7C13- Vc型	混合層	製塩 土器			30.4			石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 6/2	外縁輪柱痕、内面磨毛済	1/36	
282	30	07#99C4- Vc型	混合層	製塩 土器			38.8			石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 5/3	内・外縁輪柱痕	1/36	
283	30	07#99C4- Vc型	混合層	製塩 土器						石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 5/2	内・外縁輪柱痕		
284	30	07#99C4-Vc 型+10B22	混合層	製塩 土器						石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 5/2	内・外縁輪柱痕		
285	30	07#99C4- Vc型	混合層	製塩 土器						石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 5/2	内・外縁輪柱痕		
286	30	07#911C8- Vc型	混合層	製塩 土器			14.0			石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 7.5YR 4/2	+		底部外縁移 付着
287	30	07#97C11- Vc型	混合層	製塩 土器			23.4			石・長・チャ ・砂	灰黄褐色 10YR 8/3	+		底部外縁移 付着
288	31	07#SR68+ 7B5-Vc型+ 7C5-Vc型+ 801-Vc型+ 803-Vc型+ 8011+205- 集	青磁 (磁器 窓系)	大碗	I期	17.8	6.9	6.5	長	灰白 N 7/0	内・外縁輪柱(オリーブ 灰白 23GY 6/1)		5/36	
289	31	07#96C3	混合層	白磁	碗	IV	16.4			灰白 N 8/0	内・外縁輪柱(灰白 10Y 8/1)		2/36	D期
290	31	07#9T1-Nel	混合層	白磁	皿	D群	10.7		長	灰白 2.5Y 8/2	内・外縁輪柱(灰白 2.5Y 8/2)		2/36	
291	31	07#98D16- Vc型	混合層	青磁 (蘆葉 窓系)	碗	I類2 加I 類4				灰白 2.5Y 7/1	内・外縁輪柱(灰白 2.5Y 6/2)			内面に月形 りによる文 様
292	31	07#95A22- Vc型	混合層	青磁	天目 茶碗	-	4.0		長	灰白 2.5Y 8/2	内・外縁輪柱(青磁 黑 10YR 2/1)			大常4期
293	31	07#95A22- Vc型	混合層	珠洲燒	片口鉢					灰 7.5YR 6/1	内・外縁輪柱、内 面剥離し日、内面に研磨痕			V期
294	31	07#988- Vc型	混合層	珠洲燒	甕			15.0		石・長・砂 7.5Y 6/1	外縁タクミ			1期
295	31	07#911区表	混合層	珠洲燒	甕					石・長・骨 砂 N 5/0	外縁タクミ			1期

角地田遺跡 土器観察表(10)

報告書名	図版番号(種別)	注記No.	出土土地点	種別	器種	分類(種)	法量(cm)			勘定	調整等の所見	回転方向	口縁部邊存半	備考
							長さ	幅	厚さ					
296	31	07#*4A23-Vc型	包含層	頸壺形	壺	T種				石・長	灰 N 4.0	外面タキメ		I期
297	31	07#*5C10+6B10-Vc型+7B25-Vc型	包含層	珠渦形	壺					石・長・チ ・骨	灰 N 4.0	外面タキメ		I期
298	31	07#*8B4-Vc型	包含層	珠渦形	壺					石・長・チ ・骨・理	灰 N 5.0	外面タキメ		I期

角地田遺跡 土製品観察表

報告書名	図版番号(種別)	注記No.	出土土地点	種類	法量(cm・g)					備考	
					長さ	幅	厚さ	孔径	重量		
299	31	07#*8D12-SD14-1層	SD14	管状土錐			4.9	2.0	1.3	36.1	
300	31	07#*SD023-Ne14+TB13-SD023	SD023	管状土錐	6.6	5.2	2.0	1.6	134.1	I期	
301	31	07#*SD023-Ne14+Ne15+Ne17+SD023	SD023	管状土錐	7.0	5.1	2.1	1.5	133.9	I期	
302	31	07#*SD023-Ne17+TB13-SD023	SD023	管状土錐	7.8	5.5	2.4	1.5	176.0	I期	
303	31	07#*SD023-Ne5+Ne7~9	SD023	管状土錐	8.2	5.1	2.0	1.6	165.1	I期	
304	31	07#*SD023-Ne1	SD023	管状土錐	8.5	5.2	2.2	1.4	122.7	I期	
305	31	07#*8B21-Vc型+8B21+TB16-Vc型+SC9	包含層	管状土錐	7.8	5.1	2.0	1.5	133.9	I期	
306	31	07#*8B21-Va型+9C10-Vc型+4B10-Vc型+B15	包含層	管状土錐	7.5	4.6	1.9	1.4	96.4	I期	
307	31	07#*6B12-Vc型	包含層	管状土錐	7.6	5.2	1.9	1.5	139.1	I期	
308	31	07#*7A22-Vc型	包含層	管状土錐	8.7	4.0	1.5	1.1	60.8	I期	
309	31	07#*11B14	包含層	管状土錐	5.8	4.9	1.5	2.0	66.8	Ⅱ期	
310	31	07#*6A24-Vc型	包含層	管状土錐	6.7	2.8	1.1	0.9	46.0	Ⅱ期	
311	31	07#*2C20	包含層	管状土錐	6.2	2.7	1.1	0.8	36.1	Ⅱ期	
312	31	07#*10B12-Vc型	包含層	管状土錐	5.0	2.1	0.6	0.9	18.3	V期	
313	31	07#*6A26-Vc型	包含層	管状土錐	4.8	1.7	0.7	0.6	13.3	V期	
314	31	07#*6B6-Vc型	包含層	管状土錐	4.6	1.8	0.7	0.5	11.2	V期	

角地田遺跡 鉄関連遺物観察表

報告書名	図版番号(種別)	注記No.	出土土地点	種類	法量(cm・g)					磁着反応	備考
					長さ	幅	厚さ	重量			
315	31	07#*SN56	包含層	橢形鍛冶溶	10.6	8.3	3.7	32.0	有	下面は鉄土の消滅面	
316	31	07#*GB11-Vc型	包含層	橢形鍛冶溶	6.2	6.9	3.1	8.7	有		

角地田遺跡 石器・石製品観察表

報告書名	図版番号(種別)	注記No.	出土土地点	器種	石材	法量(cm・g)					備考
						長さ	幅	厚さ	重量		
317	32	07#*SD022-Ne23	SD022	砾石	砂岩	25.8	12.1	7.6	338.0	A類	
318	32	07#*SS52-Ne18	SS2 (SD053)	砾石	砂岩	41.9	9.9	9.1	376.0	B類	
319	32	07#*SD056	SD076	砾石	砂岩	8.5	12.4	4.4	61.0	A類	
320	32	07#*5A25-Vc型	包含層	砾石	砂岩	15.0	16.8	7.5	2800.0	A類	
321	32	07#*3B13-Vc型	包含層	砾石	砂岩	17.3	9.2	4.1	980.0	A類	
322	32	07#*5C4-Vc型	包含層	砾石	砂岩	16.5	9.4	4.8	830.0	A類	

角地田遺跡 木製品観察表

報告書名	図版番号(種別)	注記No.	出土土地点	器種	木取	法量(cm・g)					製作痕跡等の所見	備考
						長さ	幅	厚さ	重量			
323	32	07#*7B24-Vc型	包含層	木板	板目	13.8	3.3	0.5			黒漆(背面)急き如律X」	
324	32	07#*7	包含層	箸	板目	11.5	0.7		0.5削りだし、上下端を欠損			
325	32	07#*5B5	包含層	漆器不明	板目	15.7	2.9		18	口ぞきの加工、工場が削化		
326	32	07#*SX23P234	差壓下駆(面)	板目		9.2	13.4		19	上面はぞきの加工		
327	32	07#*6B15-Vc型	包含層	柱軸	柱目	7.8	7.3		12	口ぞきが2孔、台の後曲付まで欠損		
328	32	07#*5B4-Vc型	包含層	楕圓	板目	3.3	4.0		1.1	黒色漆傷り、背が馬の背状となる		
329	32	07#*5C1-V型	包含層	織じ度			1.6					
330	32	07#*5C1-V型	包含層	織じ度			1.5					
331	33	07#*P667	P667	柱軸	芯外し	29.4	12.9		10.8	分割材、下端に加工痕		
332	33	07#*P668	P668	柱軸	芯外し	55.2	12.7		10.0	分割材、下端に加工痕		
333	33	07#*P609	P609	柱軸	芯外し	51.1	15.0		10.8	分割材、下端に加工痕		
334	33	07#*P638	P638	柱軸	芯外し	16.7	14.8		7.1	分割材		
335	33	07#*P605	P705	柱軸	芯外し	27.7	7.8		7.5	分割材、下端に加工痕		
336	33	07#*P643	P843	柱軸	芯外し	41.2	11.0		6.9	分割材、下端に加工痕		
337	33	07#*P613	P613	杭	芯外し	72.0	7.7		41	丸木、下端に加工痕		
338	33	07#*P618	P618	杭	芯外し	67.2	4.9		39	丸木、下端に加工痕		
339	33	07#*P623	P623	杭	芯外し	58.5	4.9		36	分割材、下端に加工痕		
340	33	07#*P624	P624	杭	芯外し	54.8	6.7		32	半丸木、下端に加工痕		
341	33	07#*P628	P628	杭	芯外し	67.9	7.2		32	半丸木、下端に加工痕		

別 表

平遺跡 土器類観察表

報告 書No. (辨別)	図版 No.	注記No.	出土地点	種別	器種	法量(cm)			黏土 含有物 色調	調整等の所見	回転 方向	口縁部 遺存率	備考
						口径	底径	高さ					
1	34	07-7-101区Ⅲa	延含縫	須志郡	杯型	122			石・雲・白 灰白 SYR 7/2	ロクロナデ		2/36	
2	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	須志郡	無台杯	119	6.9	32	石・雲・白 灰白 SYR 7/2	ロクロナデ	右	11/36	小沿面
3	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	須志郡	無台杯	114	6.0	29	石・雲・黒 灰白 N 6/0	ロクロナデ	左	3/36	小沿面
4	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	土師器	無台碗	124	6.0	41	石・雲・黒 灰白 SYR 7/2	ロクロナデ、底部差切り		5/36	
5	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	土師器	無台碗		54		石・長・雲 灰白 SYR 7/3	ロクロナデ			
6	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	須志郡	甕	27.0			輝・石 灰白 N 7/0	ロクロナデ		2/36	
7	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	須志郡	長颈瓶		7.5		石・輝 灰白 N 7/0	ロクロナデ、底部差切り	右		
8	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	土師器	甕	28.0			石・雲 灰白 SYR 7/3	ロクロナデ		1/36	
9	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	土師器	甕	23.0			雲・輝 灰白 SYR 7/2	ロクロナデ		2/36	
10	34	07-平102区Ⅲc Ⅲb	延含縫	土師器	甕	28.4			石・輝 SYR 6/3	ロクロナデ		2/36	古墳時代
13	34	07-平103区Ⅰb	攪乱	須志郡	甕				石 灰白 N 7/0	外面部子タタキ、内面 タタキ			
14	34	07-平103区Ⅱ	攪乱	須志郡	無台杯		6.0		石・輝 SYR 7/2	ロクロナデ、底部差切り			
15	34	07-平103区Ⅰb	攪乱	須志郡	縦器		4.8		灰白 N 8/0		右		伊万里燒模
16	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	土師器	無台碗	119	6.7	36	石・雲・黒 灰白 SYR 7/3	ロクロナデ、底部差切り		22/36	12C
17	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	須志郡	無台杯		9.0		石・雲 灰白 N 5/0	ロクロナデ			小沿面
18	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	須志郡	甕				石・雲・長 灰白 N 6/0	ロクロナデ			
19	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	須志郡	甕				石・長 灰白 N 6/0	ロクロナデ			
20	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	須志郡	甕	30.0			石・長・輝 SYR 7/2	ロクロナデ			3/36
21	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	須志郡	甕				石・長・輝 SYR 7/2	外面部子タタキ			
22	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	須志郡	甕				長 灰白 N 7/0	外面部子タタキ			
23	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	土師器	甕		6.4		石・長 灰白 SYR 7/3	ロクロナデ、底部差切り			中世
24	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	土師器	甕				石・長・輝 SYR 6/2	外面部子タタキ、内面 ハケメ			
25	34	07-平104区Ⅲc	延含縫	土師器	縦底土器	28.0			石・長・輝 SYR 7/4	外面部子タタキ			1/36
26	34	07-平104区Ⅲc	攪乱	陶器	甕	11.8			石・長 灰黄 SYR 7/3	ロクロナデ、内・外面部 差切り		4/36	越中廻 ^{16c} 本 輪
27	34	07-平104区Ⅱa	攪乱	陶器	甕		10.6		石・長・輝 灰黄 SYR 7/3	底部差切り、外面部 差切り			越中廻 ^{16c} 本 輪
28	34	07-平104区Ⅲa	攪乱	須志郡	甕		3.6		灰白 N 8/0		右		伊万里燒
29	34	07-平105区Ⅴ	延含縫	須志郡	杯	12.8			石 灰白 N 6/0	ロクロナデ		2/36	
30	34	07-平105区Ⅴ	延含縫	土師器	甕	30.0			石・長・輝 浅黄 SYR 7/3	ロクロナデ		2/36	
31	34	07-平105区Ⅴ	延含縫	土師器	甕		4.0		石・輝 SYR 6/3	ロクロナデ			古墳時代
32	34	07-平105区Ⅴ	延含縫	土師器	甕				長 灰白 SYR 7/4	内・外面部子タタキ			古墳時代
33	34	07-平105区Ⅴ	延含縫	土師器	甕				輝・石 灰白 SYR 6/2	内面部子タタキ、外面部 差切り			

平遺跡 木製品観察表

報告 書No. (辨別)	注記No.	出土地点	部種	木取引	法量(cm・g)			製作直路等の所見	備考
					長さ・幅 幅	厚さ・底径	重積		
11	34	07-102区Ⅳa	用	柵	板目	155	82	ロクロ左回転	内・外面部子タタキ
12	34	07-102区Ⅳa	柵	木柵	24.0	26	22	両面削身	ほぞ穴先端にくぼみ
34	34	07-105区Ⅲ	延含縫	杓子	板目	135	34	削りだし、身の部分欠損	削りだし、身の部分欠損
35	34	07-105区Ⅲ	延含縫	杓子	板目	25.2	45	削りだし、身の先端部剥げ	

図 版

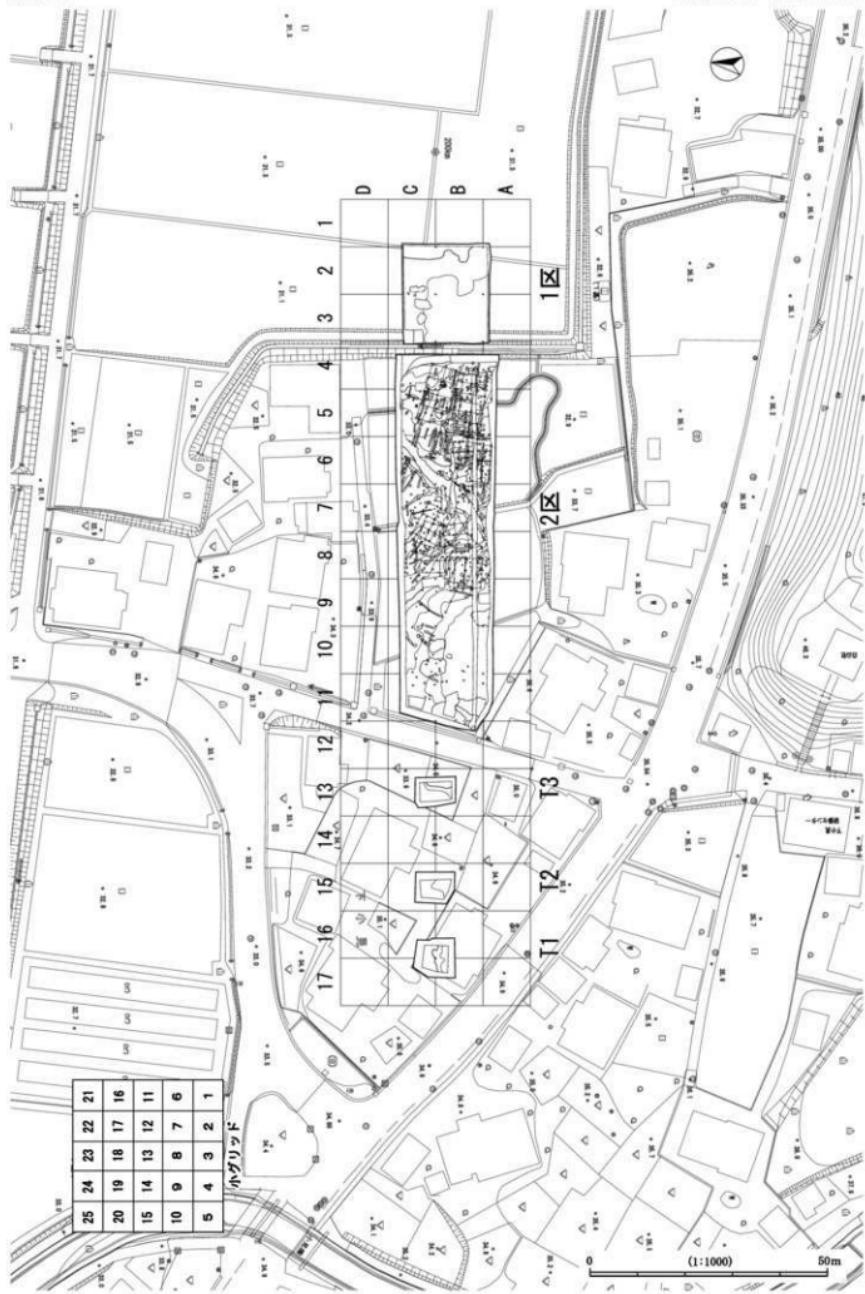
凡例

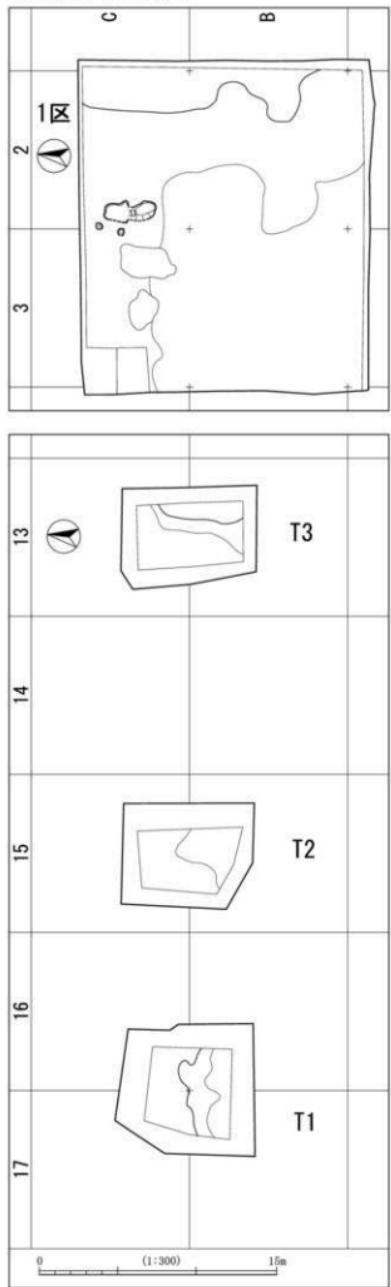
- 1 土器の断面は、須恵器は塗りつぶし、施釉陶器はアミをかけて示した。それ以外は全て白抜きとした。
- 2 土器の付着物などは、黒色処理は■■■■■、炭化物付着範囲は■■■■■、墨痕は■■■■■、黒色漆は■■■■■で示した。
- 3 鉄関連遺物の炉床粘土は、■■■■■で示した。
- 4 石製品の底面は■■■■■、炭化部分は■■■■■で示した。
- 5 木製品の黒色漆■■■■■、炭化部分は■■■■■で示した。

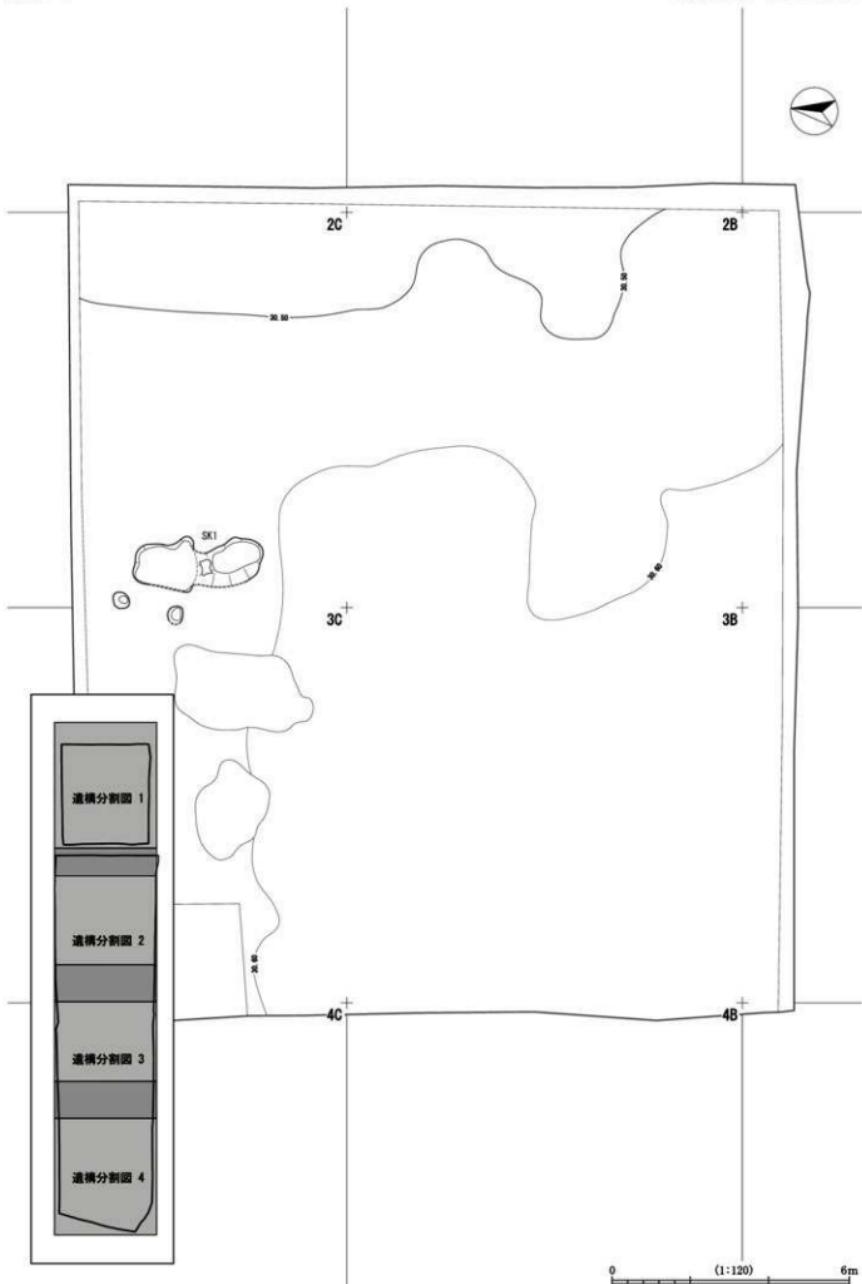
角地田遺跡 位置と周辺地形図

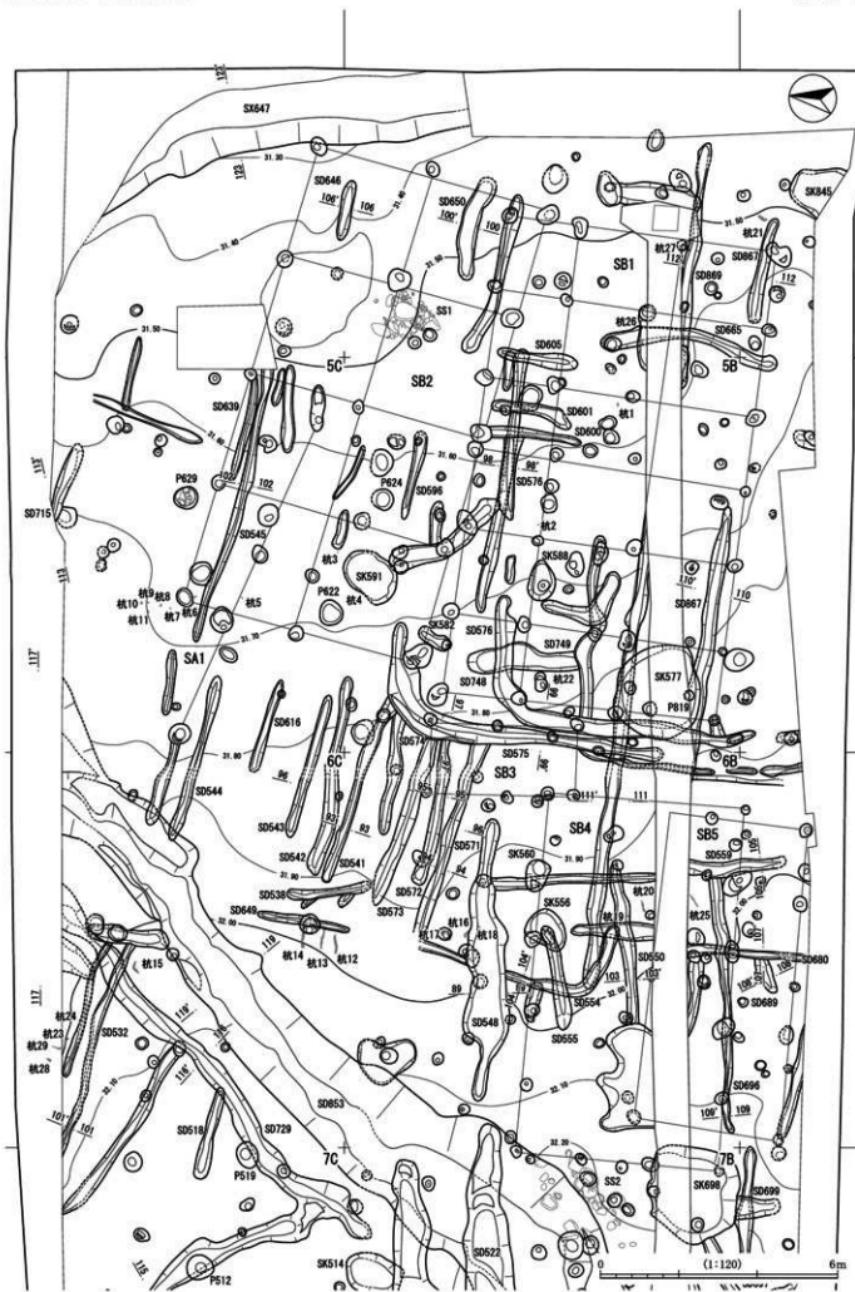
図版 1



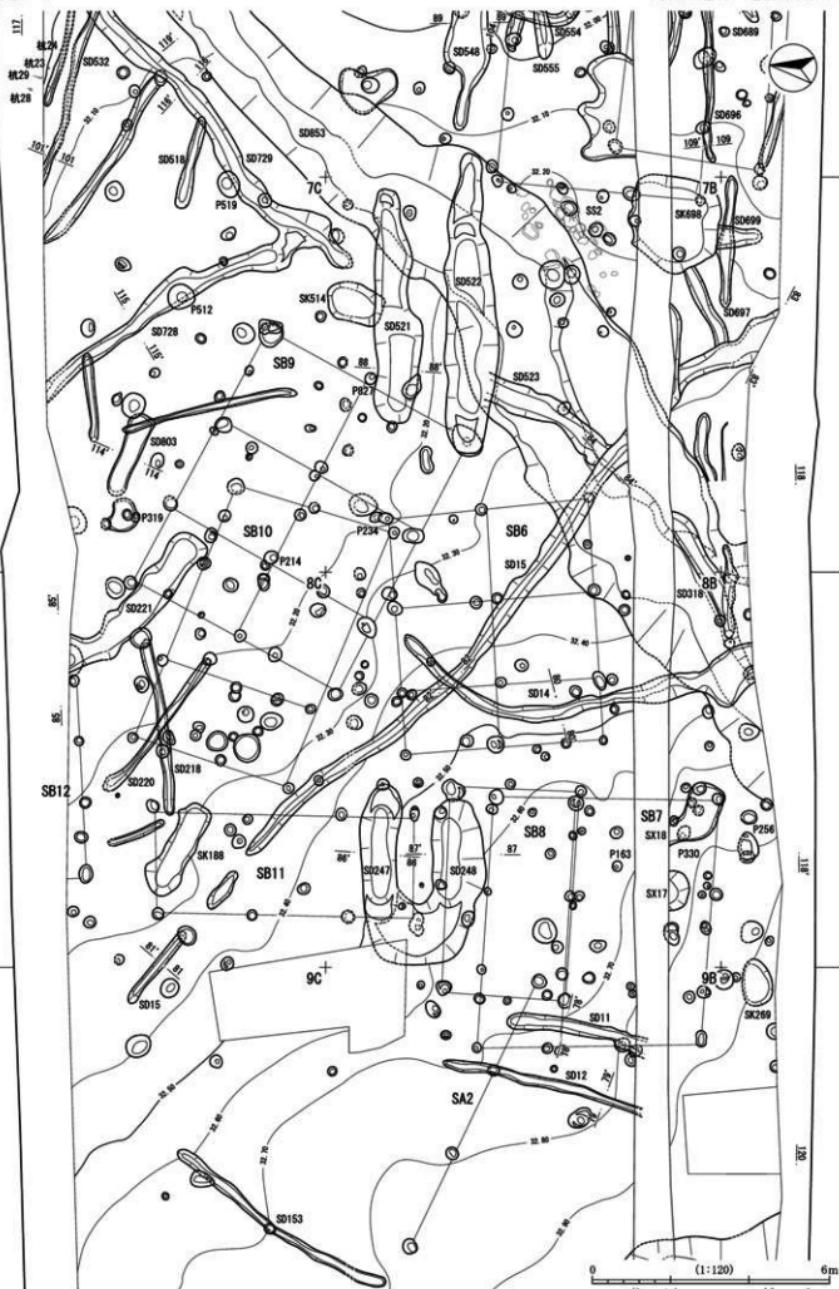


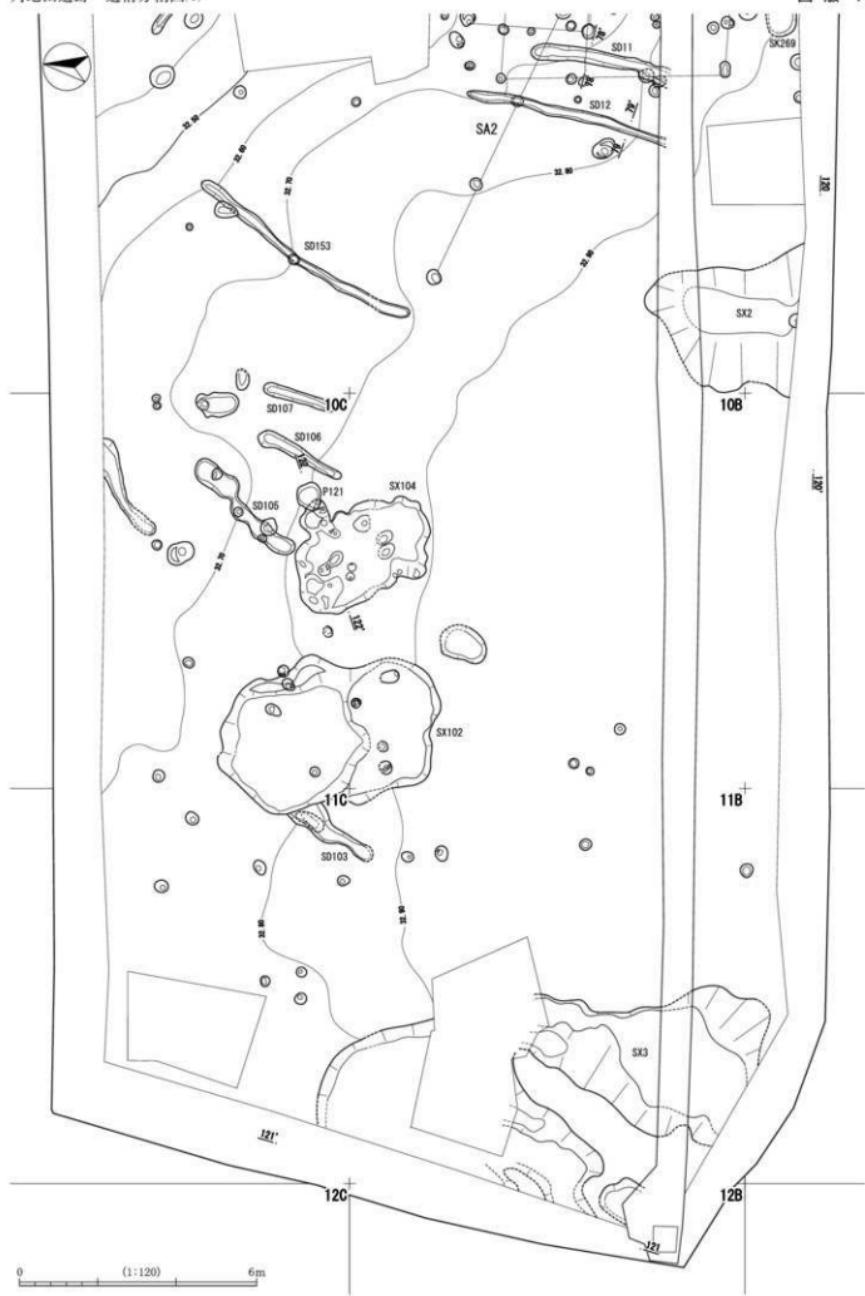


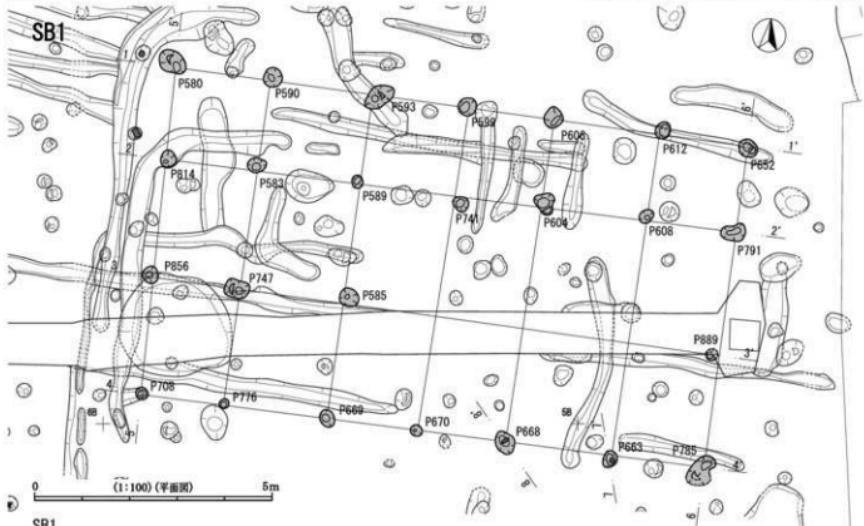




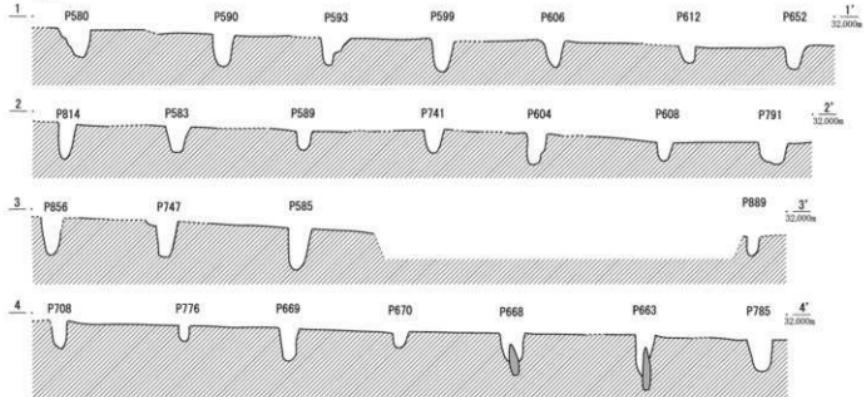
角地田遺跡 遺構分割図(3)



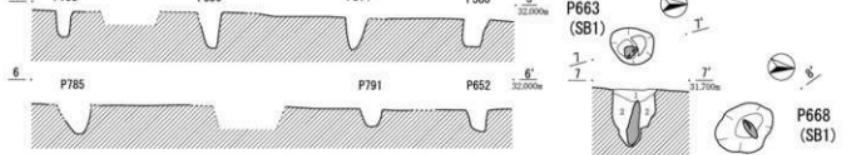




SBT



5

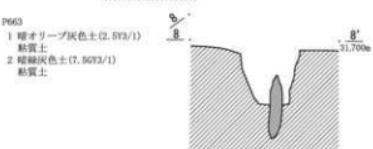


P663

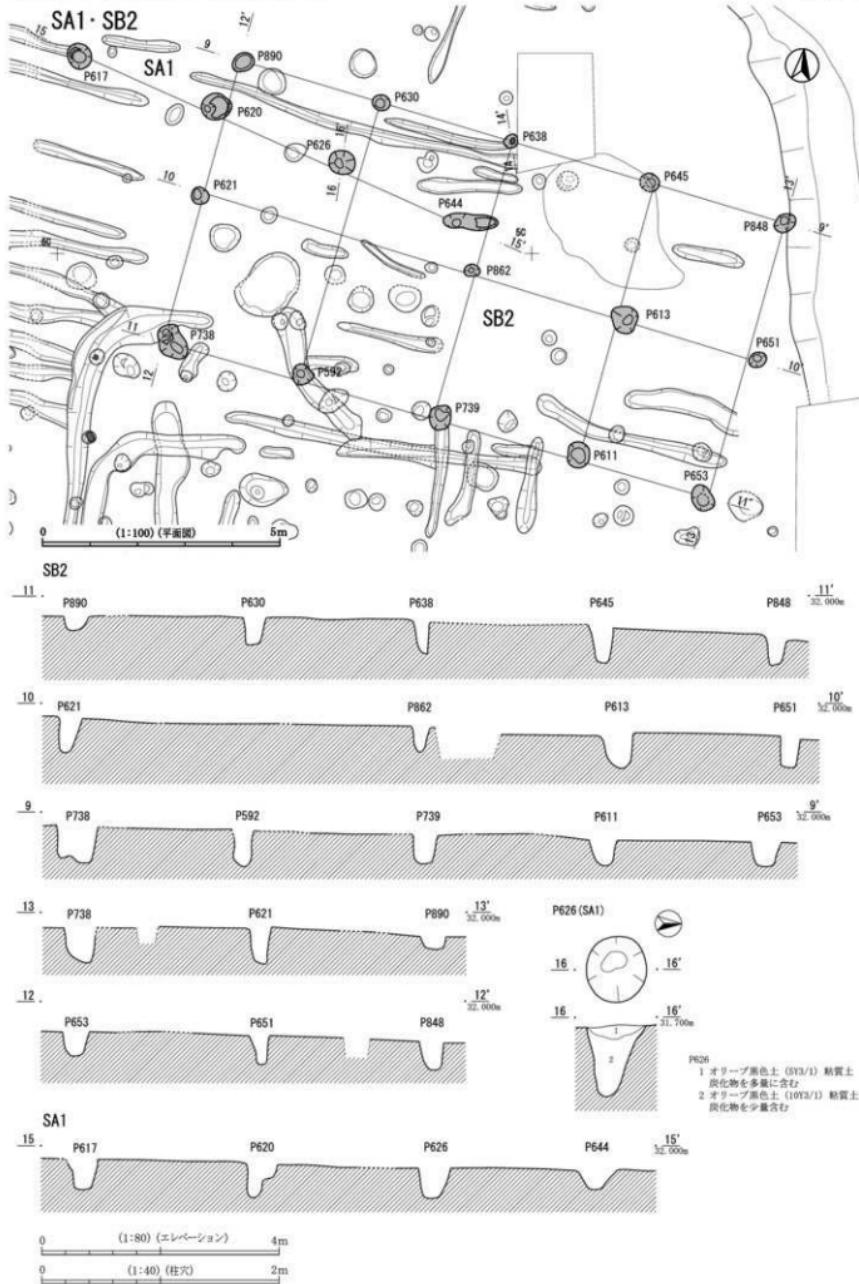
1 球オリーブ灰色土(2.5Y3/1)
粒度)

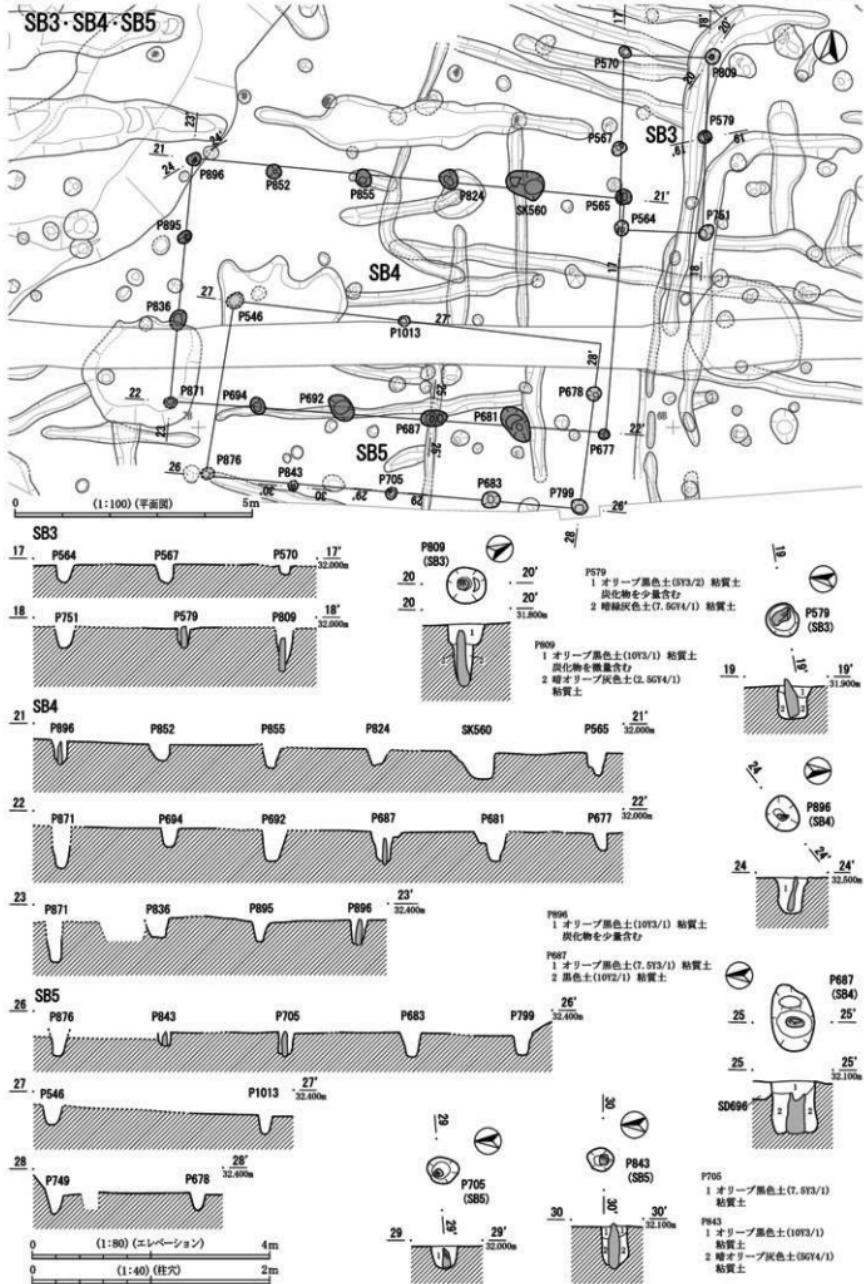
點質土

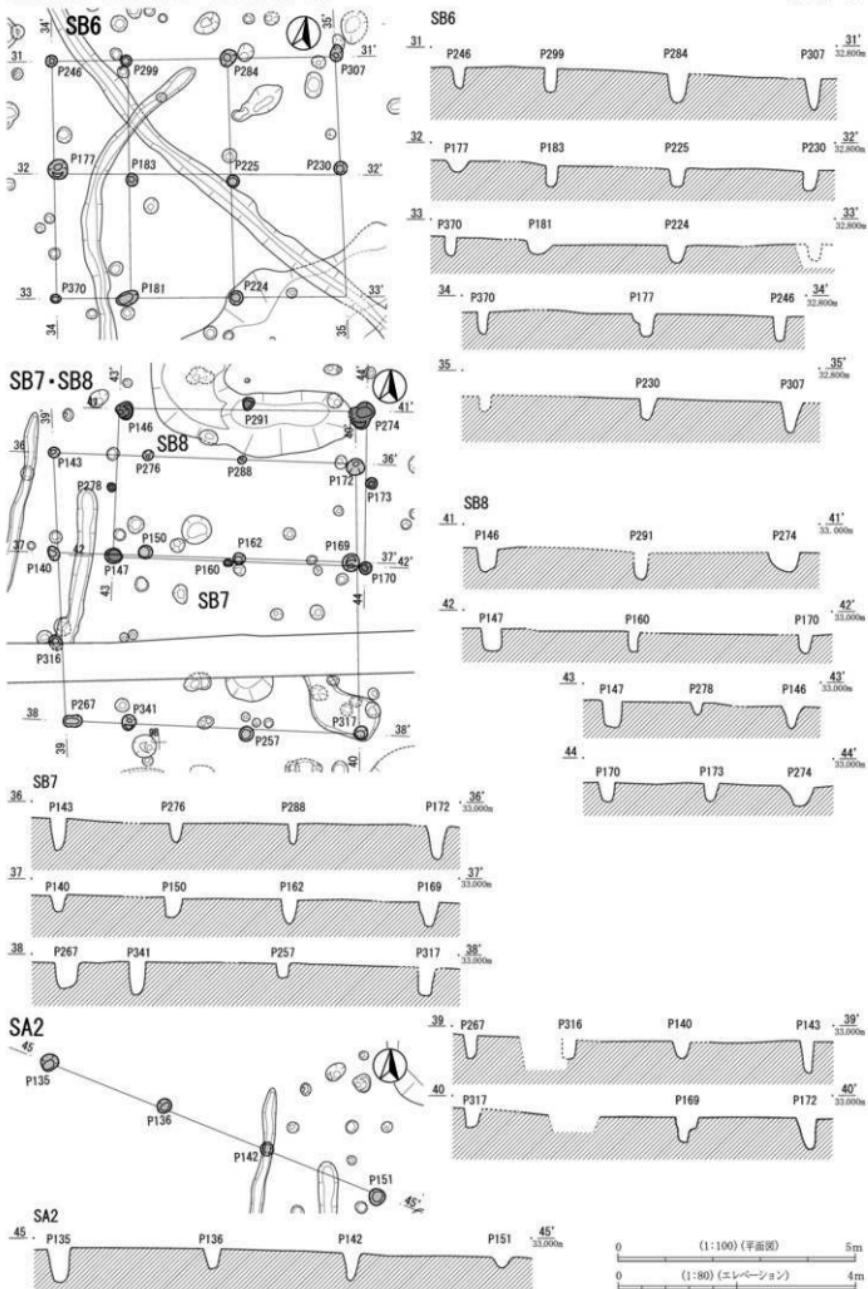
卷之三



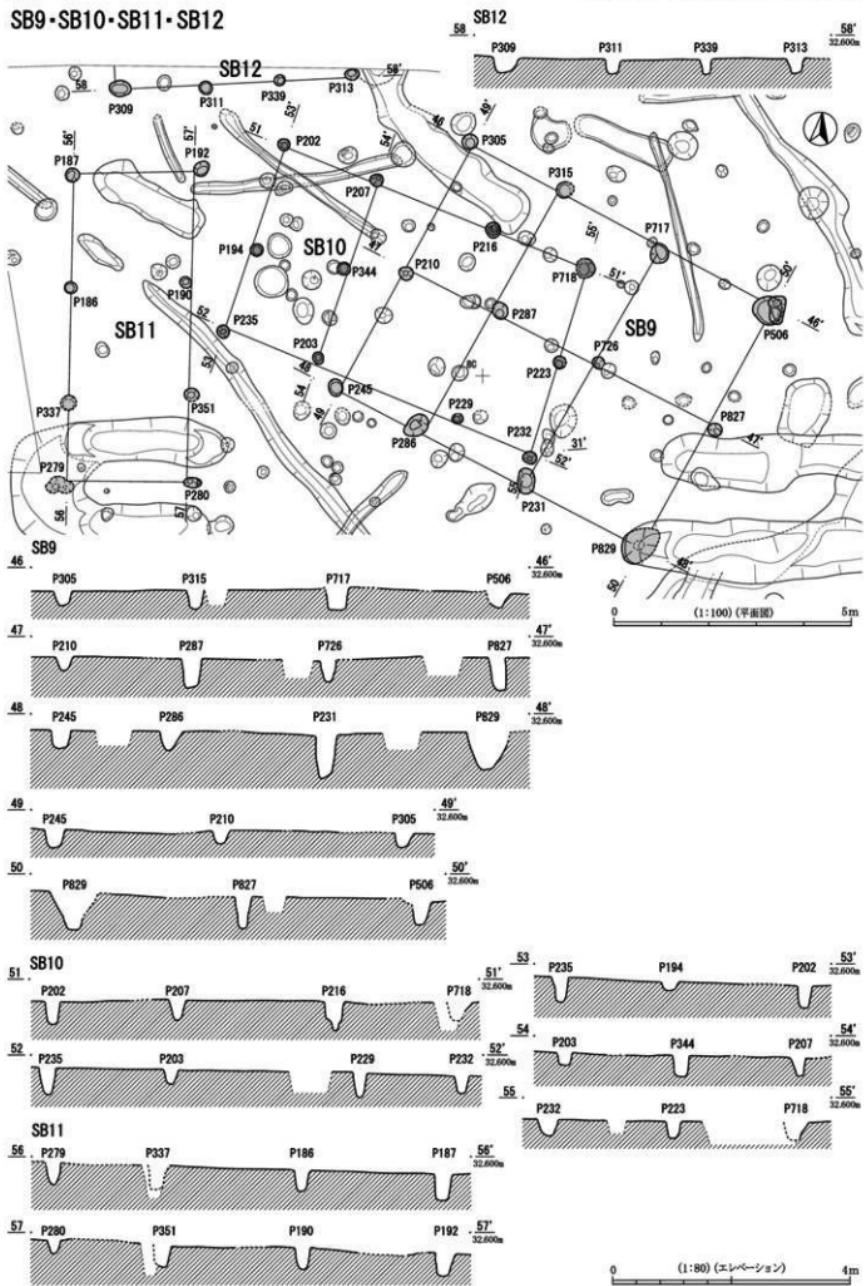
角地田遺跡 遺構個別図(2) 挖立柱建物 構



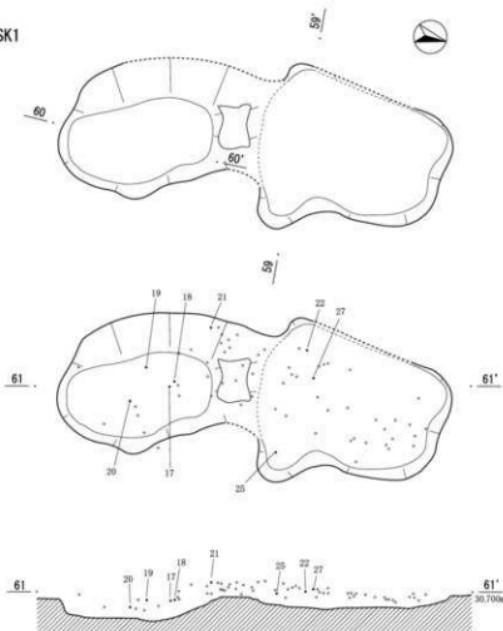




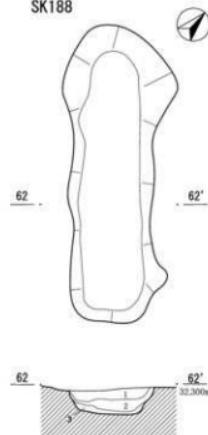
SB9 • SB10 • SB11 • SB12



SK1

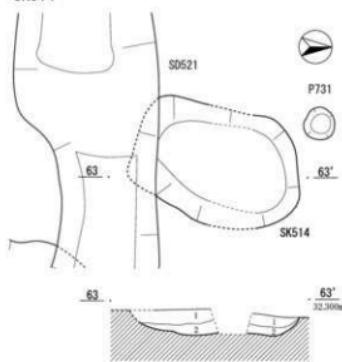


SK188

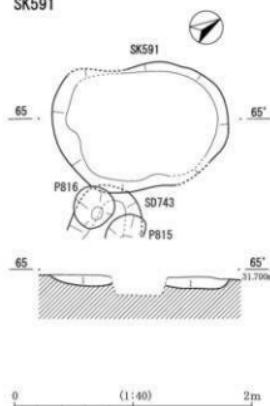


SK188
 1 黄褐色土(2. SY4/1) 粘質土
炭化物を少數含む
 2 黄褐色土(2. SY6/6) 粘質土
3 オリーブ褐色土(7. SY3/1) 粘質土
炭化物を少數含む

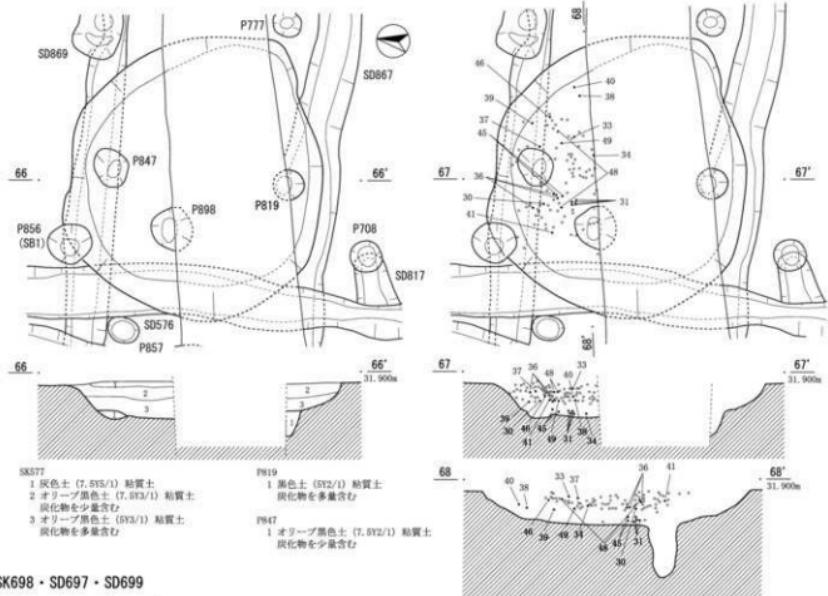
SK514



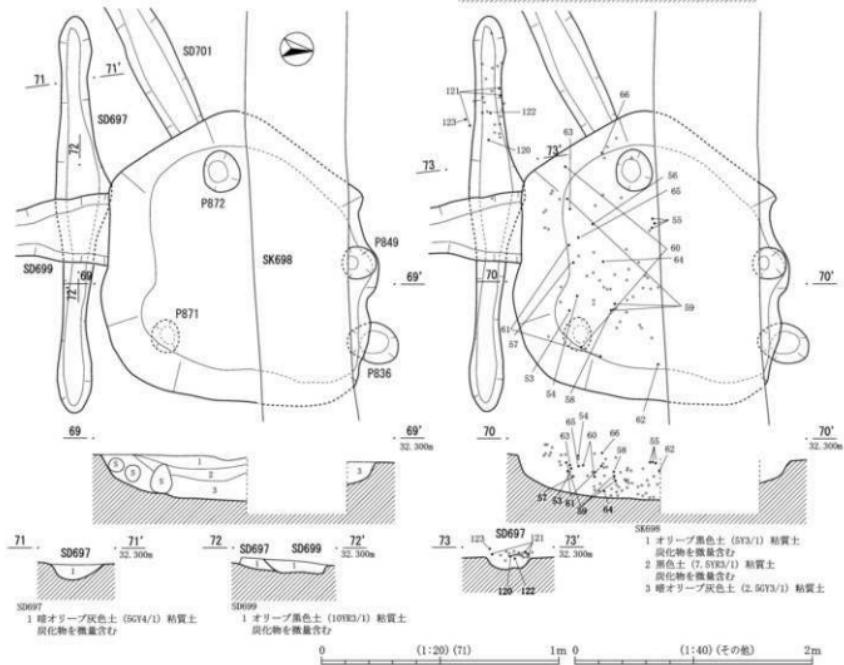
SK591



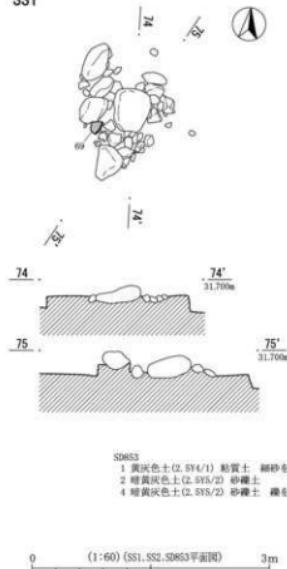
0 (1:40) 2m



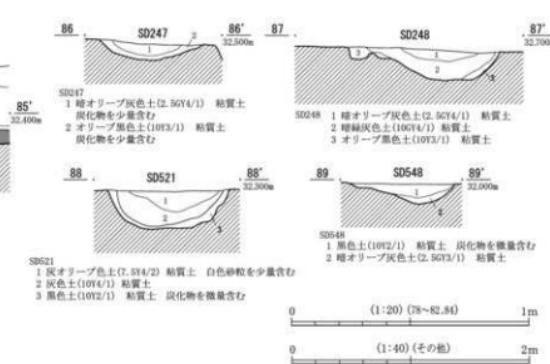
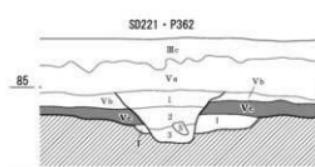
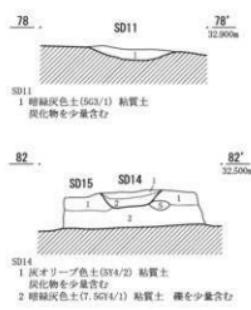
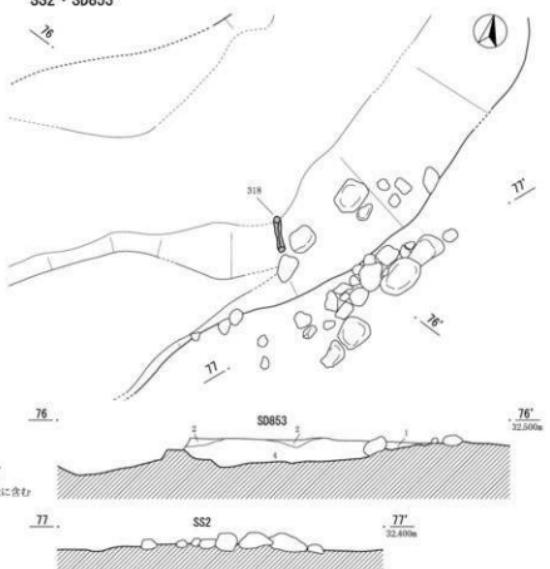
SK698 • SD697 • SD699



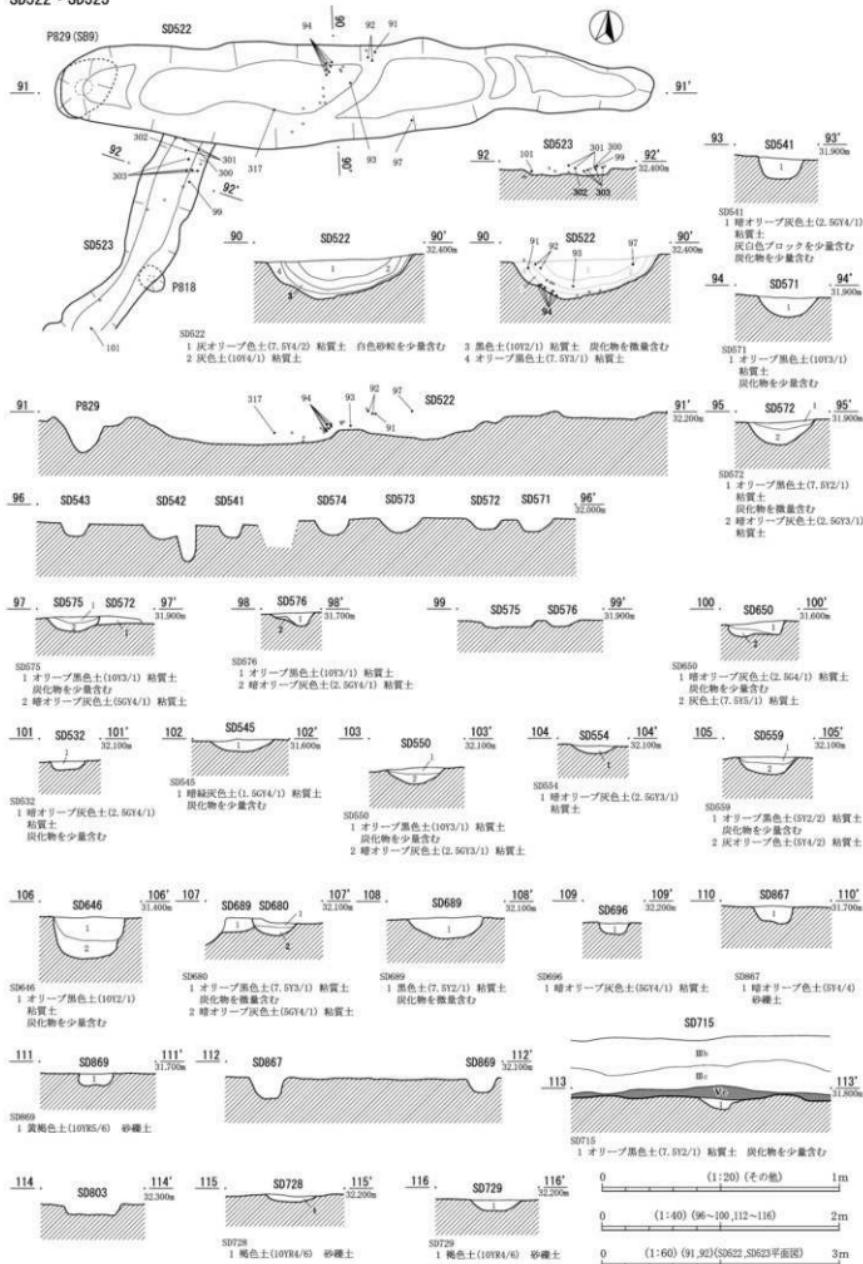
SS1



SS2・SD853

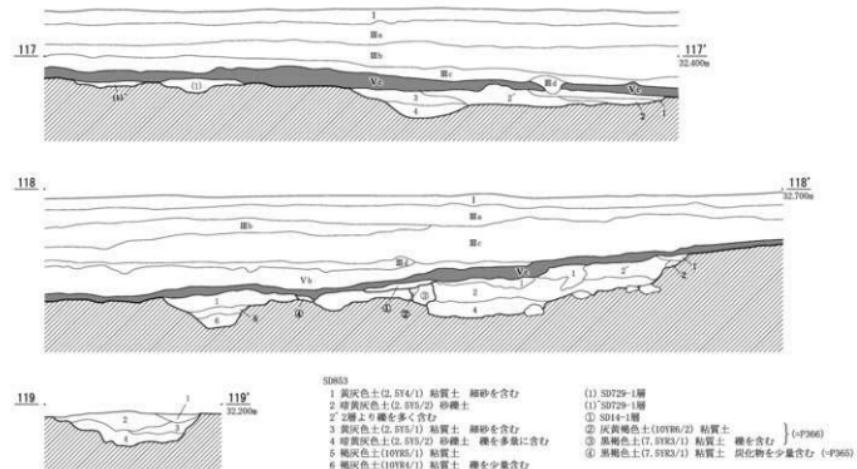


SD522 • SD523

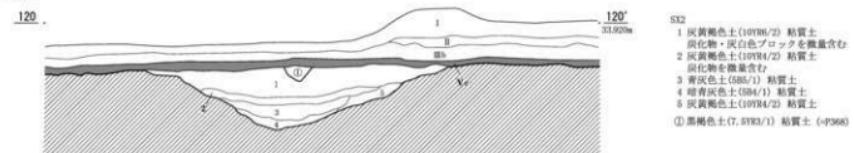


角地田遺跡 遺構個別図⑩ 溝 性格不明遺構

SD853



SX2



SX3



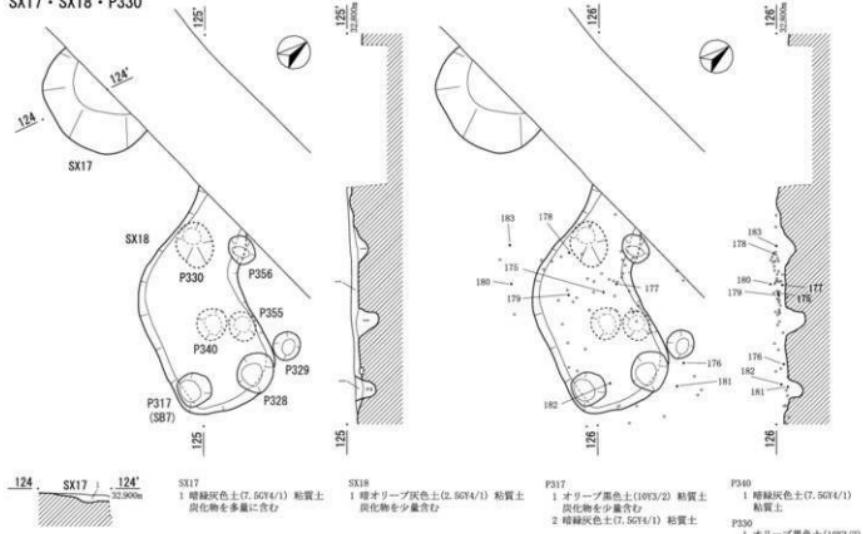
SX104・P121



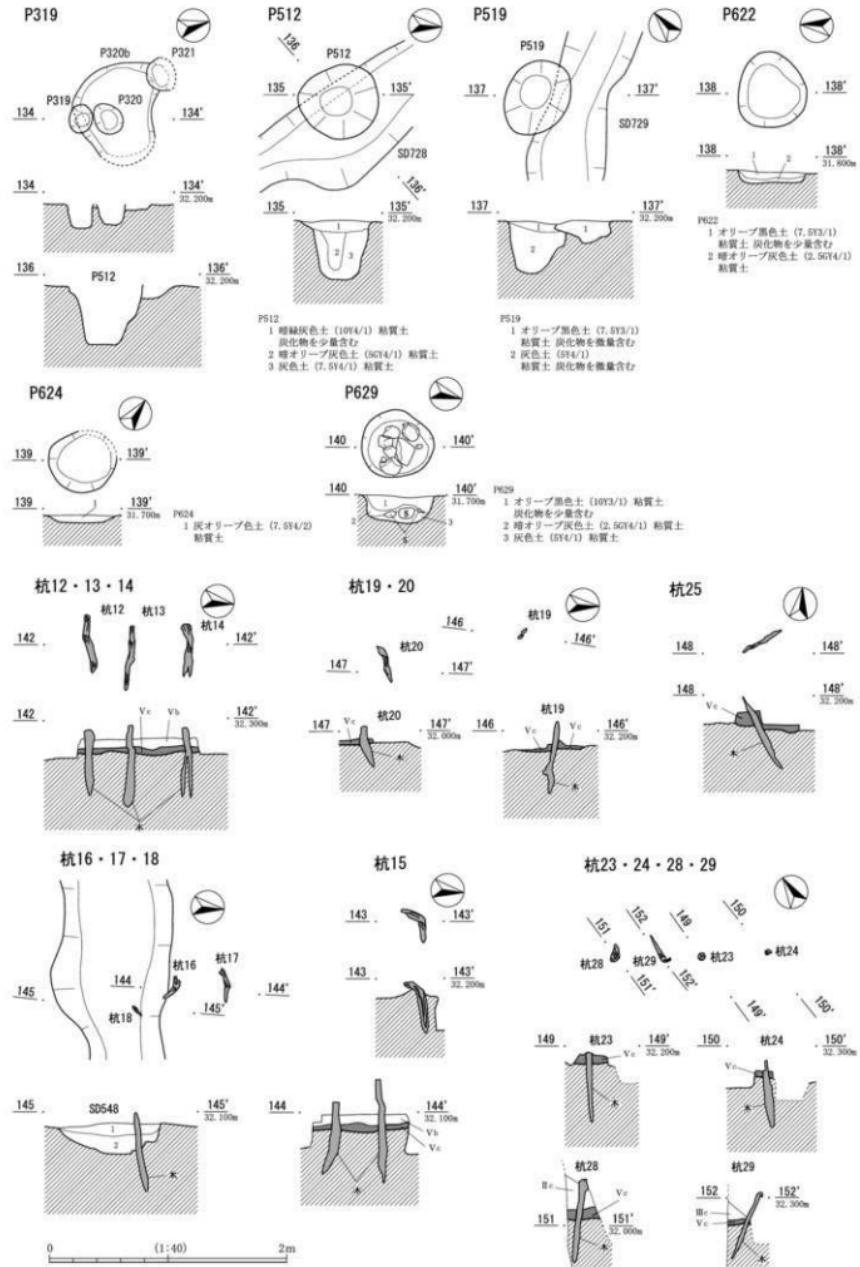
SX647

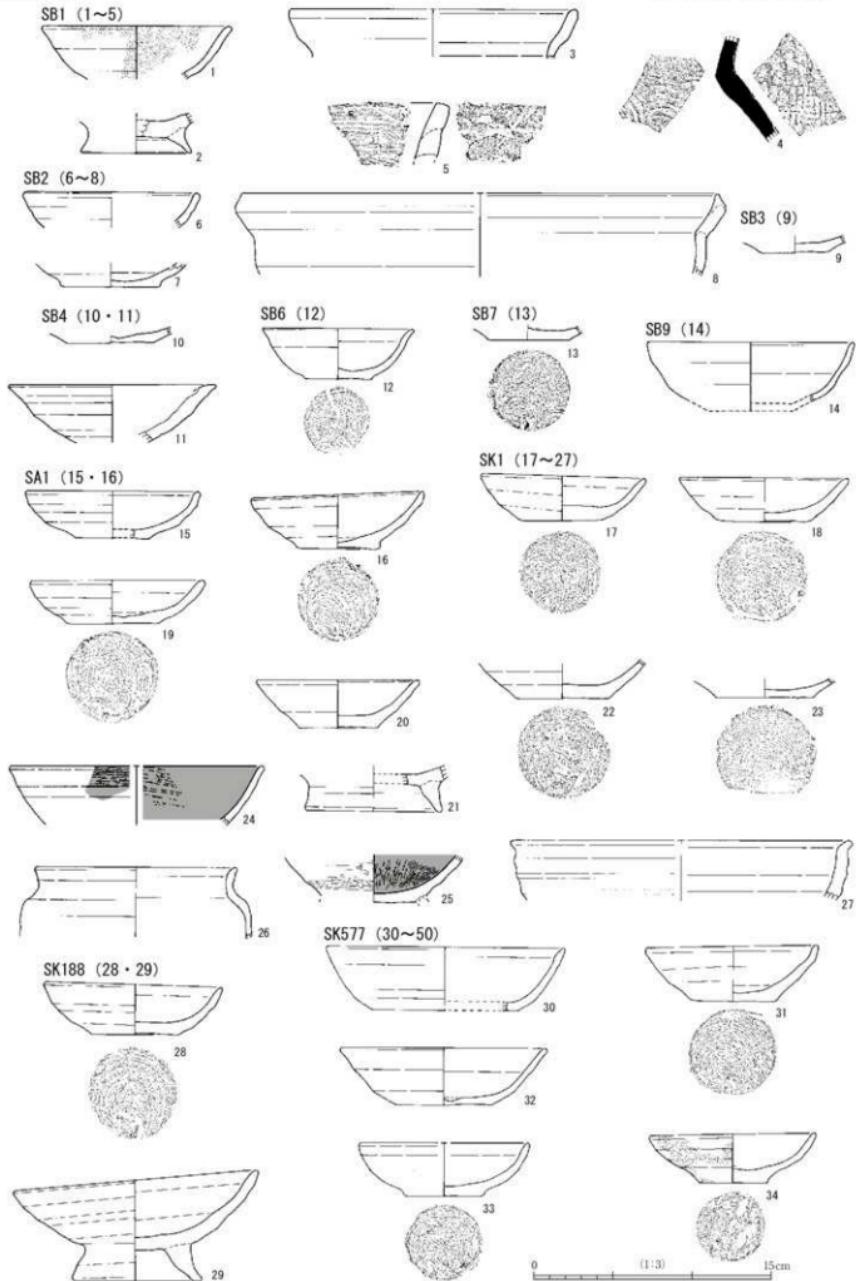


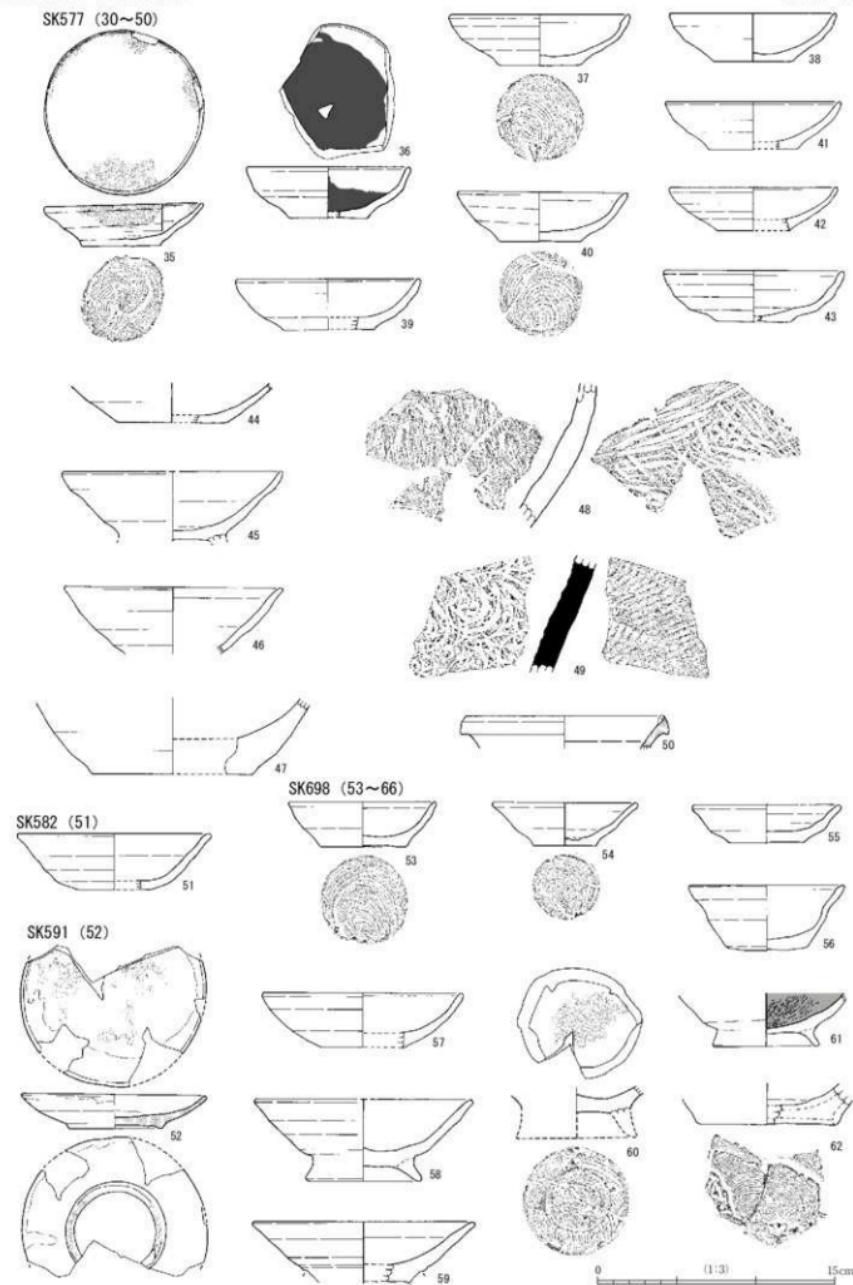
SX17・SX18・P330



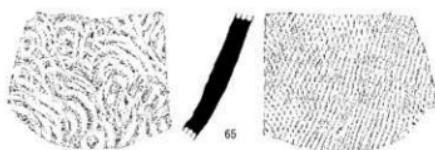
角地田遺跡 遺構個別図02 柱穴 杭







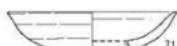
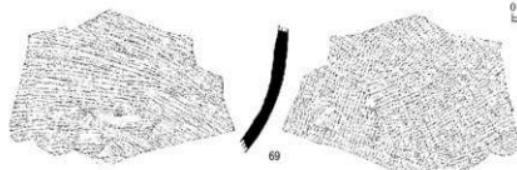
SK698 (53~66)



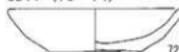
SS1 (67~69)



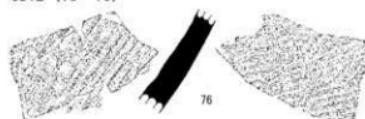
0 68-69 (1:4) 20cm



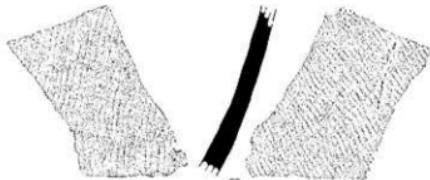
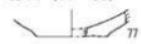
SD11 (70~74)



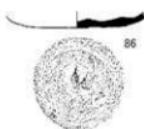
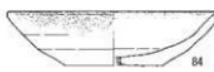
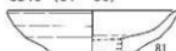
SD12 (75・76)



SD14 (77~80)

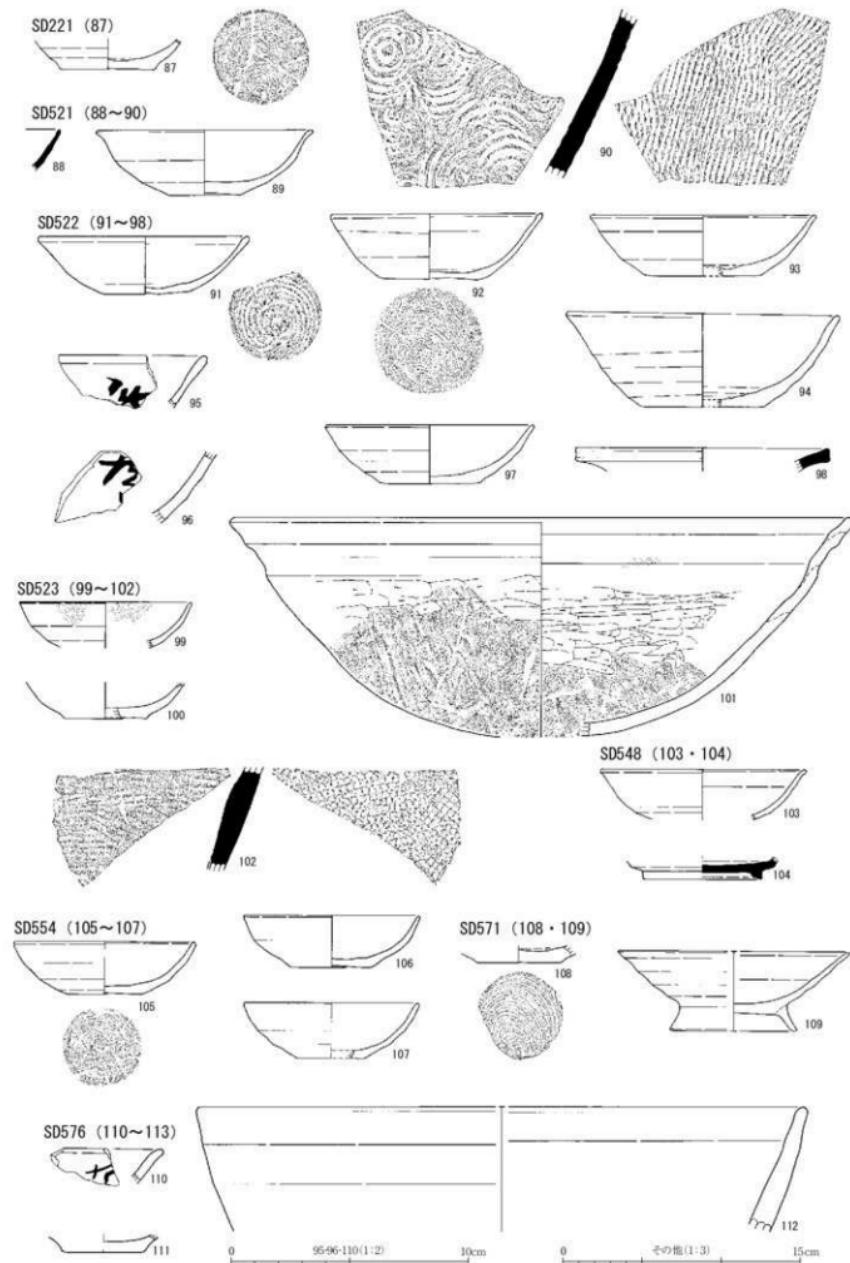


SD15 (81~86)

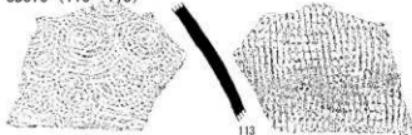


0 68-69以外(1:3) 15cm





SD576 (110~113)



SD646 (117)



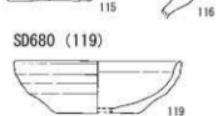
SD650 (118)



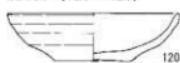
SD575 (114~116)



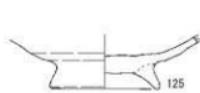
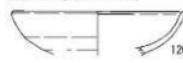
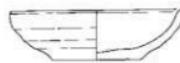
SD680 (115)



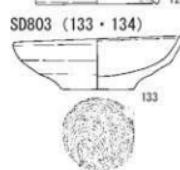
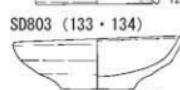
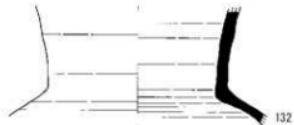
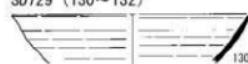
SD697 (120~125)



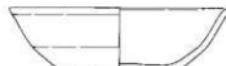
SD715 (126~129)

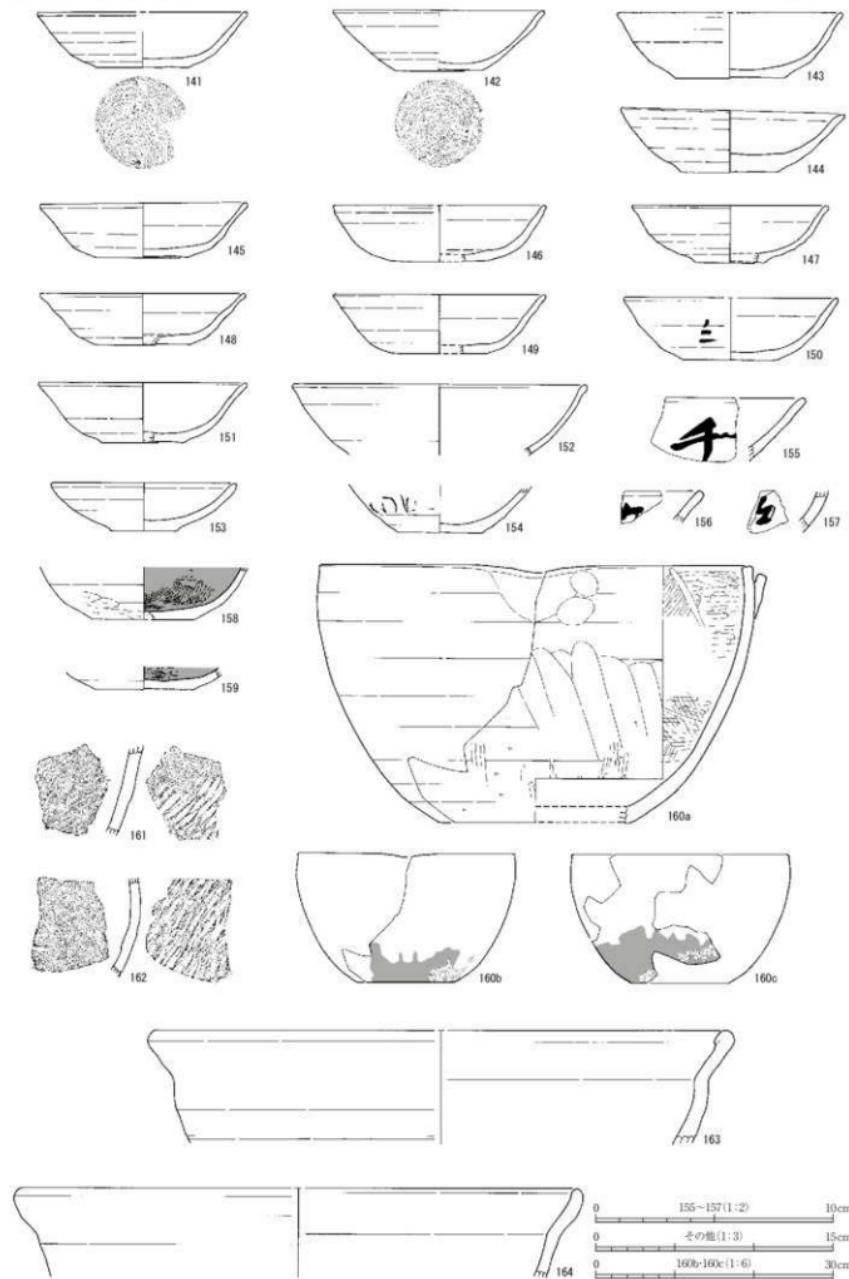


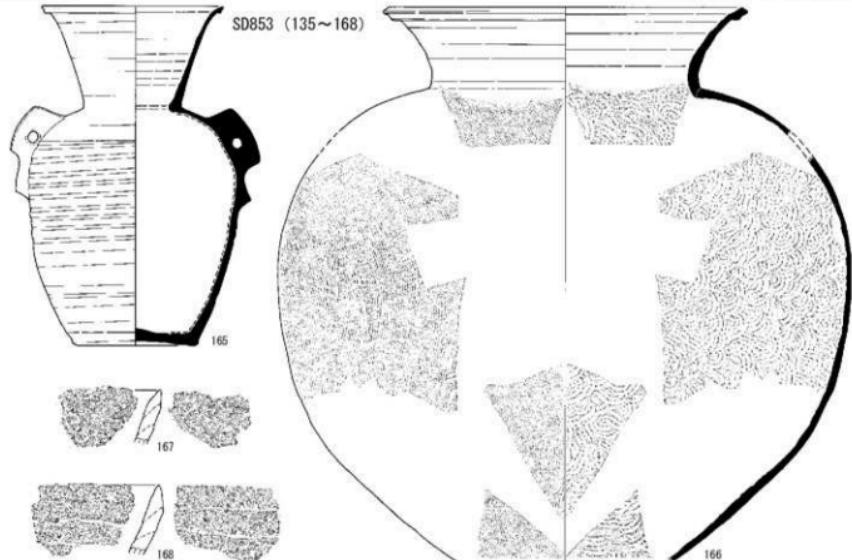
SD729 (130~132)



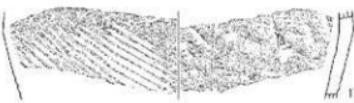
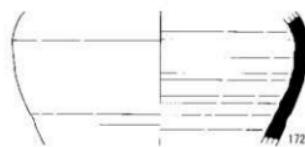
SD853 (135~168)



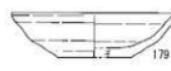
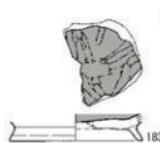
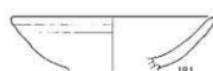
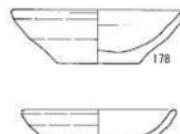
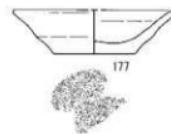
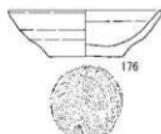




SX3 (169~174)

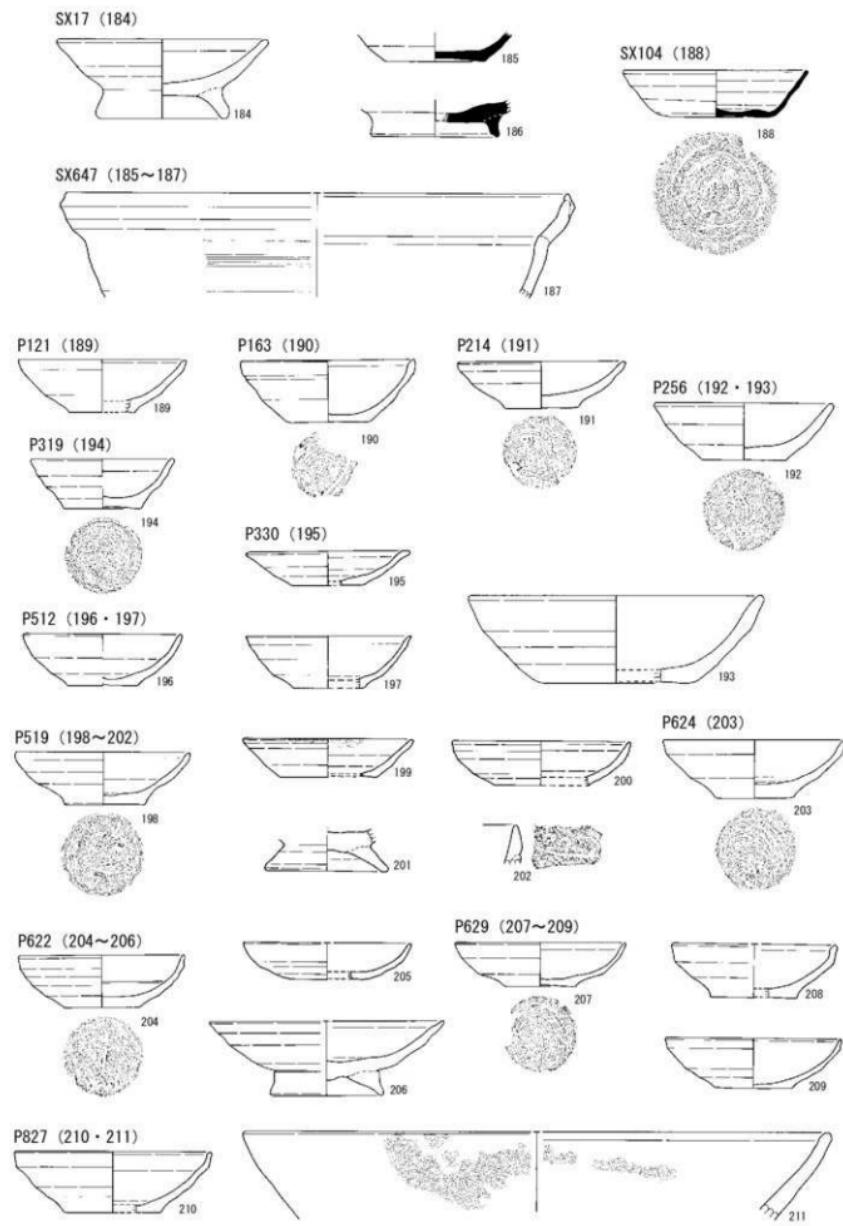


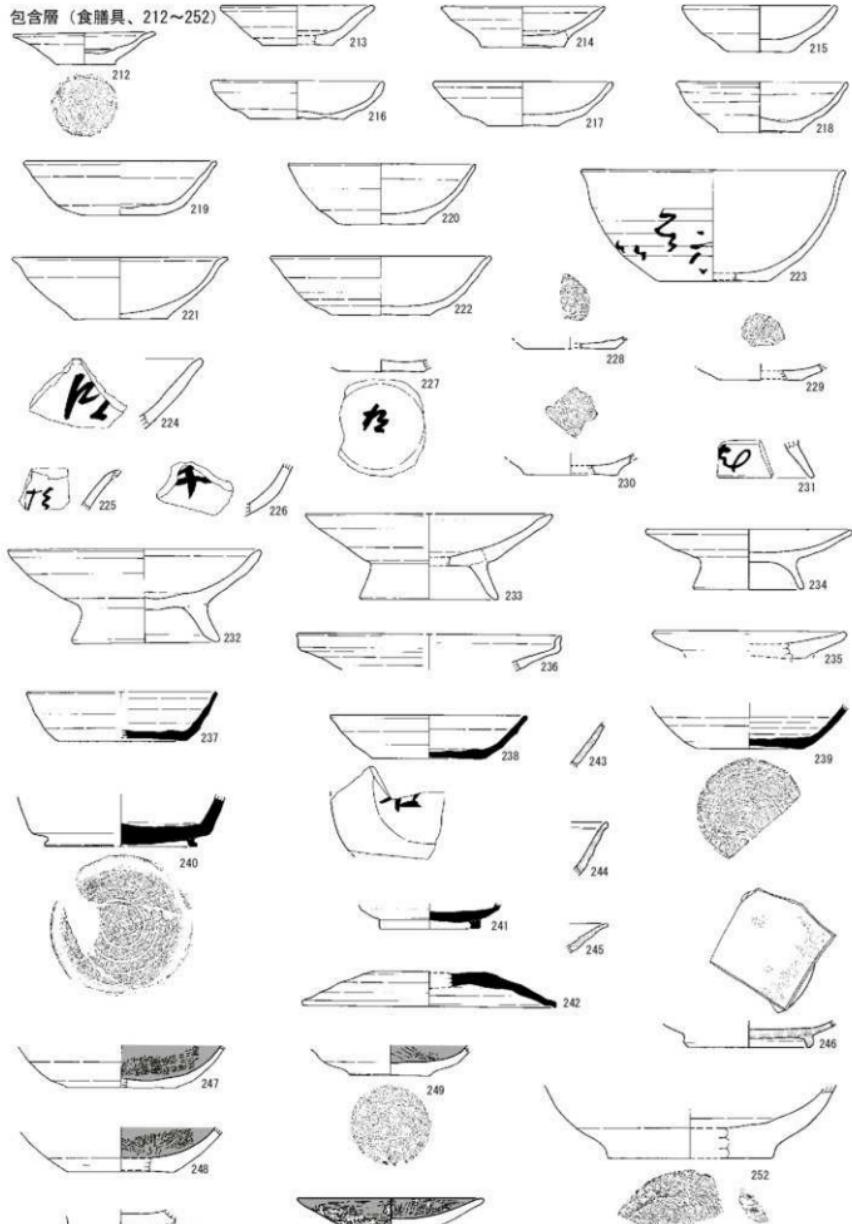
SX18 (175~183)



0 その他(1:3) 15 cm
0 165(1:4) 20 cm
0 166(1:6) 30 cm

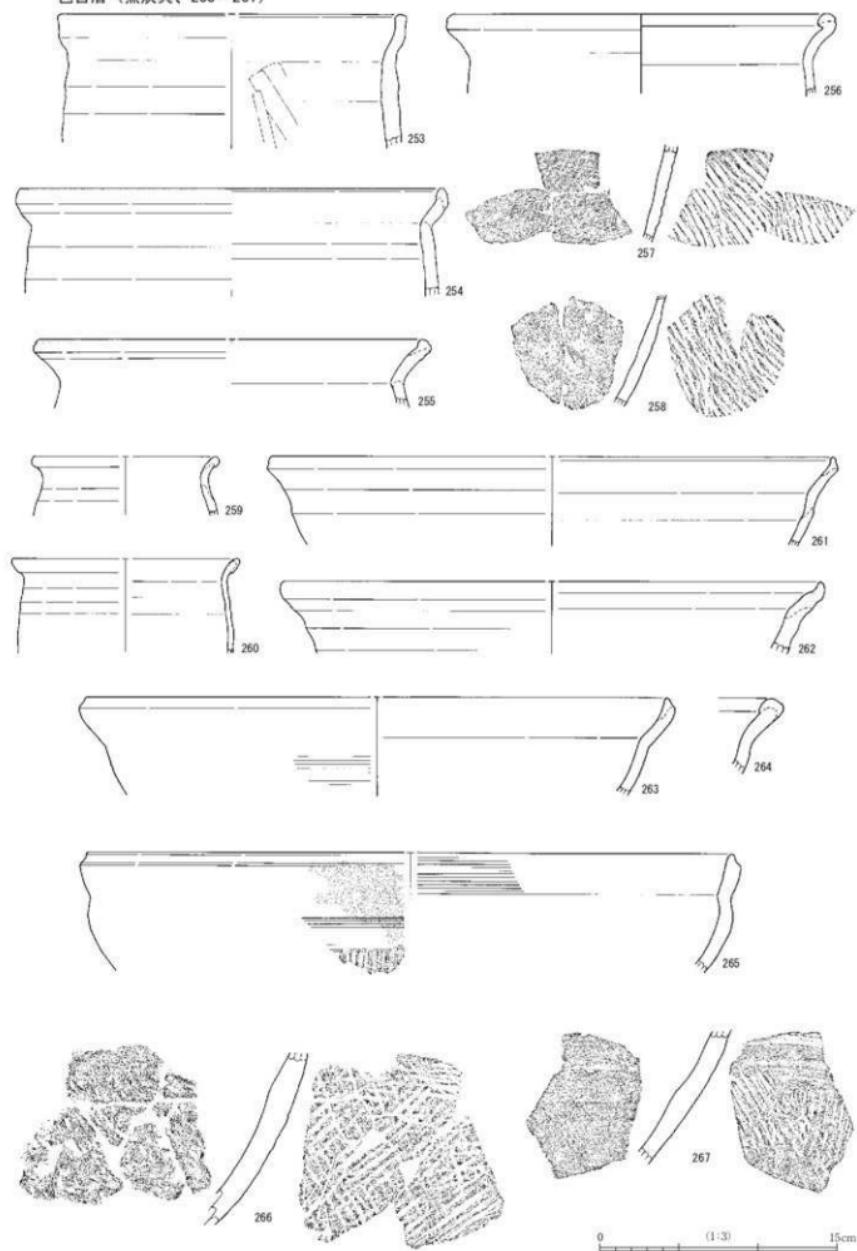




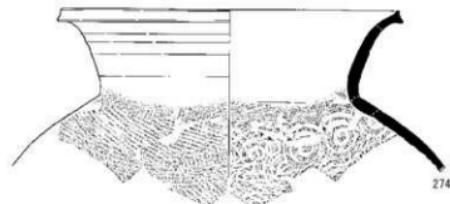
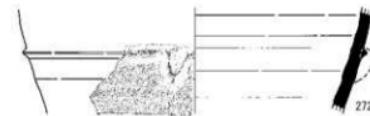
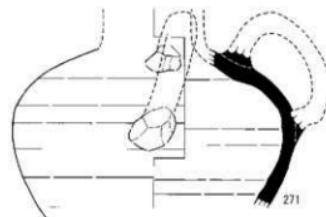
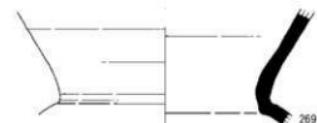
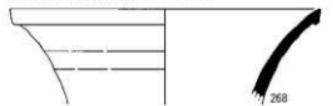


0 224~226(1:2) 10cm 0 その他の(1:3) 15cm

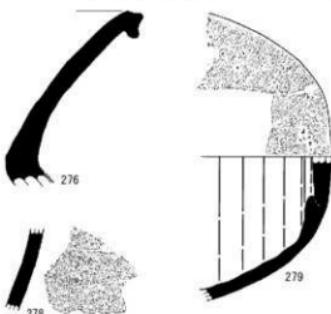
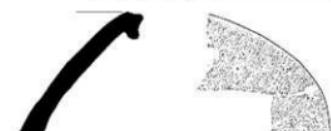
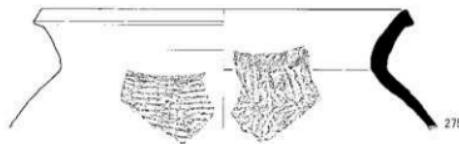
包含層（煮炊具、253～267）



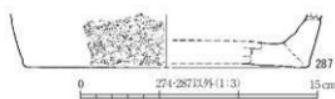
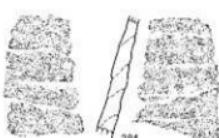
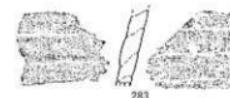
包含層（貯蔵具、268～280）



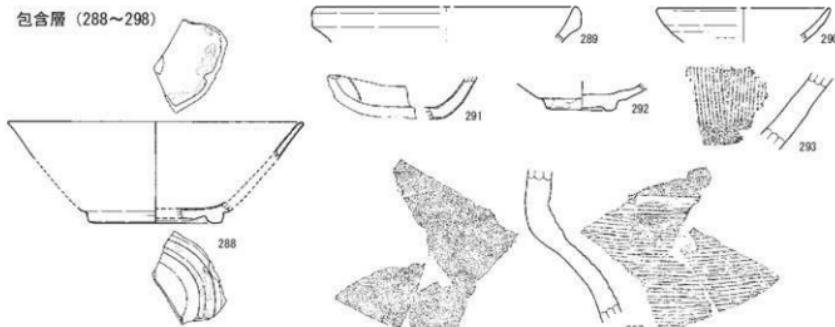
0 274-287 (1:4) 20 cm



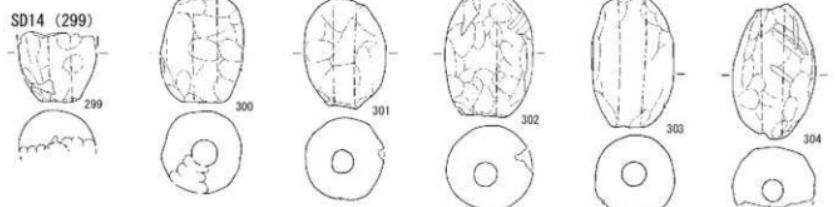
包含層（製塩土器、281～287）



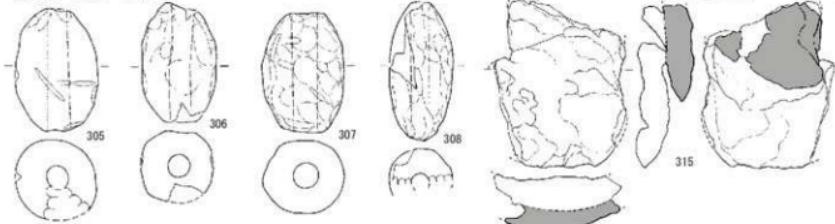
0 274-287(1:3) 15 cm



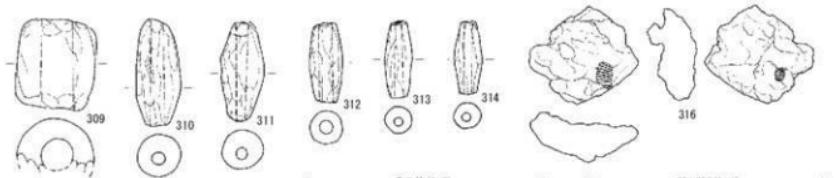
土鍾 (299~314) SD523 (300~304)



包含層 (305~314)

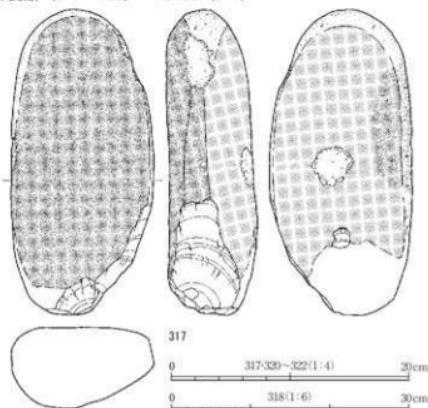


鉄滓 (包含層, 315・316)

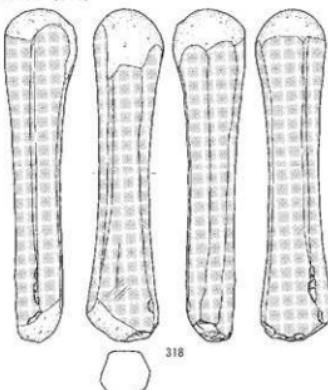


0 その他(1:3) 15cm 0 294-298(1:4) 20cm

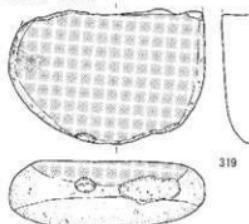
石製品 (317~322) SD522 (317)



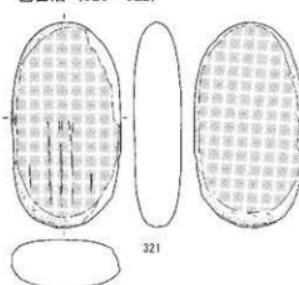
SD853 (318)



SD576 (319)



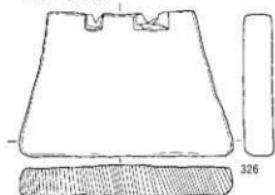
包含層 (320~322)



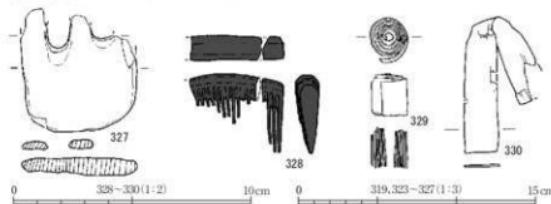
木製品 (323~330)



P234 (326)

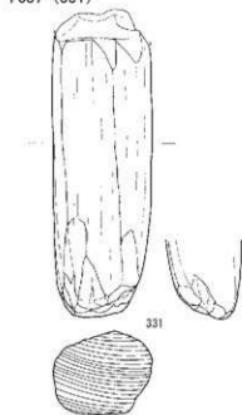


包含層 (323~325, 327~330)

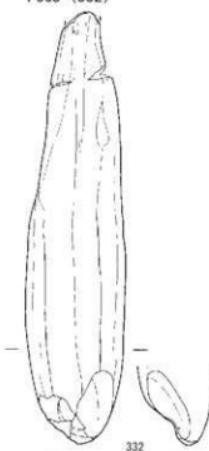


柱根・坑 (331~341)

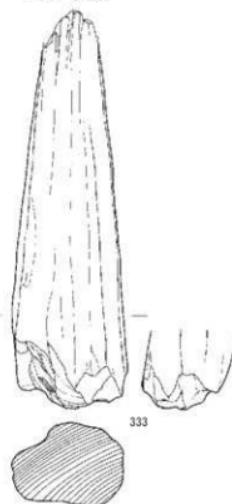
P687 (331)



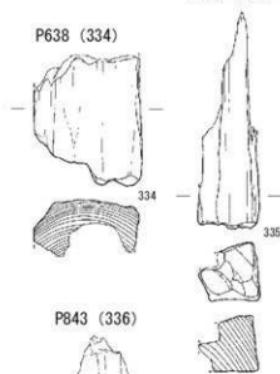
P668 (332)



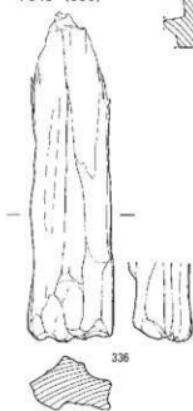
P809 (333)



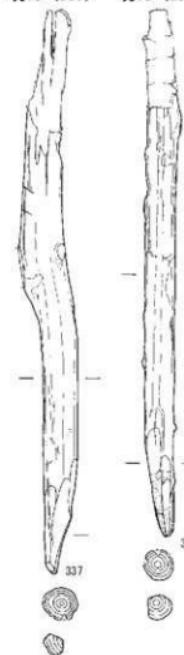
P705 (335)



P843 (336)



坑13 (337)



坑18 (338)



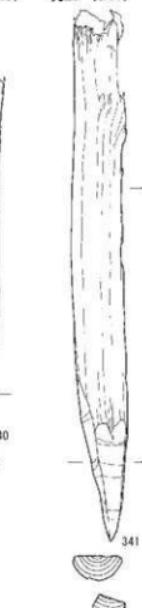
坑23 (339)



坑24 (340)



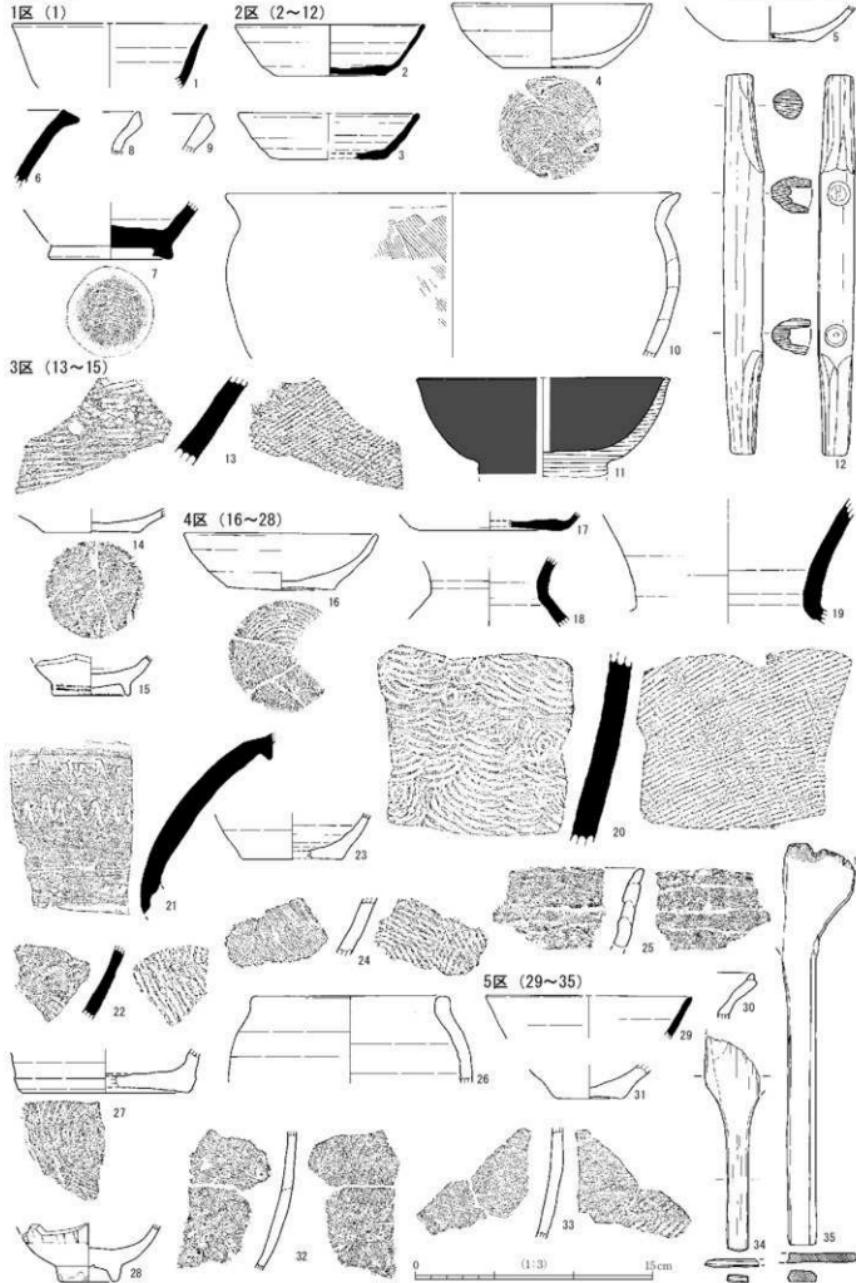
坑28 (341)



0 (1:6) 30cm

図版 34

平遺跡 遺物実測図





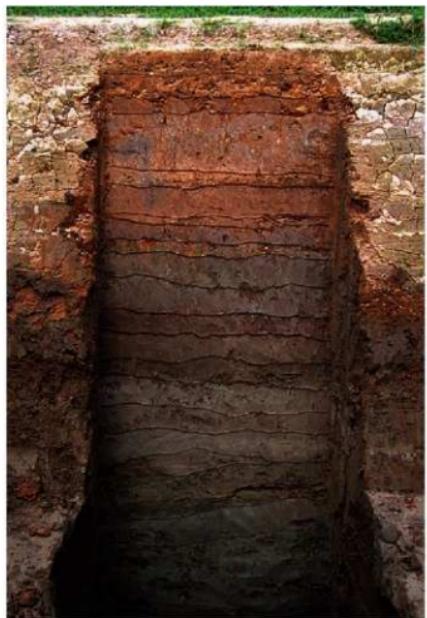
角地田遺跡 遠景（東から）



角地田遺跡 近景（南東から）



角地田遺跡 全景（真上から）



基本層序②（8C）（南から）



基本層序④（5C）（南から）



基本層序⑪（11C）（南から）



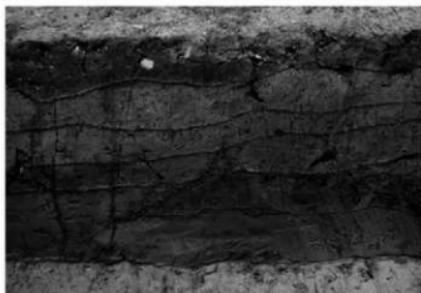
角地田遺跡 近景（北から）



角地田遺跡 全景（北東から）



1区 完掘（南から）



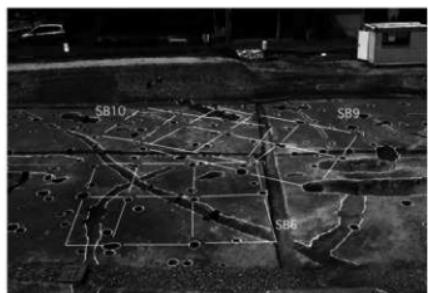
基本層序(S)（1区）（南から）



掘立柱建物（SB1～3）完掘（南西から）



掘立柱建物（SB3～5）完掘（南西から）



掘立柱建物（SB6・9～12）完掘（南から）



掘立柱建物（SB7・8）完掘（南東から）



塙立柱建物 (SB1~5, SA1) (真上から)



塙立柱建物 (SB6~12) (真上から)



P663 (SB1) 断面 (7-7') (東から)



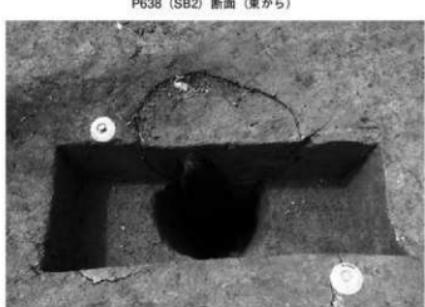
P668 (SB1) 柱根検出状況 (東から)



P638 (SB2) 断面 (東から)



P579 (SB3) 断面 (19-19') (北から)



P809 (SB3) 断面 (20-20') (南東から)



P687 (SB4) 断面 (25-25') (西から)



P896 (SB4) 柱根検出状況 (南東から)



P705 (SB5) 柱根検出状況 (北から)



PB43 (SB5) 断面 (30-30') (南から)



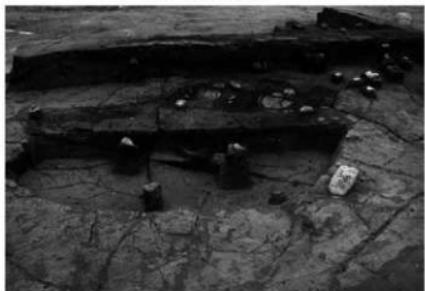
P626 (SA1) 断面 (16-16') (東から)



SK1 完掘 (南から)



SK1 遺物出土状況 (南東から)



SK1 断面 (60-60') (東から)



SK1 断面 (59-59') (北から)



SK188 完掘 (北西から)



SK188 遺物出土状況 (東から)



SK188 断面 (62-62') (北から)



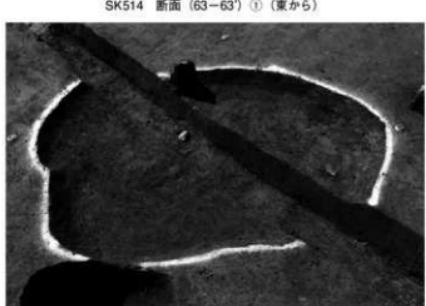
SK514 完掘 (東から)



SK514 断面 (63-63') ① (東から)



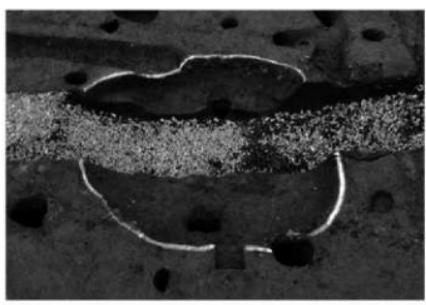
SK514 断面 (63-63') ② (西から)



SK591 完掘 (西南から)



SK591 断面 (65-65') (東から)



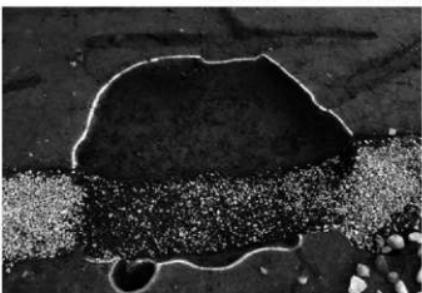
SK577 完掘 (北から)



SK577 遺物出土状況 (北東から)



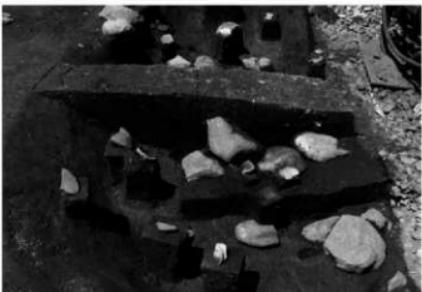
SK577 断面 (66-66') (西から)



SK698 完掘 (北から)



SK698 遺物出土状況 (東から)



SK698 断面 (69-69') (東から)



SS1 完掘 (東南から)



SS2 完掘 (北東から)



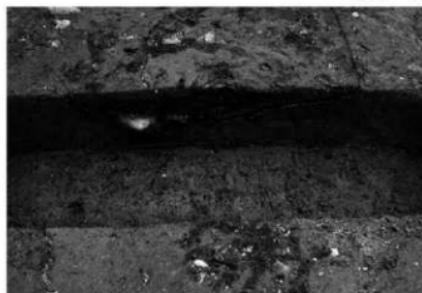
SS2・SD853 断面 (76-76') (北東から)



SS2 検出状況 (SD853覆土内埋没状況) (北東から)



SD11・12 実掘 (南から)



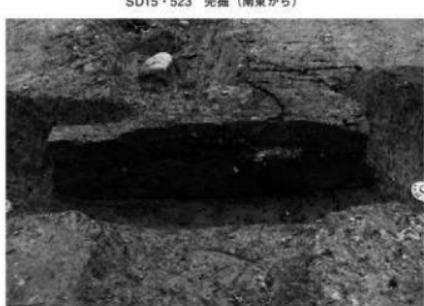
SD14 断面 (80-80') (北から)



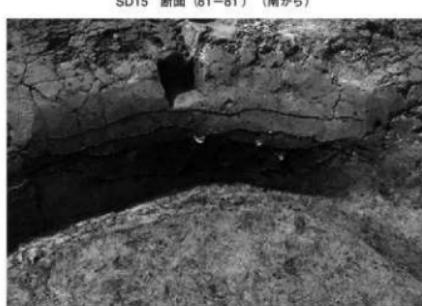
SD15・523 実掘 (南東から)



SD15 断面 (81-81') (南から)



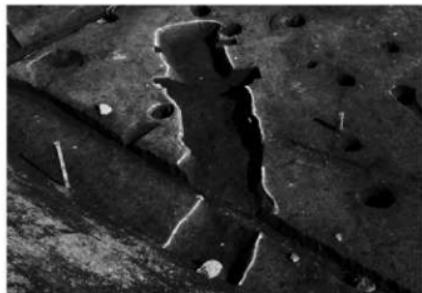
SD14・15 断面 (82-82') (北から)



SD15 断面 (83-83') (北から)



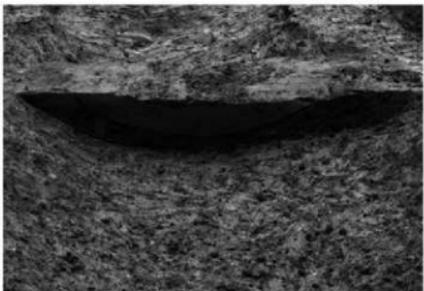
SD15・523 断面 (84-84') (北西から)



SD221 実掘 (北西から)



SD221・P362 断面 (85-85') (南から)



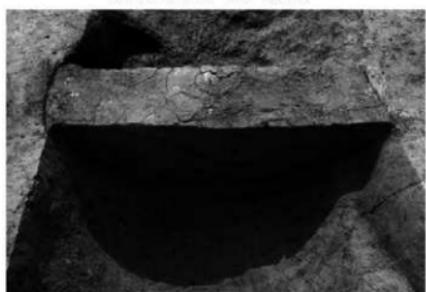
SD247 断面 (86-86') (東から)



SD248 断面 (87-87') (東から)



SD521・522 完掘 (南から)



SD521 断面 (88-88') (西から)



SD522 断面 (90-90') (西から)



SD548 断面 (89-89') (西から)



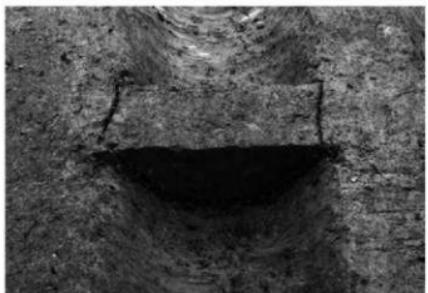
SD523 土跡出土状況 (東から)



耕作小溝 (SD541～543、571～574) (南西から)



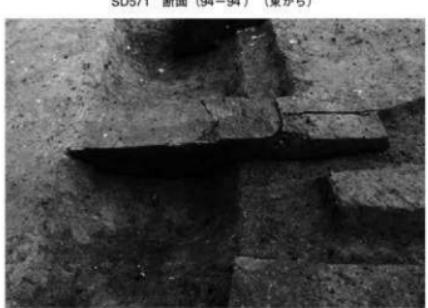
SD541 断面 (93-93') (東から)



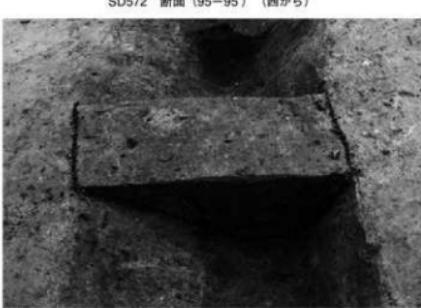
SD571 断面 (94-94') (東から)



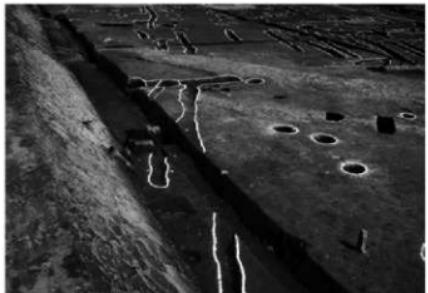
SD572 断面 (95-95') (西から)



SD575・572 断面 (97-97') (北から)



SD576 断面 (98-98') (西から)



SD532・544・545 完掘 (北西から)



SD532 断面 (101-101') (東南から)



SD545 断面 (102-102') (東から)



SD550・554・559など 完掘 (南から)



SD550 断面 (103-103') (西から)



SD554 断面 (104-104') (南から)



SD559 断面 (105-105') (南から)



SD646 断面 (106-106') (西から)



SD680・689 断面 (107-107') (南から)



SD689 断面 (108-108') (西から)



SD696 断面 (109-109') (西から)



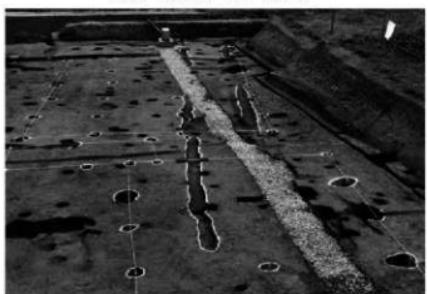
SD699 遺物出土状況 (北西から)



SD697 断面 (71-71') (東から)



SD697・699 断面 (72-72') (北から)



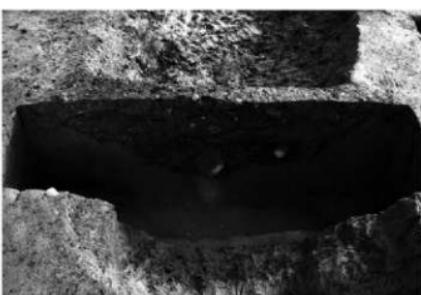
SD867・869 穂播 (西から)



SD869 断面 (111-111') (東から)



SD867 断面 (110-110') (東から)



SD853 断面 (119-119') (北東から)



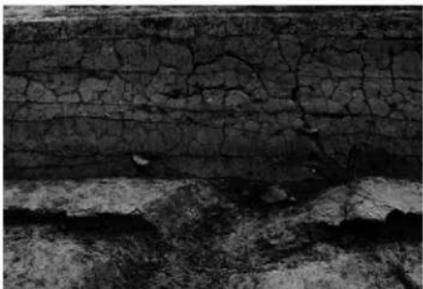
SD853・728・729 完掘 (南西から)



SD853 遺物出土状況 (南東から)



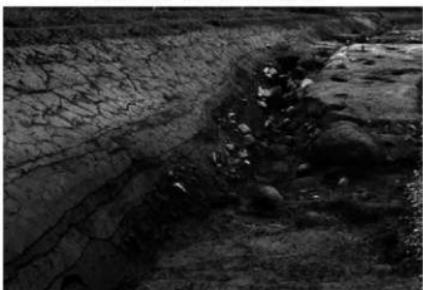
SD853 断面 (117-117') ① (南から)



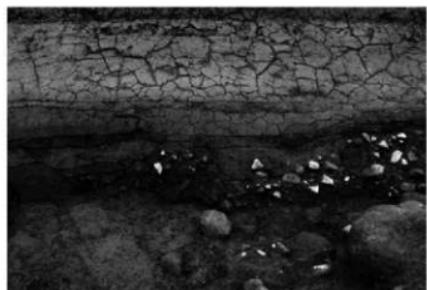
SD853 断面 (117-117') ② (南から)



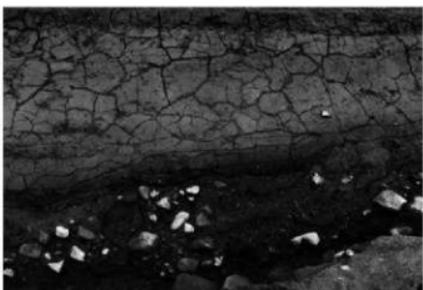
SD853 断面 (117-117') ③ (南から)



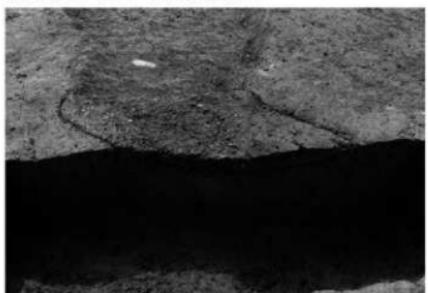
SD853 (118-118') (北から)



SD853 断面 (118-118') ① (北から)



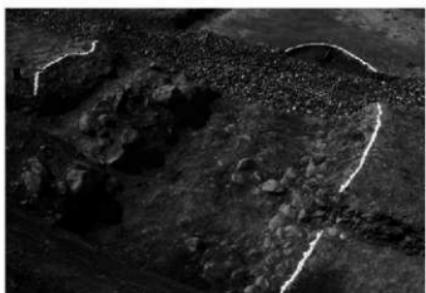
SD853 断面 (118-118') ② (北から)



SD728 断面 (115-115') (北から)



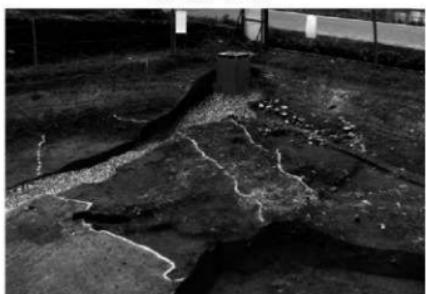
SD729 断面 (116-116') (南から)



SX2 完掘 (南から)



SX2 断面 (120-120') (北から)



SX3 完掘 (北東から)



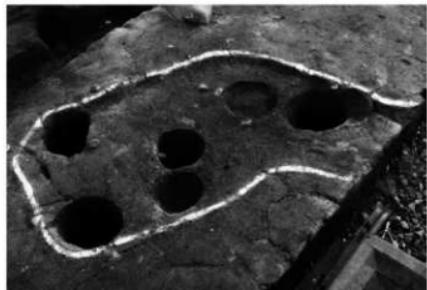
SX3 断面 (121-121') (東から)



SX17 完掘 (東から)



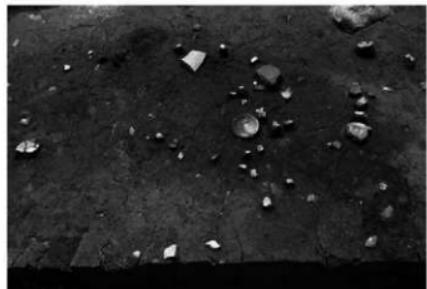
SX17 断面 (124-124') (東から)



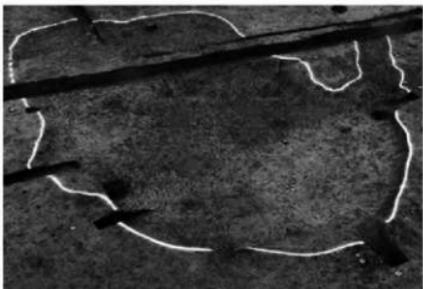
SX18 完掘（北東から）



SX18 断面（125-125'）（東から）



SX18周辺 出土状況（北から）



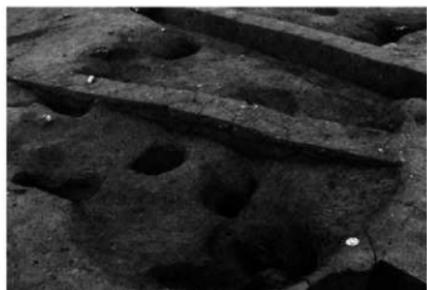
SX102・SD103 完掘（北東から）



SX102 断面（127-127'）（北東から）



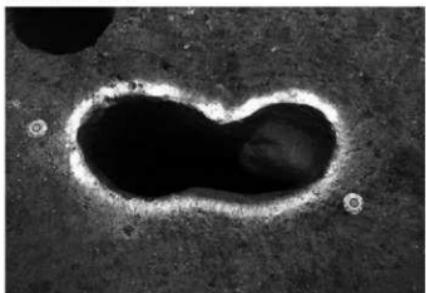
SD103 断面（129-129'）（北から）



SX104 断面（122-122'）（北西から）



SX647 完掘（北西から）



P234・307 完掘（東から）



P256 完掘（北から）



P512 断面（135-135'）（東から）



P519・SD729 断面（137-137'）（西南から）



P622 断面（138-138'）（西から）



P624 断面（139-139'）（南東から）



P629 横出土状況（東から）



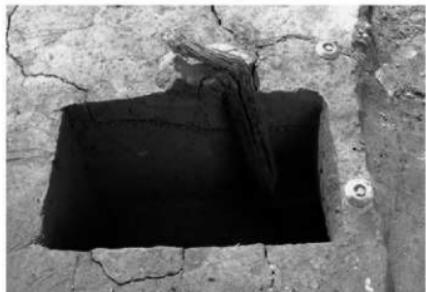
P629 断面（140-140'）（東から）



杭 (12~20) 検出状況 (北東から)



杭12~14 断面 (142~142') (東から)



杭15 断面 (143~143') (東から)



杭16・17 断面 (144~144') (西から)



杭18 断面 (145~145') (東から)



杭19 断面 (146~146') (東から)



杭20 断面 (147~147') (東から)



杭23 断面 (149~149') (東から)



杭(23・24・28・29) 検出状況 (東から)



杭24 断面 (150-150') (東から)



杭28 (151-151') (東から)



杭29 (152-152') (東から)



T1 完掘 (東から)



T2 完掘 (西から)

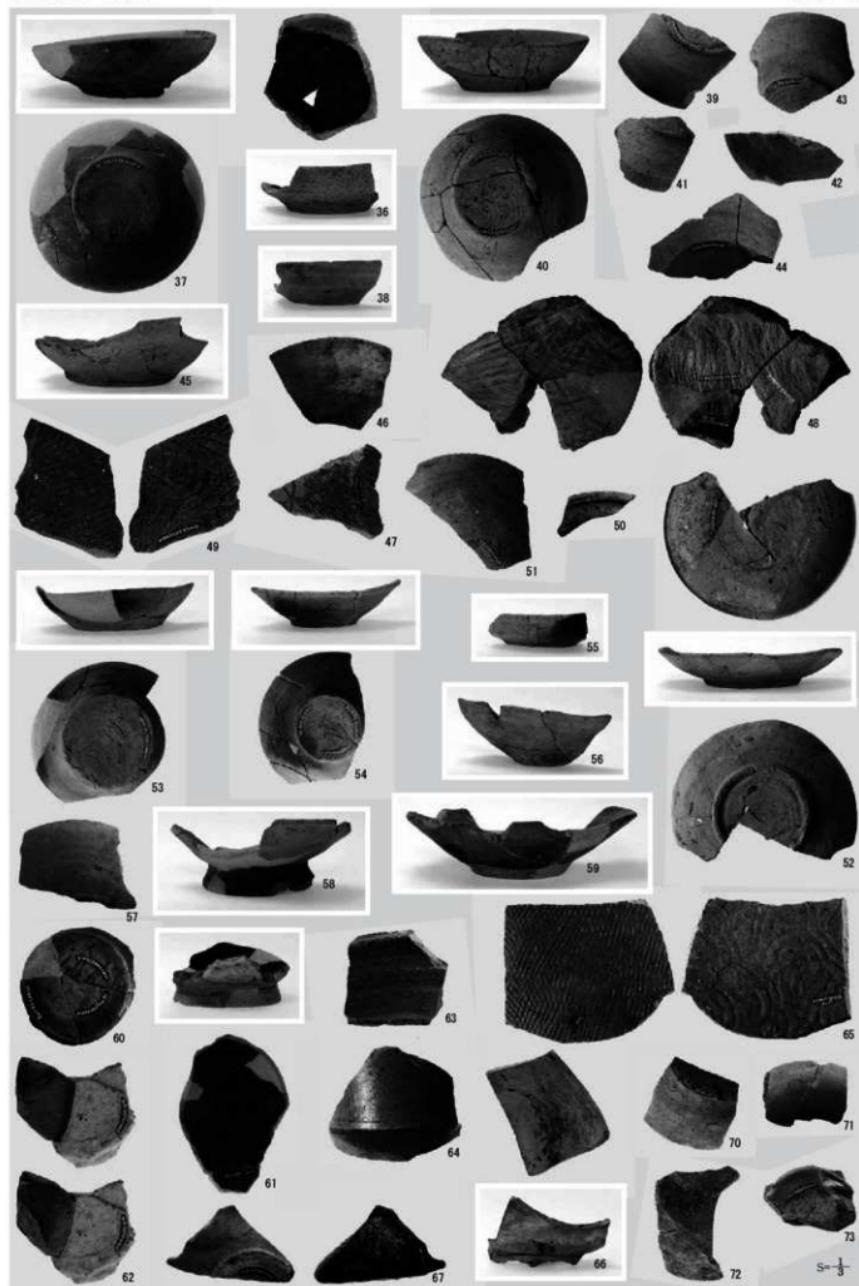


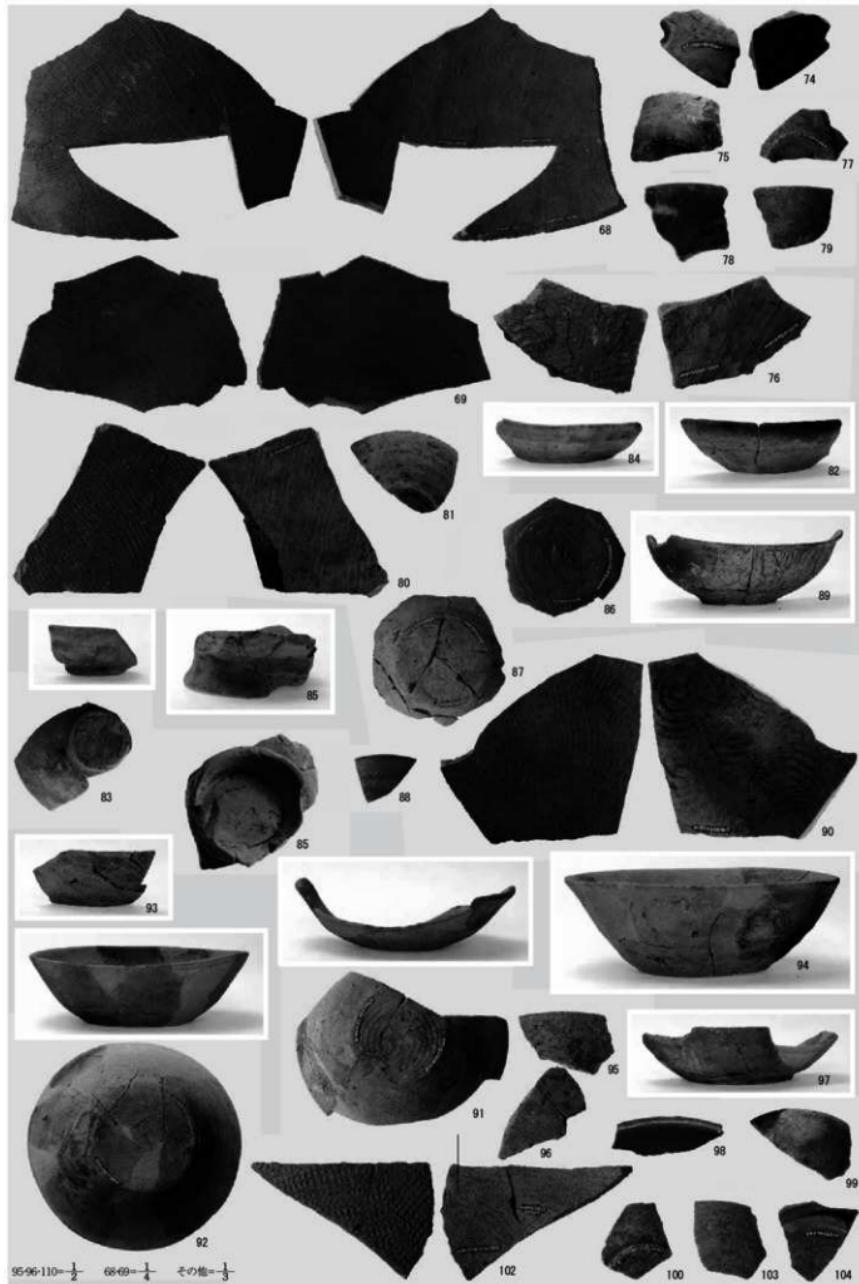
T3 完掘 (西から)

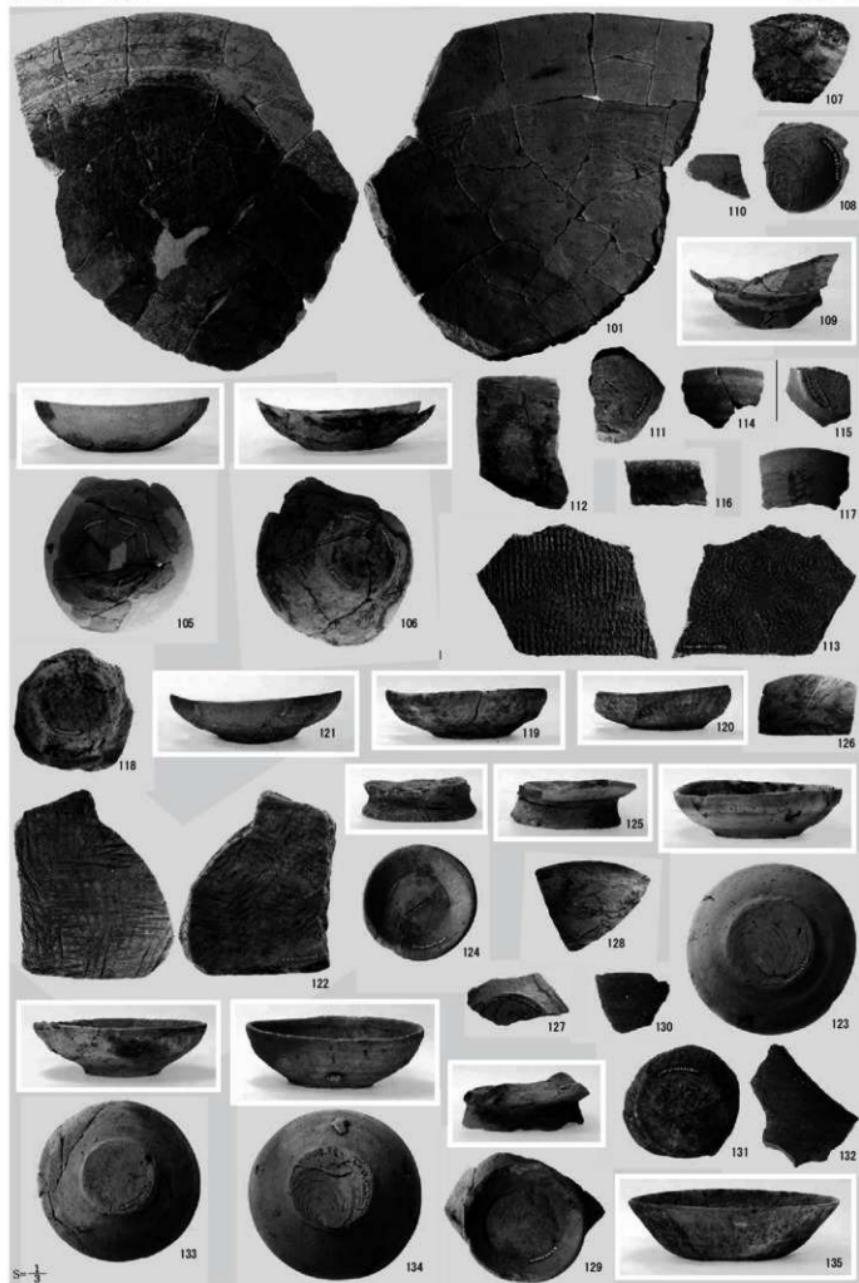


基本層序 (T3) (南から)







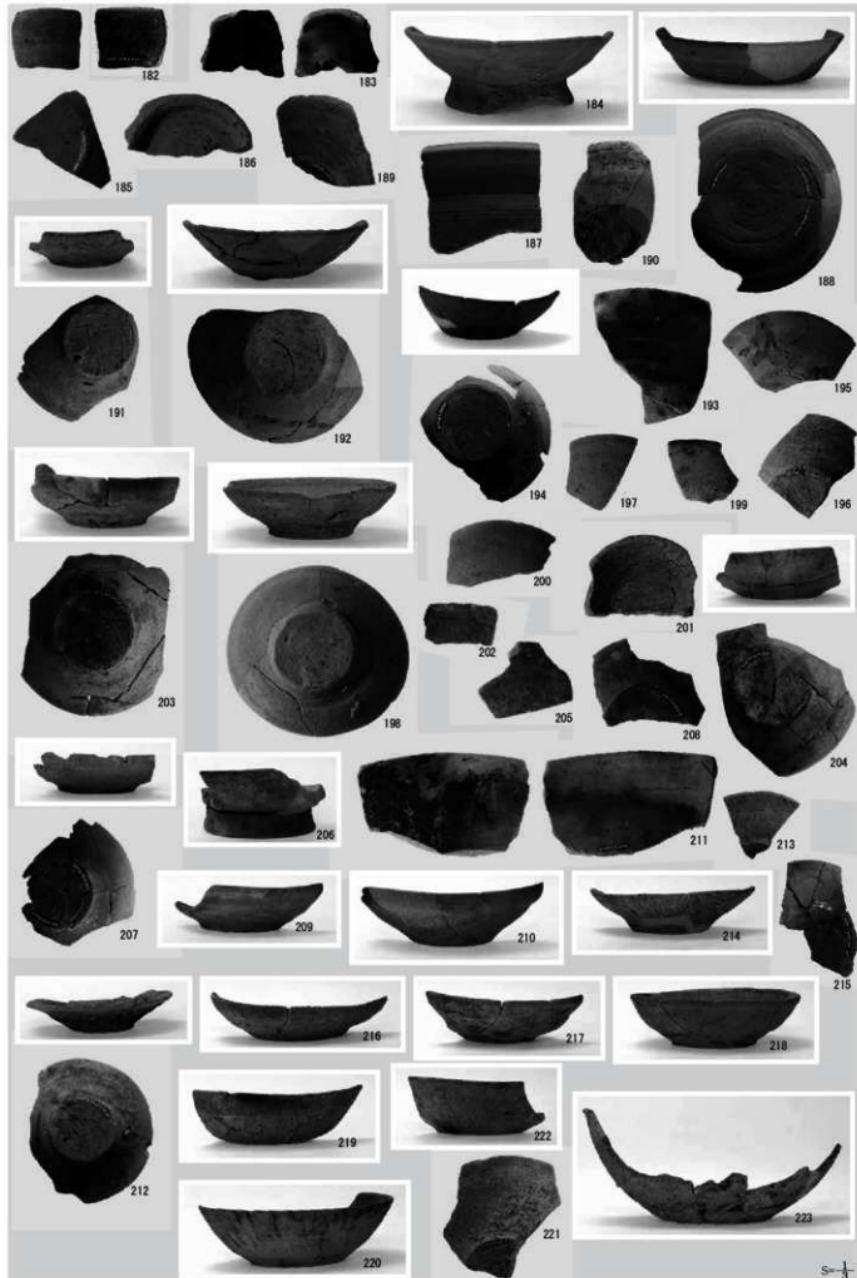


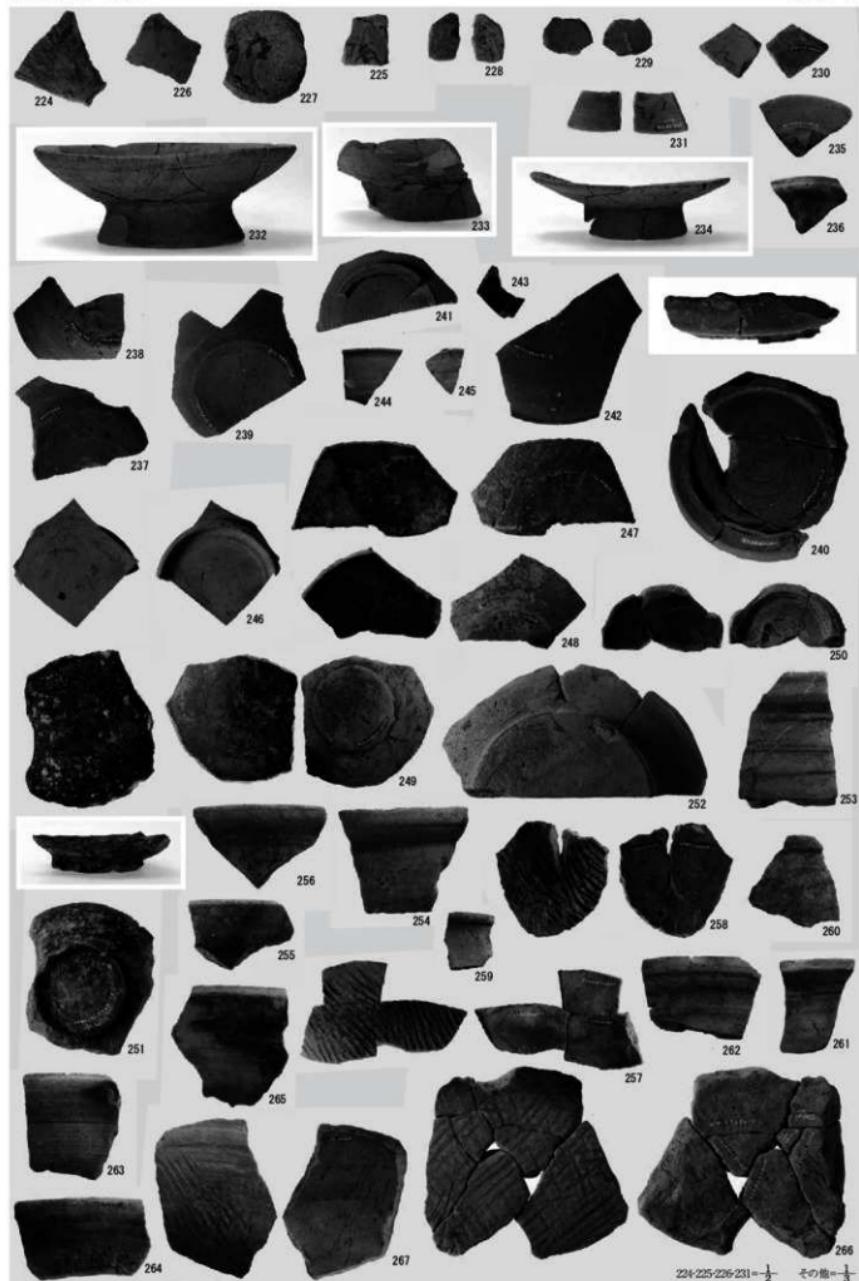
S=1/3



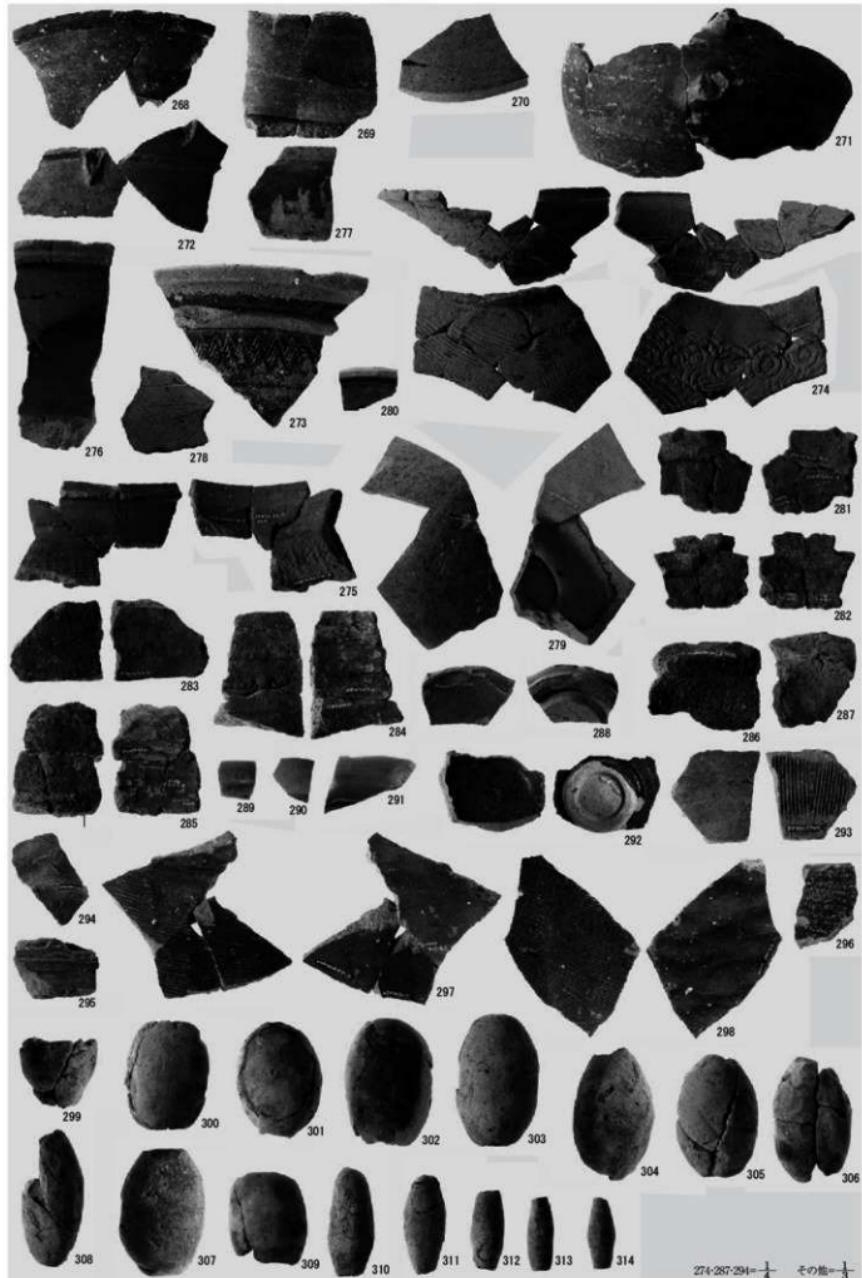
$$155-156-157 = \frac{1}{2} \quad \text{その他} = \frac{1}{3}$$

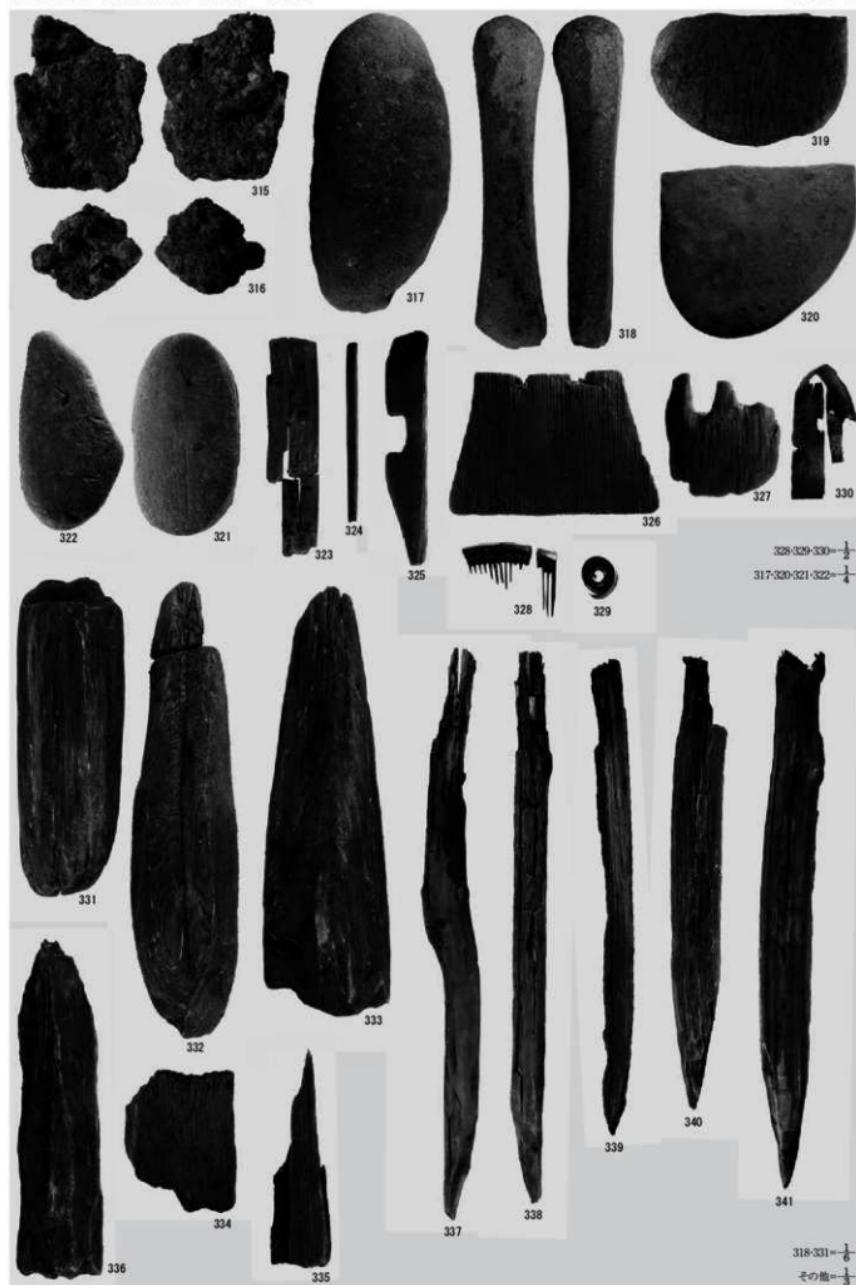

 $165 = \frac{1}{4}$ $166 = \frac{1}{6}$ その他 = $\frac{1}{3}$



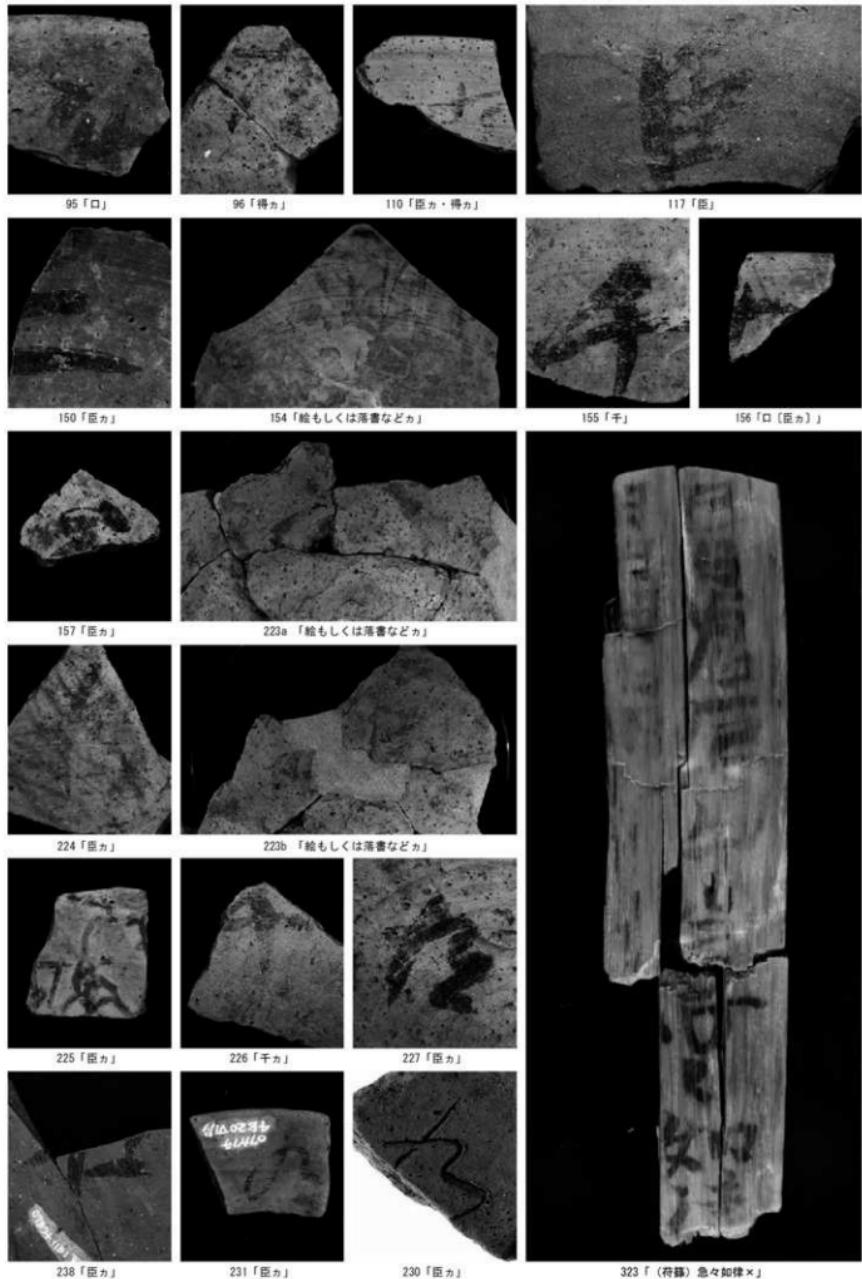


224-225-226-229-231 = $\frac{1}{2}$
その他の = $\frac{1}{3}$





318-331 = $\frac{1}{2}$
その他の = $\frac{1}{4}$





101区 基本層序 No.5 (北から)



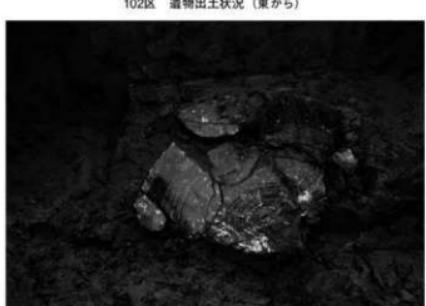
102区 基本層序 No.8 (北から)



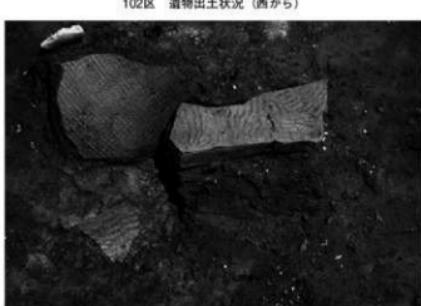
102区 遺物出土状況 (東から)



102区 遺物出土状況 (西から)



102区 遺物出土状況 (南から)



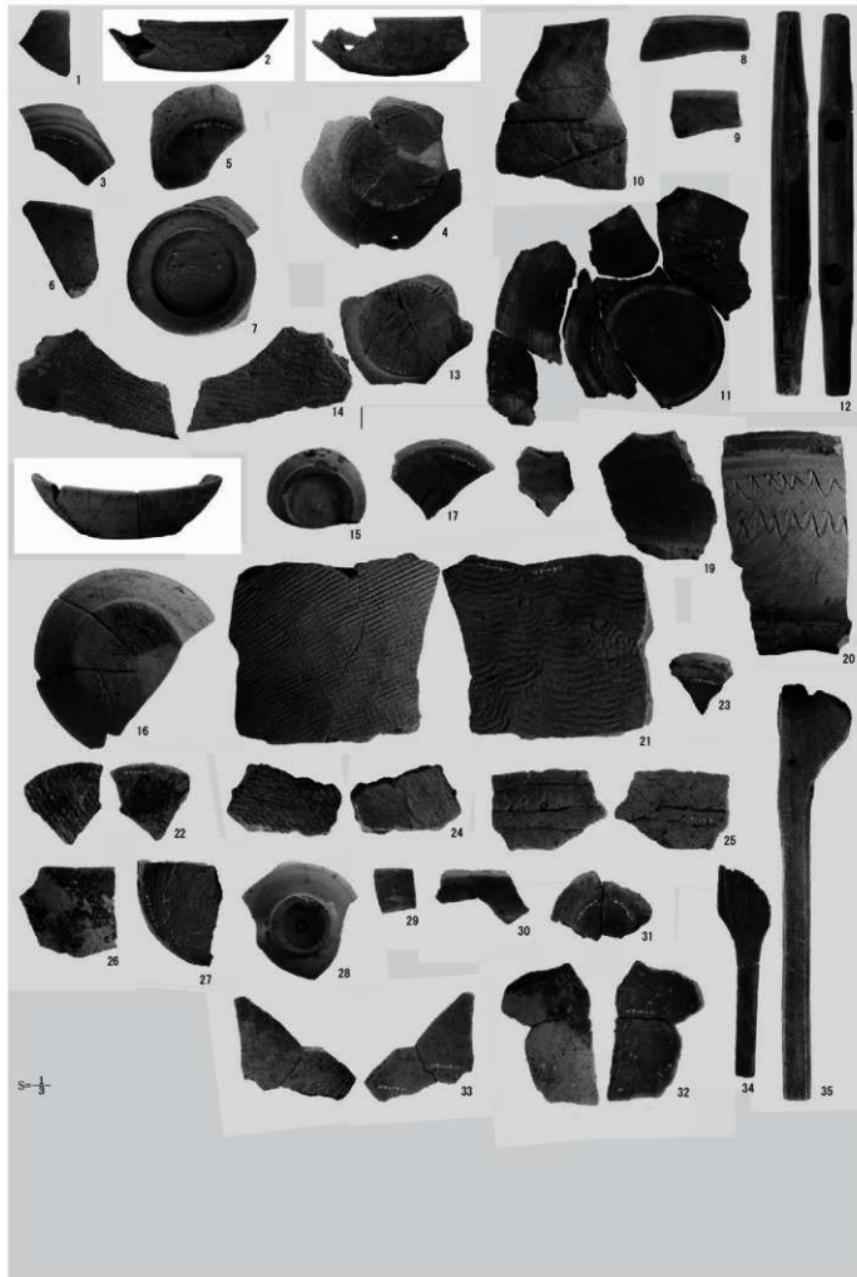
104区 遺物出土状況 (南から)



105区 基本層序 No.3 (東から)



105区 完掘 (東から)



報告書抄録

ふりがな	かくちだいせき	たいらいせき						
書名	角地田遺跡 平遺跡							
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書							
卷次	Ⅳ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第191集							
編著者名	實川顕一・長澤辰生・桑原 健（以上、株式会社みくに考古学研究所）・高橋保雄・田中一徳（以上、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）・齊藤崇人・馬場健司・高橋 敦（以上、パリノ・サー・ヴェイ株式会社）							
編集機関	財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社みくに考古学研究所							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 〒949-6437 新潟県南魚沼市中野23番地1	TEL 0250 (25) 3981 TEL 025 (782) 4550	財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 株式会社みくに考古学研究所					
発行年月日	西暦2009(平成21)年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
かくちだいせき 角地田遺跡	新潟県 烏賀川市 大字 小見字 木ノ下132 番地1 ほか	15216	217	37度 05分 08秒	138度 00分 14秒 20070906	2.135m ²	北陸新幹線 建設	
平 遺 跡	新潟県 烏賀川市 大字 小見字 横枕238番 地ほか	15216	243	37度 05分 11秒	138度 00分 45秒 20070801	700m ²	北陸新幹線 建設	
所取遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物	特記事項			
角地田遺跡	集落跡	古代	掘立柱建物(12棟)横(2基) 土坑(15基) 溝(101基) 性格不明遺構(8基) 配石遺構(2基) 柱穴(363基)	土師器(輪、壺、鍋、鉢ほか) 須恵器(杯、甕、反耳瓶ほか) 黒色土器(碗、皿) 灰陶釉陶器(碗、皿、瓶) 綠釉陶器(皿) 青磁(碗) 製塙土器・管状土鍤 鉄闘迷遺物(輪形鐵治洋) 石製品(砾石) 木製品(差歛下駄、櫛ほか)	土師器小輪・小皿などの食膳具 越州窯系青磁碗 佐渡小泊産須恵器 頸城丘陵産須恵器 呪符木簡 「臣」墨書き土器(遺跡所在地の地名である小見の可能性がある)			
			散布地	中世		珠圓焼(甕、壺、鉢) 瀬戸・美濃焼(天目茶碗) 青磁(碗)・白磁(碗)		
平 遺 跡	散布地	古代、中・近世		土師器、須恵器、越中瀬戸 伊万里焼、木製品				

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集
北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅸ
角地田遺跡・平遺跡

平成21年3月30日印刷
平成21年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025 (285) 5511
財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製作 株式会社第一印刷所
〒940-0864 長岡市川崎5丁目442番地1
電話 0258 (34) 6300

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集『角地田遺跡 平遺跡』 正誤表追加2

2021年11月追加

	位置	誤	正
図版56	上から5段目	8 4	8 2
図版56	上から5段目	8 2	8 4
図版66	上から3段目	1 3	1 4
図版66	上から3段目	1 4	1 3

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集『角地田遺跡 平遺跡』 正誤表追加 2019年9月追加

頁	位置	誤	正
抄録	平遺跡 東経	1 3 8 度 0 0 分 4 5 秒	1 3 8 度 0 0 分 3 6 秒
抄録	角地田遺跡 調査期間	2 0 0 7 9 5 0 1 ~	2 0 0 7 0 5 0 1 ~
抄録	平遺跡 調査期間	2 2 0 0 7 0 5 1 5 ~	2 0 0 7 0 5 1 5 ~

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第191集『角地田遺跡 平遺跡』 正誤表

頁	行	誤	正
57P	上から10 行目	至徳寺遺跡の資料群	一之口東遺跡や至徳寺遺跡の資料群
57P	上から11 行目	11世紀前半の遺構群(№188・476遺構)	11世紀前半の遺構群(一之口東遺跡№188・476遺構)